

幻狼 FANTASIA NOVELS
GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
Volume three
Lower volume

翼の帰る処「ところ」3

――歌われぬ約束――

下



妹尾ゆふ子
YUFUKO SENOWO

Illustration
ことき

GENTOSHA COMICS



翼の帰る処［ところ］3——下

——歌われぬ約束——

妹尾ゆふ子

THE HOME OF
THE WINGS Volume three
Lower volume

YUFUKO SENOWO



Illustration

ことき——KOTOKI

GENTOSHA COMICS

THE HOME OF THE WINGS
3
Lower volume



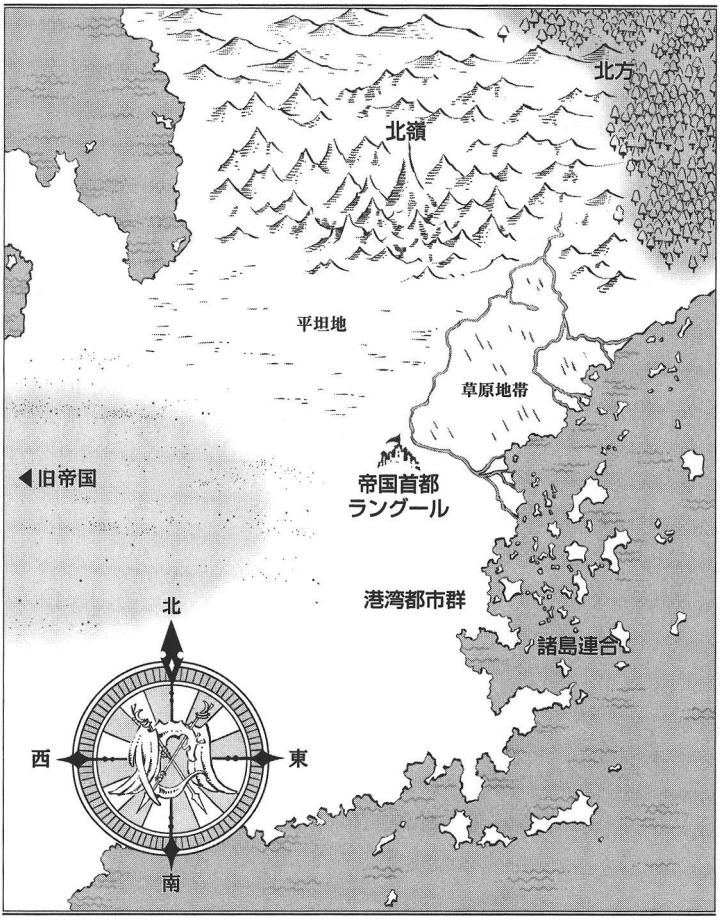
目次

第四章 ——— 11

第五章 ——— 91

第六章 ——— 197

あとがき ——— 274



THE HOME OF THE WINGS
3

人物紹介



ヤエト

「過去視」の恩寵を持つ北嶺国の相であり、《黒狼公》



皇女

皇帝の娘であり、北嶺国の王に任命される



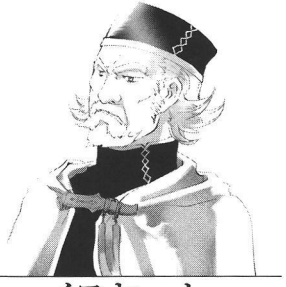
ジェイサルド

《黒狼公》の騎士



ルーギン

皇女の騎士団長



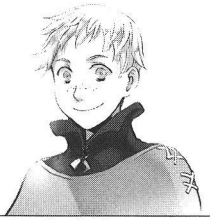
イスヤーム

北嶺の民



セルク

北嶺の民



タルキン

北嶺の民



グランダク

北嶺の民



ファルバーン

アルハンの遺民



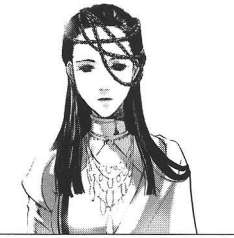
アルサール

北嶺の民



ナオ

皇女の女官



ウィナエ

ターンの預言者



ミアーシャ

先代《黒狼公》の妹



ラキニー

皇帝の妹



ナグウィン

商人



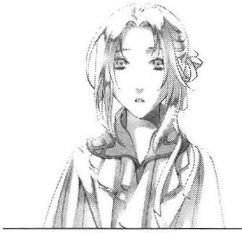
エイギル

ルーギンの部下



レイランド

北方ルス公家の公子



スーリヤ

ヤエトが救った少女



ラズラフ

北方の民



デュラルク

北方の民



ライモンド

レイランドの母



ルシル

レイランドの妹

第



章

1

詰んだな、と思った。

この状況で、ヤエトになにができる。商人の失踪をデュラルクに申し出るか、あるいは黙っているかを選べる程度だ。

みずから商人を追うのは、現実的ではない。痕跡を辿るのは可能だろう。かつて、皇女を追ったようにすればよい。だが、ここには彼の足となってくれるシロバがいない。そして、出て行くヤエトを黙って見送ってくれる門番もいない。行く先々で、失礼ながらこの先はご遠慮くださいと立ちふさがる、衛兵がいるだけだ。

――おとなしく利用されろということか。

皇帝のふざけた呼びかけを思いだし、ヤエトは反発と絶望を同時に覚えた。あの男に友と呼ばれるのは、最後通牒も同然なのだと実感した。

先代《黒狼公（こくろうこう）》もきっと、逃れられなかったのだろう――それとも、あの皇帝と互角にやりあうような、傑物だったのだろうか。

なんにせよ、ここにいるのは先代ではない。春先に叙爵されたばかりの、成り上がり者だ。過去視の力を使ったおかげで、ただでさえ貧弱な体力が底を尽きかけている、役立たずである。それをどうにか、役に立つようにせねばならない。

皇帝の思惑通り、ナグウィンが破滅へ向かうのを座視するしかないのだろうか。

――誰が。

いわれるがままに。

そうは思うが、打つ手が見当たらない。

空気が動くのを感じ、ヤエトは顔を上げた。扉が開いている。

「こちらにおいでだと聞いたのでね」

扉の前に立っていたのは、護衛の兵を引き連れたデュラルクだった。選択肢が多い方に先に動かれる

とは、ますますなさけない。
「これは摂政閣下、なにかお話でも？」
「公はお気づきかな。今宵はなかなかの月夜。散歩でも如何です」
ふと、皇帝はこの男を知っているのだろうか、と思った。ヤエトとて、デュラルクがどこまでできる男かを正確に知っているとは思えない。対話する機会が少ない商人を介しての知識しか持たない皇帝が、はたして、デュラルクという人物を適確に判断できるだろうか？
――甘く見ているのではないか。
商人がラズラフと出て行ったことを、デュラルクはもう把握している。追手もかけているだろう。その上で、そ知らぬ顔で月がどうのと話しに来たのだ。なんらかの交渉を考えているに違いない。
まだだ、とヤエトは思った。
――まだ、すべて終わりじゃない。
諦めるのは、最後でいい。それは、早過ぎることはあっても遅過ぎることのない選択なのだから。
「わたしのような不粋な人間でよろしければ」
答えて、ヤエトは立ち上がった。膝に力を入れるのが難しいのと、襲って来た頭痛に対処するのに気を持って行かれるのが困るが、この程度なら慣れているし、なんとかなると思いたい。
傍目にはあやうく映るのか、すかさず手をとって支えたファルバーンが、耳もとで囁いた。
「ご無理をなさいませんよう」
それこそ無理というものだ。多少は無理をしないと、なにもできない。
「ご不調ですか」
デュラルクの問いに、ヤエトは答えた。
「いつものことです。どうか、お気になさらず」
「お供つかまつります」
ファルバーンが押し殺した声で主張したのが聞こえたのか、デュラルクは鷹揚にうなずいた。
「結構。こちらへ」

案内されたのは、いつも散策する中庭とは別の庭だった。奥庭とでもいえばよいのか、建物に囲まれているため、空は狭い。

見るべきはむしろ、庭園を埋め尽くす花だった。入口付近の茂みに絢爛と咲き誇る大輪の花は夜目にも白くかがやいて、まるで銀細工のようだ。四阿（あずまや）に巻き付く蔓植物には青紫の花房がいくつも垂れ、その根方には、深い赤と黄色の小花が揺れている。まるで、火を入れた提灯のようだ。

「実に見事な……」

言葉を探すヤエトに、デュラルクは微苦笑とともに答えた。

「ここまでするには、手間もかかるのですがね。夫人の、気に入りなのです」

――夫人？

そういえば、女性にはほとんど紹介されていない。警戒しているのだろうと思う程度で、深く考えていなかったことを、このときようやく後悔した。

女性の方が、圧倒的に多いはずなのだ。北嶺との戦いで命を落としたのは男性ばかりだった。知っていたのに、考えなかった。

レイランドやルシルの母親、先代ルス公の奥方は今、どうしているのか。

四阿の中から姿をあらわした小柄な女性は、ヤエトよりも年上に見えた。赤味を帯びた黄金の髪が、長く裾を引いた黒衣に映える。

「ライ＝マンド・ラ＝ルス・ア＝レイ。現ルス公、ライモンド様です」

デュラルクが膝を折って礼をとる。

ヤエトはそれに倣いかけたが、仮にも四大公家の当主が臣従の礼をとるのもおかしいと、あやういところで気がついた。

――やられた。

北方は、女王が支配した過去を持つ土地だ。歴史に女の名が残らない、帝国とは違う。

男社会が常識となっている帝国人に、女性が当主

をつとめていることを想像しろ、という方が無理だ。次期当主と摂政を前面に押し出したのは、誤解を狙ってのことだろう。

やはり、デュラルクは食えない――それとも、食えないのはこの現当主といわれる女性なのか？

「ようやくお目にかかれました」

正直にいって、美女というわけではない。醜女でもないが、とりたてて特徴のない顔だ。だが、声は違う。低く、少しかすれたその声は、いつまでも耳を傾けていたくなるような美声である。

しかし、挨拶はひとことで終わってしまった。こういう声であれば、婉曲過ぎて本題がわからなくなるような台詞が長々とつづいても、なんとか我慢できるだろうに。しかたなく、ヤエトはうなずく程度に礼をして答えた。

「光栄です」

ライモンドは、四阿へ入るよう動作で促した。杖代わりのファルバーンとともに、ヤエトは緑の天蓋の下へ進んだ。

中には長椅子がある。ライモンドはそれに座ってヤエトを見上げた。隣に座れということのようだ。

「外で待っていなさい」

命じると、ファルバーンはおとなしく従った。相手に殺気を感じないのだろう。それとも女性だからと甘く見たのかもしれない。

皇女同様、ひらひらとした袖のどこかに暗器を隠し持っているかもしれないが、と考えてヤエトは苦笑した。

自分は気づくべきだったのだ。女性に仕えているのだから。せめて、可能性があるかもとは考えられただろうに。相手が明かしてくれてはじめて気づくようでは、完敗というしかない。

「今になって突然会ってくださる理由を、お聞かせ願えますか？」

思いきり直接的な質問をすると、ライモンドは低く笑った。笑い声まで、魅力的だった。

「月が美しいからでしょう」
　といわれても、四阿の中に入ってしまえば空など見えない。月はただの口実ではなく、なにかを暗示する言葉なのだろうか。
「不粋なもので、空に月があるのを見ても、その満ち欠けを知る程度です」
「満ちていればその明るさに、欠けていれば形に、情趣を感じませんか。空は、憧れを呼ぶもの。天空に属するものは、大地のあるじの力を受けません。それゆえ絶対ですし、孤独なのです」
　なかば伏せた睫毛の下、ライモンドの眼の色を窺(うかが)うことはできない。憧れるといいながら、なぜ眼を伏せるのだろう。見えないまでも四阿の外を、上方を窺う眼差しで語るべき言葉ではないか。
　少し悩んで、ヤエトは問い返した。
「月は孤独でしょうか？　あれほどの星々にかこまれていながら」
「ええ」
　目蓋が上がる。ゆっくりと、ライモンドはヤエトの方に顔を向けた。ただ流れるままにしている髪がひと筋、夜風にもてあそばれて舞い上がる。ふっくらとしたくちびるは、その髪の色に似ていた。
「月とは、あなたのことですか」
「わたしはこの土地のあるじです。月のように、空にはありません」
「アヴルスが月ですか？」
　少し危険な賭けだと承知で口にしてみたが、ライモンドは眼をほそめたのみで、とくに感情を動かした様子もなく答えた。
「その名は、口になさいませんよう。ここでは禁じています」
　禁じられているのではなく、禁じている、と来た。この土地の主権者は自分だ、支配し、命令する者なのだという意識のなせる言葉の選択だ。
「なぜです？」
「必要のない力は滅びのもとです」



なかなか会話にならない。しかたなく、ヤエトは待った。

黙って待つのは、実に不安なものだった。こうしているあいだにも追手がナグウィンに追いつき、彼の命を問答無用で奪ってしまうかもしれない。

そうなったとき、どうするべきか。

皇帝の示唆通りになるなら、一行の内のひとりくらいは、無事に北嶺に帰らせてもらえるだろう。ヤエトが運なく殺されてしまっても、皇女には報告が届くはずだ。

皇女は怒るだろうか、とヤエトは思った。

約束を破ったと、わめくだろうか。

——いや、そうはさせない。

ヤエトは生きて帰るつもりだ。滅多にしない約束をしたのだから。

ようやく、ライモンドが口を開いた。

「あなたがお連れになった商人が、ラズラフをそそのかし、ここから逃げ出したようです」

「それは、なにかの間違いでは？」

我ながら嘘くさいと思いながら口にした言葉を、ライモンドは寛容に受け流した。

「置き去りにされたのですよ。怒らないの？」

新鮮な視点だ、とヤエトは思った。これは、どう答えるべきなのだろう？

「そうですね……怒るよりは、案じております」

引き込まれるような声で、ライモンドは笑った。

「裏切り者の身を？」

「はじめから、仕えるあるじが違うのです。わたしは北嶺王のご命令を受ける身、そしてあの商人は、皇帝陛下おんみずからのご指示を受けてはたらく者。なにをもって、裏切りと申せましょう」

「ご自身の安全は、お気になさらないの？」

「もちろん、我が身も案じております」

ライモンドは笑みを深めた。

「あなたを殺せば、かわいらしい北嶺王がわたしたちを皆殺しにしようと攻めて来るでしょう。黙って

滅ぼされる気はないけれど、勝ち目はありません」

月がどうのと口走っていたかと思えば、不意にあけすけなことをいう。よくわからん、とヤエトは思い、不意に皇妹の教えを思いだした――落差で男を落とすのよ、というあれだ。

落ちるかどうかは別として、たしかに、なにか惹かれるものはある。興味をそそられるのだ。なるほど、手管としては有効かもしれない。さすがだ、と今ごろ感心させられると同時に、やはり、あれとは結婚できない、とつくづく思った。

なにがどうあっても、復縁は断るしかない。

血筋を思えば、これ以上は望めない相手だし、美女であることに疑問の余地はない。だが、つねに相手の心中を読もうとしてしまうヤエトにとって、読みきれた試しのない皇妹は、興味を抱ける段階をはるかに超えている。あれを妻と呼び、並び立つ機会が増えるなど、背負いきれない重荷を引き受けるようなものだ。

たとえ皇帝の勘気を蒙るとしても、絶対に断る。よし決めた、と心の中で拳を固めながら、ヤエトは目下の問題に戻った。

「王は、平和をお望みです」

「わたしもです」

「昨冬は、そちらから攻めておいででしたが」

ライモンドの眼がすっとほそめられた。

「あれは、あってはならぬことでした」

それきり、口をつぐんでしまう。

弁解もなく、説明もない。そういえば、謝罪だってされていない。よく考えてみると、傲慢な外交である。敗者だというのに。

もっとも、今のヤエトは反論できる立場ではない。殺す気はないといわれたも同然だが、それを無条件で信じるほど、おめでたくもなれない。

いっそ、おめでたい頭がほしいくらいだ。そうしたら、落差が見事で声が美しいこの女性との逢瀬を、うきうきと楽しめたかもしれない。

だが、実際にはヤエトは悲観的であり、考え過ぎかつ偏屈である。楽しむなど、無理だ。

「ですが実際、襲撃はあったのです。あなたがその責任を負うと考えるべきなのでしょうか、わたしは。それとも、誰か――」

「わたしたちは、どうして沙漠の言葉を喋っているのかしら？」

唐突に、ライモンドはヤエトの言葉をさえぎった。なかなか興味深い設問であるが、ごまかされるわけにはいかない。

「どういう事情で、あの襲撃は決行されたのです」

「沙漠の言葉を憎んだことはない？　あなただって、本来は違う言葉を話す者として生まれたはずでしょう。その知識はとってある？　沙漠の言葉に押し流されないよう、大事にしまってあるの？　どうして皆、沙漠の言葉を使うのかしら？」

「……隊商の力が大きいでしょう。商業力がそのまま文化の伝播に繋がった、そういう事例です。もちろん、言葉自体が単純だったことも、文字の種類が少なかったことも、影響はしているでしょうが、結局は力です。富の力が、沙漠の言葉を普遍化させたものと、わたしは考えています」

あきらめてライモンドの問いに答える。しかたがない、こういう説明をするのが好きなのだ。自分で自分が信用できないところの、第三位くらいに位置するだろう――解説の機会があると、逃せない。困った癖だとは思うが、どうにもできない。

ライモンドはヤエトの答に納得したのかどうか、遠くを見ながらささやいた。

「子どもの頃、沙漠の物語をいくつも暗記させられました。言葉を覚えるために」

「夢で沙漠を渡った王様の話、とか？」

著名な昔語りの題を挙げると、相手は小さくうなずいた。

「そうです。それから、『詩華百夜』」

「智慧の女神の翡翠の扉の物語は？」

「女神など、いませんのにね」
あきらかに、声が硬い。
――まずい。
北方では、神という言葉は禁句に近いようだ。だが、相手はそこにこだわらなかった。
「ずっと、思っていました。なぜこんな遠い土地の言葉を覚えなければならないのか、と。物語の登場人物の名も、考えかたも、なんだか異様で近づきがたかった。でもそのうちに、異様という感じ自体が消えていったのです」
言葉を切り、ライモンドは視線をさまよわせた。色とりどりの花から花へと。
そして、つぶやいた。
「わたしたちは、言葉でつくり変えられてしまう。地上に生きるとは、そういうことなのでしょう。何世代も前からの、何千何万という死者の声は、生者の力にかき消されてしまう。もし、月ならば――」
「月は言葉を語りません。死者も然り。ご存じでしょう、サイー、サーディー、サーヤリムと申すではありませんか」
死者のように静かに。
諭しながら、しかしヤエトの脳裏によみがえっていたのは、北嶺の厩舎長の言葉だった。
――あんたがたは、死者の声を聞くのかね。
あのとき、帝国の民はともかく自分は、と考えていたことを思いだした。過去視の恩寵の力をもってすれば、死者の声を聞くことも容易である。沈黙の世界に去ってしまった者が生者の世界に住んでいた頃の声を聞くことを、そう呼んでもよいならば。
記憶の淵に沈みかけたヤエトの意識を、ライモンドの声が引き戻した。
「ああ、それも暗記しました」
「言葉を学ぶために？」
うなずいて、ライモンドは嘆息した。
「わたしは嫌いです。善人がその親切を裏切られる話なんて。沙漠の民が、あんな物語をつくった理由

はなんでしょう？　ほんとうに、不愉快です」
　ライモンドがいうのは、あの慣用句が広まる素地となった物語である。たしかに不当な展開で、行き倒れになりかけた男を善意で助けたところ、後に盗賊となったその男から財産を盗まれ、殺されてしまうという後味の悪い話だ。
「あれは迷宮都市に伝わる謎かけの物語ですから」
　ライモンドは眼をしばたたいた。知らなかったらしい。
「なんですの、それは？」
「知識の扉を守る迷宮があったのです。その扉の向こうには永遠の真理があるといわれていました。迷宮の入口には番人がいて、迷宮に挑もうとする者たちの資質を占うため、ああいった物語を用意して、語り聞かせたのだと伝えられています」
「どうやって占うのです？」
「反応を見るそうですよ」
　まあ、とライモンドは眉根を寄せた。
「それで、わたしのように嫌うというのは、どうなのかしら」
「わたしは番人ではありませんから、占うこともかないませんが……そうですね、きっと心やさしく正義感のある人物と占われたのではないでしょうか。男に水を与えた行為を是とし、恩に報いぬことを否とし、不快を覚えておられるのですから」
　ヤエトの見立てにライモンドは納得せず、首を左右にふって見せた。
「わたしは裏切りを許さないだけ」
「裏切りといえば、ラズラフ殿はどうなのです」
「それは、今さらというものです。もうずっと、あの男はわたしを裏切りつづけているのだから」
　ライモンドは答え、少し笑った。ヤエトは笑う気にはなれない。
「わたしには怒らないのかとお尋ねになりながら、ご自身ではお笑いになる」
「怒っていないわけではないのです。ただ、あの男

にはもうなにも期待していない自分に気がついて、それが少しおかしくて」

「期待がないとは、寂しいことを」

「裏切られるだけとわかっていて、なにを期待せよと？　それも先のことではなく、今まさに裏切りの最中だというのに。慣れたといっても限度があります。今回は、彼を許すわけにはいかないでしょう」

その口調に、ヤエトはわずかに痛みを感じた。思い過ごしかもしれないが、そこにあるのは怒りよりも哀しみであるような気がしたのだ。

デュラルクとラズラフ、そしてライモンド。亡くなっているのであろうライモンドの夫も含めて、かれらは同じ時間を過ごし、同じことを見聞きして泣き、笑い、未来を語ったこともあったのだろう。ラズラフを排除するために、ライモンドはその思い出を切り離さねばならないのではないか。

そういう点では、自分はずいぶんと楽だな、とヤエトは思った。幼馴染みはもちろん、家族も皆、沙漠の向こうに置いて来た。疑いを知らなかった頃に濃密な時間を過ごした仲間と、知らぬ間に道を違えていたことに気づき、悩み、葛藤する——そんな痛みは知らずに済む。

裏切られたと感じるためには、まず、その相手を信頼していなければならない。ライモンドはきっと、ラズラフを信じていたのだ。心の底で、捨て切れないものがあったのだろう。

——ナグウィンを、どこまで信じていたかな。

そこそこの信頼はあった、と思う。だが、ナグウィンの行動を選択しているのは、本人ではない。彼の意志とは無関係に、皇帝が決定したことだ。

ヤエトがナグウィンに伝えた情報は、もちろん皇帝の知るところとなったはずだ。それは織り込み済みだし、実際、陛下に一件をお伝えくださいとまでいってあるのだ。だから、話が筒抜けだったとしても、裏切りとは感じない。

情報を吟味した皇帝が、ナグウィンを通じてあん

な行為に出たことはおどろきだが、それに責任を負うべきは皇帝である。ナグウィンではない。

　すると、皇帝を信じていたかどうかが問題になるが、その設問自体、愚かであろう。あの男に信義を求めるのは、筋違いというものだ。

　信じるというのは、実に愚直な行為である。目的のためには手段を選ばず、功利的な思考の達人である皇帝に対して、それでも一方的に忠誠を捧げる者はいるのだろうが、ヤエトには真似ができない。

　信じるならば、お互いに、と思う。預けあう心の重みが、同じであってほしい。

「正直なところを申し上げれば、やはり、怒っているかもしれません」

　低く、ヤエトは告げた。かたわらに座っているライモンドの耳には、問題なく届くだろう。だが、四阿の外にいるファルバーンやデュラルクには、おそらく聞き取れまい。

　これは賭けだ。

「――商人にではなく、皇帝陛下のなさりように」

　北方が一枚岩でないのと同様、帝国にもさまざまな派閥があり、思惑があると知らしめるのは、あまり利口なことではない。悪手である。

　それでも、このまま皇帝の思惑通りにされるのが望ましいとは、とても思えなかった。

　事前の指示も、説明すらない。あったのは、ヤエトの恩寵の力に依存する一方的な命令のみという、杜撰なものだ。もし恩寵の力がなければ、あるいはあってもあの場で使わなければ、皇帝の言葉は伝わらなかったはずだ。

　冗談ではない。

　――はじめから、仕えるあるじが違うのです。

　口にしたばかりの言葉が、深く、重く、心に沈潜していく。消えるのではなく、動かしがたい礎石となるために。

　北嶺には北嶺の考えがあり、利害がある。だが、それよりも帝国の権益を重んじ、皇帝の指図に従う

べき――と、以前なら考えただろう。

今は、違うのか？

――違う。

変化はすでに、おとずれてしまっていた。

いつからだろう。北嶺と帝国、皇女と皇帝。今まで選ぶ必要がなかっただけで、はじめからその問題は、ヤエトに突きつけられていたのだ。

皇帝と自分、どちらに仕えるのかと皇女に問われた、あの日から一年。

――そのときが、来た。

皇帝が踏みにじっているのは、皇女の自尊心だ。ヤエトが北方を訪れたのは、皇女の意を体現するためだ。ヤエトをかろんじるのは、北嶺王たる皇女の意向を無視するも同然である。

皇女が自分で考え、行動するひとりの人間であるという現実を、皇帝に叩きつけてやる。

それを今、やるべきなのかと問われると、実のところ、ヤエトには確信がない。おそらく、誰にもわからないだろう。後知恵で早過ぎたとかもう遅かったとか、小賢しく評するしかないたぐいの問題だ。

それでも、彼は肚をくくった。ときが来たと感じてしまったのだから、しかたがない。

「あの商人がラズラフ殿をどのようにそそのかしたかは存じません。ですが、それはわたしも、わたしがお仕えする北嶺王も関知せぬこと。すべては真上陛下よりのお指図と存じます。こちらにお訪ねするための口実に使われ、今また勝手に逃げだされたとあっては、わたしも立つ瀬がありません。どうか捕えていただきたい。生きたままこちらに戻してくだされば――」

ライモンドが、ヤエトの言葉をさえぎった。

「あなたの望みは？」

簡潔な問いだが、答えるのは難しい。おのれの望むところを正確に把握することができれば、人生はもっと楽になるだろう。ともあれ、建前だけでもきちんと答えねばなるまい。

「北嶺王のお考えは、すでにお伝えしたはず。貴国と我が国のあいだに橋を架けんと欲しておられます。ですが――」

「あなたがたの皇帝は、意見が違うのですか」

「――陛下が我が王のお考えを尊重してくださるのであれば、斯様な逃走劇が起きたはずはありません。真上陛下の深慮遠謀を、一介の国相に過ぎぬわたしが、どうして知り得ましょうか。ですが、商人がラズラフ殿を説いた言葉を聞き出してやれば、それも明白となりましょう。かさねて、お願いします。あの商人めは、是非とも生かしたまま捕えていただきたい。その命をわたしの預かりにしてくださいとまでは申しません。ただ、尋問する機会がほしいのです」

商人の身柄を確保する手段がないなら、ルス公家にやってもらうしかない。ある程度、利害は一致するはずだ。生け捕りまでは期待できる。それが、第一歩。高望みはするだけ無駄というものだ。一歩ずつ、こちらの望む方に進み、相手の譲歩を引き出していけばよい。

ややあってから、ライモンドはそのやわらかな声で答えた。

「生かして捕えた上で、目の前で殺してほしいとでも仰るのかと思いましたよ」

ヤエトは眉を上げた。穏やかな口調だが、底知れなさがある相手だ、と思う。どこまで本気なのか、読みきれた気がしない。

「死がもたらすのは沈黙だけです。わたしはあの男を喋らせたい。黙らせたいわけではない」

ライモンドは顔を前に向け、静かに告げた。

「わたしは愚かなのでしょうね。言葉を理解するより先に、声の印象をはかってしまうの。だから、あなたの理屈よりも感情の方がわかる。……怒っていらっしゃらないわけでは、ないのね」

よく考えてみると、ヤエトはたしかに怒っていた。はじめの衝撃から覚めてみれば、恐れよりも勝って

いるのは怒りだった。
素直に、彼はうなずいた。
「お言葉の通りです」
横顔が、小さく揺れた。笑っているのだろうか。
「あなたは、あなたの王のために怒っているの？」
「自分のためです」
「それでも、保身のためではないですね。北嶺相は死にたがりだと、聞いています。その割に、しぶとい、と」
「誰です、左様なことをお耳に入れたのは」
ライモンドは立ち上がった。
やはり小柄な女性だった。立っても、さして威圧感がない。ヤエトを見下ろす笑顔は彫像めいて、無関心を感じさせた。彼に与えられた時間は終わったのだと、嫌でも知らざるを得ない。そんな表情だ。
「頭を冷やすお時間を、ご用意します。デュラルク、このかたをお部屋へお連れして――そこで報せをお待ちになって。以前のように、自由に動きまわっていただくわけには参りませんの。残念ですけど」
ヤエトも腰を上げた。うかつに動いたせいで、頭がずきりと痛んだ。
「冷やすよりも、痛みをとり除く方をお願いしたいところですね」
「お加減がお悪いのでしたら、薬湯を持たせましょう。信じて飲んでくださるかしら」
立ち上がってしまえば、見下ろすのはヤエトの側だった。痛みに顔を歪めるのが得策かどうか悩み、結局、どっちつかずの無表情で答える。
「信じていただかねばならないのは、わたしの方でしょう。あなたの信用を得ているならば、動きまわるなといわれるはずがありません」
ライモンドは目線を上げ、怖じることなくヤエトの視線を受け止めた。
「ラズラフに忠実な者がいれば、あなたを襲うかもしれないわ。あるいは、昨冬の戦で家族を失った者が……いいえ、正直にお教えしましょう。すでに、

凶行をなそうとした者がおりますの。警護の兵を増やそうにも、ご存じのように人手がたりません。公をお守りするには、部屋の中でじっとしていただく必要があります」

実に心あたたまる指摘である。

――さて、どうすべきか。

どうしようもこうしようも、ヤエトに選択肢はないも同然だ。それでも、考えねばならない。なすべきことを、見落としてはいないだろうか。

提案、脅し、揺さぶり。商人の命を救うために必要なのは、なんだろう。案外、わかりやすい賄賂が効果的なのかもしれない。だが、なにを？

目の前のこの人物を動かすことができるような手札を、自分は持っているのだろうか。

ライモンドは四阿の外を見た。ファルバーンが、兵士に囲まれている。ヤエトの方へ来ようとしたのだろう。

「逆らうな」

命じると、ファルバーンは弱々しげに首をふり、さっとこちらに駆けて来た。なんという演技力だと呆れながら、ヤエトもせいぜい頑張って前に出ると彼を受け止め、ついでに耳もとでささやいた。

「軟禁される前に逃げられるか。お前だけでも」

「北嶺へですか？　土地勘がありません」

それもそうだ。

急に動いたせいでひどくなった頭痛を無視しようとつとめながら、ヤエトはライモンドに尋ねた。

「商人を、どうなさるおつもりです」

「捕えます。抵抗せねば、殺しはしません」

だが皇帝は、商人を殺させる気満々なのだ。抵抗すれば殺すとでもいわれれば、商人はこれ幸いと暴れまくるだろう。

死ねと命じられるのは、どんな気がするものだろうか。殺されろと、含められるのは。

「くれぐれも、生かして捕えていただきたい。あれは皇帝直属の臣、大事な情報源となりましょう。末

期の声ひとつでは、割にあわぬとお考えを」
　ライモンドは彼を見て微笑んだ。
「結局、ご自身の身よりも裏切り者を案ずるのですね、《黒狼公》」
「当面、この命は繋がるのだろうと見当がつきますゆえ。それより、商人とラズラフ殿は、なんのために、どこへ？」
「公が、ご存じなのかと」
　知っているとも知らぬとも、ライモンドは口にしない。ヤエトに対しても、詰問するわけではない。
　どうでもいい、といわんばかりの態度だ。
「わたしも、捜索に同行させてください」
　ライモンドは眉を上げた。一瞬、笑みが消えると、そこに覗き見えたのは、ひどく感情の欠けた仮面のような顔であった。
　それから、じわりと笑みが滲んだ。氷がとけるように、ゆっくりと。
「なにがおできになるの？　なにも告げずに姿を消した相手でしょう。あなたと再会しても、語るべき言葉は持たないのでは？　戻って来るように説得なさるおつもり？　あなたがたの皇帝の命令より、あなたご自身の言葉の方が力があると、証明してくださるのかしら」
「力などは、ありません。ただ、お味方の兵のみで追うより、見知った顔がいた方が」
「公のお顔を見ても――」
　そこで、ライモンドは言葉を切った。なかば当惑して、ヤエトは問い返した。
「見ても、なんです？」
「お顔の色が……まるで死人のよう。警護のことは抜きでも、どうかお部屋にお戻りの上、横になってくださいませ、と……申し上げたくなります」
　嘆息するのは、ヤエトの番だった。顔色のことなど考えていなかったが、もちろん、悪いに決まっている。さっきから、少しでも気を抜くと頭痛にすべてを乗っ取られてしまいそうだ。

「わかりました。お言葉に従いましょう」
「あなたに死なれては困るのです。先にも申しましたけれど、復讐に逸る北嶺王の軍に勝てるとは、確信できませんもの。お命を、どうぞお大事になさって。夫は貪欲に生きていましたが、死ぬときは呆気ないものでした」
「もしや、北嶺で亡くなられたのですか」
ライモンドはその深く美しい声で答えた。
「いいえ。わたしが殺しました、ここで」
はじめは、意味が理解できなかった。ごく単純な言葉で告げられたというのに。
どう応じるべきか、ヤエトが決めかねているあいだに、ライモンドが言葉をつづけた。
「わたしを殺そうとしたからです。恐れが彼を怒らせ、怒りが判断を曇らせました。哀れな男です――公よ、死者は静かなどではありません。わたしの心に、あの男は末期の声を焼きつけていきました」
――なぜだ？
ライモンドを恐れる理由が、先代にはあったということか。恐れ、怒りを覚えるような、なにかが。
たとえば、デュラルクやラズラフといった男たちの力を借りて、ライモンドが先代を追い落とそうとしたとか……それなら恐れ、怒りもするだろう。だが、これはなんの根拠もない憶測に過ぎない。
目の前の事実だけを考えろ、とヤエトは自分に命じた。そうしないと、どんどん想像が突っ走ってしまいそうだった。頭が痛い。吐き気がしてきた。
「ア＝ヴルスは――」
「口になさいませんよう、と申し上げたはずです」
「――世俗の権力とは無縁のはずですね？　ルス公家の人間であっても、それは関係ない。ですが、切り離すのは惜しいほどの、しかし同時に恐ろしくもある力でしょう」
ライモンドは口をつぐんだが、かまわずヤエトはつづけた。
「当地には、神はおられぬと聞きました。その代わ

りに《雷霆の使者》がいる。ア＝ヴルスも。けれども、人はどうあがいても人だ。力の問題ではありません、心の持ちようが、魂のかたちが、人でしょう。恐れも、怒りも、神とは無縁だ」

「なにを、仰りたいの？」

「恐れが怒りや判断の歪みを招くのであれば、ア＝ヴルスをことさらに排斥しようとするあなたにも、それは起きているのではないかと考えました」

「……失礼なかたね」

「歪みない判断であるとお考えなのでしたら、お教え願いたいものですね。あたかもア＝ヴルスなど存在しないがごとくに扱う、その理由を」

自分の名を呼ぶものはいない、と断言していた少女。それが当然、という口ぶりだった。

何年、その状態がつづいているのだろう。誰がそう決定したのか、それはなぜか。

ライモンドの表情からは、なにを考えているのか読みとることはできなかった。そのくちびるは、動かない。ふるえも見せず、引き結ぶでもなく、ただ静かに閉じたままだ。

再度、ヤエトは問うた。

「なぜです？」

返答は、四阿の外から聞こえた。

「質問の時間は終わりですよ、《黒狼公》」

デュラルクだった。

それが合図ででもあったかのように、ライモンドは踵を返した。長い裾をさばき、衣擦れの音とともに歩み去る。赤くかがやく髪が揺れていた。

ほんの一瞬、ほんとうにライモンドは夫を殺したのだろうかという疑念が浮かんだ。ここでというのが事実なら、恩寵の力で視ることができる。

――馬鹿なことを。

あの小柄な女性が夫を殺したかどうかなど、今は些末な問題に過ぎない。

「わかりました。おとなしく着いて参ります。供の者にも、逆らわぬよう申し伝えましょう。声だけで

も、かけさせてください」
「ご案じめされますな。すでに、全員を捕えてございますれば」
仰々しく一礼して、デュラルクは笑顔を見せた。
殴ってやりたい、という衝動がヤエトを襲ったが、すぐに消えた。頭の中でルーギンが、突き指しますよと暢気に指摘してくれたからだ。
こんなところで命懸けの突き指をしても、しかたがないではないか。挙げ句、噂になるに決まっている——《黒狼公》、北方で突き指する、の巻。代官の奥方でさえ、これを都合のいい物語に仕立てることはできないだろう。……いや、なんとかしてやりかねないが、とても嫌だ。
突き指は諦めて、ヤエトは丁重に答えた。
「それは手回しのよろしいことで。摂政閣下は有能なかたであろうと、つねづね思っておりました」
「能吏と噂に高い《黒狼公》に高くご評価いただけるとは、望外の喜びですな」
こちらへ、と手招きされて、ヤエトは歩きはじめた。ファルバーンが支えてくれていなければ、まともに動けなかったかもしれない。
そういえば、第三皇子の邸を脱出するときも、こうしてスーリヤに助けられ、ようやくの思いで歩を進めたのだったな、と思いだす。あのときは、外でジェイサルドと合流し、わけもわからぬまま皇宮へ連れて行かれたのだったが。
ヤエトは額をさすってつぶやいた。
「そのような評判に値するとは、とても思えませんが。仕事はいつも山積して、かたづけきれないままです。それに、……こう頭が痛むのでは、まともにものが考えられない」
「薬湯も、お持ちします」
「寛大なことです。無事、北嶺に帰り着いた暁には、我が王に、摂政閣下のご親切を確とご報告申し上げましょう」
デュラルクの表情に変化はない。帰してもらえる

のかどうか、判断の足しになればと思ったのだが。

暫し、無言で歩を進めた後、ヤエトは尋ねた。

「セルクは、暴れませんでしたか」

「商人の行方が知れぬので、ご一行の皆様には部屋に籠っていただきますと説明したところ、あっさりと。一族の者と、双六に興じておいでです」

「皆様に親しくおつきあいいただいているようで、ありがたいことです」

セルクはともかく、六名の騎士はどうだろうと考えていると、向こうが先に話をふって来た。

「護衛の騎士が、ひとり減っています」

「……無体なことを」

「誤解ですぞ、公。姿がないのです。おそらく、商人の護衛として同行したのでしょう」

デュラルクが偽りをいっているとは思えない。

だが、自分には護衛などいないと商人が叫んだのも、ゆえのないことではない。北嶺の騎士たちのつとめは、ヤエトとセルクの護衛である。商人は、かれらの観点からすれば、おまけに過ぎない。

――あるいは、皇帝の伝達官だと承知している者が混ざっていたのか。

皇帝も、はじめからナグウィンを使い捨てるつもりではなかったはずだ。伝達官の替えは神殿でいくらでも育成されているとはいえ、あきらかに異人種と見える人材がそう多いとは思えない。ナグウィンは、それなりに貴重な存在だろうし、騎士に内命がくだっている可能性はあった。ラズラフを説き、護衛として同行したのかもしれない。

ヤエトは少し、顔をしかめた。

――皇女の命であれば、よいのだが。

皇帝の意が届く者が、皇女の騎士団にいたのなら――もしも、皇帝がナグウィンの口を借り、その者に伝えていたとしたら。適当な場所で、ラズラフもろとも商人を殺し、発見させ、外交問題に発展させるよう命じられているなら。

阻止する手立てが、あるだろうか？

知るかボケ、とヤエトは心の中でつぶやいた。

——そんなこと、俺が知るか！

得体の知れない伝達官の、その命がどうしてまた彼の肩に背負わされてしまうのだろう。なぜ、伝達官なのか。いつも、いつも、いつもそうだ。

皇女の伝達官が、ぴしゃりとヤエトの膝を叩いたあの手のあたたかさ。ウィーシャがそっとふれた、その指の冷たさ。ふたりとも、闇に消えた。忘れ得ぬ感触を、ヤエトに残して。

——忘れたいんですよ。

ナグウィンの言葉の意味が、わからないわけではなかった。この歳になれば、忘れてしまいたいこともたくさんある。

それでもやはり、自分は怖い。忘れる方が、ずっと怖いのだ。

だったら頑張るしかない。忘れたいなどと念じずに済むよう、ナグウィンを救うため、最善を尽くす。今は、それだけを考えよう。

ヤエトはデュラルクの目線をとらえて尋ねた。

「ラズラフ殿は、ナグウィンをどこへ連れて行かれたのでしょうか？」

「逆ですぞ、公。あの商人めが、我が従弟をそそのかしたのです」

「お言葉を返すようですが、旅から旅の行商人とは申せ、あの者に当地の地理がわかるはずもない。どこかへ行くとしたら、案内に立つのはラズラフ殿に決まっています。問題なのは、どこへ、ということです。わたしも知りたい。見当がついておいでなら、教えていただけませんか」

実のところ、ヤエトは正解を知っている。デュラルクは、知っているのだろうか。

夜の城内は、いたるところ闇だらけだった。先導の兵が掲げる灯火が届くには遠過ぎるほど、天井は高い。一行の足音と、武装した兵の装具がたてる耳障りな音もまた、その遠い暗がりへと吸い込まれていくようだ。

かなりあって、ようやくデュラルクが口を開いた。
「公は、氷姫の物語をご存じでしたな」
「おおまかな、あらすじ程度ですが」
「かつて氷姫の庭があった場所がどこだったか、今となっては誰も知らぬのです」
「……庭？」
ヤエトが訊き返したのを無視して、デュラルクは話をつづけた。
「先ほどの庭はその氷姫の庭を模したものです。はるか南方でも歌にうたわれたほどでした。常春の庭とも呼ばれたその庭が、恋人を待つためのものだったという事実は、あまり広まっていませんがな」
なんの話だろう、とヤエトは内心、首を捻った。
彼が知っているのは、絶大な魔力を手にした氷姫が、迫り来る南方からの侵略者を追い返すため、みずから国土を凍り漬けにしたという、いってみれば極端な対応にまつわる部分だけである。
デュラルクは、おもしろくもなさそうに、つづきを語った。
「かならず帰ると約束して戦に出た恋人を、氷姫は待っていたのですよ。常春の庭でね」
「それで、その恋人は戻ったのですか？」
「氷姫と恋人の約束は、歌にはうたわれぬまま……重要な約束とは、つねにそうしたものだとは思われませんかな。世人の知るところとはならず、ただ頬を撫で、耳をくすぐる風が知るのみである、と」
ヤエトは曖昧にうなずいた。デュラルクが詩人の心を持ち合わせているとは知らなかった。散文的な返ししか思いつかないが、そのまま答えるわけにもいかない。痛む頭をさすりながら、自分なりに言葉を捻ってみた。
「約束とは、非常に難しいものです。守れる約束だけでは、先が見えている。守れないかもしれない、ぎりぎりのことを持ち出すくらいの方が、実は誠実なのかもしれないと思うようになりました」
「守れないことが、誠実とは？」

「結果だけではないということです。無論、結果は大事ですが、はじめから守れるとわかっている約束は、人に変化をもたらしません。小手先で、済んでしまう。自分の限界に挑むような約束であれば、全力を尽くすことになるでしょう。努力はかならず身につきますし、周囲に影響もあたえるはず。そういう意味では、はなから結果の期待できる約束をするより、ずっと誠実ではないかと思うのです」

「なかなか含蓄のあるご意見、流石と申し上げておきますか」

笑みを含んだ声に、おや、と思う。

――なにか、別の意味があったのか。

デュラルクの意図を見落としていたかもしれない。情趣に富んだ返しができないことに劣等感があるせいで、そちらにこだわってしまった。

会話はそこで途切れた。

ヤエトが案内されたのは、以前とは違う部屋だった。荷物はすでに移してあるようだ。どうせ中もあらためられたのだろう。見られて困るものはとくにないはずだったが、気分のよいものでもない。

「ここならば、寡兵でも守れます」

部屋自体はそう狭くもないが、圧迫感がある。窓が小さく、少ないせいだ。そのひとつに近寄って、ヤエトは鎧戸の金具に手をかけた。冷たいが、ヤエトの指先も冷えきっている。血がかよっていないようだ、と思った。

――そろそろ倒れるかな。

敷物の厚みは申し分なさそうだが、できれば寝台に倒れたい。つまり、横になりたいところだ。

どうにでもなれと思いながら、ヤエトは鎧戸を押し開けた。窓が面していたのは、深い空濠だった。落ちたら死にそうな高さだ。侵入するのも困難だろうが、脱出も同様である。

ふり向くと、デュラルクが兵たちを退がらせ、こちらに向き直るところだった。視線があうと、摂政閣下は胡散臭い笑顔でヤエトに問うた。

「ところで、貴公に自由をお約束したら、代償になにを約していただけますかな？」

——ああ、なるほどね。

密約をしようという話を、遠回しに持ち出されていたのか。デュラルクが急に詩人になったのかとびっくりして損をした。

「先ほど、限界に挑む方が誠実などというお話をするのではありませんでしたね」

「今さらなにを。あの谷に橋を架けるという人が、それより無謀なことを思いつけるなら、知りたいものだ」

これには苦笑するしかない。ヤエトは少し咳き込んでから、問い返した。

「今ここで、保証していただく必要があるほど、わたしの自由はあやういものですか？」

「すべてはルス公の一存で決まります。そして、わたしはそれを左右する発言力を持っていると、申し上げておきましょうか」

「レイランド公子は、あのかたの地位を脅かしたのですか？」

デュラルクは鼻先で笑ったのみだった。

権力という名の魔性に、かれらは魅入られているのだろうか？　ルス公としての力をふるいたいライモンド、彼女に影響力を及ぼすことで実権を握ろうとするデュラルク。後継者たるべきレイランドを異邦へ遣ったのは、より長く、権力の座に就いていたい一心でか。

ふとナグウィンの言葉を思いだす。

——不良在庫か。

手に入れたらもう売りさばけない、手放すときは死を覚悟するたぐいの権力を、かれらは争っているのかもしれない。

格子の向こうで、デュラルクは微笑んでいる。自分が握りしめている権力の強さと価値を知悉しているのだろう。権力自体は、売り渡す必要などない。力を使ってなにができるかという部分が取り引きの

種、いわば権力者にとっての商材なのだ。
「貴公のお命を取ろうとは、ゆめにも思っておりませんよ。それは、おわかりですね？」
ゆったりと告げられたデュラルクの言葉を押し返すように、ヤエトは曖昧に手を動かした。
「なにをお約束すれば喜んでいただけるのか、残念ながら、わたしにはわかりかねます」
「同盟を」
即答だった。意味するところは即座にわかった。
――友邦を攻めるのか。
北方諸領の結束は、事前に予測していたよりも、ずっと弱い。むしろ存在しないも同然なのだろう。でなければ会談の設定にこれほど時間がかかりはしないだろうし、ひとつの一族をまず先に、といった展開にはならない。
「相互不可侵でしたら、この場でお約束できます」
デュラルクは、感心しないという表情を見せた。わずかに肩をすくめ、首を左右にふる。
「それは公の仰る、できるとわかっている約束に過ぎないでしょう。ご自分の限界に挑んではおられない。互いの関係に、変化ももたらさない。まさに、仰せの通りです」
「急激過ぎる変化には、ついて行けぬ者も多くなりましょう」
ヤエトの言葉を無視して、デュラルクはつづけた。
「そうですな、友軍としての出兵を条件に含む同盟……というところまで、思い切って踏み込むのは如何かな」
やはりな、とヤエトは思った。想像通りだ。的中しても嬉しくない予測ばかり、当たる気がする。不思議なものだ。
ヤエトは眼を閉じた。
帝国は一枚岩ではない。北方も同じだ。そこに、隙がある。
その隙を、無条件には歓迎できない。付け入ることができると考えるのは、危険だ。こちらも同じ、

付け入られる隙がある。
帝国から引き剝がされ、庇護下になくなるだけなら、まだよい。全面対立を余儀なくされるような展開に持ち込まれたら、どうする。
――あやうい。
時期尚早、という言葉が頭に浮かぶ。
勝手に兵を動かすわけにはいかないのだ。春先、第二皇子のために鳥を送ったのとは、わけが違う。帝国の領土を守るためでも、皇子の依頼があるわけでもない。同盟を結び、他国の内紛に介入するなどという行為を、皇帝が許すだろうか？
皇帝と皇女の利害は、いずれ対立する。いや、すでにそうなっている。皇帝は皇女を掌中の珠としておきたいのだし、皇女はそこから転がり出ずにはおられまい。それは既定の事実だ。
だからこそ、重要なのだ。いつ、どのように、それを明示するかが。その重大事を、北方の一氏族の都合にあわせる必要があるだろうか？
ない、とヤエトは断じた。心の内で、しっかりと結論づけた。その必要は、ない。
だが、完全に切り捨てるのも惜しい。北方は、北嶺の隣人である。敵に仕立ててよし、味方として結んでもよし。使われるのではなく、こちらが使う立場になればよいのだ――真上皇帝をして、危険な男といわしめたデュラルクを相手に、それは容易なことではなかろうが。
ヤエトは眼を上げ、デュラルクと視線をあわせた。灯火を映して、彼の眸（ひとみ）は光そのもののように明るかった。その奥に抱えた野望の大きさ、暗さを推しはかることはできない。
彼の商材に手をつければ、否応（いやおう）なく支払いを迫られることはわかっている。今はまだ適度な距離をたもちたいところだが、そうはさせじと追い詰められてしまった。相手は馬鹿ではない。むしろ、かなりの難敵だ。皇帝が警戒するのも無理はないだろう。
小さく息を吐いてから、ヤエトは口を開いた。

「北嶺は、魔法の土地です」
「……なに？」
「北方が、その大地よりあふれる力で支えられているのと同じく、北嶺もまた、神力としか表現しようのない契約の力にたよっているのです」
デュラルクの口の端に、笑みが浮かんだ。
「詭弁で逃れられるとでも？」
「逃れようにも逃れられぬのです、摂政閣下」
対するヤエトは真顔である。
目の前にいる男に、これほど真情をこめて語るのは、はじめてかもしれない。敵味方や利害の対立などという地上の理屈とは、これは別の話だ。神の力から逃れることなど、不可能だ。
「あなたがたの土地に、神はおられぬのでしょう。しかし、北嶺には存在する。時を経て人は代をかさね、はじめの約束がすでに忘れ去られようとしていても、それでも、逃れることはかなわぬもの。我々も――」
「神など」
横柄に遮られても気にせず、ヤエトは言葉をつづけた。
「――そしてもし、北嶺の力を望まれるのであれば、あなたがたも。我らの関係を変化させたいとお考えなら、北嶺の魔法をも受け入れねばなりませんよ」
デュラルクの表情が厳しいものになった。
「どういう意味か」
神は人の都合など気にすまい。利用できるものは利用させてもらわねば、損だ。
「巨鳥の入国を、許可願います」

2

出立前、連絡がつかなくなる、とヤエトは皇女に告げた。
期間が長いほど、揺るぎない信頼は難しくなる、だが信じてほしいと語った。あれはあれで、本気の

言葉だった。

ただ、それでは困るとも感じていた。

もちろん、いざとなればナグウィンを通じて皇帝に連絡はとれるし、皇帝がその気になりさえすれば、皇女にも瞬時に話は通じる。だが、できれば経由したくない人物である。

そのナグウィンが逃亡してしまった今、ほかに連絡手段を用意してあったことに、ヤエトはほっとしていた。おかげで、救われる。

連絡がつくから仕事が増えるという自覚はあったから、必要最低限にしか明かしていない。知っているのは、護衛騎士団の隊長と、厩舎長だけだ。

皇女にすら、報せていない。

――《雷霆の使者》に留められるのではないかと、ひやひやしたが……。

だが、ジェイサルドの入国を阻んだ異能者は、気にもとめなかったようだ――騎士団の荷物に紛れ込ませた、おとなしい、小さな白い鳥には。

「ご無事でなによりです」

隊長は、ヤエトの顔を見ると小さく一礼した。一瞥して、少なくとも目につくところには怪我がないと確認して、ヤエトはほっと息をついた。無駄な争いは、なかったようだ。

小脇に抱えた布袋の中には、《雪鳩》が入っているはずだ。ヤエトの視線に応え、隊長は小さくうなずいた。《雪鳩》は、まだ元気でいるということだ。

――七日の日限は、少なくとも《雪鳩》には影響しないようだな。

感応力がはたらきやすいというだけで、《雪鳩》はふつうの鳥と大差ない生き物なのだろう。でなければ、《雷霆の使者》もなんらかの反応を見せたはずだ。

「これを」

畳まないまま紙片を渡し、うなずいて見せる。読め、という意を介し、隊長は受け取ったものに視線を落とした。

大したことは書いていない。デュラルクやライモンドに見られて困る内容ではいけないし、北嶺に届いたら届いたで、誰に見られるかもわからない。

「三羽、ですか」

「デュラルク殿がお約束くださいました。巨鳥が三羽と乗り手を一名」

それ以上の譲歩は、引き出せなかった。

同盟を望むなら、鳥にも慣れてもらわねばならない。当初、にべもなく拒絶したデュラルクを、ヤエトは理詰めで説き伏せた。もし鳥が使えなければ、出兵を望まれたとき、徒歩で行くことになる。架橋が終わらなければ、馬は使えない。

貴殿は歩兵をお望みか、とヤエトは尋ね、デュラルクは返答に窮した。

信頼関係は、いきなりできあがったりはしない。積年の恨みがあるのだ、それを抑えるだけでも大変なことだろう。それでも望むというなら、まず鳥に慣れてもらわねば話にならない。

試験的な運用と考えればよい、とヤエトは説いた。少数の鳥を飛ばせて、民の反感の度合いを見る。もし恐慌状態におちいるようであれば、戦場での効果的な使用も望めまい。敵だけを恐怖させるならともかく、同盟相手までが逃げまどうようでは困る。実際、都では南方人の使用人が逃げ出す騒ぎになったのだ。同じことが、北方では起きないだろうと期待する方が、どうかしている。

人だけではない。北方の魔法は、異種の力を拒むものだ。北領の神に力を与えられた鳥たちが、北方の空を飛翔し得るのか。その確認もまた、双方にとって必要なものだ。同盟の話はそれからだろう。

理屈は通っているし、デュラルクはなまじ頭が回る男だから、理にかなったことをいわれると、弱い。

それで、なんとか押し切れた。もちろん、ルス公にも話は通っている。現状を把握できていないのはむしろ、護衛の騎士たちだろう。

「商人が姿を消したことは、知っていますね」

「はい。行き先を知っているかと問われました……ここに書かれている、一行から行方不明者が出た、というのは」
「彼のことです」
その捜索のため、鳥と騎士の派遣を要請する、と書いた。ルス公家側の許可は得た、と。
隊長は、わずかに眉根を寄せた。
「よろしいでしょうか？」
「なんなりと」
「森に隠れられてしまえば、上空からの発見は困難なものと思われます。降りられる場所も、限られてくるのではないでしょうか」
ヤエトは苦笑した。ルーギンが選んだ騎士は、さすがに無能ではないようだ。
「たしかに。ですが、高速かつ広範囲の捜索が可能になる上、相手も空は警戒していないはずです」
「三羽――それに、乗り手は一名ですか」
突き詰めていえば、デュラルクとライモンドは、鳥より人の方を恐れたということになる。騎士の数を、増やしたくないのだ。一羽に一名と要求したら、一名で三羽を率いることができないなら、この話はなかったことにと返された。
向こうは向こうで、交渉のなんたるかを知っていると見える。
手招きをして騎士を間近に呼び寄せると、ヤエトは声をひそめて伝えた。
「《雪鳩》の存在は、明かしていない。隊長ならば、条件さえととのえば北嶺との通信が可能である、と示唆した。ごく単純な内容に限り、念じれば伝言が届く程度の力がある、と。向こうも、通信手段もなく我々が敵地に乗り込んで来たとは思わないから、容易に信じた」
「それは――」
騎士が言葉を失っても、無理はなかった。
紫の肩衣を与えられた伝達官は、竜種の言葉を運ぶ特別な存在である。いかなる事情があろうとも、

それを騙ることは許されない。

「当地の人間は、伝達官のなんたるかも知らぬ。帝国はそういう力を使い得るという程度を知るのみだ。だから、それを利用する。伝達官を騙るわけではない。万が一、問題があれば、わたしが責任をとる」

竜種の能力はすでに知られており、秘匿しても意味がない。巨鳥も同じだ。だが、《雪鳩》は違う。皆、巨鳥に気をとられて注意を払わないが、《雪鳩》は各地に持ち込まれ、基本的には、日限までに北嶺へ戻されている。定期便のようなものだ。無論、有事には重要な通信文を運ぶことになるだろう。

いずれは知られてしまうだろうが、可能な限り、それを先延ばしにしたい。

「それには及びません。責任は、わたしが」

生真面目に答えられて、ヤエトはかるく首をふった。相変わらず、頭痛がひどい。そろそろ寝たいのだが、ここまで痛いと熟睡はできないだろう。

「隊長、わたしと君と、どちらが偉い？」

「それは」

「わたしだ。責任というのは、偉い人間がとることになっている。諦めろ」

責任をとって辞職、悠々と引退……という夢を、ほんの一瞬、ヤエトは脳裏に描いた。虹色の未来といいたいところだが、一連のできごとを伝達官の詐称と判断されれば、生ある者の世界からの引退を強制されかねない。

なかなか難しいものだ。

「確認だ。伝達官を騙る必要はない。いいな？」

「はい」

「だが、耳目は集めてもらう必要がある。集中に入るための儀式だとでもいって、なにか適当にやってくれ」

「なにか、ですか？」

「適当にそれらしく、だ」

「はい」

そこで、ふとヤエトは思いつき、尋ねてみた。

「酒は強いか？」
「枠、といわれています」
「枠？」
「素通しです。いくらでも飲めます」
生き物としてのつくりが違うな、と思ってしまう。ヤエトなら、一口で倒れて生死の境を彷徨うものを、目の前の男は水同然に飲むらしい。
「要求してやれ」
「は？」
「樽で運ばせるんだ。精神集中のために、塔の最上階に部屋を用意するよう、依頼済みだ。樽酒を上まで運ぶとなれば、人手もいるし、かならず注目を集めるだろう。その隙に、《雪鳩》をはなつ」
騎士は、はじめて笑顔を見せた。
「おまかせください。いい案があります」
「なんだ？」
「帝国式の儀式であるといって、杯を回します。騎士団の酒盛りでよくやる要領です。団結力を高め、全員の精神を統一するという口上のもとに、皆で回し飲みをします。あれなら、そらで唱えられますし、もっともらしい文言になっていますから、大丈夫です。やれます」
「酔っぱらいを量産するのか」
「参加者をつのります」
「よし、やれ」
「はい」
「では《雪鳩》を」
《雪鳩》が入っている袋を抱えたまま、騎士は少し躊躇し、それでも敢えてといった風情で口を開いた。
「おできになりますか？」
「はなてば、北嶺の厩舎へ戻るよう訓練されているはずだ。なんなら今、事情を教えてやるか？」
「いえ……《雪鳩》はそこまで話が通じませんし、すぐにものを忘れてしまいます。それに、わたしはこいつらと心を繋ぐのが、あまりうまくないのです。それから、夜目は――」

「見えないそうだが、飛んでもらう。安心させてやってくれ」

うなずいて、騎士は《雪鳩》を取り出した。

《雪鳩》は、鳴き声が低い。羽撃きの音もあまり大きくなく、非常に静かな鳥である。小さな身体の割には早く飛ぶ。残念ながら、暗いとほとんどものが見えなくなるらしい。方向感覚ははっきりしているから飛べはするが、障害物の多い木立の中は無理だな、と厩舎長がいっていた。飛速が災いして、そこになにかあると見えたときにはもう激突することになっているだろう、と。おそらく同調して視界を共有したことがあるのだろう。行く手をさえぎるものがあったら終わりだ、というのが厩舎長の分析だった。

あまり頭はよくない、とも厩舎長はいっていた。巨鳥たちのように、自分で考えて自由に行動するというわけにはいかないが、長距離を休まずに飛ぶことはできる。生まれ育った厩舎の場所を記憶し、はるかな距離を越えてそこに戻る力がある。

実に素朴で単純な、帰巣本能が《雪鳩》の力だ。化鳥の騎士団が各地に遠征していた時代から、《雪鳩》は飼育されていた可能性もある。

鳥を使った通信には、前例がないわけでもない。もっとも、歴史に詳しいヤエトだから、そういう例があると知っているだけで、一般的な知識ではないだろう。

帝国では、迅速な通信手段は皇家が独占すべきものだ。軍を動かすために街道の整備は進み、駅逓制もととのった。だが、人を介さぬ通信手段は、顧慮されることなどなかったといってよい。

《雪鳩》については、帝国にも、できるだけ知られたくない。そうなると、皇女の騎士団にどれだけの忠誠を期待できるか、という話になる。

少し前、ルーギンにさりげなく話をふってみたところ、どうかな、と曖昧な返事だった。

――難しいだろうな。

こういうとき、彼は建前でごまかしたりしない。騎士とはどうあるべきだという理想に溺れず、現実を語る。そのあたり、いかにも帝国人らしい。

難しいとルーギンがいうなら、その通りなのだろう。騎士団の団員は、皇女に剣を捧げている。通常の任務であれば、問題なくこなしても、皇帝と皇女のどちらを選ぶかといった微妙な局面で、各人がどう出るかまでは、わからない。皇帝の内意を受けている騎士も、紛れているかもしれない。

――皇帝に限った話でも、ないだろうしな……。

ほかの皇子か、あるいはかれらの支持者の命を受けた者が、潜んでいるかもしれないのだ。その可能性を完璧に排除することなど、不可能だろう。

《雪鳩》に、厩舎に戻る能力があることは、騎士たちも知っている。多少は感応力を使える、意を通じさせることができるというのも、知られている。だから、騎士団に内通者がいれば、それらはもう隠すべくもない情報だ。

それでも、できるだけ知られぬようにしたい。空に《雪鳩》の姿を認めた敵兵が、弓に矢をつがえるようになっては終わりだ。

――敵兵か。

誰が敵になるのか、それはいつなのか。

今かな、とヤエトは思った。

隊長は静かに喉を鳴らしている《雪鳩》を撫で、脚に通信文を結びつけている。

自分も鳥と心が通じればよいのだが、とヤエトは思った。日によって、違う。通じればよいと思い、通じなくてよかったとも思う。今日は前者だ。

《雪鳩》に心を乗せ、厩舎に辿り着くところまでを見届けられれば。そうしたら、少しは安心できる。

猛禽(もうきん)に襲われる可能性はあるし、北嶺以外の土地でなら、今宵の糧にするためにと人に射落とされる恐れもある。

《雪鳩》は、けっして確実な伝達手段ではない。

隊長に鳥を渡され、ヤエトは少し緊張した。この

まま、窓からはなってもらおうか。いや、駄目だ。極限まで見張りを分散させてからにしたい。

「たのみました」

ヤエトがそう告げると、隊長は一礼した。

「たしかに、承りました」

「おもての衛兵に伝えてくれませんか。わたしは気分がすぐれないので、人を入れないようにしてもらいたい、と」

ものはついでとたのむと、隊長はそれもこころよく引き受けてくれた。

気分がすぐれないのも嘘ではないが、《雪鳩》をおとなしくさせておく自信がないから、という方が理由としては大きい。

隊長が部屋を出ると、ファルバーンが扉の内側に椅子を立て掛けた。静かに動かしていたが、重たげな木製の椅子である。

「なにを？」

「開きづらいようにしています」

「なるほど」

「殿は、少しでもお休みください。それの面倒は、わたしが見ておきます」

それ、というのは《雪鳩》のことだろう。物扱いするようなら預けられん、と思ってしまった自分に少し目眩がした。

駄目だ、もう鳥馬鹿一直線だ。認めざるを得ない。これも北嶺の神の加護か、あるいは呪いか。

「少し考えたいことがあるので」

いいわけがましいと自分でも思ったが、ヤエトは寝台に腰を下ろし、膝の上に鳥を乗せて待った。勝手に飛び立ったりしないよう、押さえるともいえないほどの力で左右の翼を包むように手を添えているが、《雪鳩》はそれをどう感じているのだろう。

――案外、とくになにも思っていないのかも。

鳥の考えることなど、わからなくて当然だ。

騎士たちに聞いたところでは、鳥の思考が読めるといっても、それはやはり人とは異質なもので、言

葉では説明できないこともあるという。厩舎長あたりになると、その異質な思考にすら同調し、なんとなく理解してしまうようなのだが、そこまでできるのは異常である。

人は人、鳥は鳥。違う生き物であろう、とヤエトは思う。通じあうのが、奇蹟なのだ。

《雪鳩》のあたたかさを感じ、この小さな身体を駆け巡る血と力、翼に宿る可能性を考える。

鳥とは不思議な生き物だ。

空を飛べるというのは、どんな気分なのだろう。

もちろん、ヤエトもシロバの背に乗って飛ぶことはできる。だがそれは、自力で飛ぶのとはあきらかに違うだろう。完璧に心を添わせ、すべての感覚を鳥に同調させることができれば、同じように感じられるのだろうが、ヤエトには無理だ。

ぼんやりと視線をさまよわせる内に、扉の前に移動させた椅子に腰掛けているファルバーンに目がとまった。

――わからないといえば、あいつもだ。

亡国の王子という自分の立場を、どう考えているのか。人に仕えることに、なにか疑念を抱かないのだろうか。浮き世離れした宮廷に生まれ育った母親と、どうやってあの渾沌を生き延びたのかを、ヤエトはまだ、彼から聞いたことがない。

そしてなぜ、今はヤエトに仕えているのかも。

預言者がヤエトを救い主と呼んだから？ それだけと考えるのは、短絡ではないのか。

視線が合った。

「預言者は、なんといったのです」

「いつのことを、お尋ねですか」

ファルバーンは落ち着いている。

食えない奴だ、と思う。なんとなく、ジェイサルドと似たところがある。双方、ヤエトに尽くしてくれるのはわかるし、信頼もできるのだが、どこか根っこのところで気を許せない。

心の芯に抱いている価値観が、根本的に違うので

はないかと思う。それがなんなのかはうまく言葉にできないし、そもそもヤエト自身の価値観がどんなものなのかも、端的には表現できないのだが。

ふと、ライモンドの言葉を想起した。

――物語の登場人物の名も、考えかたも、なんだか異様で近づきがたかった。

なるほど、沙漠の民はそれほど異質ということか、と納得しそうになるから怖い。異質といえば、ライモンドだってそうなのだ。北方の文化を、ヤエトはほとんど知らない。沙漠以上に。

「わたしが倒れる前です」

「そう仰られましても、いつのことだか」

平然と返されると、苦笑せざるを得ない。

「最近のことです、自領から北嶺へ、シロバに勝手に運ばれたときのね」

ファルバーンはわずかに肩をすくめた。

「あのかたにはお会いしていません。もう、どれくらいになりますか……博沙国へお供する前に、お会いしたきりですね」

「そのとき、なにかいわれましたか」

「救い主様をお助けするのが、わたしの使命だと」

その救い主という呼称を、ヤエトはできれば聞きたくなかった。しかし同時に、そこを解明したくもある――救い主とは、いったいなにを救うのか。あるいは、誰にとっての救いなのか？

「その救い主というのは、いったいなんなのです」

「公は、預言された救い主であらせられます」

「ですから、それはどんな預言なのかと」

「先々のことを、お聞きになりたいのですか？」

返す言葉に詰まった。

たしかに、未来を知るのは嫌だ。ファルバーンにも、その話はしたことがある。

だが、問題は個人的な好き嫌いに留まらない。未だ発生していない事象を語る神、記憶をふり返るように未来を透視するターンの力を、ヤエトは疑い得ない。彼に過去視の恩寵の力を与えている古王国の



神オルムストと、ターンとは、対になる存在である。ヤエトにとって、預言者が告げる言葉は重い。逃れようなく、知っているからだ。その神の力が本物であることも、預言者が嘘をつけないことも。

へたに聞けば、追い詰められてしまう。自分の性格なら、きっとそうなる。どうせ、知りたくなくても知らされるだろう。必要とあらば、預言者はそうするはずだ。

そのときのことを考えると、うんざりした。さぞ逃げ出したくなるような局面であろうと想像がつく。しかし、逃げられはしないのだろう、とも。

しかたなく、ヤエトはもうひとつの疑念の方をぶつけてみることにした。

「お父上のことは、記憶にあるのですか？」

珍しく、ファルバーンが動揺を見せた。

「わたしの、ですか？」

なんでもないことを反復して問い返すなど、彼には珍しい。少し迷ったが、ヤエトはうなずいた。

「あなたのです」

「いえ。わたしはまだ幼く、故国のことも覚えていないほどで……考えてみれば、あの母が、よくわたしを連れて逃げてくれたと」

ファルバーンの母親、すなわちアルハンの元王妃は汚穢に敏感で、日常生活にも支障を来すほどだと聞いている。皆殺しといわれるほどの惨劇の舞台となった王宮から、無事に逃げ延びることなど、とてもできそうにない。それでも実際、ここにファルバーンがいるし、本人もまだ生きている。

――ジェイサルドが、なにか仕組んだか？

沙漠の老将は、はじめから裏切るつもりでアルハンに潜り込んだという話だが、王妃と接点があったのだろうか？

考えてみたが、その可能性は低そうだ。ジェイサルドは、アルハンにはなんの未練もないといっていたはずだ。たしか、出奔する前の自分に親切にしてくれた人は皆、すでに死んでしまっていた、だから

故国をなつかしむ気もちもない、と。
では先代《黒狼公》の命令か、と思いついて、そこから復縁の申し出を連想してしまい、ああ、とヤエトは息を吐いた。
どちらを向いても面倒ばかりのこの人生に、絶望しそうだ。
「お父上が、逃がしてくださったのでは」
そういう可能性もある。どうせ実証できないのだから、信じたければ信じてもよいだろう。
だが、ファルバーンは首を左右にふった。
「父は真源に籠ってしまい、都の崩壊もなにも伝えるすべがなかったと聞いております」
「真源？」
ファルバーンは声を低めて答えた。
「水源のことです」
——穢れを含んだ水の源泉か。
話を聞いた限りでは、アルハンの王は祭祀王である。政治や経済には疎かっただろう。聖性と清浄の維持に伝え聞くほどの手間をかけていたら、ほかに割く余力はない。
——神の怒りを鎮めようとしたのだろうか。
天災だけでなく、人災にも、かれらは神の意図を感じたのかもしれない。だとしたら、滅びに瀕したときにも、いや、そういう事態ならなおさら、祭祀を重んずるだろう。
声を低めて、ファルバーンはつづけた。
「邪竜に祈るためだったと、ほかで聞きました」
意外な答だ。清浄神の恩寵は、邪竜の心臓そのものを滅ぼすわけではなく、流れ出る血を浄化するためのもの。直接に敵対しているに近く、邪竜とは相容れないはずだ。
清浄神の敵に、なにを祈るというのか。そもそも、祈りが届くのか？　相手は心臓だ。
少し口にしづらそうに、ファルバーンは告げた。
「あれは穢れですが……不死でもあるので」
なるほど、とヤエトは思った。

王は民も土地も、神さえ捨てて、保身に走ったというわけだ。

「それが、民にも漏れましたか」

ファルバーンは無言でうなずいた。

王族が憎まれる理由は、国を滅ぼした無能さのみに留まらなかったのだ。王妃や王子が生き延びていれば、王の祈りが邪竜に届いたという風評もひろまるだろう。家族はその恩恵を受けたのだと。

「誰に聞いたのです？　作り話ではないのですか」

「廷臣の……父の腹心であったという男の娘が南方に嫁していたので、その縁をたよって身を寄せていたところ、数年後に本人が来たのです。母がその者を見覚えていました。そのときに、父の話を聞かされました。裏切り者、穢れの王、呪ってやるといわれ、追い出されたのです」

「大変でしたね」

空々しいが、ほかに言葉がみつからない。

どうして自分のまわりには、特異な生い立ちの人間が多いのだろう。もう少しこう、両親に愛されてまっすぐに、ふつうに育った人物がいてもよいのではないか、と思う。

それとも、ふつうの家族とか育ちかたとかいう概念自体が幻想に過ぎないのだろうか。それもなんだか、ずいぶん哀しい話だ。

「公も、お疑いになりますか」

「なにをです」

「わたしが……穢れた心臓の加護を受けていると」

「まさか。清浄神の恩寵のおかげで、毒殺されかけたところを救われたわたしが、そんな疑いを抱くはずがないでしょう。お父上のことは、その者が嘘をついている可能性もあります」

「……お気もちは、ありがたく」

ありがたくなさそうだな、と思ってしまうような返事だった。

ファルバーンが見せる、年齢に見合わぬ落ち着きぶりは、すべてを諦めているところから来ているの

かもしれない。諦めるためには、今さら希望など持ちたくない。本心はそんなところだろう。

だが、家臣の言葉を、頭から信じるのもどうだろう。王が実際に真源に行ったとして、その意図を誰が正確に知り得るのか。

「仮に嘘でなくとも、思惑を隠して真源へ赴かれたのかもしれません。余人に知られてはならぬ事情があったのだろうと信じてみてはどうです」

「ですが」

「過去を変えることはできませんが、あなたの心の中で、よりよい未来に繋げることはできるでしょう。お父上の過ちを過ちとして認めるにしても、自分も穢れを受けているかもしれないと疑うのはよくない。それくらいなら、逆になさい。立派なかただったと信じてみればよいのです。実際がどうであったかなど、誰にもわからぬのですよ、今となっては。こうであったならと望む姿を、心の中で生かしておあげなさい。なにをいわれても、きっと立派な人だったと心に想うだけでいい。他人と共有する必要はありません。それでも、きっと支えになります」

「……ありがとうございます」

まだ、なにか鬱屈が残っていそうな声音だった。

――まぁ、どうにもならないか。

ヤエトにできることは、たかが知れている。ちょっと指摘して、心に楔を打ち込んでおく。目印程度だ。本人がその気になれば、そこから壁を割ることもできるだろう。今すぐでなくてもいい、いつか、なにかのきっかけにはなるだろう。

あるいは永遠に、壁が割れる日は来ないのかもしれない。諦めで塗り込めた過去と折り合いをつけ、そのまま生きていくことも、べつに間違いでもなんでもない。

少し寂しいだけだ。

「礼をいわれるようなことは、なにもありません。むしろ、わたしが礼をいう側でしょう。命を救われていますしね、もう幾度となく」

ファルバーンは居住まいを正して答えた。
「それは公が我々を受け入れ、救ってくださったからです」
「先代のなさったことを、引き継いだだけですよ」
ヤエトが答えると、ファルバーンは吹き出した。どうしたのかと見ていると、失礼、と彼は咳払いをしてから告げた。
「公にお礼の言葉を申し上げるのは、とても難しいですね」
「そうでしょうか？」
「当然のことだ、なにもしていない、ほかの誰かの手柄だ……このどれかで、いなされます」
「議論だけは得意ですからね。わたしを口で負かすには、ずいぶん修行が必要だと思いますよ」
「そもそも、謝礼の言葉を否定なさることが、おかしいのですが」
ヤエトは首を捻った。なるほど、たしかにおかしいかもしれない。
「わたしは感謝されるのが嫌いなのでしょうか？」
「……お答えのしようがありません」
感謝されること自体は、べつに困らない。
だが、感謝は期待に繋がってしまう。本人が意識しているか否かに関係なく、この人は素晴らしい人だから次もなにかしてくれるだろう、という考えが、どうしても附随する。
それは困るのだ。期待されるのは、ヤエトは好きではない。はっきりいって、嫌いである。その期待に応えられなかったらと不安になるからだ。
つまり、自分はひどく小心なのだろう。
「情けないな」
「は？」
「いや、なんでもない。そろそろ飛ばそう」
できない約束はしたくない。そんなヤエトの態度を人は誠実と呼ぶが、実態はこんなものだ。
期待を忘れ、諦めきった人生を過ごしている誰かを見れば、寂しいなと思う。もっと期待しろ、未来

を自分から鎖すな、と説いたりもする。だが、その期待が自分に向くのは御免蒙りたい――それがヤエトという人間だ。

身勝手といわれれば、それまでかもしれない。

――でもなぁ。

それでなにが悪い、とも思う。知るかボケ、やってられるか、手前のことは手前でなんとかしろ、期待をかけるなら自分自身にかけろ、という理屈はべつに間違っていないと思う。

「外は、かなり人が行き来しているようです」

ファルバーンのいう外は、室外の廊下や階段という意味だ。戸外ではない。この人手のたりない城館で、それだけ屋内に人がいるなら、屋外はますます手薄と考えてよい。

それを狙って、隊長にあんな依頼をしたのだ。

北方に明かす手の内は、最小限に留めたい。友好を深めたいとか橋を架けたいとかいっても、本音はそんなものだ。

これもまた、少し寂しいというべきか。

ファルバーンが部屋を横切って窓辺へ行き、鎧戸の隙間から外を覗き見た。

「見える範囲には、人はいないようです」

配されているであろう見張りが、外からの侵入者に備える方に熱心で、城館の窓などあまり見ていないよう、そこは祈るしかない。

祈るといっても、ヤエトに恩寵を与えている古王国の神は、祈りが届くだけでかなえられることはない。祈るだけ無駄そうではある。ファルバーンに恩寵を与えている清浄神も、この状況では力になれはしないだろう。

北嶺の巨鳥に飛翔の力を与えたツェートーであれば、《雪鳩》の翼にもさらなる力を……と思わなくもないが、もともと気に入られていないヤエトの祈りでは、届きそうもなかった。

《雪鳩》は、ヤエトの手の中で今もおとなしい。北嶺まで飛べるのか、と不安になるほどだ。

「……たのむぞ」
小さく声をかけ、ヤエトは鳥を窓からはなった。なにも見えない夜の中へ、突然はなたれる。《雪鳩》にとっては災難でしかないだろう。
行け、速く飛べ、無事に北嶺へ辿り着けと祈るのと同時に、許せ、とも念じていた。
おまえの小さな翼にたよるしかない、人の無力さを許せ、と。
《雪鳩》は少し高度を下げたが、それもまばたきひとつのあいだに過ぎなかった。すぐさま翼が空気をとらえ、風に乗り、ひらりと空を切って飛び去った。
ついさっきまで膝の上にいて、両手のあいだにぬくもりを感じていたのが、もう夢だったとしか思えない。《雪鳩》の輪郭は夜にとけ、消えた。
「あとは待つだけだ」
緊張がとけたのか、不意に視界が狭くなった。これはまずい、倒れるかもと思うあいだにファルバーンが彼を支え、寝台へと移動させてくれた。
「ほら、また助けてくれた」
ヤエトがつぶやくと、ファルバーンは怪訝そうに彼を見た。
救い主などではない。自分には、誰かを助ける力などない。むしろ、助けられてばかりだ——そう語りたかったが、そこで一回、意識が飛んだ。
これっきりかと思ったところで、なぜか戻った。
その一瞬、ヤエトの意識は明晰だった。あたりのなにもかもが、くっきりと見えた。闇に溶ける天井と、それを支える柱の境界までもが。差し渡された梁の木目が美しい、と思った。知らない文字のようだ。流れるような黒をこの木に配したのは、北方の大地の力なのだろうか。
北方には神がいない。土地の力はそのまま、特定の人間に流れ込む。
それなら、《雷霆の使者》はどうなる。
かれらは天候をあやつる。その力は大気に属するものだ——かれらは大地に縛られない。ゆえに、政

治とかかわらない。土地に、領土に保証される権力とは無縁に生きよとさだめられている。

木目を見ながら、ヤエトは思った――なんというくそったれな頭痛だ。もう少しでいい、まともに考えさせてくれ。

ライモンドの声が聞こえた。

――わたしはこの土地のあるじです。

空には彼女の力が及ばない。北方の空に力を及ぼせるのは《雷霆の使者》だ。かれらは敵にも味方にもならないだろう。

鳥がいれば、空はなんとかなる。

だが、それだけではたりない。逃亡者たちは、地上を行くのだ。生かすも殺すもルス公次第という状況を看過するのは、まずい。

ああ、そういうことか、と思った。

それで彼女は自分に姿を見せたのだ。名を告げあって、繋がりをつくったのだ。

「ア＝ヴルスだ」

自分でもなにをいっているのかわからないまま、ヤエトは囁いた。くり返した。

「ア＝ヴルス……」

寝台に倒れ込みながら、今度こそヤエトは意識を手放した。

3

凄まじい頭痛のせいで目が覚めた。頭痛で気を失っておいて、やはり頭痛で目が覚めるなど、どういう冗談だと思う。話がおかし過ぎる。

だが、それが現実だった。

背中から首、後頭部にかけて、板が入ったように硬くなっている感じがする。それが熱をもって、どうにも我慢のならない勢いで攻めてくる。

自分の身体のことだから、外に出ていざ会戦というわけにもいかないし、籠城戦になるだろう、食糧の備蓄はどうなのかと暫く考えて、それから気がつ

いた。

籠城ではない。部屋に軟禁されているのだ。鳥はどうなったのだろう。通信は届いたのか？

「ファル……」

最後まで音にできなかったのは、喉が痛んだからだ。炎症を起こしていそうだな、と思う。痛いといえば、くちびるもだ。ひび割れているに違いない。

「お気がつかれましたか」

いるはずのない男の声が聞こえた。

霞む視界の奥から顔が近づいて、聞き間違いではないとわかった。名を呼ぼうとしたが、痰が絡んで変な音が出、喉が不愉快に痛んだだけだった。

「お口を湿します」

勝手に宣言して、顔は遠ざかった。水気をたっぷり含んだものが、はたはたと口のまわりを撫でるように動いた。割れたくちびるに染み、その隙間からヤエトの口内に滴って、熱で腫れ上がったように感じられる舌を、ほんの少しだけ冷やした。

もっと水が欲しいと思ったが、あまり急いでも、どうせ飲み込めないことはわかっていた。

迂遠な方法で水分をとりつづけるあいだに、また意識を失ったらしい。どこからどこまでが夢なのか、きちんと目覚めているのかわからない状態で、それでもヤエトはまた現実に戻った。

今度は、いるはずのない少女の顔が見えた。

「よく戻ったな」

偉そうな口調だが、表情は歪んでいる。つらそうだ。まずいな、と思った。

――俺は、死にかけているのか。

ついこのあいだも、死にそうになったばかりだ。いくらなんでも節操なく死に瀕し過ぎである。これでは周囲も呆れるだろう。

三十までは生きられないといわれて育った自分だから、三十過ぎからはもう余生と心得て過ごして来たのだが、そういえば最近、先々について考える機会が増えていた。未来が訪れるのが、当たり前であ

るかのように。

明日や明後日のことではない。

何年か先はどうなるのか、どうしたいのか。計算せざるを得なくなったのは、力を手に入れてしまったからだ。自分の判断が、百人、千人単位の先行きを左右しかねないのでは、無責任に明日をも知れぬ身を気取ってはいられない。

身の丈にあわぬ権力を手に入れたと途方に暮れていたが、そうか、結局死ぬときは死ぬのだ、とわけもわからず得心した。

死後、なにを遺せるかを、彼は考えるようになっていた。

世界は美しいな、という声が耳もとで聞こえた。黄金の髪が揺れ、ヤエトの視界は絢爛たる光の波で埋まった。

風の音とともに、ふたたび声は告げる。

――世界は美しい。

そうだ、とヤエトは思った。世界は美しい。美しくて、醜い。慈悲深く、残酷だ。駄天した女神の光、沙漠に満ちるこの世ならざるかがやきと、地下に眠る穢れた心臓。

世界は矛盾し、数多(あまた)の様相を孕(はら)んでいる。多面的であり、重層的である。理解不能な複雑さがあると知ればこそ、単純素朴にただ美しいと感じられる、その瞬間は貴重だ。

悪神を悪と断罪したのは誰か。それは、ほんとうに悪なのだろうか。なにもかもが曖昧に輪郭を失い、意味を手放して虚空をただよっていく。

世界は美しい……。

それから、気がついた。

さっきの声は、同じではないか？　今、ここに、いるのか。どこに？

誰がいるというのか。

重たい目蓋を必死に持ち上げて、ヤエトは少女を見た。紫の双眸に、光が宿っている。灯火を映しているのだろうが、夕映えのようで美しい。

「王」

ようやく、声が言葉になった。

単語ひとつではどうにもならないが、それでも、多少ほっとした。自分に意識があることを伝えられたのは、たしかだろう。

相手も、わずかに表情を緩めた。しかし、目もとに宿る光は、今度は涙のように見える。

冷たいものを感じた。手だ、とわかるまでに、少し時間がかかった。自分の手を誰かが握っている。いや、誰かではない。

皇女が、しっかりと握っている。

「運び込まれるたびに意識を失っているのは、もう許さん。次からは、倒れる前に戻って来い」

聞き間違いではなかった。

これが夢でないなら、どうやらジェイサルドや皇女が北方に来たのではなく、ヤエトが北嶺に戻されたということらしい。

――なんでだ？

死にそうだったから、というのが最初に思い浮かんだ回答だった。

どうもそれが正答と考えてよさそうだ。皇女の表情が、言葉よりも雄弁に伝えていた。ヤエトへの気遣いからか、平静をたもとうとはしている。だが、ふるえる口も、強張った頬も、皇女の努力を裏切っていた。なにより、ついにあふれた涙がヤエトの頬にぽたりと落ちたのが、効いた。

「……どうか、心安く」

やっと、文章になった。

皇女の顔が歪んだ。

「誰が心安くなれようものか。そなたは――」

喉が痛い。ジェイサルドの声が聞こえる。いけません、といっている。なにがいけないのだろう。

――本格的に死にそうなんだな。

死ぬのは怖いが、この頭痛から解放されるなら、それも悪くはないと思えてしまう。後悔はいろいろあるが、今の状態でできることなど、たかが知れて

いる。せめて、なにか伝えておこうと思った。喉が痛くてもかまわない。くちびるが割れても。

ヤエトは死んで終わりになるのだとしても、世界はつづく。そこで皇女は生きていく。

「ア＝ヴルスと、お会いください」

「なに？　もうよい、寝ていろ」

「これきり、起きられない、と、困ります」

「ヤエト」

彼の言葉を遮るように、乱暴に名を呼ばれた。

もっと、伝えておかねばならないことがあるはずだ。ア＝ヴルスの件も、もう少し、通信文に書いておけばよかった。セルクはあの少女の存在すら知らないし、ファルバーンも名告りあってはいない。ナグウィンは――どうなったのだろう？

――そうじゃない。

ほかにあるだろう、と思った。

目の前で、怒ったような、泣きそうな表情で彼を見ている少女のために、声にできる言葉が。今のうちに、伝えておくべきことが。

「王に、お仕えできて、よかった」

「……終わったことのように、申すな！」

手が、握りつぶされそうだった。すごい握力だ、と思った。きっと、皇女の手は自分より強い。皇女の方が強い、なにもかも。きっとそうだ。

大丈夫なのだろうとヤエトは考え、眼を閉じた。きっと大丈夫、皇女は大丈夫だ。

伝えようのない想いだった。もどかしく言葉を探したが、みつからないし、声にもならない。手を握り返そうにもまったく力が入らず、諦めるしかなかった。

なんとか、これだけ口にした。

「信じられる、かたで、……」

よかった、とまで口にできたかどうか、確信がもてないままに、ヤエトはまた意識を失った。

まともにものを考えられる状態に戻ってから、ヤエトはあのときのことを思い返しては顔をしかめた。

熱があるときの自分は信用ならない。伝えるべきことの優先順位が、なっていない。

薬湯を運んで来たジェイサルドに、ヤエトは現況を尋ねた。

「なぜ、わたしは北嶺に？」

「鳥を送れという通信が届いたその日の内に、ご要望の鳥三羽と騎手一名が出発、日没前にはルス公家本城に到着したとのこと。そこで、人事不省状態となられた殿を発見、即座に北嶺に送り返すべしと全員の意見が一致したのです。護衛の騎士一名とともにご帰還あそばしたときには、いえ、北方を出る前からすでに殿は意識を失っておいでだった由」

つまり、ヤエト自身には選択権がない状態だった、ということだ。

「……よくルス公家側が許しましたね」

「あそこで殿がお命を落とされても困る、というのが本音でしょう。人質としては、セルク殿がおいでになるわけですし」

老騎士は、そこで少し息を吐いた。自分にとってはどうでもよいことに時間を割いてしまった、ヤエトの体力も無駄遣いしてしまった、と考えているようにしか見えない。

だが、ヤエトにとっては重要なことなのだ。

「セルクだけですか、……いや、護衛はいるでしょうが」

「鳥を連れて行ったのは、グランダク殿です」

ヤエトは眼をしばたたいた。

「しかし、セルクが北嶺にいない今、グランダクは内政担当の責任者ということになっているはず」

「本人が志願したのです。セルク殿の様子を見たい、自分なら彼をうまく扱えるし、と」

「扱える……」

あまり感じのよい言葉ではなかったが、まぁ、事実そうだろう。グランダクは、セルクで遊ぶのがうまい。裏を返せば、どう刺激すればどういう反応があるかを、よくわかっているということだ。

「それで皆、納得しました。お尋ねある前にお答えしておきますが、殿が北嶺に戻られてから、三日たっております」

思ったより短い。ヤエトは安堵の息を吐いた。

それを見下ろして、ジェイサルドはわずかに眉根を寄せた。

「ずいぶんお痩せになられた。そろそろ、少しずつでも粥をお召し上がりいただかねば」

変な味だったら吐く自信があるが、経験上、ジェイサルドもそこまで無茶はしない。最初は薄い塩味からと、最近はもう手順が決まっている。

なんの手順だと問われると困るが。

「それより、王にご報告申し上げたいことが」

「じき、おいでになります。殿とお話しできるようになり次第、お呼びするようにと申しつけられておりましたゆえ、すでに使いを遣りました」

そんな要求にジェイサルドが応えるのも珍しい。

ヤエトの考えを察したのか、老騎士は、にこりともせずに言葉を継いだ。

「殿ご自身も、かならずそれをお望みになるはずであるとの仰せでした。やるべきことを済まさねば、気も落ち着かず、本復までの時間も長くなろう、と。……姫様には、かないません」

苦笑して、ヤエトは答えた。

「まったくだ」

「ですが、ご無理はなりませんぞ」

「どうせ、王がお気遣いくださるだろうさ」

「殿にもかないませんな」

うそぶくジェイサルドこそ、最強無比の無敵老人だ――そう思ったが、敢えて口にはしなかった。

ともあれ、使いはつとめを果たしたらしい。ほどなく皇女が部屋を訪れ、大股に入って来るなり、命じた。

「はずせ」

もちろんジェイサルドに対してだ。ジェイサルドは問いかけるように眉を上げ、ヤエトはうなずいて

応じた。皇女の用件がなんだかは知らないが、生まれも育ちも現在の立場も、向こうの方が上である。ヤエトが皇女を上回るのは、背の高さと年齢くらいのものだ。逆らう理由がなければ、従うしかない。

ジェイサルドが退室すると、皇女はすぐさま椅子に座り、いつものように身を起こそうとするヤエトを制した。

「そのまま寝ておれ」

「はい」

「……珍しいな。ほんとうに加減がよくないのか」

「よく見えますか？」

「見えぬ。手短に済ませよう。北方はどうだ。なにをたくらんでおる？」

「結局、ルス公家としか交渉はできませんでした。北方諸侯相互の関係は、良好とはいいがたいようです。軍事的な同盟を、と示唆されました」

「同族間の争いか」

皇女は顔をしかめた。

「ルス公家内でというよりは、他家との戦いを考えているようでしたが……」

答えながら、そうでもないのか、と考える。実際、現ルス公として紹介されたライモンドは、先代を殺したといっていた。一族の中で重要な位置を占めているらしいラズラフによる裏切りもあるし、ルス公家自体もけっして安定しているわけではない。

あらためて、ヤエトは言葉をつづけた。

「同盟は他公家との武力衝突を想定してのことと思いますが、ルス公家内で争いがないという意味ではありません。現ルス公は女性ですが、先代を殺したというようなことを、申しておりました」

「そうらしいな」

難しい顔で、しかし既知の情報であるように答えられて、ヤエトはおどろいた。

「それを、なぜご存じなのです」

皇女は俯いて頭を抱えたが、すぐにその手で髪をかき上げ、ふう、と息を吐いて顔を上げた。

「そんなことはあるまいと考えたかったのだが。話は公子に聞いた。人質に来る方が、自分の邸にいるより安全だろうと考えた、とな」

なるほど、当事者のひとりが北嶺に来ていたことを、失念していた。レイランド公子の印象は、ヤエトの中ではすでにおぼろなものだ。しっかり皇女の胸を見ていたことくらいしか、覚えていない。

「母子とも同じことをいうのであれば、事実なのでしょう。先代を除いて、今のルス公がある、というのは……しかし……」

なぜ、とヤエトは思う。そこまでして権力を得たいのか。冷え冷えとした空と暗い森。生き物の気配が薄い土地だ。もちろん、人も少なかった。あの邸の外に、どれだけの領民がいるのだろう。

ルス公という肩書きに、どんな力があるのか？

ただ妄執にとり憑かれているのか、それともヤエトが見落としているなにかがあるのか。悩んでいると、皇女が口を開いた。

「聞いたといえば、これもあまり信じたくないのだがな。現ルス公は、あの土地に愛されているという。ルス公家の領地内に限っていえば、人以外の存在についても、すべてを掌握しているそうだ。生物であると無生物であるとを問わず、土地に属するものすべてがルス公のしもべだと。そんな馬鹿なことがあるかと思うのだが、公子の妹に至っては、より広汎な地域を支配する大地のあるじだというのだ」

「彼が人質を肩代わりした妹ですね」

「そうだ」

幻影なのか、それとも実像だったのか。レイランド公子の像よりも、少女の姿の方がよほど鮮明に浮かぶ。心の中で、ヤエトはその名を呼んでみた。ル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルス。

「北方で、おそらく会っています」

「レイランドの妹に？」

皇女が人質の名を口にしたことについて、ヤエトは少し考えた。

皇女の方が地位が高いのだから、公子の名を呼ぶこと自体は問題ない。しかし、今の呼びかたには、なにかしら親しみのようなものが感じられた。

あまり親しくなるのも、どうだろう。

北方との友好関係をどこまで推進してよいものやら、今は判断をつけがたい。できれば距離をとりたいくらいだが、そう悠長なこともいっていられない。少なくともルス公家については、放っておくと厄介なことになりそうだ。

「どうもルス公の命令で、その……うまくいえないのですが、存在自体がなかったことにされているとでも申しますか、そういった扱いを受けているようでした」

「それも聞いた通りだな」

なんだか嫌な感じがした。ルス公家側に、うまく事態をあやつられているような、そんな気分だ。

「どこまで信じられるか、あやぶんでいます」

「なにをだ」

「ルス公家は策謀好きだという印象が、深まりました。かれらの言はすべてお疑いあれと申し上げたく存じます」

皇女は少しだけ躊躇したが、すぐにうなずいた。

「わかった」

このまっすぐな性質の少女に、なにもかも疑えと進言するのは、あまり気分のよいものではない。できれば、そういう要素はヤエトの段階で止めておきたいものだと思う。彼が疑い、吟味し、処置すればよし、という体制にしたいのだ。

——無理だろうな。

病弱なこの身ひとつでは、どうにもならない。むしろ、深く傷つくことのないよう、疑いかたを教えてやるべきなのだろう。その方がのちのち、皇女を助けることにもなるはずだ。

「わたしの言葉も、お疑いになるべきときはございます。それを、お忘れなきよう」

「そなたはわたしに、信じよと申したではないか」

「……はい？」
「暫し連絡がとれなくなるゆえ、ひたすら信じよと。左様なこと、念を押されずともできるのにな」
いわれてみれば心当たりはあるが、なんだか曲解されている気もしないでもない。
「それは、離れているあいだのことで――」
あわてて訂正しようとしたが、皇女に強い口調で遮られた。
「わたしは、そなたを信じる。それゆえ、その信頼に値する存在であれと、そなたには命じておく。よいな」
「……はい」
ほかに応じようがなかった。
やはり、保護者面などできそうもない。皇女の方が、彼よりずっと強い。なるほど、これではジェイサルドも勝てないはずだ。
気をとり直し、ヤエトは話の方向を変えた。
「ところで、北方でナグウィンが失踪しました」
「通信にも書いてあったな。どういう事情だ」
「陛下のお指図です」
皇女の眉が上がった。
「そなたに説明があったのか」
「いえ……いや、そういっても間違いではないかもしれませんが、とにかく、陛下はルス公家の内紛に介入なさるおつもりのようです。現摂政は追い落とし、ラズラフなる男に実権をお与えになることを、お考えなのではないかと……」
「理由は」
「ラズラフの方が、扱いやすいとお考えのご様子でした。ナグウィンを摂政に害させて外交問題とし、そのまま摂政を追い落とすおつもりです」
「ナグウィンを？」
皇女は眼をしばたたいた。意外だったのだろう。だが、おどろきの表情はすぐにぬぐい去られ、眉間に雷が宿りそうな不機嫌がそれに代わった。《雷霆の使者》なら、この雷をどこかへ移動させてくれる

だろうか。かなり、怖い。
その怖い表情のまま、あらためて問われた。
「ご自身の伝達官を、害させると？」
「御意。わたしにも協力せよと仰せでした」
彼の命も供出しろといわんばかりの勢いだったことは、とりあえずいわずにおいた。
「そなたはそれを黙って聞いていたのか」
「恩寵で視たもので……」
答えた次の瞬間、自分があまりにもさらりと口にし過ぎたことに気がついた。無警戒だった。皇女にどう伝えようか、それなりに悩んでいたのに、どうもこうもない。これでは、そのまんまだ。
聞き流してくれることを期待したが、もちろん、そうはならなかった。
「どういうことだ」
「……申し上げた通りです」
「恩寵で？」
「はい」
「なのに、陛下が？　そなたに？　協力せよと？」
一語ずつ区切って尋ねる必要がどこにあるのか。なにやら途方もない圧力を感じる。否定できるものならしてみろ、できないなら説明しろ、と。
嘘でも否定したいものだと思いながら、ヤエトは正直なところを答えた。
「御意にございます」
「なんだそれは」
びっくりですよね、と迎合したかったが、やめておいた方がよさそうだ。
ヤエトが黙っていると、皇女は鬱陶しげに髪を払い、命じた。
「説明せよ」
しかたなく、ヤエトは命令に従った。
大雑把なところではあるが、商人が姿を消した後、自分がなにをし、見聞きすることになったかを説明したのだ。彼が話し終えると、皇女はその要旨をまとめて見せた。

「そなたがおらぬ場に、そなたへの言葉を残しておいでだった、ということなのだな」
「はい」
「陛下はそなたに与えられた恩寵の力をご存じか、少なくとも疑ってはおられるということだ」
「左様に存じます」
「なんだそれは」
まったくですよ、なんだそれは！ ……と、ここも迎合したいところだが、やはりやめておくべきだろうという良識がはたらいた。良識など、鳥に食われてしまえばよいのに。
「恩寵の力が強くなりつつあることは、陛下もすでにご存じのはず。わたしが古王国の出身であることも。双方を考えあわせれば、過去視の力を想定されても、おかしくありません」
「それだけで？」
「確信を持っておいでしたら、これでは済まず、ほかの動きもあったでしょう」
「そう思うか？」
そうであってほしいが、それこそ確信などない。どう答えるべきか迷っている内に、皇女が先に言葉を発した。
「なんにせよ、覚えておろうな？」
「……はい？」
「わたしは絶対に、そなたを幽閉したりはせぬ、と申した」
それはもう忘れるはずがない。
まだ、出会って間もないといってもよさそうな頃だったな、と当時を思いだし、ヤエトは少し当惑を覚えた。
――なぜだ？
あの時点ですでに、皇女はヤエトを自分の臣下にすると――皇帝の部下ではなく、自分自身に仕える存在にすると決めていた、ということか。
そうではあるまい、と思い直す。そこまで計算しての発言ではない。少女らしくするどい感性で、彼

の恐怖を捉えたのだ。その根深い苦しみから、ただひとことの約束をもって救い出そうとした。

それは、皇女の純粋さというものであっただろう。子どもだからできる約束だ。

当時、おどろくだけで諫めきれなかったのは、ヤエトがまだその言葉を真剣には受け止めていなかったせいだろうか。皇女自身も、勢いだけで口にしたという面は、あったはずだ。たとえそうでも、約束した以上は守ろうとしただろうが。

だが、今はどうか。

皇女はヤエトを見ている。彼が覚えているかどうかを表明するのを待たず、もう言葉をつづけようとしている。

「陛下はもちろん、ほかの誰にも引き渡すつもりはない。そなたを幽閉の憂き目にあわせたりはせぬ」

皇女にとって、約束は、より重くなっている。より強く、適用すべき範囲も広がっている。まさしく、絶対にという表現がふさわしい、そんな約束に。

それはいけないと諫めたいのに、言葉がみつからない。

「どうした、忘れたのか」

「いや」

「なにが『いや』か？」

「ですから、……」

臣下ひとりのことで、皇女が本気になり過ぎるのはまずい。帝国の最高権力者と、初手から喧嘩腰で渡り合いそうな勢いでは、困るのだ。

だが、それをどうすれば納得してもらえるか。明白な事実が、いきなり難問に早変わりだ。

すでに皇女の眉は吊り上がっているし、眼差しもするどい。容易には宥められまい。

皇女も馬鹿ではないから、皇帝と争うのが愚かであることくらい、わかるはずだ。ヤエトが説明するまでもないだろう。

だが、それとこれとは別、と断じられかねない。損得だけでは動かない人間が、もっとも扱いづら

いのだ、とヤエトは痛感した――皇女は約束と信頼を重んじる人間で、この問題にはその双方が深くかかわっている。

自分では動かせない、と感じてしまう。

「やはり忘れたのか」

「かなうならば、忘れてしまいたいとは思います」

皇女はヤエトを睨みつけた。

「自分のこととなると、そなたは救いようのない愚か者になり果てるな」

「お言葉の通りです。斯様な愚か者は、どうかお見捨てください」

「……わかった、といえば安堵するのか」

ヤエトは少し考えてみた。頭がぼうっとする。こんなことに、時間をとられてはいけない。皇女に伝え、助言し、判断を仰がねばならない問題が、たくさんあったはずだ。

「どうでしょう」

「自分のことなのに、わからぬのか」

「自分のことですゆえ、仰せのように、救いがたい愚か者になってしまいます」

「馬鹿者めが」

「はい」

皇女はため息をついた。

「陛下がほんとうに気づいておいでなのか、探りを入れよう」

「どうか、お捨て置きを。へたに動けば、却って疑われるということもありましょう。わたしが恩寵持ちではないかと陛下がお疑いになる理由など、いくらでもあるのです。歴史をひもとけば、古王国の恩寵の力はあきらか。わたしの家柄が悪くないことは、尚書局の者に聞けばわかってしまいますし、縁者に恩寵持ちがいたことも、覚えている者はいるかもしれません」

かもしれません、どころではない。尚書局の長であるリーレンと、その伯父セイレイは、間違いなくその事実を知っている。

「恩寵持ちがいた？　親族にか」
「さしたる力はなかったそうですが、旧帝国で、宮廷に召されて調べられたと聞いております」
「なんだそれは」
「なんだ、と申されましても」
「左様な大事、なぜわたしに話さぬ」
「大事ではありません。大事とは、国にまつわるような話。個人の問題、これは小事に過ぎません」
「御託はよい。黙れ」
「王」
「わたしが王ならそなたはなんだ。北嶺国の相であろう。そなたは国の重鎮、その身の安全は無論、仕えるべき者が誰かも、国の問題ぞ。違うか？」
　ヤエトは皇女の手を摑んだ。冷たい、と思った。同時に、これはまずい、とも思った。どうやら熱が上がっているようだ。
　皇女もそれに気づいたらしい。困ったように、表情が揺れた。
　すかさずヤエトは口を開いた。
「北方へ戻らねばなりません」
「馬鹿を申すな」
「ナグウィンから、陛下を引き剝がしましょう」
「……なに？」
「死ねと命じられて、おとなしく死ぬほどの純粋な忠誠心は、あの男にはありません。臨の状態にでもなってあやつらない限り、ナグウィンは逃げます」
「しかし、どうやって」
「陛下に忙しくなってもらいましょう。北方に、全力を傾注できない程度に」
「それと、そなたが北方へ行くことに、なんの関係があるのだ」
「ジェイサルドを呼んでください。陛下に忙しくなっていただく方法は、あれと相談します。わたしが北方へ行かねばならないのは、北のあるじに招かれているからです」
　皇女は眉根を寄せた。思いあたる節を考えつつ、

しかし自分の推測を信じられずにいるようだ。
その口から問いが出るのを待たずに、答える。
「ア＝ヴルスです。ア＝ヴルスはわたしの力を必要としているらしいのです。引き換えに、こちらも助力を得て参ります」
「助力？　まつりごとには関与せぬのではなかったのか、《雷霆の使者》と同じく」
「ルス公との交渉はもう、セルクとグランダクにまかせます」
「それでよいのか？」
若干の不安はあるが、基礎は打ってある。
「できる、と本人たちが決めたのです。今さら、わたしが顔をだすわけには参りません。かれらの自負心を砕き、交渉相手からの信頼も失わせてしまいかねないでしょう」
「なるほど」
神妙な顔で、皇女はうなずいた。そこまでは考えていなかったらしい。
困ったものだ、とヤエトは思った。
皇女の態度からは、ヤエトが行けば万事解決するだろう、という無邪気な信頼を感じてしまう。ヤエトがいないとうまくいかないのではないかという不安にも、その信頼は繋がっている。
仕事を預け、後進を育てる必要がある。それを、あらためて痛感した。
時間はひとつの方向へしか進まない。年齢を考えれば、死は遠からぬところにあると心得るべきだ。人一倍途切れやすい命の糸を辿っていることを、自分はもっとわきまえねばならないのに。
地上に留まれるあいだに、できることをできるだけ、やって行くのはもちろんだが、いなくなったときにも、皆が困らないようにしておきたい。
ヤエトが現在の職を辞してもかまわない状態にするのが、窮極の目標といえるだろう。
すなわち、隠居である。
——一周したな。

隠居という目標だけは、捨てずに済みそうだ。なんだか道は遠くなった気がするが。

「北のあるじに求めるのは、魔界の蓋の方の問題です。あの戯れ歌にうたわれた破滅の日を避ける方法はないのか、あるいは魔物が出て来たとして、共闘することはできないか。そもそも、破滅が迫っているということに、気づいているのかも確認したい……わたしが参るのは、そのためです」

ヤエトを見下ろす皇女の表情は、硬い。

「そういうことか。だが、それこそ、そなたが行く必要はあるまい」

「いいえ、わたしでなければなりません。名指しで、招かれているのです」

「なぜ、そなたでなければならぬ」

ア＝ヴルスも彼の恩寵の力を知っているようだと明かすべきとは思えない。そんなことを口にしようものなら、絶対に行かせてもらえないだろう。

「仔細はわかりません。ろくに話をする機会がなかったのです。ただ、わたしを選んで招いていることは、確実です」

「危険はないのか？」

「現人神（あらひとがみ）といわれるほどの力がある相手です。その庇護下にある限り、安全かと存じます」

「しかし、レイランドはア＝ヴルスを、人間らしいところのない娘だと申しておったぞ」

ふうん、とヤエトは思った。

――なるほど、なかなかいうではないか、小僧。

ア＝ヴルスの存在を神秘的なものにしておきたければ、悪くない説明だ――敵対を望んでいる場合も。

レイランドにはレイランドの事情がある。妹を庇うだけのために人質を引き受けたのではなかろう。あの母や摂政の監視下を逃れ、隠した刃を研いでいるところと考えるべきだ。

だが、ヤエトにもヤエトの事情がある。北嶺を、簡単に利用されるわけにはいかない。

「浮き世離れしている風ではありましたが、常人に

は考えも及ばぬ力を身につけていれば、それも無理からぬことでしょう。とは申せ……あれは人です。人ならぬものではない。人間らしさという言葉にこめられた意味は存じませんが、人である限り、ア＝ヴルスとてそれと無縁ではいられないはずです」

なにかいいかけて、皇女はやめた。探るようにヤエトを見て、それから、ぽつりと告げた。

「そうか」

少し、拍子抜けした。

表情から見てとったのだろう、皇女は笑みを深めて告げた。

「そなたを信じると、決めたのだからな」

そう来るとは思わなかった。

「とりあえず、お約束通り、戻ったことですし」

さりげなく返したつもりだが、実際には胃のあたりに重たいものが乗っている気分だった。そういえば、雛はどうしたのだろう。あれが二羽とも、無理矢理に腹の上に乗ったらこんな気分に違いない――重さに幸せと不幸せの区別をつけることができるなら、そこはきっと違うのだろうが。

ヤエトの内心を知ってか知らずか、皇女の表情はさっぱりしたものだ。

「なにが約束通りに戻った、だ。戻らされた、と申すよりなかろう。よいか、その約束はまだ果たされたとは思わぬからな」

「はい」

「ア＝ヴルスの問題は、まかせる。だが、まず身体をもう少し、治してからだ。よいな」

「はい」

「それと、陛下に忙しくなっていただく方は、わたしにも一枚噛ませろ」

「……はい」

「なんだその、無念、といわんばかりの顔は」

皇女は笑って、ジェイサルドを呼んだ。

4

ヤエトがふたたび北方へ向かったのは、その五日後である。それに先立ち、ヤエトを送って来た騎士に書状を持たせ、セルクとグランダクのもとに送り返した。ヤエトの状態は快方へ向かっており、北方側の配慮にいたく感謝していると伝えるようにという指示からはじまり、ナグウィンは皇帝の直臣であるから、身柄を無事確保することを最優先すべし、デュラルクが同盟を持ちかけて来た場合の対応は一任する、とした。

――どうなることやら。

仲良くしましょうね、と手を繋いでやっていけるような間柄ではない。外圧があってようやく、なんとか折り合いをつけられるかどうか……という関係の土地なのだ。

同盟にしても、うまく利用された挙げ句、裏切られて終了という展開を辿りかねない。そこを、セルクはともかくグランダクは理解しているだろうか。

セルクはむしろ、わかっていないのが強みだろうな、とヤエトは思った。彼の誠実さ、無邪気さが、通じない人物はいる。それは、もちろんだ。世の中はそんなに甘くはない。だが同時に、あれにほだされる者もいるはずだ。確実に。

「大丈夫なのか」

峡谷まで、皇女はヤエトの見送りに来ていた。どうせ止めても無駄なので、断りもしなかった自分もどうなのか、といささか微妙な気分ではある。形ばかりであっても、諫めるべきではないのか？

「なんとかなるでしょう」

招かれたのは自分ひとりだから、と何度も固辞したのだが、単騎で行くことはまかりならぬと命じられ、アルサールが護衛として同行することになった。厨房助手ながら、調理器具を手にしても勇敢に戦えることは、立証済みだ。国境地帯の地理にも詳しい。境界線を警戒する一族の出身だからだ。

ヤエトへの尊敬も人一倍、忠誠心もそれに比例して高いのは、嘆かわしいがこれまた事実である。

忠誠などというものは、自分と無関係な世界の言葉であってほしいというのが、ヤエトの本音だ。その言葉に彼が感じるのは、どうしようもない不自由さだ。その不自由さに嬉々としてとらわれ、讃美するような人々には、苛立ちさえ覚える。

アルサールは善良な少年だ。それに、ヤエトのためにこの役目を引き受けてくれたのだから、感謝すべきであり、不快に思うのは間違っているだろう。それはわかるが、やはり、嬉しくない。

自分のこういうところは、どうにかならないものかと思う。

「もっと近いところもありますが」

ヤエトを見上げるアルサールの眼は、ほんとうにここでよいのか、と尋ねている。

夜明け前である。慣れない土地へ鳥を飛ばすのに、夜は駄目だと、出立の時刻は厩舎長が決めてしまって、誰も反論できなかった。

東の稜線の向こうにある空は、ほんのりと明るさを帯びつつあるが、その手前の山並は一層暗さを増し、見る者を威圧するようだ。ヤエトたちがこれから越えて行く峡谷も、冬場に視察したときのように雪に覆われてこそいないが、切り立つ断崖のするどい形があからさまになり、より剣呑に見える。

「余計な者に気取られないことが、優先です。ジェイサルド、このあたりが弱いというのは、間違いないな？」

「はい、北方の側を向いても、抵抗を感じません」

使節団への同行を禁じられてからも、ジェイサルドはたびたび、北方へ侵入できないかを試していたという。おかげで、呪的な護りが弱い箇所の特定ができて助かるが、それ以前に問いたい。来るつもりだったのか、と。

しかし、ヤエトはその問いを敢えて口にしなかった。当然、ジェイサルドはそのつもりだったのだ。

そんな質問、時間を無駄にするだけだ。皇女を諫止するより、さらに不毛である。

「ここなら渡り切ることもできるやもしれません」

しれっといってのけたのも、おそらく本気だろう。放っておけば、ついて来るかもしれない。

一応、釘を刺しておくことにした。

「残念だな、ほかに任務があって」

「まことに無念です」

「重要なことだ。たのむぞ」

「かならずや、殿のご期待にお応えします」

侵入したが最後、一歩も動けなくなりかねないのでは、同行されても迷惑だ。それより、有効な場所ではたらいてもらった方が助かる。

「放っておいても、じきになにか起きそうだが」

腕組みをして断崖に立つ皇女は、いつも通りに勇ましい。綺麗だの愛らしいだのより、凛々しいという言葉が似合う——風になびく髪をかき上げる仕草だけ、不意に女性らしさを感じさせたのには、意表を突かれたが。

もつれた髪を手で梳いて、皇女は彼を呼んだ。

「ヤエト」

「はい」

こちらへ参れ、という言葉が省略されているものと見て、ヤエトは風に押されるように前へ出た。

「先ほどな、《天地輪》のあと、二の兄上から連絡があった。仕掛けているのは四の兄上で間違いないそうだ」

「左様でございましたか」

第二皇子が兵馬を集めていることについて、叛逆の準備ではないかと《天地輪》で批判の声があがったというのは、ヤエトも聞かされて知っていた。その一件、誰が仕掛けているか確認したいから、黙っていろと、皇女が協力を依頼されたことも。

協力したのだから、情報は渡してもらわねばならない。情報を渡すならもっと協力をと話は進み、第二皇子と皇女の距離は、ずいぶん詰まったようだ。

この先を考えると、特定の皇子にあまり近づくのも危険なのだが、誰かひとり選ぶならば、第二皇子というのは悪くない選択だろう。後見となっている《銀鷲公》の野心の度合いは気になるが、第二皇子本人は、無駄なことは望まない性質だ。目の前の現実と向き合い、問題をかたづけていく堅実さがある。兵力の充実に力をそそいでいるのは、土地柄、しかたのないことだ。故国を滅ぼされた沙漠の民や、その血縁者は、未だ恨みを忘れてはいない。

「もとは、四の兄上が馬を集めようとしたところから、だそうだ。あちこちで取り合いになっているからな、馬は。手に入らないので苛立って、二の兄上に罪を押しつけようとしたというところだろう。短絡的なのだ、四の兄上は」

「四の君は一の君ご支持の立場ですね？」

「一の兄上以外、認めぬであろうな」

「それにしても、いきなり過ぎます。誰かが焚き付けたとしか思えません」

その疑いが強いという話は、北方へ行く前に聞いている。その時点でヤエトは皇女に、裏がありそうだから調べた方がよいと献言している。

「調べさせてはおるが……」

語尾がはっきりしないのは、進捗が見えないということなのだろう。しかたがない。ヤエトは自分の憶測を口にすることにした。

「あまり先入観からものを申したくはないのですが、五の君をお疑いになるべきかもしれません」

皇女は眼をしばたたいた。

「五の兄上は、しかし――」

「四の君には馬鹿にされていると仰せでしたね。だからこそ、四の君を陥れることなら、喜んでなさりそうだと思うのです」

踏野郡で会った第五皇子は、才気がほとばしるという人物ではなかった。といって、武にすぐれているようにも見えず、つくったような武勇伝すら存在しない。血筋も出生順も、彼には味方しなかった。

自分では帝国の頂点に立つことができないと、割り切れるだろうか。その場所を手に入れられねば、へたをすると命を失うという認識を、きちんと持っているだろうか？

わかっていれば、せめて同腹の兄弟同士で手を結ぼうとするはずだが、第四皇子との溝は、おそらく周囲が考えるより深い。この峡谷のように、とヤエトは闇に沈む深淵を見下ろして考えた。ふたりの皇子のあいだには、確執があるはずだ。峡谷を隔てて並ぶ土地が、恨みと憎しみを抜きには互いを考えられないのと同じ、近いからこその問題が。

「足を引っ張っても、自分に返るだけなのにな」

皇女のつぶやきをヤエトは無視した。

「鉱床の件、わたしが出発したらすぐにもお願いします」

ヤエトの留守中に、ジェイサルドがついに踏野太守の裏収入源を突き止めたのだ。沙漠で悪名を轟かせていたおかげで、ジェイサルドは裏社会の情報網を使うことができる。鉱床の場所も、そのおかげで特定できた。思ったより早く事態が進展しそうだ。

踏野は郡である。財政は帝国から完全に独立したものではない。それはつまり、帝国の預かり知らぬ収入があってはならぬ、ということだ。

踏野太守はこの裏収入を使って都に人脈を作り、第五皇子ほかの有力者に接近し、自分の太守としての地位を確保しているらしい。おそらく、北嶺の土地を削り取ることも狙っているはずだ。小娘とあなどっていたら、存外に苦戦を強いられた、という認識だろう。

ただの小娘ではないとは、踏野太守にもわかったはずだ。皇妹からの招待は、どこまでが第五皇子の、あるいは太守の考えだったのか。そのあたりはわからないが、あの機会に太守は皇女の人物を見きわめ、対策を立て直そうとは目論んでいたはずだ。

「わかっている。かならず、陛下にお知らせする」

うなずいた皇女を見下ろし、太守は自分の選択を

後悔したかもしれないな、と考えた。第五皇子ではなく、皇女と結ぶべきだった、と。

帝国の跡目争いなどにかかわろうと考えたこと自体を、太守はやがて悔いることになるだろう。特定の皇子に肩入れするには、かなりの覚悟が必要だが、太守にはそれがあるのだろうか。

それも、すぐにも火を噴きそうなところに立ち位置を決めてしまったことを、理解しているのだろうか。あるいは敢えてそこを狙い、さらに深く、帝国の中枢に切り込むつもりなのか――。

現状では、判断のしようがない。ヤエトは思考を切り替え、目前の問題に戻した。

「四の君については、二の君が？」

「お気が進まないようではあったが、きりがないゆえ、二の兄上が申し上げないのであれば、わたしからとはお伝えしてある」

「暫しは様子をご覧になった方がよいでしょう。まずは、鉱床の件のみを」

「わかった。だが、陛下は鉱床の存在をご承知なのではないかと、そんな気がしてならぬな」

「かなり規模が大きくなっておりますので、確証を摑んでおいでかはともかく、なにかあることはお耳に入っていても不思議ではないかと。ですが、陛下がご存じであることと、最愛の末娘からの訴えがあることは、同義ではありません」

ヤエトの言葉に、皇女は苦笑した。

「その最愛の末娘とは、わたしのことか」

「陛下のお力を信じ奉り、解決にはそれが必要だという姿勢をお見せになる限り、陛下は王のお味方でいらっしゃいましょう。独り立ちをしきれない、やはり陛下をたよってしまう、そんな風を装ってくださると、万全です」

北嶺の民が巻き込まれているのだ。それを口実に討伐の兵を挙げ、解決してから皇帝に報告することも、不可能ではない。それはそれで、皇女の評価を上げることに繋がるだろうが、今の第一の目的は、

皇帝に忙しくなってもらうことだ。ならば、皇女にはまだ皇帝の掌中の玉でいてもらう方が、いろいろと都合がよい。

「……悪い男だな、ヤエト」

「そうでしょうか？　わりと善人なのではないかと、本人は思っているのですが」

「善人というのは、セルクのようなのを申すのだ」

「ああ、では無理ですね。負けました」

「不戦敗か」

「あれに勝ったら人生終わりという気がします」

皇女は声をあげて笑った。

「ひどいことを申す」

「勝った方がよろしければ、努力いたしますが」

「まさか。……で、鉱床へはルーギンを行かせてはならぬのだな？」

ひとことで切って捨てた皇女も、かなりひどいのではないかと思いつつ、ヤエトはうなずいた。

「我らが北嶺将軍を投入すべき場面があるとすれば、二の君のところですね」

「よもや、四の兄上が本気で喧嘩をふっかけるようなことはなかろうと思うが……」

そうであればよいが、とはヤエトも思う。だが、相というものは心配性であるべきで、そうなったら嫌だなという事態を想定し、そなえておかねばならない。ヤエトはそういう仕事には向いている。根が悲観的だからだ。

「告げ口をしたからと、北嶺に向かって来ることもあり得ます。領地は近いのですし。その場合も、もちろん、ルーギン殿を前面に出してください。帝国の兵には、北嶺将軍の令名は鳴り響いていますから、彼が出て来たというだけで、志気に影響があるでしょう。鉱床でなら、アルハンの降将、あるいは沙漠の悪鬼の方が名が通っているはず」

ヤエトがそちらを向くと、老騎士は表情も変えずにうなずいた。

「おまかせください。儂（わし）の名が過去のものになって

いたとしても、すぐに復活させましょうぞ。逆らう者には、思い知らせてやります」

思い知らされる者たちに同情しつつ、ヤエトはまた皇女に向き直った。

「兵を動かすような事態にならぬことを願っておりますが、万が一のときは、北嶺の武器を存分にお使いください」

「速さと高さだな」

「御意」

「見せつけて、売り込むのもやるのだな」

ナグウィンなら、とヤエトはふと考えた――あの商人ならば、鳥の戦力を商材と仮定して分析するだろう。機動力の高さ、乗り手を選ぶがゆえの親和性と排他性、そしてその賢さ。強力ではあるが、手放せば命があやうくなるような種類の力ではあるかもしれない。

転売できない在庫を抱える気はありません、と彼なら評価するだろうか。

――鳥だけ、転売する馬鹿はいないだろうが。

鳥と乗り手を組にしてなら、それはすでに伝統的な商材といえるだろう。かつて、《化鳥の騎士団》がそうであったように、傭兵集団としての生きかたを選ぶことは、今でも可能なのだ。

それを統括するのが皇女である必要はないと考える不届き者も、出て来るのではないか――ヤエトは最近、そんなことまで疑いはじめている。

北嶺の支配者たらんと望む者が、いてもおかしくはない。後先も考えず、権力を欲する愚か者が。

今はまだ大丈夫だろう――いや、そう思いたいだけだろうか？

とにかく、巨鳥という奇蹟を隠してはおけない以上、見せつけて、売り込むしかない。神との再契約を果たしたのが皇女そのひとであると喧伝することも、今後は視野に入れた方がいいだろう。巨鳥と皇女をわかちがたくしてしまうのも、善し悪しではあるのだが、皇女自身、鳥と別れることを望みはしな

いだろうし、その方向で考えるしかない。
「恩も、売っておいてくださるとよいですね」
「そなたもな。危険を冒すのだ、高く売りつけろ」
「せいぜい頑張って参ります。ところで、公子には、この一件は……？」
「そなたが帰国したことは知っておる。騒ぎになったからな。だが、ふたたび北方へ発つのを知っているのは、ここにいる者のほかには、ルーギンとエイギルくらいだ」
「厩舎長もです」
まだ本調子ではないのが気になると渋りつつ、それでもヤエトを運ぶならシロバしかいないだろう、囲いを別にしていたから、姿を消しても気づかれづらいはずだ、と勧めてくれたのは厩舎長だ。
アルサールの鳥に同乗することも考えたが、乗り手ひとりに一羽ずつだ、と譲らなかったのも厩舎長だった。
三羽に騎士ひとりという先日の命令も、本気で嫌がっていたらしい。危険なところに鳥だけやるなんて、という理屈なのだ。仇敵である北方へ、乗り手の護りもなく鳥を遣るのは我慢ならない、と。
ヤエトの場合、あらゆる意味でシロバの護りにはならない気がするが。
「ヤエト」
袖が、重くなった。
今回は、使節としての立場を誇示するような飾りの多い服である必要はないのだが、さりとて行動的な服など、そもそも持っていないことがわかった。結局、比較的地味だが袖の長い服を着用に及ぶしかないのが現状である。
「はい？」
皇女に袖を引かれるのは珍しい気がする。
「無事に帰って来い」
「そのつもりです」
皇女は答えなかった。かならず、とまた口にすべきだろうか。それで少しでも安心してくれるのであ



れば、言葉にしておこうか——だが、迷っているあいだに袖が軽くなった。
「たのんだぞ、アルサール」
「はい。身命を賭してお仕えします」
「そなたも、無事に戻れ」
しっかりとした口調で告げて、皇女は断崖の縁をはなれた。それきり、後ろも見ずに歩み去る。ヤエトがジェイサルドに視線を投げると、老騎士は一礼して皇女の後を追った。
「……はい」
去り行く後ろ姿にアルサールが答えた声は、小さ過ぎて、おそらく届かなかっただろう。
ヤエトは少年の肩に手を置いて、告げた。
「行こう」
すでに、シロバは脚を畳んで姿勢を低くしていた。相変わらず、ヤエトは鳥の背にひらりとまたがることなどできない。よっこらせとよじ登る自分の姿が、いささかも颯爽としていないことは承知しているから、見送りがいないのは、ありがたい。
出迎えも、当面はいないはずだ。
ルス公より先に、ア＝ヴルスにみつけてもらう必要があるのだが、さて、うまくいくかどうか。
土地の支配者は、大地の力を直接受け取っている。だから、その土地に属するものすべてを感知する。極論すれば、ルス公家の土地を踏んだとたん、ライモンドに知られてしまう恐れがある。
だが、《雷霆の使者》は、その呼び名から察するに、空中に通じる力をそなえているはず。さらにその上位の存在であるア＝ヴルスも、空に支配力を及ぼすはずだ。ならば、空から侵入すれば、ルス公より先にア＝ヴルスが発見してくれるかもしれない。
鳥を使うのは、それも理由のひとつだった。
「シロバ、雛たちは大丈夫だろうな？」
立ち上がって、シロバは嘴を鳴らした。肯定の意味だろうと勝手に解釈して、ヤエトはその首をやさしく叩いた。

神気にあたったというナオの見立てがたしかなら、ヤエトとシロバはふたたび危険をおかすことになるわけだが、それは敢えて皇女には告げなかった。おそらく、皇女も気づいてはいるだろう。

危険とわかっていても、やらねばならないことは、やるしかない。それを皇女は理解している。行け、と命じるのが自身のつとめであると、知っている。

そしてもし、かれらが無事に戻らなければ、ひどく後悔するだろう。

――やはり、言葉にしておくべきだった。

もっとも、この葛藤を説明すれば、言葉よりも行動で示せと叱られるだけだろう。

なんとなく、口の端に笑みが浮かんだ。

――しかたないな。

なぜ笑ってしまったのかも、なにがしかたないのかも、よくわからない。心の中に、すとんと落ちてきたのが、その感覚だったというだけだ。

ヤエトは手綱をぐっと握った。久しぶりの騎乗で身体が馴染まず、鞍からずり落ちたらどうしようと案じながら、それでも笑みは消えなかった。

第



章

1

何処にありても空は同じ、という歌がある。姉が、よく口ずさんでいた。

何処にありても空は同じ
青く、深く、どこまでも
何処にありても心は同じ
潔く、強く、いつまでも

もとは有名な詩人の詩の一節だというが、姉が気に入っていたのは、それをふくらませて作ったという歌の方だ。はなればなれになった運命の恋人同士がどうこうという芝居の劇中で、くり返し、この歌が流れるという。ヤエトはその芝居を見たこともないし、興味もなかったが、姉のせいでなんとなく覚えてしまった。

最近、妙に思いだすのは、実際に空に飛びだしたからだろう。この詩句を書いた詩人に、教えてやりたい。北嶺の空と都の空は、あきらかに違う。色も違えば匂いも違う。

空は、同じではない。

自分にとって、空とは、ただ見上げるものではなくなった——そんなことを、実感した。

今もそうだ。明るくなりだした空を、昔ならただ青いとしか感じなかっただろう。

「この空も、北嶺とは色が違うな」

ヤエトのつぶやきに応えるつもりか、シロバが小さく声を発した。

同意なのか否定なのか、相変わらずヤエトにはわからない。

——反応があるだけでも、嬉しいものだな。

「おまえも、そう思うか？」

低く、声をかけてみる。

シロバの抱える不調は、ヤエトには問題ではない。

もともと、彼には鳥の心の中など見えなかったのだから。だが、シロバにとっては、これは一大事だろう。仲間との交流も、うまくいかないのだ。気がふさいでも、無理はない。

巨鳥は、賢い生き物だ。そして賢いとは、理性のみに支配されることを意味しない。

人もそうだが、鳥もまた、思った以上に感情的な存在である。喜怒哀楽や好悪の情があり、それを制御しきれないことがある。

気鬱から病になることだって、あるだろう。厩舎長なら、きっとそういう実例をいくらでも挙げられるのではないか。

シロバの首筋に少し手をすべらせ、ただ、無事でいてくれてよかったと、ともに飛ぶことができて嬉しいと感じていることが伝われば、と思う。

それだけで、いい。ほかに望むことなどない。

――そんな生活を送ってみたいものだが。

ため息をついて、甘い考えを横に押し遣った。

シロバと飛ぶためには、北嶺が安定している必要がある。皇女が主権者としての力を失えば、ヤエトも自由に鳥に乗れるかどうか、あやしいものだ。七日の日限がある以上、北嶺を追放されてしまえば、シロバがついて来ることもできない。

現実は、厳しい。

北嶺相としてのつとめに励み、かつまた世界の破滅を防ぐための手立ても探さねば、結局、ヤエトの野望は達成されずに終わるのである。

もう一回、ヤエトはため息をついた。

隠居がここまで困難だなどと、誰が予測できただろう？　実にささやかで、かわいらしい野望だったはずなのだ。問題になるのは、十分な蓄財ができるまで、自分が生き延びられるかどうかという部分だけだと思っていたのに、その計算は完全にくつがえされてしまった。

呪われるべき人物一覧表の最上位争いは熾烈をきわめ、上下の移動もめまぐるしい。隠居を邪魔する

者など、呪われて当然であるとは思うが、たまに、隠居の最大の障害となっているのは、自分自身なのではないか、という気がしないでもない。

もう少し無責任に、そして自由に、自分の未来を追い求めても、よいのではないか。

つまり、知るかボケ、の心意気で生きるべきではないか……と思うのだが、未だに、これを口にする機会が見当たらない。

ため息をつかずには、いられない。

視界を遮るものもなく朝焼けを楽しみ、その色が引いていくあいだ、日射しにあたためられながら飛ぶなど、贅沢な経験ではないか。暫しのあいだでも、なんの心配もなく満喫すればよいのに。

それが、できない。

「アルサール」

肩越しに声をかけると、少年が乗った鳥が距離を詰めて来た。こんなに近づいて大丈夫か、翼同士がぶつかる心配はないのか、とはらはらするほどだ。

鳥たちにいわせれば、そんな間抜けなことをするはずがない、馬鹿にするなというところだろうが、それでも不安なものは不安である。

無意識に身体が斜めに傾いで避けようとしてしまうのを、なんとかまっすぐに戻しながら、ヤエトは言葉をつづけた。

「とくに変わったことはないですね？」

「はい」

あまり時間をかけるわけにはいかない。

商人の捜索のため、ルス公の部下が散っているはずだ。恩寵の力が強い一族だから、上空になにか異質な力の存在を感じとっても、不思議はない。ライモンド自身にみつからなくとも、それでは同じことになってしまう。

ア＝ヴルスに——ルシルに会うために、彼は戻って来たのだ。

ヤエトは心を決めた。

——呼ぶしかない。

「異変があったら、すぐ声をかけるように」

名前の魔法は、とてつもなく古い。名前とその持ち主を本質的に同じものと看做す、その原理は素朴で単純なものだ。

だからこそ、ほかの魔法にも援用される。

先年、呪師のはなった追手が、ヤエトの名を書いた紙を彼自身と錯覚し、それを攫って行ったことがあるのも、同じ原理による。そもそも名被せの術自体、名前の力を押しつけるものである。

神々ですら、この魔法の法則には従わざるを得ない。それゆえ、ツェートーは皇女の呼びかけに応え、鳥に翼を与える契約を結んだのだ。

ルシルがヤエトに名告ったのもまた、魔法の力をこめるためだったに違いない。

名告りは、その魔法の力をさらに強める。

「ルシル」

ヤエトは少女の名をときはなち、風に委ねた。

――呼べば、届く。

彼の呼び声は、真っ先に本人に届くはずだと、信じるしかない。ひょっとすると、ルス公の注意も惹いてしまうかもしれないが、本人が呼べと指示したのだから、なんとかなるだろう。むしろ、なんとかしてくれねば困る。飛ぶのは楽しいが、いつまでも飛んでいるわけにはいかない。

「ル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルス」

自分の声の小ささに、ヤエトは笑いたくなった。もっとはっきり、呼ばねばならない。

顔を上げ、腹の底から声をだすつもりで、彼は呼びかけた。

「ル＝シル・ル＝ウル・ア＝ヴルス、どうか道をお示しください……ヤエトが参りました」

最後の名告りは、ふと思いついただけだった。だが、それがなにかの合図ででもあったかのように。

風が、流れた。

後ろから、前へ。鳥の毛が逆立つほどの勢いで、するどく、ほそい気流が流れたのだ。

アルサールが小さく声をあげたから、ヤエトだけが感じた異変ではないだろう。

その風は、かれらの前方で形を得た。

まったく理屈にあわない話だが、自分たちを追い越していった風が、目に見える姿をとった——そうとしか、思えないのだ。

四足獣の姿である。ぴんと立てた耳、ふさふさとゆたかな尻尾、雲を巻いて飛ぶ足先には、するどい爪が見える。

特徴だけ並べてみれば、犬だといってもよさそうだが、銀光を発して空を飛んでいる時点で、犬ではないと考えるべきだろう。

それなら、あれの正体はなんなのか。

天翔けつつ、見事な銀毛に覆われた肩越しにこちらをふり向いた長い鼻面は、やはり犬に似ている。だが、犬よりずっと大きい。シロバの雛たちより大きいくらいだ。さすがに成鳥よりは小さいから、子馬くらいというところか。脚は長く、動きは鞭のようにしなやかである。そして、虚空からいきなり出現したとは思えないほどの、存在感があった。

その不思議な獣が、わずかに飛速を落とした。距離が、詰まる。シロバが首を動かし、ヤエトは我に返った。だが、行動を起こしたのはアルサールが先だった。

「右へ！」

横に並んでいたアルサールの鳥が、右旋回をはじめる。あわててヤエトもシロバの手綱を引いた。

このまま飛んでいたら、あのわけのわからない生き物に追突してしまう。

銀色の獣も、かれらにあわせて方向を変えた。行く手を遮る意図はなく、ただおもしろがっているように見える。

アルサールが短弓を構えようとしたので、ヤエトはあわてて止めた。

「やめろ」

さっとふり向くと、銀色の獣は大きな口を開いて

いた。するどい牙のあいだにだらりと垂れた舌は、暗い色をしていた。血のように赤い。

轟々と鳴る風の響きが聞こえ、耳にして暫くしてからようやく、それが獣の声なのだと気がついた。

「迎エニ来タ」

双眸は、ひどく明るかった。光を発しているといってもよい。茫漠、という言葉をヤエトは想起した。想像もつかないほどの虚無、永劫、極大……そういった、日常とは縁のない言葉のすべてを、その眼差しは示唆していた。

「誰の迎えか」

「我ガ主人、我ガ名ヲ呼バイシ者」

「それは誰か」

獣は、ハァッ、と大きな音を発した。おそらく、笑いに近いなにかだろう。

「来ヨ」

獣が空を蹴ると、風が動いた。空が割れる、とヤエトは感じた。シロバの身体が揺れ、アルサールが声をあげた。

「風が、おかしい！　これだけの速さで飛んでいるのに、後ろから撫で上げられるようです」

いわれて気づいた。あのほそい気流が通っただけでは、終わっていなかったのだ。今もまだ、風は後ろから吹いていた。

しかも、それはさっきのように通り抜けるのではなく、かれらを押すような動きを示している。だから、シロバが揺れたのだ。

「おまえの仕業か」

ヤエトの問いに、獣は答えなかった。こちらを見ることもせず、ただ前へ進んだ。

――しかたない。

連れて行かれるのがライモンドのところか、あるいは別の誰かのところだったとしても、諦めるしかなさそうだ。

風は、それほどの勢いでかれらを押している。

「従おう」

ヤエトはアルサールに告げた。
これほど力のある存在を従えているのだ、そのあるじは現人神に近いといわれるア＝ヴルスであろう、という読みもある。
「しかし……」
「逆らえば、鳥を消耗させるだけです。……シロバ、あの犬を追ってくれ」
なすすべもなく流されるより、自主的に追っていると考える方が、ずっといい。鳥も、人もだ。行動の選択肢を奪われたように感じたままでは、心に自由がなくなる。自分で選んで行為していると、信じられる限りは信じつづけるべきだ。
シロバの姿勢が安定し、アルサールの鳥も飛速を上げた。
気づけば、かれらを押すような風は止まっている。まるで、追うと決めたのがわかっているような……。
——知っているのだろうな。
相手は空を飛び、人語を喋る犬だ。心も読むかもしれないし、そうでなくとも、鳥の動きを見ればこちらの考えがわかるほどの洞察力を持ち合わせていても、おかしくはない。
空を飛んだり言葉を喋ったりする時点で、もうおかしいのだから、考えるだけ無駄だ。
ヤエトは心配するのをやめることにした。目的地に着くまでは、なりゆきにまかせると決めた方が、気疲れしなくて済みそうだ。
眼下を流れ去る森は、緑の洪水のようだ。地上にあふれ、すべてを埋め尽くす。なにもかもが、幻めいて感じられた。遠い山並、渦巻く雲。森の切れ目に、銀色の筋が見える。川だ。草原が白や紫に見えるのは、花の季節だからだろう。一輪ずつの容(かたち)を認める暇もなく、それは色のかたまりとなって視界を過ぎ去る。
まだ低空にとどまる日の光のせいもあるかもしれない。あるいは、地表をやわらかに覆う朝靄の存在が、そうさせているのか。ヤエトの知らない土地だ

からとも、考えられる――だが、それ以上に、その景色には不思議な魅力があった。

獣はゆっくりと降下をはじめた。このあたりの地形は北嶺に似ていたが、露出している岩の色が違っていた。北嶺の岩は黒いが、ここでは白が主体だ。光の破片を砕いて捏ね上げたかのごとく、ちらちらと虹の色にかがやく岩の眺めは、氷雪に鎖された季節の眺めに似ているようで、やはりどこか違う。視界のどこかに木立があるような景色は、北嶺では望み得ない。

岩がちの地形は途切れ、地表はふたたび森に覆われた。そして、その濃密な緑の向こうに、燦然とかがやく湖が見えた。

風を受けて波立つ湖面は白と銀、まるで地上に光を宿すために存在するかのようだった。波の合間に見える碧緑の色は、光の届かない湖底までの距離を思わせた。

白い石の塔が、その湖の中央部に建っている。基部から突き出した桟橋を風が撫で、波が砕けて飛沫が散った。その突端に降り立った白銀の獣を中心に、波は立ちつづけている。銀の螺旋を描くようなその光景に、ヤエトは魅了され、同時に畏れを感じた。

ここにあるのは、純粋な魔法だ。

日常の理屈は通じない。あれは魔法の存在であり、彼の知る常識を隔絶したものだ――おそらく、そのあるじもまた。

――人間らしいところのない娘、か。

皇女に聞かされたレイランド公子の言葉が、不意に現実味を帯びてきた。

「降りますか？」

アルサールの声にも、畏怖の念がこめられていた。ふれ得ざるものに手をのばしに行くのだと、彼にもわかっているのかもしれない。それでも、ヤエトは念を押しておくことにした。

「ここから先は、つねならば出会わぬような不思議にも、遭遇するだろう。心得ておきなさい」

「……はい」
「よし。降りる」
短く応じただけで、シロバにもヤエトの意志が伝わったのだろう、下降体勢に入った。
桟橋は、そう幅広くはない。一羽ずつでなければ着地も無理だ。いつでも逃げられるよう、鳥の背から暫しは展開を見るべきかとも考えなくはなかったが、それも礼を失した態度であろう。
やや不様にではあるが、ヤエトは鳥の背から滑り降り、しゃんと立つことに成功した。長く乗っているとそうなりがちなのだが、降りてすぐにまっすぐ立つのが、意外に難しい。今も、もう少しで膝をついてしまうところだ。そうならなかったのは、アルサールが如才なく横に進み出て、腕をとってくれたおかげである。
獣は一部始終を見守っていた。その輪郭は、終始揺れ動き、不自然にぶれつづけている。まるで炎だ、とヤエトは思った。この炎は熱こそないが、ふれ得ざるという点で、はるかにまさっている。この獣にふれた者は、……どうなるだろう？
獣は、大きな口を開いた。
「主人ガ待ツ」
ヤエトは塔の方を見た。扉は、あった。ただし、扉はしっかりと鎖されている。その上、金具で頑丈に固定された太い鎖と、重たげな錠前が一、二、……七個。中にあるのはそれほど貴重か、あるいは危険なものなのか。なんにせよ、近寄るな、という明確な意思表示を感じる。
「招かれているようには見えないな。むしろ盗めとでもいわれているようだ」
ヤエトの無遠慮な感想に、獣は、うたうように応じた。
「錠前ハ謎、鍵ハ答」
「おまえは何者だ」
「何ト見ル？」
少し迷ったが、ヤエトは正直な所感を告げた。

「姿は、銀色の大きな犬に見える」
獣は牙を剝いた。笑ったのだろうが、どう見ても怖いなんてものではない。腰が抜けなかったのをほめてほしいくらいだ。
「犬ニハ非ズ。姿ハ狼也」
――そんなの、どうでもいいだろう。
ヤエトは、狼を間近でしげしげと見たことなどないし、犬とどこがどう違うのかなど、知る由もない。だいたい、空を飛んだり人語を喋ったりしている時点で、ふつうの生き物ではあり得ないのだ。犬でも狼でも、大差はないと思う。
しかし、相手はそこにこだわりがあるようなので、一応、詫びておくことにした。
「……それは失礼を。だが、見た目は所詮、かりそめのものと心得る」
「左様。我モ汝モ、同ジク。身体トハ仮ノ器也」
「わたしは人だが、そちらは人ならざる者であろう。本性は、なんだ？」
銀の狼はわずかに眼をほそめた。
「留マリ得ヌ者」
なんとなく、覚えがある表現だが、意味までは思いだせない。なんだったか、と考えているのを見透かしたように、銀の狼は告げた。
「謎ヲ解キ、答ヲ得ズンバ進ムヲ得ズ。問ウ、我ガ本性ハ何ゾ」
余分な質問は身を滅ぼすと、そろそろ学習してもよさそうなものだ。本性など確認する必要もないだろうに、うっかり尋ねたせいで、自分で明かさねばならない羽目に陥っている。
獣の姿は揺れている。《ふれ得ざる者》ではないのだな、と思い、そこから彼は記憶の糸を摑んだ。
沙漠の西、まだ家族と暮らしていた頃だ。窓から入る日射しを受け、空気に含まれたこまかい埃が、金粉のようにかがやいていたのを覚えている。古びた本の、独特のにおい。兄が書庫から持って来た、不思議な文字の並んだ本。どう読むのかわからなく

て、兄に訊いた。
ちらと弟の手元を見、兄は鼻の上に皺を寄せた。
——読めないのか。
読めないから訊いているのだと答える前に、兄が教えてくれた。
——《ふれ得ざる者》だろ。
少しばかり、得意そうである。
——どういう意味？
——うるさい、自分で考えろ。だいたい、それは子ども用の字習書だぞ。
子ども用の、という部分に兄は力をこめて語った。ふうんと受け流すと、兄は少し気勢を削がれたようで、それでも自分の知識をひけらかすのを忘れはしなかった。面倒だ、うるさいと文句をつけはしても、弟に威張ってみせる機会を逃すことはない。
——『詩華百夜』の中から、ものの呼び名の由来にまつわるものだけ抜き出した本だ。
不愛想に、しかし得意げに説明する兄の顔よりも、ヤエトの記憶にはっきりと残っているのは、そこにしるされた美しい飾り文字だった。水のよう、あるいは風のようともいうべき、流麗な線で描かれた図形は、文字以上のなにかに見えた。
——これは、夜。
——どこの文字なの？
——『詩華百夜』だって、教えただろう。
——……沙漠？
沙漠の文字なら、ヤエトだって知っていた。日常、もっともよく使用される文字の原形が、沙漠の文字なのだから。
答えず、兄は頁をめくった。
——これは、空が目覚めると書いてある。
教えられれば、読めた。読めるというより、文字の姿が見えた、というべきかもしれない。簡素な文字が、装飾の中に隠されている。それでいて、装飾自体が意味を持つかのようでもある。
記憶の中で、兄の姿は遠ざかって消えた。本だけ

が、残った。本と、文字と……言葉。

文字の裾は地平線をあたためる朱に彩色されているが、上方は淡い水色だ。背景にしっかりと塗りこめられた藍色は、頁の下方へ進むにつれて淡くなり、最下部では背景色などないに等しい。一本の線の始点と終点がことなる色を持ち、その曲線はたなびく雲であったり、風に巻き上げられる砂の流れであったり、そして地平の向こうからあらわれる日射しの矢であったりした。

《空の目覚め》が朝なら、太陽は《空の眼》だ。夜は、《目蓋の裏》……。

――わかった。

それらは、沙漠独特の言い換えだ。他所者(よそもの)からは、交易路に点在する都市国家群と見られ、損得勘定のはっきりした民族性をもつと思われがちだが、もちろんそれだけではなかった。珍奇なもの、美しいものをかれらは愛した。そして日常をも、その色に染めようとした。ありふれたものにさえ別の呼び名を与え、詩的な言い回しがいくつも生み出された。

「おまえの本性は、風か」

狼を自称する獣は無言である。尻尾をふさりとふって、それだけだ。

たしか、ルシルがいっていたはずだ。自分は風霊と話すのだと。

「風霊、と呼ばれるものなのか？　あるいは、風妖とか……シダーカという呼びかたもあるそうだが」

別の呼び名があると教えてくれたのは、商人だ。未だどこにいるのか、無事なのかもわからない男の知識が、ヤエトの中で生きている。

獣は眼をほそめた。鼻の上に、あまり友好的とはいえなさそうな皺が寄り、銀毛がわずかに逆立つ。

「其ハ卑俗ナル呪師ノ言葉也」

不意に寒さを感じて、ヤエトは身震いをした。

波が荒いせいで、飛沫が服の裾にかかり、濡れてしまう。このまま立っていれば身体が冷えて、体調の悪化を招くのは必至だ。

ここに来るのだって、ずいぶん無理をしているのだ。ヤエトには、時間がない。

「おまえのあるじは、アヰヴルスか？」

「答ヲ得ズンバ進ムヲ得ズ」

獣が独特の声でつぶやいた直後、一陣の風が桟橋を吹き抜けた。そのまま、獣の姿も消えた。

アルサールが支えてくれなければ、桟橋から落ちていたかもしれない。夜明けから間もない時間帯である。水の冷たさを想像するだけで、寒さとは別の震えが来た。

「命の恩人だな」

ぴんと来ない顔をしたアルサールの肩をかるく叩いて、ヤエトは塔に歩み寄った。近くで見ると、鎖はより太く、錠前はより重く、いかにも厳重に封じているという印象を与えた。

内からの戸締まりではない。外からの施錠だ。

ルシルはほんとうに、この中にいるのだろうか。

――鍵は答。

ヤエトは鎖に手をかけ、そのまま眼を閉じた。体力に不安はあるが、やるしかない。

「暫く、静かにしていてくれ。考える」

「はい」

呼吸をととのえ、一気に時を戻す。最近、過去への遡行は、本の頁を繰るのに似ていると感じはじめている。あるいは、階段を降りる感覚にも近い。たぐり寄せるための手がかりとして摑む一区切りずつが、頁や段差として認識されているのだろう。そういう連想をした方が、円滑に進む気がする。

ただし、それが正しいやりかたなのかはわからない。誰もヤエトに教えてはくれないからだ。

空を映す湖面が、ヤエトの背後で日にきらめき、あるいは夜に沈んでいく。星の光が足下にまたたいて、上下の感覚が狂う。手がかりを失い、とめどなく沈んでいくように感じながら、ヤエトは時を遡りつづけた。

やがて、それは姿をあらわした。

ライモンドだ。小柄な背中が桟橋を遠ざかる。繋いだ舟は、鏡のような湖面に黝い影を落としただけで、静止している。ほかに人影はない。

もう一頁、ヤエトは時を過去へとめくった。

ライモンドの姿が移動した。白い指先が、鎖を撫でている。

――この鉄は、冷たいわ。

あの声で、彼女はささやく。

――わたしにとっても、おまえにとっても。この北の大地とは、かかわりのない場所から運ばせた鉄よ。これなら十分だと思っていたのに、……抜け出したわね？

答はない。ライモンドの指は錠前に辿り着く。

――おまえはわたしをラヴスロク王にするつもりなの？ そうしておいて、自分はイザモルドを気取るのね？ でも、わたしは愚かなラヴスロクとは違う。意気地のない男と同じ過ちはおかさない。

わずかにかすれた、美しい声だ。蠱惑的な魅力がある。その声のせいだろうか、ライモンドの表情は見る者を引き込むようだ。なんという笑顔だろう。さながら、毒を含んだ蜜の風情だ。甘さの奥に致死の苦味を隠す、危険な女性。

低い声で、彼女はくり返す。

――おとなしくしていられないのなら、おまえが生きる場所はない。おまえをうまく使えるだろうと、男どもは思っているようだけれど……わたしには、わかる。それは、人に扱えるようなものではないわ。わたしの力でさえ、あやういのだから。

ライモンドの指先に、鍵が見える。この錠を開くためのものか――あるいは、鎖すためか。

赤毛が風に揺れた。

――食事はもう届かないわ。生き延びたければ、ここを出なさい。ただし、この扉は自分で開けるのよ。誰も手助けはできないから。

鍵が、弧を描いて宙を飛んで行く。水音と、同心円状にひろがる波紋だけを残し、見えなくなる。

——この先を決めるのは、おまえよ。おとなしく死ねないなら、出て来てわたしと戦いなさい。おまえの力で、北の大地を滅ぼしなさい。諸侯どもを雪片のように散らして飛ばし、凍りつかせてしまうのはどう？　……おまえほどの力になれば、従うのは人ではない。妖魔だけよ。廃墟の女王として、無人の宮廷に君臨する孤独を享受なさい。妖魔たちなら、おまえは完全に信じられる。

暫しの沈黙と、静止。聞こえるのは風と水の音、そしてかすかな呼吸の音だけだ。

眼を上げて、ライモンドはささやいた。

——人は、駄目よ。人は裏切る、どうしても。

やわらかに、いたわりさえ感じるような口調で告げて、ライモンドは踵を返した。桟橋から揺れる小舟に乗り込む動作は機敏で、少女の頃はさぞかしお転婆だったのだろう、と思わせた。

今は違う。

彼女の背には、重荷があった。眼差しには諦念が、そして声には——失ったものを焦がれて追い求める、せつなさがあった。

漕ぎ手もいないのに、舟は湖面を滑るように遠ざかって行った。

ヤエトは、意識を過去に止めていた力を抜いた。浮上する感覚とともに、世界が明るくなる。圧力が薄れ、彼は自分が今に戻ったことを知った。

——鍵は、ない。

それが答だ。湖底のどこにあるとも知れなくなってしまった。探し出すことなど、できそうもない。

「公」

案じるように声をかけられ、ヤエトはかるく手を挙げた。呼吸が荒くなっているのは自分でもわかるが、おそらく顔色もひどいだろう。

まともに喋るためには、息をととのえねばならない。少し待って、ヤエトは少年に答えた。

「大丈夫だ」

「……はい」

まったく承服しがたいという顔で、アルサールはうなずいた。
「大丈夫だから、少し、下がっていなさい」
「ですが」
「よろけて落ちたりしないから」
たぶん、と心の中で言葉をつづけ、ヤエトはふたたび鎖にふれた。ひどく冷たい。日が高くなれば、あたたまることもあるのだろうか。
ふたりの会話が途切れると、あとは静かだ。今は風もほとんどなく、塔の裾や桟橋の橋桁を洗う波も穏やかだ。
ライモンドがいうように、この鉄が遠くから運ばれたものなら、北の大地の祝福を享けた異能者たちにとっては、さらに冷たく、よそよそしく感じられても不思議はなかった。
ならば、それ以外のものは、どうなのだろう。北方のこの大地に属しているものは？ あたたかく、親しく感じられるのか。
たぶん、そうなのだろう。さっきの銀色の獣のような、人語を解する存在もいるなら、話し相手にも困らない。しかも、かれらは友人ではなく下僕なのだ。人外のものたちは、契約だの誓約だのといった約束ごとには、完全に縛られる。ア＝ヴルスが北の大地に属するものに絶対的な支配力をふるうならば、従わせるまでもない。向こうから勝手に寄って来て、仕えるだろう。
けっして裏切らない忠実な下僕たちに囲まれていれば、人の世界は必要ないだろうか？
「……違うだろ」
思わず、つぶやいていた。
そんなはずはない。
「ルス公は、間違っておられる。……聞いていますね、ルシル？」
扉の向こうに、気配がある。
気のせいでもかまうものかと、ヤエトは言葉をつづけた。

「ご自身に、なまじ力がおありだから。誰よりも、あなたの力の怖さをおわかりだと、お考えなのでしょう。ですが、だからこそ間違われた。人の世に出すことをはばかるほどの力があるからといって、あなたを人らしい暮らしから切り離して、なんの意味があります。人というものをわからなくさせてしまうだけではありませんか。無人の宮廷に君臨しろという言葉通りにね。あれは来るべき未来を語る言葉ではない。呪いです。そんなものを、あなたが気にする必要はない。あなたは人なのです、ルシル。ア＝ヴルスである前に人として生まれ、人として育つべきだ。北の大地のあるじとして、あなたは自分自身が何者かを、まず知るべきです」

ひと呼吸、置いた。

背後に控えるアルサールが、いきなりの長広舌におどろいていなければよいのだが、と頭の隅で考えながら、声に力をこめた。

「あなたがこの塔を出るべきか否か、その問いの答は明白です。出ておいでなさい。そして、生きるのです」

「……戦うのは、嫌」

小さな声だった。

気のせいかと疑いたくなるほど、かすかな。

「そんなこと、自分で決めればいい。いったでしょう、あれは呪いです。従う必要はない。あなたは自由だ」

今の幻視は、そう前のことではない。疲労の度合いで、だいたいわかる。

おそらくライモンドには、非常な速さで移動する手段があるのだろう。少なくとも彼女の領地の中では、そうした非常識がまかり通るに違いない。漕ぎ手もない舟を使うのだ、森を行けば木々が動いて道ができるくらいのことは、やってのけても不思議はない。……いや、十分に不思議なのだが。

――それほどの力がありながら。

なぜ、娘ひとりを救い得ないのか。

塔に閉じ込め、とりあえず視界に入らなければよいとでも思っていたのか。人の手や声のあたたかさから遠ざけて、どうするのか。

まだ、ほんの子どもだというのに。

ヤエトは待った。

自由という言葉が、少女の耳に空疎に響かなければよいがと思った。

ほんとうの自由など、滅多なことでは手に入らない。人は誰しも、自分の属する集団に大きく影響される。行動はもちろん、思考さえも。そこから完全に解放されることは、誰にも望み得ない。

たとえば彼自身、恩寵の力からも、官吏という立場からも、逃れられぬように。皇女がその出自から来る権力や責任に縛られているように。ジェイサルドが悪鬼の名を、あるいはファルバーンが滅びた王国の影を引きずっているように。

誰もが、不自由さのなかで生きている。

それすら、こんなところで暮らしていては、実感のしようがないではないか。

「どうか、自由になってください」

「わたしは、知っている」

ルシルの話しかたは、前と変わらない。違うのは、その声がずっと弱々しく響くことだ。

「なにをです」

「風霊が、教えた。未来」

ぞっとした。同時に、叫びだしたいような衝動を感じた。つとめて声を抑え、ヤエトは答えた。

「人から教わった未来など……そんなもの、よくできたまがい物に過ぎない。明日は、自分で積み重ねていくものだ。誰かに語られるものではない」

預言者の顔が、脳裏に浮かんだ。

――この世に失敗などないのですよ。神がご覧になる世界はすべて、あるべきようになっている。

そうだろうか、とヤエトは思う。

神でさえ、こんなはずではなかったと感じることはあるのではないか。世界の行く末を案じ、望む方

へ舵をきろうと目論むことは、あるのではないか。
なにかの変化をもたらすのは、しかし、実際には神自身ではない。人だ。
「わたしは、知っている」
ルシルはくり返した。さっきよりも、声の調子が少し強い。ヤエトの発言に、苛立ったのだろう。
反発は大いに結構。あれで感情が波立つのであれば、まだ大丈夫だ。つとめてゆっくり、聞き取りやすさを心掛けて、ヤエトは言葉を返した。
「ご存じとお思いなのは、わかります。ですが、知識は知識、現実は現実です。知っているのと、実際に経験したのとは違う。そのことを踏まえておいでですか？」
少女は答えない。
北の大地のすべてを知り得るというこの少女にこそ、理解しておいてほしいことだ。自身と他者を切り分けて考えられるようにしておかねば、入ってくる情報量に押し流され、いずれ自分を見失ってしまうだろう。
「現実というのは今、この瞬間、この場所にしか属し得ない。自分で感じ、考え、行為する——その積み重ねを経験と呼ぶのです。これからなにが起きるということを人に教わっても、未だ遠い知識でしかない。あなた自身の人生と同じようでいて、違うものに過ぎない。他者から得る知識が無意味とは申しませんが、それはまったく別の種類のものです」
「静かに」
あきらかに、黙れと命じる口調だった。それこそ《死者のように静かに》を求められそうな勢いだ。
ヤエトが黙ると、ルシルは強い調子でつづけた。
「わたしは呼ぶ。あなたを呼ぶ」
「出て来てください」
「あなたが、来る。来なさい、ヤエト」
手の下で鎖が熱を帯びた。それとも冷たくなり過ぎて、熱いと感じたのかもしれない。
あっ、と声をあげたときにはもう、鎖は彼の足下

に溶け落ちていた。扉を挟む壁に鎖を固定していた金具や錠も、すべて。

「公！」

アルサールが声をあげた。

「危険はない」

反射的に応じたが、確信はなかった。

扉は開いていた。なめらかに、蝶番をきしませることもなく。その内側に、人影は見えない。衣擦れの音がしたような気がしたが、風か水の音を聞き間違えたのかもしれない。

塔の中には黒々と、濃密な闇がわだかまっているだけだ。ほかには、なにも見えない。

「お供します」

ふり向くと、険しい表情のアルサールと目があった。こんな顔を見せるのは、厨房で調理用具を武器に立ち回りを演じそうになっていたとき以来ではないだろうか。

しかも今回、アルサールはれっきとした武器を持っている。鍋釜包丁にもあなどれない性能があるのはわかっているが、やはり、殺傷を目的につくられた剣や弓矢とは格が違う。

とても、連れて行くわけにはいかない。

「招かれているのは、わたしだけだ。ここで待っていなさい」

「俺も――」

「命令だ」

アルサールは口をつぐんだ。が、今度は急に歩を進め、ヤエトと塔のあいだに立ちはだかった。

「公のお命を、姫様からお預かりしました」

「無事に北嶺に戻れないと、意味がないでしょう」

「……はい、もちろん」

「だからおまえはここにいて、鳥たちの面倒をみてくれなければ」

「こいつらは、自分で自分の面倒くらい、みられますから」

アルサールの中で、ヤエトの評価は鳥に劣るらし

い——それもそうかも、と納得してしまう自分もどうかと思うが。

それにしても、敵と対面するより味方を突破する方が困難なことが多いのには、困ってしまう。武闘派厨房助手が相手では、強行突破も無理そうだし、やはり説得するしかないだろう。

「そこを退きなさい。行くべきは、わたしだけだ。これは、わたしの仕事なのです」

「ご無事にお戻りになることこそ、公の第一のお仕事です」

「違いますね。それなら、わたしは北嶺を一歩も出るべきではない。ここに来ている以上、わたしには、一身の安全以上に果たすべき責務があり、それをないがしろにはできぬのです」

「お供します」

強情に、アルサールはくり返した。

ひょっとすると、ルシルは少年も受け入れてくれるかもしれない。だが、それを期待して連れて入って、湖に放り出されでもしたら困るから、止めているのだ。なんとなくだが、招かれざる客を排除するにあたり、安全や健康に配慮してくれるだろうとは期待しない方がよさそうだという感じがする。

「招かれているのは——」

不意に、心の中に声が生じた。

——ヤエト。

頭の奥から、あるいは耳のそば、背後、肩口、それとも腹の底から。いたるところから聞こえるようでもあり、同時にどこでもない場所で発された、誰の耳にも届かない音のようでもあった。

いや、音ですらない。純粋な言葉であり、言葉以上のなにかだった。

——ヤエト。

呼び声は、容赦なく彼を揺さぶった。

聞き慣れた、自身の名だ。それがまったく違う重みをそなえている。彼のすべてがその短い言葉に凝縮されていた。考えも、感じることも。過去も、未

来も。

そして、今、この瞬間を。

「――わたしだけ」

ヤエトは無造作にアルサールの肩に手をかけた。ちょうどいいところに手がかりがあったとでもいう具合に、かるく摑み、後ろへ押しやり、自分は前に出た。

意外過ぎる動きだったのだろう、相手がなにもできなかったわずかの隙に、彼は一気に歩を進めた。

アルサールの手が彼の長い袖口をかすめたのを感じたが、摑まれることはなかった。

――ヤエト。

声は強くなっていた。

彼の内にあるのに、外にある。だから、行かねばならない。どうしても、その場へ。

――ヤエト。

視界は霞み、世界から現実感が失われた。今や、呼び声だけが彼のすべてだった。

ほかは、消えた。

2

少女の前に立ったとき、なにかがはじけたような音がした。それでようやく、彼は自分が移動していたこと、あれほど嫌っている塔の内部を上って来たことを知った。

そこはすでに塔の入口ではなかった。それはわかるが、天辺でもないようだ。

疲労を感じ、胸が苦しくなった。なにしろ、病み上がりなのである。休みなしに階段を上るなどという運動は、健康なときでもヤエトにはつらいものだ。それだって、健康だなどと主張できる時期があるとして、の話だが。

アルサールの姿はない。

「連れの……者は？」

なんとか声にしたつもりだが、答はない。

閉め出されたのだろう、と考えることにする方がよさそうだ。

少女は彼をじっと見ていた。顔の高さがあまり違わないのは、階段の段差のせいだ。金茶の髪は、闇を含んで少し暗い。灰色の服は逆に明るく眼に映り、あたりの景色から浮き上がっているようだった。

光源となっているのは、少女が掲げた手の先に宿るなにかである。正体はわからない。少なくとも、燭台だの角灯だのといった、尋常の灯火ではないと思われる。

それはなんですか、と問いそうになり、また無駄な問いで時間を浪費するのも愚かだろうと気がついた。ついさっき、狼を自称するもの相手に、それを学習したばかりだ。

開いた口をそのまま閉じるわけにもいかず、使い古された無難な文句を発してしまう。

「お招きくださり、光栄に存じます」

ルシルは顔をしかめた。

「難しい。言葉、わからない」

平易にといわれても、どうせただの挨拶だ。ヤエトは恭しく一礼した。

頭痛の気配を遠くに感じる。まだだ、と思う。まだ時間切れには早過ぎる。なにも、やっていない。ようやく出発点に立ったかもしれない、という段階に過ぎない。

アニヴルスと対面し、問うべきことや語るべきことは、いくらでもあるはずだったが、頭の芯が痺れるようで、うまく考えられない。

呼び声の残滓が、まだ彼を縛っていた。

少女の手から、ふっと光が飛んだ。それは中空に留まり、黄から橙、赤、と色を変えながらも、消えることなくまたたいている。

やはり、その正体はなんなのか、尋ねておくべきかもしれない。気になり過ぎて困る。

一段、少女は階段を降りた。距離を詰めるためだと気づいたのは、無造作に手をとられてからだ。

その動作に、なぜかヤエトは痛ましさを感じた。理由ははっきりしない。

「冷たい」

ルシルの手は、あたたかく、やわらかい。子どもらしい、小さな手だ。少し、湿っている。

「わたしを、お呼びになりましたね」

いわずもがなのことを確認する自分に嫌気がさしたが、ルシルはこともなげにうなずいた。

「呼んだ。ここで、用がある。古い、視る。あなた、視える？」

いきなり核心にふれられてしまった。だが、ここまで来ておいて、ごまかすもなにもないだろう。ルシルの伝言を受け取ってしまった時点で、彼は過去視が可能であることを明かしたも同然なのだ。

「秘密ですよ？」

「秘密」

ルシルは真剣な表情でうなずいた。どれだけ理解しているのかに不安はあったが、どうしようもない。

ヤエトはうなずいた。ほかに聞く者とていないだろうに、事実を明かす声はどうしても低く、小さく、ひそめたものになってしまう。

「ある程度は視えますが、限界はあります。時を遡り過ぎると、身がもちません」

「遡る？」

少女の語彙にはない言葉だったようだ。苦笑して、ヤエトは答えた。

「遠い昔は、疲れて無理です」

「昨日と明日、それより前とそれよりも先。風霊が、教える。風霊は時にとらわれない。わかる？　前と後ろ、順番、風霊は気にしない。注意できない。混乱してる。あなた、順番、わかる？」

ヤエトは少し考えた。風霊は時を越えられるし、少女にさまざまな過去や未来を報告できるが、ものごとの推移や展開を説明できないのだろう。断片的な情報だけでは、意外と役にたたないものだ。

「おそらく」

答えると、ルシルは笑顔を見せた。あまりにも嬉しそうなので、ヤエトは少したじろいだ。
相手が幼く無邪気に見えるからといって、そのまま対応してよい立場ではない。ほんとうに他意がないかどうか、まだ判断をつけられるほどの材料もないのだ。それに、他意があってもなくても、この少女が危険な存在であることは間違いない。
流されるまいと考えながら、彼は尋ねた。
「しかし、なにをです？」
「風がいる、ここに。からまって、ほどけない」
「風……？」
なにかの聞き間違いかとも思ったが、ルシルはうなずいた。
「古い風。風、動かない、消える。でも、ずっと、ここにいる。わたし、ほどく。どうなっているか、知らねばならない、助けて」
ヤエトは困惑した。
「わたしは呪術のことはわかりません」
「名前」
「名前？」
ルシルはヤエトの手を握りしめた。
「名前わかる、わたし。でも、古い風、わからない。誰かがからめた。きっと、使った。誰かが名前使った――」
ルシルはもどかしげに言葉を探している。北方のすべてを知る存在なのに、説明するための言葉がないのでは、苛立ちが募るばかりだろう。
「風霊に尋ねた。からまったとき、風霊たちここにいない。わからない。わたしがわからない、北方のものではない。なのに、ここにからまっている。間違い、正す」
「北に属さぬものが、ここに囚われている？」
「そう。誰かがやった、なぜ、わからない。風霊には、教えられない。人の出入り、風霊は知ってる、でもわからない。今より前なのかどうか。なにもかも知ってる、だけど理由わからない。順番がわから

ないと、理屈もわからない」
ヤエトはうなずき、自分の手を握るルシルの手を見下ろしてつぶやいた。
「わかりました。交換に、わたしもあなたにお願いがあります、ルシル」
少女は無言だった。耐えかねて視線を上げると、励ますように彼を見る小さな顔があった。
「知っている。風霊が教えた。あなたの条件、もう知っているから」
一瞬、呆気にとられ、それから苦笑した。全知というのは、まったく手に負えない。ターンの預言者など、かわいらしいものだ。
「昔を視る力があると気づいたときに――まず、母はわたしに告げました。その力があると知られれば攫われてしまい、家族と暮らせなくなるだろう、と。その次に、こう教えてくれたのです。それだけではない、どんな秘密も持てないような相手と、安心して暮らせる者はいない。家族であっても、同じこと。余分な力は使わぬように、もし使ってもそれをかるがるしく口にはせぬように、と」
少女は眼をしばたたいた。明るくかがやく眸は、叡智を秘めているようでもあり、あるいは無心に生を貪る獣のようでもあった。
長い沈黙のあと、少女はつぶやいた。
「もう遅い」
「遅くはありません」
「遅い。家族と暮らしていない。わたし、ひとり」
ルシルは口を引き結んでヤエトを見上げた。
返す言葉がないとはこのことだ。底の浅い忠告をしてしまった、と思う。少女の境遇を目の前にして、なぜ口にできたのか。
わかっていないのは自分だ。ちょっと歳が上だからと偉そうに、と皇女ならいうだろう。両手を腰にあて、少しでもヤエトより頭が高くなる位置を探して、上から見下ろしてくるだろう。
だが、ルシルは違った。彼を見下ろす場所など探

さず、ただ強い口調で告げた。
「理由がわかった。感謝する」
「遅くはないのです」
同じ言葉をくり返し、ヤエトはルシルの前に跪いた。向こうが見下ろす努力をしないなら、こちらが見上げてやればよい。簡単なことだ。
愚かなのは年上面して説いた自分であり、孤独に耐えているルシルではないのだと伝えるために。
「希望を持つのは、生者の特権なのです。昨日は過ぎ去ってしまっていても、まだ今日があり、明日がある。あなたは風霊ではない。日々の積み重ねが次へ繋がると、理解できるはずです。それが、生きるということです」
先の発言とあわせて、どこまで伝わったのかはわからない。それでも、ルシルはうなずいた。
ヤエトを見下ろすと、小さな声で、しかしはっきりと答えた。
「わかった」
「ありがとうございます。では、話を戻しますが」
「条件は――」
あわてて、ヤエトはルシルの言葉を遮った。
「たとえご存じでも、わたしは、わたしの言葉で今、あなたにお伝えしたい。お聞き届けいただけるかどうかは、それからお考えください」
見上げると、少女はこくりとうなずいた。
揺れる光に照らされて、その顔の輪郭が黄金に、あるいは深紅に、ふちどられる。
ふと、これから自分が語る願いは、少女が知っているという内容と同じものなのか、気になった。まったく違うことを口にできないだろうか？　もし、そうできたなら、どうなるだろう？
だが、ヤエトはそんな考えを捨てた。
未来がどう定められていようと、自分がなすべきと考えることをなす。彼にできるのは、それ以上でも以下でもない。
「北嶺との友好に、お力添えいただけますか」

少し考えるようにしてから、少女は語りだした。

「渇いた旅人に、男は水を与えた。感謝するという言葉だけを男に残し、旅人はおのれの道を進んだ。やがて旅人は盗賊となり、水をくれた男と再会した。盗賊は笑った。おまえが水を与えなければ自分はあそこで死に、盗賊にはならなかっただろう。男は答えた、数多の命を踏みにじり、絶望を糧にしたとはいっても、今日まであなたが生き生きとした生を得たというなら、それは自分の幸いである、と。盗賊は男の財貨を奪い、男を静かにさせた。静かに、眠るように静かに、死者のように静かに――」

沙漠の古い物語だ。言葉を学ぶために暗記したのだろう、やけにすらすらと語りながら、少女はヤエトを見た。

「――もし、盗賊がそこで悔い改めれば。あるいは、せめて男の命を救っていれば、盗賊も幸いを得、友を得たであろう。だが、盗賊が獲得したものといえば、静かになってしまった恩人と、ものいわぬ財物、心を許すことのできない部下、そして、やがては彼の首を絞めることになる罪の数々であった」

サイー、サーディー、サーヤリム。静かに、眠るように静かに、死者のように静かに――慣用句を産んだのは、この物語だ。

ライモンドが嫌いだといっていた、善人が報われない説話。親切の報いが死であるこの物語は、たしかにあまり後味のよい内容ではない。沙漠の民の考えは理解できない、異質だという感想を抱くのは、ライモンドだけではないだろう。

喩えとして持ち出しはしたものの、ルシルもこの説話を好んでいるわけではないのだろう。いかにも嫌そうに告げた。

「わたしは盗賊ではない。感謝する、言葉だけではない」

「はい」

「でも、わたしはわたし。わたしだけ。わかる？」

大地に選ばれし者は、政治権力とは無縁な人生を

送る決まりだと、教わっている。それは承知の上だ。それでも、とヤエトは思った――それでも、アルスは北方の精神的な象徴のはずだ。だから、こんなところに閉じ込められる。会えばデュラルクが激怒する。

友誼を得ることは、無意味ではないはずだ。

「それではまず、わたしの友になってください」

「友？」

「盗賊が得られなかったものです」

答えながら、ヤエトはジェイサルドのことを思いだしていた。サーヤリムという名を与えたのは、あのとき彼があまりにも静かだったからだ。この物語のことなど考えはしなかったが、ジェイサルドはどうだろう。実に皮肉な名だ。

ヤエト自身、それと意識はしないまま、名づけの足がかりにしていたのかもしれない。結果的に悪人をながらえさせてしまった善人と、その恩に報いることなく命をとった盗賊の、どちらかといえば、ジェイサルドは盗賊の側に立っている人間だ。だが、ヤエトが与えた名は、盗賊に殺される側に属している。見ようによっては間抜けだが、信念のもとに生きた人物ともいえるだろう。

これは、与えることを喜びとした男の物語だ。奪ったり奪われたりではなく、人が充実した生を送れることにこそ重きを置くべしという考えが、名も知れぬ男の人生にかがやきを与えている。摘み取られてしまった命の炎が、物語の中に今も生きている。

それを、ジェイサルドも感じてくれればよい。容易なことではないだろう。ヤエトだって、その日の気分次第では、なんと愚かな男だと笑いたくなるだろうから。

ただ、今はそんな気分ではなかった。少女の声で語られたせいかもしれない。

「わたしも、誠実さを見せる必要がありますね」

「うん……？」

また言葉がわからなかったのか、眉をひそめる少

女に微笑み、ヤエトは立ち上がった。なにげなく袖に手を入れてから、自分がそうしたのはそこに重みを感じたからだと気がついた。指先の感触で、ふれたものの正体がわかる。

「わたしでお力になれるか、試しましょう。まずは、……空腹ではないですか？」

袖から取り出したのは、油紙に包まれた携行食だ。厨房で改良をかさね、冷えてもできるだけ硬くならないよう、素材や調理法を吟味したという。できれば少女にあたたかい食事をとらせたかったが、ヤエトの能力では無理そうだ。アルサールであっても、材料も道具もなくては、どうにもならないだろう。

「なに？」

「食べ物ですよ、北嶺の。よかったらどうぞ」

「食べ物」

くり返して、ルシルは包みを受け取った。その無造作な行為にまた、ヤエトは痛ましさを感じた。そして今度は、理由もわかった。

慣れていないのだ。

さっき、手にふれられたときも、そうだった。距離の詰めかたが一方的で、相手の様子を窺うということがない。ルシルの躊躇のなさは、経験の少なさから来ているのだろうと、容易に想像できた。赤子ならともかく、ルシルの年頃の少女ともなれば、ふつうはここまで無頓着な動きを見せることはない。

「人にものを貰ったら、お礼をいうものです」

「お礼？」

「ありがとう、と」

「ありがとう？」

問いかけるように上がった語尾は、そこにはまだ、感謝の気もちなどこめられていないと教えていた。ただ口にした、問い返したのみ。それは音の羅列に過ぎない。

「そうです」

それでも、ヤエトはうなずいてみせた。まずは言葉を覚え、声にするところからだ。

子どもを孤独にして、よいことなどなにもない。たとえその子が人ならざる力をそなえているとしても、だ。そんなことは関係ない。

愛情を知って育つからこそ、人は他者に愛を与えることができるようになるのだ。

そう考えてみると、他者を愛おしむ心というのは、人が生まれながらに持っているものではないのかもしれない。自分自身を大切にする心でさえ、素朴な生存本能以上の深みを持たせることができるのは、他者だけではないのか。

孤独から学ぶことも多いが、人とのかかわりで学ぶことは、比較にならないほど多い。

「感謝は大切なことです」

ヤエトのつぶやきに、ルシルはまた真剣な表情でうなずいた。

「感謝する……言葉だけではない」

それから、包みを開いて中を眺め、これも無造作にかぶりついた。

彼が幻視したのは——ライモンドが少女に無慈悲な言葉をかけたのは、何日前のことだったのだろう。多少は備蓄の食糧があったに違いない。衰弱した風ではないからだ。それでも空腹ではあったようで、包み焼きは、たちまち食べ尽くされてしまった。

食事はもう運ばないといわれ、少女はなにを考えただろう。

「来る」

ひとこと告げて、ルシルは階段を上りはじめた。中空に留まっていた光が少女の手の先に舞い戻ったが、ヤエトも今度はその正体を思い悩むゆとりがなかった。

揺れる光は、記憶を想起させ過ぎる。

名も知らぬ先祖が幽閉されていた、あの塔。父に手を引かれ、不安と困惑を抱え、はじめての本格的な幻視に襲われるとも知らず、階段を上っていたあのときを、どうしても思いだす。

背中に汗が滲んだのは、久しぶりの過酷な登攀（とうはん）の



せいだけではない。恐怖の匂いがする。

風が階段を吹き抜けた。ヤエトの額がひやりと冷え、緊張のあまり忘れていた頭痛を思いださせた。

まだいいから、もういいから、永遠に出てこなくていいからと懇願しつつ、いったい自分はなにをしているのかと思う。頭痛に向かってなにかを念じて、どうする。相手が斟酌してくれるはずがない。自分自身に、忘れておけと命じる方が、まだしもだ。

息切れして、ヤエトは壁に手をついた。冷えた手よりも、壁面はさらに温度が低かった。

「ヤエト？」

呼ばれると、勝手に足が動いた。これも名前の魔法とやらの効力なのだろうか。少し上の方に、灰色の服の裾が揺れている。近づいたと思えば遠ざかる、それを追ってヤエトはひたすら階段を上りつづけた。

――これしきの階段、北嶺に比べれば。

なんとかそう思おうとしたが、残念ながら、ここに来る直前は死にそうに具合が悪かったせいで、階段どころか自室を出ることすらかなわなかった。

北嶺でふつうに勤務していれば、どうしても使うことになるのが階段だ。体調がよくてもヤエトはやはり息を切らせずには移動できないのだが、それでも、慣れてはいたのだろう。階段を上りきれずに途中で休憩、ということは滅多になくなっていた。

今は無理だ。身体がなまっている。疲れて、身体が思うように動かない。呼吸が苦しい。

しかし、立ち止まると彼を呼ぶ声がする。

「ヤエト」

若い者は体力があって羨ましい限りだ、いや自分の場合は年齢とはあまり関係ないな、しかし歳をかさねる限り、今後もどんどん体力は落ちていくのだろう……それはひどい、もう死んだ方がいいな！などと不毛なことを考えながら、ヤエトは階段を上りつづけた。心臓は活躍し過ぎてもう限界である。もちろん足も重くてたまらない。

身体がなまっている、などと笑える状況を超えて

いた。

「ヤエト」

名を呼ばれると、なんとなく動ける気がするから怖い。気がするだけでなく、足が動いて階段を上りつづけることができてしまうのが、もっと怖い。

やがて、ヤエトは少女のかたわらに立っていた。塔の外壁に沿うように作られた階段は、上階につづく跳ね上げ戸に遮られ、途切れてしまっていた。

――まだ上があるのか。

正直いって、もうここで結構です、帰りますという気分だが、上って来たばかりの階段をすぐ下りられるほどの体力も、気力もない。息を切らしてあたりを見回すしか、ヤエトにできることはなかった。

塔の内部は、吹き抜けである。なんのためにこの空虚な筒を作ったのか、見当もつかない。それなりの資材、時間、人手、そしてそれらを動員するための権力と財力とを必要としただろうから、意味がないわけはないのだが。

「見る、あれを」

ルシルが手をさしのべると、彼女の指先から淡い光がただよい出た。そして、光量が一気に上昇した。あまりのまばゆさに、眼を閉じねばならなかったほどだ。

するどい声が響いて、少女がなにか命じたとわかった。白熱していた視界がゆるやかに暗くなり、やがてちょうどいい明るさに落ち着く。

「見なさい」

なにも見えるはずはない、なにか見えたとしたら、そのなにかは宙に浮いていることになるのだし――と考えたのは、間違いではなかった。いや、前半は間違いであった。

「……なんなのです、あれは？」

灰色の渦が、そこにあった。

光がたりなければ、塔の内部にたくわえられた闇に紛れて、わからなかっただろう。だが、今ははっきりと見えている。渦を構成しているのは、人の身

体だった。正確には、人の身体の部分が断片的に見えては消え、という動きをくり返している。

人の動きをいくつもに分解したものが、不完全な形で再現されようとしているようだ。

たしかに、これは気になっても無理はない。ヤエトだって、ひどく気になる。できれば知らないでいたかったとも思うが。

「ひっかかって、からまって、いる」

それはそうなのだろうが、なにが、なぜ——と問い返そうとして、ヤエトはおのれの馬鹿さ加減に気がついた。彼が求められているのは、それに対する回答なのだ。断片の、全体像をつきとめる。あれの正体を明かす手助けをすること。

そのために、彼は呼ばれたのだ。

「風霊からほかに、情報は？」

「からまる前か、後か、聞いた。新しいか古いか、わからない。聞いた、男の声」

「男の声？」

ヤエトは眼を凝らし、灰色の渦にあらわれては消える身体の部品を見きわめようとした。それは毛織りの布をかけた肩であるかと思えば、皺が寄った服、それとも布のあいだからこぼれる黒い髪であるように見えた。あるいは、指輪に飾られた手。

ああ、とヤエトは思った。間違いない。

——あの手は、男だな。

なんとなく、がっかりした。女性だからなにかいいことがあるかというと、なにもないだろうが、それでもなんとなく、である。

久しぶりに、自分も男だなぁ、と思った。

「うまく見えない、名前わからない」

「あんな黒髪の持ち主が、北方の生まれとは思えません」

北方に属していない以上、ルシルには名前がわからないということだろう。

ふと思いだして、ヤエトは尋ねた。

「鎖は、どうやって消したのです。さっき、この塔

の扉の鎖を消しましたね？　北の産ではない、冷たい鉄だという鎖を」

口にしながら、また余分なことをと思ったが、もう遅い。ルシルは真面目に答えてくれた。

「……ああ、あれは、北にあるべきものではない。拒否した」

となると、北方に属していないとしてルシルが拒否すれば、なんでも消してしまえるのか。それもずいぶん恐ろしい話だと考えていると、少女はヤエトに視線を向け、言葉をつづけた。

「ふつう、しない。なんでしたのか、わからない」

「わかりませんか？」

「わからない」

「そうですか」

「わかる方が、よりよい？」

少し不安げな問いに、ヤエトは微笑して答えた。

「自分のことは、わからないものです」

「あなたは、わかる？　理由」

「しないことをするのは、ふつうではないということですね。おそらく感情が激されたのでしょう」

「感情」

ルシルは顔をしかめた。

「人は、感情に支配されやすいものです。自分が思っているより、ずっと」

「わたしは……」

少女は言葉を探している。

――間違うことが許されぬ。

北嶺に置いてきたあるじの言葉を思いだし、ヤエトはやるせない気分になった。

「とにかく、おかげでわたしは中に入れました。お役に立つこともできますし、言葉だけではない感謝を、あなたから得ることもできる」

ルシルの眉間から皺が消えた。その黄金の日射しのような眼差しが、中空に浮かぶもの、混乱し、断片化したなにかの方へと向けられた。

「できる？」

「あの者の名さえわかれば、あなたはあれを救ってやれる。そうですね？」
少女はうなずいた。
「うん」
「わかりました。やってみましょう」
頭が痛いとか息が苦しいとか、いっている場合ではなさそうだ。
体力は、まぁ、なんとかもつだろう。
死にかけたばかりだから、あまり自信はないが、とにかく短時間なら正気でいられる。今ならばまだ、出立前に服用した薬の効果があるからだ。切れてしまう前に、用件を果たさねばならない。
息を吐くのは、気もちを集中するための第一歩だ。皇女の伝達官に教わった技術の中でも基礎中の基礎であり、もっとも簡単に実行できること。
練習をくり返すと、息を深く吐いただけで、そのまま集中に入ることができます、と伝達官はいったものだ。正確には、ひと呼吸で集中できるわけではない。集中するための手順に、息を吐くと同時に没入していくだけだ。
階段を上って呼吸が乱れていたせいか、はじめはなかなか息を吐ききることができなかったが、やがて、ヤエトは自分の準備ができたことを知った。
灰色の渦が暗くなり、闇に紛れる。ヤエトは時間を過去へと手繰る速度を増し、遡った。
周囲の気配が吹き飛んでいく。彼にこの行為を願った少女の存在さえ、ヤエトには感じられなくなっていた。
あるのはただ、時間。圧倒的な時間だ。
時の階段に座っていた、オルムストの姿がよみがえる。あのとき、鏡の向こうにあった静謐な、動かしようのない決定済みの過去の堆積を、そのほんの一部分を、ヤエトはみずからかき分けている。それを自覚すると、異様な高揚感が胸を衝いた。
鏡をくぐり抜けて、自分は今、あの階段を下りているのだ。

灰色の渦が姿を変える。
からまったものがほどけた、その瞬間。
そこに、見知った顔が視えた。
間違いない、と確信する自身の思考は、どこか他人事のように遠かった。ターンの預言者の声が、さらに遠くで響いた——避けたくても、避けることのできない運命というものがあるのです。
運命。
すべて、こうなると決まっていたから、ヤエトは彼を知っているのだろうか。
恩寵の力をまだ使いこなせず、意図して焦点をあわせたわけでもなかったというのに、時の彼方で、彼を視た。あるときは夢の中で、まるで羽虫が灯火に引き寄せられるように、その周辺をまわっていた。どうすることもできず、そして今また、彼のもとに辿り着いた。
頭に巻いた布からこぼれる艶やかな黒髪、なめらかな額。夜のように黒いのに、なぜか明るい眸。そして容貌よりも忘れがたいのは——。
——狡猾だな。
その、声。深く、心の底まで届いてふるわせる。
声は告げた。
——ああ、おまえは頭がよい。それは認めよう。彼を直接呼ぶ方法がなければ、道具を使えばよいと思ったのだね。なかなかうまいよ、よく考えた。でもね、かわいそうに。
やわらかく、ゆたかな声だ。こんな声を発する人物を、ヤエトはひとりしか知らない。幻視の中に登場したという事実をして、彼を知っていると称してよいのかも、疑問なのだが。
声は語る。
——長く生きてきたあいだに、無駄な知恵がついてね。わたしの一部、わたしの名前そのものは、遠くに隠して来たんだよ。だから、おまえはわたしを支配することはできない。
——捕えられていることを、理解しているのか。

反論する声は、ずいぶんと若い。比べるのが酷だとは思うが、あの男の声を聞いたあとでは、耳に心地よいとは思えなかった。平板で、深みがない。優位に立っているはずなのに、余裕もない。

どこか滑稽であり、もの哀しくもありながら、そこには矜持も感じられた。言葉はつづく。

——おまえには用はない。用があるのは、東の御方だ。さっさと呼べ。

冷たく、硬い口調だ。人と喋るのに慣れていないのではないかと思わせる響きがあった。相手の考えや事情を忖度するという発想自体が欠けている。自分の意志を告げるだけで、背景の説明も、合意を得ようとする努力もない。

——嫌だよ、そんなの。

寂しげな口調で、声はかろやかに告げた。すぐに、答があった。

——選ぶ権利など、ない。

ようやく、口論の相手が見えた。その人物は、ヤエトのすぐ横に立っている。ずいぶん背が低い。少年と呼ぶには歳がいっているが、まだ大人というほどでもない。燃えるような赤毛が印象的だ。彼の小さな身体からは、凄まじい劣等感と達成感が放射されていた。その奥には希望と絶望、自信と不安、そして不満が錘のようにぶら下がっている。

声は、彼の不満をそのまま音にしたようである。不快な棘さながら、耳に刺さった。

——呼べ！

——いっただろう、嫌だよ。否といえる程度には、自由なんだ。ここからは動けないし、動けなければいずれ消えてしまうだろうけど。

——呼べばいい。東の御方を呼びさえすれば、おまえは自由だ。

黒髪の男は中空に浮かんでいる。彼の周囲に渦を巻いている風は徐々に色を帯び、その姿を覆い隠すよう動きはじめている。

男はやわらかに告げた。歌でもうたっているかの

ように。

――わたしの名前すら完全には明かせないおまえ風情に、彼の名を知る資格はない。北の大地も疲弊したのかな。それとも、おまえがア＝ヴルスになったのが、なにかの間違いかな？　代替わりするまで、意地をはってみようか。

――それでは意味がない。今、必要だ。

かぼそい声は、やはりヤエトに棘を連想させた。冷静に見せてはいるが、その実、赤毛の青年を支配しているのは強烈な不安だ。その不安と戦うために、彼は棘を生やすしかない。ひたすら棘を立てつづけ、ますます敵を増やし。やめることはできない。原因にも気づけない。彼は理解していないのだ。自分が孤独であることと、それによって絶望の淵に追いやられようとしていることを。

黒髪の男の方が、よほどそれをわかっていた。

――ほどきなさい。最後の機会だ。

声は、説得する風でありながら、もう諦めているようにも聞こえた。

若者は頭を左右にふった。赤毛が揺れる。

――おまえに復讐の機会を与えるようなことを、するとでも？

――復讐されるようなことをした自覚があるなら、結果も甘んじて受け入れなければ。愚かだね、ア＝ヴルス。わたしを説得すべきだった。罠にかけず、誠意をこめて語ればよかった。その方が、ずっと危険は少なかったよ。

――従わなくとも、このまま封じるだけだ。危険はない。

恐怖が若者を支配している。胸が苦しくなるほどの、強い感情だ。なのに、本人はそれを自覚していない。自分は目の前の存在を支配できるはずだと、未だに考えつづけているだけだ。

彼の中には矛盾がある。きれいに包み隠してしまったせいで本人の眼には届かない、歪みがある。

――これから、北方を吹く風は乱れるだろう。先

読みのできない雷雲が起こり、豪雨と氷雪を地上に叩きつけ、数百年を経た大樹を折り砕き、河を氾濫させるだろう。

——呪いか？

——違う。当然の結果だ。この歪められた風たちが、本来駆け抜けるべきだった場所を通らなければ、そういうことが起きる。それだけだ。

——呼べばいい。

赤毛の若者は、くり返す。説得しているわけではない。理も説かなければ脅しもしない。自分の事情を一方的に語るだけだ。それでは駄目だと助言したくなるほど、彼はなにもわかっていない。

黒髪の男は、ため息をついた。彼の身体は、すでになかば以上が、灰色の渦にとりこまれてしまっている。

——わたしに命じることすらできないくせに、彼を呼んでどうするんだ。滅ぼされたいのか？

——剣に、石が必要だ。

——剣？

——東の御方なら、ふさわしい石を持っている。

そこまで聞いてはじめて、黒髪の男の表情が変わった。黒い眼が、どこまでも暗く、見通せない色になる。

——まさか、あの剣を鍛えようというのか。

——剣はもう鍛えた。必要なのは石だ。柄に嵌める石さえあれば、完成する。

だから、と赤毛の若者は命じた。

——呼べ、東の御方を。

凄まじい不安が、ヤエトを襲う。

その感情を放射しているのは、罠を仕掛けた方だ。囚われた男の方からは、なにも感じることができなかった。まるで、人とは違う、なにか異質なものでもあるかのようだ。

——風の檻より逃れたくば、おとなしく従え。諦めろ、アストラ。

アストラと呼ばれた南方人は微笑を浮かべ、静か

に答えた。

――わたしの本質は、すでにその名のみではとらえ得ない。諦めるのはそちらだ。

黒い眼差しが、ヤエトをつらぬく。そこにいるはずのない彼の存在に、気づいたかのように。

もちろん、それは錯覚に過ぎない。

男は眼を閉じた。すでに、そのくちびるに笑みはない。

若者が叫んだ。

――されば報いを受けよ。我が名において、命ずる。風の檻よ、アストラを封じよ！

ぐん、と風が強さを増した。塔の内部が旋風に満たされる。世界のすべてが風になる――と、そう感じた。

男を囲んでいた風の輪が縮まった。灰色の渦が完成し、男の姿は覆い隠され、見えなくなった。

――馬鹿な奴だ。

赤毛の若者のつぶやきを最後に、幻視は破れた。

気がつくと、ヤエトはその場に膝をつき、床に向かって荒い息を吐いていた。なんと冷たい床だ、と思う。どうしてこんなひんやりしたものを、両手でしっかりさわっているのだろう。不思議に思いながらヤエトは床を見、床の上に広げた自分の手を見、この手がなければ額と鼻のどちらが先に床にふれるだろう、と考えた。

それから理解した。なるほど、そういうことか。手をついていなければ、倒れていただろう。

ルシルが彼の名を呼んだ。

「ヤエト」

「……その者の、名。一部は、わかりました」

「一部？　誰？」

体力の限界が近い。そこを突破してしまえば、ルシルが名を呼ぼうがどうしようが、ヤエトは現世とおさらばできそうな気がした。それも楽そうでいいな、と頭の片隅で思った。

「ア＝ヴルスが、やったことです」

「わたし、やっていない」
ヤエトは首を左右にふった。そして、後悔した。頭が痛い。猛烈に、痛い。あまりの痛みに、吐き気がするほどだ。
「あなたじゃない。あなたがア＝ヴルスになるより前のことです。……我が名において、と、命じていました」
あの声がよみがえる。迷いのない行為には見えたが、人が抱えきれるのかと思うほどの恐怖が、彼を動かしていたことを、ヤエトは知っている。
彼には理由があった。
「我が名において命じる、風の檻よ、アストラを封じよ、と」
ルシルがいくら風に尋ねても答が得られない理由も、今ならわかる。あのとき塔の内部を満たしていた風は、すべて男を捕えるために利用されてしまった。今も中空に渦を巻いている、あの檻を構成している風なら、すべてを知っているはずだ。
だが、語ることはできないのだろう。
風の檻は、檻の中の男だけではなく、その檻自体を構成する風をも殺してしまう。そして風が奪われることで大気の均衡が崩れ、天候が乱れる——その結果、北方は追い詰められているに違いない。
でなければ、積年の怨みかさなる北嶺と軍事同盟を結ぶ可能性など、たとえデュラルクが発想しても、認める者はいなかっただろう。
上体を起こせ、と自分に命じる。そんなことができるのだろうか？　足も、手も、がくがくと震えている。身体の末端の感覚は失われ、苦しいと感じるのは中心部ばかりだ。頭と胸、腹が痛い。首もひどい。板でも入れたようにこわばってしまっている。
——感じなければよいのに。
「ヤエト、痛い？」
顔を、覗き込まれた。小さな手が、彼の額にふれる。それは、ひんやりとしていた。
「男性の、ア＝ヴルスです……」

ルシルは彼の額にあてた手を引いた。
駄目だ、とヤエトは思った。吐いてしまいそうだ。嫌な感じの唾液が口にあふれるのを、やっとの思いで呑む。これに失敗すると、次は本命が出て来てしまい、それはもう呑み直すのは無理だと、経験上、わかっている。
吐き気と戦っている場合かと自分でも呆れるが、当面、最大の問題はそれだ。吐いてしまえば楽になるだろうが、あれはあれで体力を消耗し過ぎることも、これまたよく知っている。
必死に我慢した甲斐があって、吐き気の大きな波をなんとかやり過ごすことができた……と感じるまでに、どれくらい時間がたったのだろうか。なんとか床についた手をはなし、身体を起こすことにも成功した。ただし、立ち上がるのは無理だった。壁にもたれて浅い呼吸をくり返すのが精々だ。
ルシルが投じた光は、今も明るさをたもっている。灰色の風の檻が、はっきりと見えるほどに。
少女がわずかに首をかしげ、そしてヤエトを見下ろした。乱れたままの髪が、光の翼のようだ。虹の光輝にふちどられた頬から顎にかけての線、光を宿す睫毛。黄昏の色をした眸は明るく、しかし同時に昏く、芳醇でありながら、もの寂しい。
「男のア＝ヴルス、それは、父上」
一瞬、吐き気もなにも吹き飛んだ。
――なんだって？
「ルシルの父上、母上の夫、ずっと前。ルス公と呼ばれた、でもそれは母上だった。ほんとうは、母上が、ルスのあるじ。父上は、ア＝ヴルスほどの力があった、風霊に愛された、過去と未来をたくさん知っていた、たくさん、たくさん」
そこで言葉を切ってから、少女は生真面目につけくわえた。
「でも、順番はわからない」
「なんの……」
「破滅の日、生成の日、それが今より前か、後か」

全智というのは手に負えない。過去を知ることができるヤエトもそうだが、未来を知るターンの預言者も、そして北の大地に属するものすべての命運を握るというこの少女も——自身を失い、知識にふりまわされる恐れからは、逃れることができない。

少女の眼差しが、けわしくなった。風の檻を見据え、くちびるを結ぶ。

「ルシル」

「許さない。あれは、ここにあってはならない。駄目。どうしても。あるべきでない。正しくない」

「少し待って。考えなければ」

あの術をほどこしたのが誰かは、ともかく。

風の檻は、あってはならないのではなく、ここになければならないのかもしれない。

理由はあったのだ。説得のすべを知らぬ若者の心の裡で処理されてしまったから、余人には伝わらなかっただけだ。

彼は風霊に愛された者だったのだ。風霊を一か所に留めることの不自然さを、理解していないはずがない。それでも、やらざるを得なかった。

理由があるのだ。

——恐怖だ。

目の前の存在以上に、彼はなにかを恐れていた。あの不安をもたらしたものこそ、避けねばならない、到来を許してはならないなにか、に違いない。

決然と、ルシルが宣言した。

「ほどく」

「破滅の日とは、なんのことです。鍛えられた剣に、心当たりは？　それから、東の御方とは——」

わからないことだらけだ。わけもわからないまま、協力させられるわけにはいかない。

知っているのだ。今の世で、ヤエトだけが知っている。赤毛のア＝ヴルスが抱えていた恐怖を。

彼はルシルの腕を摑んだ。

「アストラという名は、彼の一部に過ぎないともいっていました」

「よくない。本来の名でもないもの、本来の場所でないところに、結びつける。封じている。よくない、とてもよくない」

「そんなこと、お父上もご存じだったでしょう」

あの若者が長じて、いずれルシルの父となり、あの庭でライモンドに殺されるのか。

いや、考えるべきは、そこではない。そんな家族の悲劇に巻き込まれている暇はないのだ。

「よくなくても、東の御方から……石を手に入れねばならぬと、そう思っておいでだったのです」

「石」

ルシルはヤエトに視線を戻した。

「石です。剣に使うと」

「いつ」

「……いつ？」

質問の意味がわからず、思わず問い返した。

少女は厳しい表情を崩さないままだが、その背後にちらりと不安が覗いていた。

「風霊に愛される、時間の流れから解放される、愚かになる……父上は、愚鈍公と呼ばれた。わたしもそう、ものを考える、うまくない。父上と同じ」

「いや、そんな」

「理屈がわからなくなる、こうだったから、こうなった、こうなる、考えるのが難しい。結果がある、原因もある、みんな見える、後先の別がない。わかる？　わからない。父上は信じた、破滅がこれから来ると考えた、それでやった。でも、正しいかどうか、誰にもわからない」

ヤエトは答える言葉を探した。

たしかに、時間の流れにとらわれないというのは、不安定なことなのかもしれない。因果がわからなくなり、認識が混乱する。条件が不確定だから、判断も信じられない。

それでも、ア＝ヴルスはそれぞれ、自分の信じることをなさねばならない。そしてルシルは、風の檻からあの南方人を解放するのが、正しいことだと信

じている。
　たしかに、彼が口にしていたことが事実なら――この術のせいで、天候に異変が生じて天災を招くならば、これはなんとかせねばならない。現実に、北の民は追い詰められたのだ。第三皇子にそそのかされたとはいえ、北嶺を襲わねばならないほどに。人質を送り、今度は北嶺との同盟を画策せねばならなくなったのは、襲撃に失敗した結果だが、それにしても動きが積極的過ぎるのは、そのせいだろう。
　安閑とはしていられない事情があるのだ。
　――しかたがないな。
　ルシルの言葉は、間違ってはいない。風の檻は、ここにあってはならない、正すべきものだ。
「わかりました。風の檻を壊し、彼を自由に」
　ルシルはくちびるを引き結んでいる。
「……できませんか？」
　さっきまでは、すぐにもとりかかりそうな勢いだったのに、今度は躊躇している。
「知ってる名前、半分なのに？」
「アストラという名のみで、封じたのです。それがわかっていれば……できませんか？」
「父上の名においてかけられた術、わたしの名でとく、とても――とても、強い？　返る？」
　言葉を探しているルシルに、教えてやる。
「たぶん、反動ですね」
「そう、反動？　名前わかれば、残りも知っていれば、正しくとける、かるい、やさしい、きれい」
　どうやら、残りの名がわかれば、それを補助的に使うことで、真正面から父親の術に対峙しなくて済む、ということらしい。
「調べれば、残りもわかるでしょう」
　答えながら、しかし、容易なことではないかもしれない、と思った。相手は名前の魔法に親しんでいる南方人だ。
　隠した、と彼は宣言した。それも遠くに、だ。
　隠されたものを、どうやって探す？　過去視の力

で？　だが、とヤエトは自分のふるえる手を見下ろして考えた――だが、ヤエトの力は今いるこの場に縛られる。その限界を突破するためには、鏡の呪力と、彼の幻視に翼を与える竜種の存在が必須だ。

「わかる？」

ルシルに問われ、ヤエトは躊躇した。

彼の迷いを知ってか知らずか、ルシルはさらに言葉をつづけた。

「自由にする、彼は怒る？　恨む？　滅ぼす？　破滅の日、始まる？」

「まさか」

「あなたはわかる？」

その問いを聞いたとき、激しい耳鳴りが生じた。呻いて、彼は両手で耳をおさえた。だが、そんな動作ではなんの効果もない。

耳鳴りは、過去から来ていた。

――ターンの神より、お預かり言です。

預言者の声が聞こえる。

過去神オルムストが信奉者から完全に顔をそむけているのと対照的に、未来神ターンは預言者を持ち、みずから言葉をくだす。預言者とはまさに、神の言葉を預かる存在。彼女が語る未来とは、ただその力で見聞きしたというだけのものではない。

神が、告げるべしとして言葉を預けたという、神意の体現者としてこそ、預言者はそこにいる。そして預かった言葉を口にする。

――あなたが北方へ行かれる前に、お伝えすることになっています。

未来を、現実にする。

――あなたへの、お言葉です。

忘れていた記憶が、凄まじい圧力でよみがえった。その場の空気、耳にするともなく聞いていた音――五感のすべてで得たものが、ヤエトに襲いかかったのだ。必要な部分に焦点をあわせるどころか雪崩をうって押し寄せる大量の情報に、彼は喘ぐことしかできなかった。自分自身すら見失いそうだ。

これだったのか、と思った。

恩寵の力を賜ったのとは相反する神から、じかに言葉を浴びせられたのだ。竜気にあてられるのとは比較にならないほどの衝撃を受け、だから彼は意識を失ったのだ。

預言者の口が動く。それを彼は見ている、皮膚のかすかな皺のひとつずつまで、はっきりと見える。

――あなたは知っている。あなたは彼を視たことがある。くり返し、彼の姿を視、声を聞いている。秘められた彼の名も、その本質も知っている。あなたは明かす、過去に埋められたもの、語られぬ物語に隠された名、失われた歌に残る真実を。

預言者の眼は、黒い。月のない夜のように、灯火のない洞窟のように、邪竜の骸が横たわる深淵のように、穢れた血を流しつづける心臓のように。そして、その血のように。

今この瞬間に、ヤエトが神の言葉を思いだすことまで、ターンの神の采配なのだろうか。

――すべては、あるべきように。

記憶の底に沈んでいた預言者の貌が、ゆらりと揺れた。彼女の額が星のようにかがやいて、そこから力を感じた。あたかも、時を越え、神力を与えられたかのように。

揺れる装身具が描く光の軌跡が、目の前に見えたような気がした。吸い込まれてしまいそうだ。ヤエトは眼を閉じ、息を吐いた。

同じように感じているのだろうか、あの預言者も。惹かれながら、反発する。相似でいて対称、ふれあえば火花が散りそうなほどの緊張。彼女の眼差し、抑制の奥に覗き見た、かすかな揺らぎを思いだす。

――わたしには、時間がないのです。

誰だって、とヤエトは思った――皆、そうだ。時間がたりるなんてことはない。人生は短く、不確定要素が多過ぎる。

それにしても助かった。今ので一瞬、神力への通路が開いたらしい。限界まで削られていた体力が、

かなり復活している。いや、体力ではなく気力なのかもしれないが。

身体の芯に、光が入ったかのようだ。なんの説明にもならない表現だが、そうとしかいえない。

呼吸が落ち着くのを待って、彼は眼を上げた。

少女の表情は静謐さをとり戻していた。許さないと声をあげたときの、あの激情はどこにも見えない。見えないだけで、なくなったわけではないのだ、とヤエトは思う。感情をあらわすのがうまくないだけだ。なにも感じないのとは、違う。巨大な力の器ではあるが、まだ子どもなのだ。

ヤエトは不意に、抑えがたい苛立ちを感じた。

まわりの大人たちは、いったいなにをしているのか。こんな子どもひとりに、どれだけのものを背負わせれば気が済むのか。なぜ、支えてやらない。力そのものを分かつことはできなくとも、見守ることはできるはずだ。手を添え、心を励まし、力づけてやれるのに。ライモンドが見捨てただけで、全員がそれに追随したというのか。

とはいえ、ヤエトにできることは少ない。この場に留まれる時間は有限だし、彼は帝国の貴族であり、北嶺国の相でもある。今はそのつとめをはなれ、幻視で語られた不穏な事態への対応を考えて、この場にいるのではあるが、それでも公的な立場がある以上、へたな介入はできない。

暫しの後、彼は口を開いた。

「あの者の名は、わたしが明かします」

それが、自分が今、この場にいる意味だ。帝国人としてより、過去視の恩寵を賜った者として。人智を超え、時を遡って真実を明かすために。

「明かす、すぐ？」

返す言葉に詰まった。

ターンの預言に虚妄はない。隠された名を、ヤエトはすでに聞いたことがあるはずだ。

――だが、いつ？

あの男の姿をはじめに視たのは、第三皇子の邸で

のことだ。親殺しの名で呼ばれる南方王国の女王、ジャヤヴァーラの時代の幻影であろうと思われた。男とともにいたのは少年で、互いに名を呼びあうことはなかった。

雪中、海辺での場面も視た。あれは、博沙国でヤエトが昏倒したときのことだったろうか。たしか、そうだ。南方人と言葉をかわしていたのは、彼よりもさらに謎めいた存在だった。シルなんとかいう名だったはずだ。……だが、それすらさだかではない。南方人に対しては、うたびとよ、と青年は呼びかけていたはずだ。

あれでもない。これでもない。ほかに、なにか視たことがあるか？

――力が暴走したときだろうな。

ここと思い定めて得た幻視の風景に、あの男があらわれた記憶はない。

ふと、意図せず恩寵の力がはたらくときこそ、祈りに応えぬ神といわれるオルムストが、その信奉者に力を貸しているのではないか、と思った。ターンが未来を告げるように、明かされるべき過去を掘り起こすことで、神は人に恵みをたれようとしているのではないか。

ヤエトは記憶を探った。

北嶺での暴走は、関係ないだろう。あそこでは、南方人の姿は視ていない。

記憶が擦り切れるかと思うほど反復した予言詩の幻視は、除いてかまわないだろう。あのとき、かれらは互いの名を呼ばなかった。呪師に名が漏れることを警戒していたのかもしれない。

――いつだ？

だいたい、あの南方人は何者なのだ。ジャヤヴァーラの時代にはもう、人ならざるものとして、世界を救う方策を探していた。

――それから先代まで？

術をかけたのがルシルの父なら、今から十年、二十年ほど前のできごとであろう。いったい何百年、

地上をさすらっているというのか。
「ヤエト」
少女に名を呼ばれ、彼は顔を上げた。
「わたしの記憶をお読みになれますか？」
「なに？」
「必要な情報を、得られますか。わたしの名から、すべてを」
眉間に皺が寄った。
「北のものじゃないから、できない。ヤエトは客人。下僕にすれば、できる」
「下僕……」
「下僕になる？」
そんなことを訊かれても困る。苦笑して、ヤエトは答えた。
「わたしにはすでに、お仕えせねばならないかたがいらっしゃいますので」
「うん」
「わたしは、彼の名を知っているはずなのです。未来を告げる預言者が、そのことを教えてくれていました。ですから、記憶を探ればみつかるだろうと思うのですが、いったいいつ、どこでそれを聞いたものやら……未だ見当もつきません」
ターンの神も、迂遠なことをする。あのとき、アストラが隠したという残りの名も教えてくれればよかったのに。
そもそも、名を隠すとはどのような行為を示すのか。ただ黙っているという話なのだろうか？
「教えてください、ルシル。アストラは、自分の一部、名前そのものは隠して来た、と語っていました。それは、どういうことなのでしょう？」
眉間の皺が、深まった。
「アストラについて、風霊は教える。半人、半妖。なかばは風霊のようなもの。風のたまりに行く、時を超える」
「元は人だった？」
「そう、アストラは人だったときの名」

「なるほど。その後、名が変わったのですね。風霊は名を教えてはくれないのですか？」
「互いの名は教えない。わたしは、名を明かす力。明かせない名を従えるのは、よくない。だから、教えない」
なるほど、とヤエトは思った。全智にも、限界が設定されているわけだ。北方に属するものなら、どんな名でもわかるのだろうが、そうでなければ手に入れられない。
それにしても融通がきかない、とは思う。
「訊いても、答は得られないのですか」
ルシルは彼の問いを無視した。
「あらたな名前、アストラの本性。風に近い、風ではない。物に宿る霊。それが北にあれば、わかる。でも、わからない。南にある」
――南だ。
ヤエトは確信した。絶対に、都にいた頃だ。
しかし、いったいそこでなにを視た？
第三皇子の邸での、不穏な幻視。あれらのどこかに、なにか隠されていただろうか？
当時も今も、自分は名前の魔法についての知識が貧弱過ぎると痛感する。昨冬、皇女の名を呼び戻したときも――。
ヤエトははっとした。
――名前の魔法だ。
そうだ。皇女が呪師に狙われていると知り、名前の魔法について知らねばと考えたことがあった。強く希って、幻視の力が暴走するのを待った。
あのときだ。
第三皇子の邸を逃げ出した直後。ジェイサルドの手引きで皇宮に忍び入り。広い敷地のどことも知れぬ中庭で、皇妹が来るのを待っていたあいだ。自分にできることがないかと探し、念じたあのときだ。
幻視の中に、あの南方人がいた。
中庭に、なにかを残していた。楽器だ。自分の名が歪められたら、正しく奏でてくれと声をかけてい



た。その幻視を得たから、ヤエトは皇女のまことの名を、秘められた名を呼ぼうと決めたのだ。
　正解に辿り着いた――問題は、その楽器の名を思いだせないことだ。
「楽器です」
「楽器？」
「三日月の形をした胴に、弦を張った楽器でした」
　南方の楽器であれば、ルシルはその名を知らないだろう。正解を前にしながら、手が届かない。
　しかし、少女はうなずいた。
「わかった」
「……わかったのですか？」
「失われた楽器。詩人の声に力があった時代、歌が魔法だった頃。弦月の光と風で奏でる。それは北のもの。そう、北の楽器があの男を南から連れて来た。北へ来たからこそ彼は滅び、そして生まれた」
　そう告げる声の調子自体、まるでうたうようだった。言葉もつねになく流暢に流れ、別のたましいが幼い声を借りてでもいるかに思われた。
　少女は立ち上がった。
「我が名において命ずる」
　確信をこめた言葉と声に、大気がふるえた。中空の塔を、魔法の力が巡る。圧倒されて、ヤエトは身動きもできない。
　風の檻にまっすぐ向かって立つと、くり返し、ルシルは宣言した。
「我が名において命ずる。アストラよ、そなたをこの風の檻より解放せん」
　なにかがひび割れるような、あるいは軋むような音がした。轟、と風が鳴る。竜蛇のように風が巻く。まるで断末魔の苦悶だ。
　ルシルが浮かべていた光が、風に押されて壁に貼りついた。反対に、ルシルの長い髪は前になびいている。あの風の渦に引き込まれてしまいそうに。
　だが、少女は頑としてその場に立っていた。さかまく風を身にまとい、ばたばたと衣服の裾を鳴らし

て。年齢に見合わない厳然たる表情で、宣告した。
「アストラ、あるいは古き竪琴ハルウィオン」

3

風がおさまったとき、そこにはあの男がいた。
何回となく幻視の中で姿を見、声を聞いた、あの南方人だ。黒い髪を布で巻き上げ、あまり上等そうではない毛織りの上着を身に纏っている。目利きではないから自信はないが、たくさんつけている装身具もまた、高価なものには見えなかった。身なりは、都のどこにでもいる、昔ながらの南方人そのものだ。顔だちは、はっきりしている。黒い双眸は大きく、秀でた額からつづく鼻筋は高い。
今まであまり彼の容貌に注目したことがなかったのは、やはりその声のせいだろう。
「さて、何年たったのか」
第一声が、それだった。なんということのない、むしろ、もう少し気のきいたことはいえないのかと思うくらいの台詞だが、とにかく声がいい。
彼はルシルを見、そしてヤエトを見た。弓なりに、眉が上がる。
「あなたがたが、わたしを救ってくれたのかな？」
男の問いに答えたのは、ルシルだった。
「父上が、アストラを封じた」
そこからか！　とヤエトはびっくりしたが、相手は気さくに問い返しただけだった。
「彼は元気かな？」
「もういない」
「そうか。それは残念だね。人はすぐ逝ってしまう。時の彼方へ」
思わず、ヤエトは口を挟んだ。
「あなたが行くのでしょう、時の向こうへ」
男は彼を見て、微笑んだ。華やかでありながら、もの寂しげな表情だ。
「君とは会ったことがある」

「失礼ながら、お会いするのははじめてかと」
　一方的に目撃したことならあるが、相手がヤエトを見ているはずがない。
「それなら、君にとってはまだ、これから先のことなのだろう」
「……そうなのですか？」
　思わず尋ねてしまったが、無意味だと思った。どうせ曖昧な答しか得られないと、言葉が口からこぼれた瞬間にもうわかっている。
　案の定、相手は微笑を消さないまま答えた。
「わたしには、時間の前後がもうよくわからない。ただ、自分が知っているか否か、それだけだよ」
　もっと、適確な問いをしなければならない。
「お尋ねします。あなたは、ジャヤヴァーラを斃し、世界の罅を塞ぐための剣を手に入れたことがある。そうですね？」
　アストラは眼をしばたたいた。大きな眼だ、と思う。睫毛も長い。しかもこの声だ、女には困らないだろう。しかし半人半妖でもやはり、女にもてて嬉しいものなのだろうか、とここまで考えて、おそろしくどうでもいいな、と気がついた。
　相手の方は、もう少しどうでもよくないことを考えていたらしい。声に、少し緊張感が生じていた。
「今はいつだ？」
「南方三代の王朝が滅びてから、数百年が経過していると思われます。南方には史書がありませんので、詳しくは不明ですが」
「君は、何者だ？」
「拝顔の栄に浴したことがあるそうですが、その折り、自己紹介を怠ったのですか、わたしは」
「そうかもしれない。わたしもあまり気にしていなかった。いずれまた会うのだろうと思っていたし。実際会えたしね」
「真帝国北嶺国相にして《黒狼公》、ヤエトと申します」
　名告ってから、そんなことをしてよかったのだろ

うか、と少し思った。ヤエトには、隠してあるもう半分の名前だの、本性だのは存在しない。名を呼ばれ、支配されたらどうなるのか？

ついさっき、ルシルに呼ばれるまま階段を上ったように、どこへでも呼びつけられ、なんでもやらされてしまうのだろうか。

――無理だな。

とても体力がもちそうにない。つまり、実害が出るとしても、短期間で済むと考えてよさそうだ。

うなずくアストラの表情からは、彼の名告りをどう受け止めているかはわからなかった。

「真帝国ね」

「建国二十年に満たぬ、新しい国です。その源流を遡れば、沙漠の西の旧帝国に至りますが」

「沙漠の西？」

「真帝国とは、沙漠を渡った軍旅が興した国です」

――神与の力がよみがえり、沙漠を軍旅が渡ります。

この男がうたったのだ。この声で。

そして、焼きつけた。ヤエトの記憶に。

――血と悲鳴、死と破壊、絶望の朝。そのときわたしはどこにもいない……。

だが、うたわれたのと同じ言葉を突き付けても、アストラの表情は変わらなかった。

「なるほど。今はそういう時代か」

「あなたはご存じなのですか、この先になにが訪れるか」

「さあ？　理解してくれとはいわないが、想像くらいはしてくれてもいいだろう？　わたしの中では、時間はまっすぐに流れていないんだ。どういうことか、わかるかな？　いや、無理な要求だろうね。自分でも、なにがなにやらわからないほどだから」

「あなたは、ジャヤヴァーラを斃す話をなさっていました。剣を示し、未来をうたっておいでだった。時の流れを把握していなければ、そのように示唆し、みちびくことは不可能では？」

アストラは少しおもしろそうな顔をした。
「たしかに、ジャヤヴァーラの時代はわたしにとって近い。今からは遠く隔たっていても、わたしの中ではつい昨日か一昨日のことのように思えるからね。だけど、数百年も前の、史書にも残っていない話を、なんで君が知っているの？」
——なんなんだ、この男は。
やがて英雄になるであろう少年を力付けていたときとも、雪中で白い青年と喋っていたときとも、まったく違う。たよりになりそうにも見えなければ、世界の破滅を案じているようでもない。
——ほんとうに、なにもわかっていないのか？
混乱した記憶を抱えた、孤独な時の旅人に過ぎないのだろうか。
「あなたにとっては、数百年も一睡の夢に同じ……ならば、ご記憶でしょう。かの女王の時代に訪れた、世界の危機も。そして、その解決法も」
はじめて、アストラの表情が真面目なものになった。わずかに眼をほそめ、口元に力を入れただけで、どこか彫像めいたよそよそしさを纏ってしまう。
彼にしては硬い声で、アストラは告げた。
「覚えているよ。憐れみと悔恨の時代だ」
「悔恨、……ですか？」
「ああならずに済む方法はなかったのか、と誰もが思ったからさ。それに、誰にも望まれぬ女王は、憐れまれるべきだろう。恐怖と憎悪の中に、彼女の名は埋もれていった。救われぬままだ——あの女王に憐憫（れんびん）など不要と思うかい？」
「いいえ。それを不要と断じられるほどの強さは、わたしにはないでしょうから」
アストラの表情が、やわらいだ。
「弱さを知り、認めることができるのは、よいことだよね。ジャヤヴァーラにも、誰かがそれを教えてやればよかったんだが」
——彼の心は、あの時代にあるのかもしれない。
そう感じざるを得ないが、それがすべてではない

はずだ。

――ごまかされるな。

どんなに過去に親しんでいるとしても、今に至る時の流れに、無知であるはずはない。たとえ前後の順序が混乱していたとしても、彼は知っているはずだ、さまざまのことを。

実際、幻視の中で、彼は先代のア＝ヴルスと言葉をかわしていたではないか。

「あの剣とは、どの剣です」

「なんの話かな」

「あなたを封じたア＝ヴルスが鍛えた剣です」

剣はもう鍛えた、とルシルの父は明言したはずだ。その剣に石が必要で、ふさわしい石を持っているのは東の御方、だと。

わからないなりに、はったりをかます程度の情報はある。ヤエトは言葉をつづけた。

「東の御方がお持ちの石を、使うべき剣です」

アストラは笑った。ほそめた眼は、しかし、ヤエトをしっかりと観察している。

「分を超えたことには、かかわらない方が賢明だろうね、《黒狼公》」

「賢明という言葉とは、縁遠くなっております。よく、復縁すべきだとは諭されますし、自分でもそうは思うのですが、どうにも逃げられてしまって」

「それなら、なおさらだ」

「ですが、これがわたしのつとめです」

ヤエトはアストラの視線を受け止めた。相変わらず床にへたりこんだままだから、相手にはどう見えていることやら。威厳がある姿ではなさそうだが、それでもこれが精一杯だ。

事態が彼の対応できる範囲を超えてしまうのは、指摘されるまでもない。そんなことは、わかっている。それでも、やらねばならないことならば、やるしかないではないか。

どうせ、逃げても追って来るのだろうし。

視線の圧力が消えた。アストラは、ルシルの方を

向いている。
「君の望みはなんだい、ア＝ヴルス」
「あるべきでないものを、なくすこと。それはもう、やった。あなたを解放した」
「そうか」
「ヤエトはア＝ヴルスの客人。ルシルの友人。助けてくれた。わたしは、感謝する。言葉だけではない、感謝。だから、ヤエトの望みはわたしの望み」
アストラはまた、その黒い眉を上げていた。大きな眼をさらに大きく見開いて少女を見、そしてヤエトに視線を戻した。どう思う？　と問われているようだ。
だが、実際に口から出たのは違う言葉だった。
「剣のことが知りたいんだったね」
「はい。魔界の蓋が今また開きかけています。そういう時代なのです」
「そうか。では、万全ではないんだな」
「ジャヤヴァーラの時代に、あなたはそう仰せでした。これから女王を斃し、魔物が地上の生命を滅ぼし尽くさないようにはするけれども、いつまでも効果がつづくわけではない、と。そこから先は、遠い未来の人々がなすべきことなのだ、と。そして今が、その時代です」
アストラは笑った。屈託のない表情と声で、しかし聞いているヤエトにはあまり嬉しくないことを、笑いながら教えてくれた。
「そうか。それはすごい。でも、わたしは知らないな。たぶん、これから口走るんだろう」
「口走る……」
「教えてあげられることは、いくつかあると思う。でも、すべては知らない。わたしもまだ調べている最中だからね」
「では、雪中の――」
海辺での会話も、アストラにとってはこれから先のできごとなのだろうか。ヤエトが幻視したのだから、人の感覚では過去のことなのだろうが。

尋ねれば、わかるだろう。
だが、ヤエトは躊躇(ためらい)を覚えた。
アストラには未だ巡り来ていない時間なのだとしたら、それを教えてしまってもよいのだろうか？ヤエトは神ではないし、その言葉を預かる者でもない。本人に告げるべきかを知るすべが、ないのだ。それこそ分を超えた問題だ。
「雪中？」
「いえ、ご存じのことを教えていただけますか」
「世界の鰯についてだね。あれは昔からあるもので、それなりに安定はしていた。放っておけば、いずれ世界の垣根は崩壊しただろうが、それでも時間はずっとかかったはずだ。均衡を破ったのは、魔界の王だ。つまり、魔王と呼ばれる存在。わたしの名は、彼の名の一部をとってつけられたんだ。親もなにを考えていたんだか、わけがわからないよね？」
気さくに問いかけられたが、肯定的な相槌をうってもよい場面か、よくわからない。そんなことはないでしょうというべきなのだろうか？
結局、名づけには言及せずに言葉を返した。
「魔王とは、闇の御子とか黒の御子とか呼ばれているあの神のことですか？」
「ああ、その呼び名はまだ生きているのか。そう、それが彼。堕天した女神が産んだ最後の息子だ。母親を追い出し、自分の存在を無視する天界を、ひどく恨んでいるね。それに、たぶん焦がれてもいる。手に入らないものが好きなんだ、彼は」
「わがままなのですね」
「だだっ子なんだよ。誰も甘やかしてくれないから、自分で自分を甘やかした。悪いことに、そうするだけの力があったわけだけれどね」
とても神のことを語っているとは思えない口調と内容だったが、なんとなく信じてしまいそうだ。これもアストラの声のせいだろうか。
神をも籠絡するという声だ、人に過ぎないヤエトなど、ひとたまりもなくても、不思議はない。

「ではその魔王が、世界の罅の状態を悪化させたのですか？」
「そういうことになるだろうね」
あっさり認め過ぎだと思う。
――かるい。
ひとことでいって、この男の印象はそれに尽きた。ものすごく重大な話をしているのに、なぜか、軽薄な感じがする。
「その後、ジャヤヴァーラの御代になって、あなたの手助けで一回は封じられたそうなのですが」
アストラは答えず、自分の手をじっと見ていた。たくさんの指輪で飾られているのは、彼を風の檻から解放する前に見た通りだ。骨張った長い指を、彼はなんとなく所在なげに動かした。空いた手を握ったり開いたりしてから、うん、とうなずく。
「なんだか、身体が重く感じるようだ」
ひら、と布が翻り、アストラはルシルのかたわらに降り立った。
そうしてはじめて、それまで彼が中空に浮かんでいたのだと思いだした。やはり、これは人ではないのだろうと実感する。
ならば、なんなのかは、……わからない。
正体不明の男はルシルの前に跪拝した。
「今さらですが。北の大地のあるじよ、一時、わたしの名をお預かりくださったことに感謝します」
巻き上げた布からこぼれた黒髪が、男の頬に濃い影を落とした。その声はこよなく甘く、深い。
応じたルシルの声は、しかし男の声に惑わされている風ではなかった。少しも変わらぬ調子で、淡々と尋ねた。
「返してほしい？」
「自由こそ、我が本性と心得ております。土地のあるじに繋がれては、わたしは水面に結ばれたうたかた同然、あとかたもなく消えてしまうでしょう」
「安心する。ほどくために、呼んだだけ」
ルシルはアストラの額にふれた。少し前、ヤエト

に手をのべたときと同じように、唐突で遠慮のない動作だ。アストラも、それにおどろいたらしい。顔を上げた彼に、ルシルはうなずいて告げた。
「もうほどけた。あなたは自由」
「……これはつれない。ご恩返しすら望まれぬと」
「望んでも、いいの？」
アストラは微笑んだ。
「わたしの力の及びます範囲でしたら」
「鰏を塞ぐ方法」
笑顔が消える。この摑みどころのない男が、ルシルにいいように踊らされているのは、なかなか愉快ではあった。
「無論、知っている限りのことは、お教えします」
「あの剣とは、なんですか」
ヤエトが横から尋ねると、アストラは拗ねたように肩をすくめた。
「あなたには教えない」
「教えて」
即座にルシルが応じたから、ヤエトは笑いたくなってしまった。なんとか噛み殺し、複雑な表情をしているアストラに尋ねた。
「なぜ、教えることを厭われるのです。世界の鰏を塞ぎたいとは、お思いではないのですか？」
暫しの沈黙の後、アストラは答えた。
「たぶんね。思っていたんだろう。だから頑張ったこともあったんだろうね――その時期に、君に会ったんだろうね」
つぶやきながらヤエトに向けた眼差しは、暗かった。かつて幻視したどの表情よりも暗く、冷えきっていた。
「お会いしたわけではなく、お見かけしたのです」
「いつ？」
ごまかしを許さない語調だ。ヤエトは肚を据え、答えた。
「わたしは過去神オルムストの恩寵の力を賜りし者なのです」

「ああ……過去視の力があるわけか。なるほど。なら、好きなだけ過去を視ればいい。答はすべてあるだろう」
「いつ、どこを視るべきかもわかりませんし、たとえわかったとしても、何百年と時を遡れば、命にかかわります。幻視はした、しかし伝えるすべもなく死んだ……では、意味がありません」
「実際に視ているんだろう、何回か。それなら、次も生き延びるさ。そういう運命ならね」
アストラの表情は変わらなかった。ひどく冷たい。
思わず、問うた。
「人として生きた時代を、もはや、お忘れになったのですか」
――人の世のことは、人がなせばよい。
かつて得た幻視の光景で、突き放すように告げた白い青年の言葉に、この男は反発していたはずだ。
人として生きたことがあるのだから、と。
「変わらず熱いといわれた魂の熱も、もう冷めてしまったのですか」
――おまえの魂は、変わらず熱いな。
あの言葉を思いだして、そのままつぶやいた。すると、男の表情が動いた。
「誰がいった」
「あなたのご想像の通りかと」
黒い眸がわずかに揺れた。うたうように、彼は答えた。
「……剣とは、犠牲の神を宿すためのものだ」
ヤエトは眼をしばたたいた。聞いたことのない神だ。犠牲とは、神々に願いを聞き届けてもらうために人が支払うべき対価だとヤエトは考えている。しかも、その大半は人が勝手に思い込んでやっているだけで、神はそんなものは気にしていないだろう、というのが彼の認識だ。
犠牲をつかさどる神が存在するのなら、少しばかり考えをあらためねばならないかもしれない。
「どこにおられるのです」

アストラがなにか答えようとして、はっとしたように動きをとめた。

と同時に、ヤエトの胸の中にあった光が、一気に彼の身体を駆け巡り、呑み込み、覆い尽くし――そして、ほとばしり出た。

『アストラ』

それは、ヤエトの口を借りていた。

否応なしに、身体が動いた。ルシルに呼ばれていたときの感覚とはまた違う力だ。圧力、とでも表現するしかないそれは彼を圧迫したが、意図してのことではないのは、なんとなく理解できた。

それはヤエトのことなど、なんとも思っていない。ただ、力なのだ。人には強過ぎる、圧倒的な力。

アストラはわずかに眉を上げ、そして、あの声でいいはなった。

「この者はオルムストの庇護下にあると自称していたはずですが、なぜあなたが？」

『なぜ？　わたしが責任を持てるのは、理由ではない。結果に過ぎぬ』

空気が震動している。凄まじいまでの力は、あたりの景色まで歪めて見せた。影響されていないように見えるのは、アストラだけだ。ルシルの影も、どこか遠い。

「これが結果で、目的なのですか」

『必然だ、人でもあり妖魔でもある者よ。南に生まれ育ちながら北の血を持ち、異界に出入りする。そなたを知っているぞ、アストラ』

「それは光栄なことですね。はじめてお会いするのに、わたしをご存じとは」

神は笑った。

『未来が、そなたを教える』

間違いない。これは、オルムストと対になる神、もっとも近しく、同時に相反する性質をそなえた、未来知の神だ。

――ターンが、なぜ？

理由を尋ねても無駄なのだろうと思っていたら、

アストラが勝手に謎解きをしてくれた。
「ああ、ア＝ヴルスの土地に侵入するためですか。この者に、徴をつけてあったのですね。必要な時に、すぐ手繰り寄せられるように。その時がいつかを知るのは、あなたにはたやすいことだ」
『今より先のことは、すべて我が知識の内だ。そのわたしが教えよう。時が迫っている。そなたの果たす役割、かるくはないぞ』
「曖昧な予知の言葉で人を混乱させるのは、おやめください」
アストラの声は落ち着いていたが、さっきまでとは違うよそよそしさがあった。しかし、神は彼の言葉など聞かぬ風に答えた。
『曖昧な言葉にせぬために、ここにいる。そなたらに知らしめるためだ』
「なにをです」
神は告げた。
『自分にできることならば、進んで引き受けた』
アストラは口を引き結んだ。
神は言葉をつづけた。
『だが、わたしは天界の神ではない』
それをヤエトは、どこか他人事のように聞いていた。しかたないだろう、と彼は思う。喋っているのは自分の口だが、自分で動かしているわけではない。自由を取り戻したくとも、どうにもならない。
ひどい詐欺に遭遇したような気分だ。
ターンの神は、預言者に言葉を託して人々を導く。大きなお世話だとヤエトは思っていたし、今、その感覚は強くなるばかりである。
未来は決まっているなら、それはそれでしかたがない。ならばおとなしく見守っていればよいのに、どうしてこうでしゃばるのか。
黙れハゲ、知るかボケ、だ。もちろんターンの神がハゲかどうかはわからないが、たぶんそうだと思うことにした。こんなに先々のことばかり案じて口出しをしていたら、きっと頭髪は減るに違いない。

――なにを考えているんだ。

そんな場合ではなかろうと自分を叱咤したいところだが、ではどんな場合なのか、なにをすべきなのかと問い直すと、答は出ない。

なにもできないのだ。

それどころか、気を抜くと自分が誰なのかわからなくなってしまいそうだ。

自分はターンの一部なのか、それともターンが自分の一部なのか。そもそもターンとはなにか、自分は誰なのか、……ぐるぐるまわって、なにがなにやら判断がつかない。

アストラが、口を開いた。

「それは存じております」

『かつてなにがあったか、わたしは知らぬ。すべては失われてしまった。だが、そなたの未来はまだ、わたしの眼に映る』

「時の流れの果てまでを支配なさるあなたならば、当然ご存じでしょう」

『そなたは選ばねばならぬ。苦しみ、悩みぬいた果ての選択となるだろう』

少し時間を置いてから、アストラは答えた。

「……わたしのなかばまでは、人に過ぎませぬゆえに。それも、無理からぬことでしょう。神ならぬ身では、ひと息に正解を知ることも、思い切りをつけることも、ままならぬものです」

『だが、そなたは選ぶ』

「教えられずとも、来るべき未来であれば、わたしはそのようになすでしょう」

『時を、わたしは失いつづける』

神の声は音である以前に光であり、力だった。それは神を宿しているヤエトを内部からうちのめし、しかし同時に強めもした。

『これがどれほどの痛みであるか、そなたらにはわかるまい。語る端から、すべて失われる。時の流れのどこにあろうと、それより前は、つねに失われる……過去は、わたしの預かり知らぬところだ』

ターンの声が低くなり、光が弱まった。
ヤエトの意識がすうっと身体に戻り、今まで自分はどうしていたのかと疑いたくなったが、そのときまた、口が勝手に動いた。
『次に会うとき、わたしはこのことも忘れているだろう。だが、また会おう、アストラ』
そして今度こそほんとうに、神の気配は消えた。
ヤエトは自分の身体ががくがくとふるえているのに気がついた。止めようがない。
全身を血が駆け巡っているのがわかる。燃えるようだ、と思った。そのまま身体が燃え上がってしまいそうなほど、熱い。
アストラは立ち上がった。その輪郭は、どこか曖昧になっているように、ヤエトには感じられた。
見た目は揺らぎ、薄れていくのに、声はますます存在感を増していく。
「神々ときたら、勝手なものだ」
大いに同意したいところだが、まだうまく口が動かなかった。代わりにというわけではないだろうが、それまで無言を通していたルシルが、声をあげた。
「神とは、なに？」
ずいぶん難しい問いだ。
だが、アストラはさらりと答えた。
「祈ればわかる」
「祈り？」
「祈るがいい、神々に。救いを乞うがいい。神々の遠さを思い知り、天に絶望するがいい。そうしてはじめて、わかるだろう。神は少しも地上を顧みてなどいないことが」
絶望しているのは彼なのではないか、とヤエトは思った。そう感じさせるような声だったのだ。
「オルムストは、祈りに応えぬ神ですが――」
思いのほかすらすらと、言葉が出た。ふたりから同時に視線を向けられて、ヤエトは少しためらった。
だが結局、彼は思った通りを口にした。
「――それでも、つねにご覧になっておいでです。

世界を、その流れを、我らが積み重ねた時を、経験を、変化を。すべてを。わたしがなにをなしたかは、わたし自身と、神がご存じです」

「だから？」

「神がご存じだと、すべてをみつめておいでだと心得ているだけで、十分だと思います。むしろ、それ以上の手出しはご無用、というべきではないでしょうか。人の世をつくるのが、神であってはならない。そうではありませんか？　人の世は、人がつくるべきものです」

　アストラは笑ったのだと思う。彼の姿はもう闇に溶けかけていて、うまく見えない。ただその気配で、笑ったのだろうと感じただけだった。

「たのもしいな。いよいよ、人の世がはじまるのかもしれない。神々を相手どることになっても、屈せずにいられるならば」

「そのときは、あなたも一緒に戦ってくださるのですか。我らの側で」

　ヤエトの問いに、アストラは答えなかった。ただ、ため息のように歌声が響いた。

　されど約束はうたわれぬまま
　神の御名はくちびるをかすめ
　されど祈りは唱えられぬまま
　神の御名は風のかなたに消ゆ

　声は塔の内部を満たした。まるで、彼の声を響かせるために設計されてでもいたかのようだ。

　せつない声だった。

　胸が締め付けられるようでありながら、同時に、心が身体をはなれ、自由な鳥のように飛び立っていくようでもある。

　アストラはひとりなのに、彼の声はいつまでも塔の中に留まり、くり返し聞こえた。それは追いかけあい、輪唱のように和してまた遠ざかり、いつまでもつづくかに思われた。

それでもやがて歌が消えた頃、アストラの声がふたたび聞こえた。

「犠牲という名の神がいるわけではないよ。罅を封じるために、犠牲になってくれようという神を、そう呼んだだけだ。神力を流す剣を鍛え、その柄の根元には、犠牲の神を封じた石を嵌め込む。それを罅まで持って行って、刺す。とても簡単なことだ、言葉にするだけならば」

「……あなたは、傷ついているのですか？」

我ながら妙なことを訊いた、と思った。

答はなかった。アストラの姿も、完全に消えてしまっていた。

予想はしていたことだが、彼は去ってしまった。ろくな助言すら残さず。

――ジャヤヴァーラの時代、彼は犠牲となる神を探し出し、口説き落とし、剣に封じたのだろう。

それと同じことが、ヤエトにできるだろうか？

呆然と虚空をみつめる彼のかたわらに、ルシルが座り込んだ。

「友？」

「……はい？」

なんの話かわからないままふり向くと、少女は真剣な表情で彼を見ていた。

「約束。そのときは、一緒に戦う」

一拍置いて、理解が訪れた。

ともに戦おうといってくれているのだ。

友という言葉に、どれほどの重みがあるのか。取り引きの材料だ、とデュラルクなら考えるだろう。彼ならずとも、誰でもそう考える。

だが、ルシルは違うらしい。

わずかに言葉をかわしただけの間柄で、そこまで……と思いかけて、気がついた。

その程度、とヤエトは思う。だが、ルシルにとっては違う。会話すること自体がおそらく稀なのだ。ライモンドがつねにあの調子ならば、母子の会話ですら一方的に申し渡されるだけのもので、言葉のや

りとりになど滅多にならないだろう。
当然、会話の価値は重い。
自分がなにをしでかしたかについて、ヤエトは少し考えた。徐々に慣れてきてしまった中空に浮かぶ光や、その光を宿した金茶色の眼や、まっすぐに切り下げられた前髪を眺めて、そこにいるのはただの少女であると考え、同時にその少女は神のいない地域で現人神とも呼ぶべき力を所持していること、親に見捨てられていること、つきあう相手は妖物だけであることを、あらためて考えた。
友になってくれ、というヤエトの言葉は、事態をかるくするために選んだものだったというのに、逆の効果をもたらしてしまったのではないか。
彼女の力が目当てだ、確たる約束が欲しいだけだと思わせるべきだったのではないか？
友になるという約束に忠実にふるまおうとすれば、ルシルは犠牲を支払うことになるかもしれない。
——犠牲。
さっき聞かされたばかりのアストラの言葉を連想して、ヤエトは少し腰が引けた。
やはり、自分にはできそうもない。犠牲の神を探して、封じるなど……具体的な方法もわからず、神を探すこともできないからだけでなく。
ならばどうする、という問いにも答は出ないが、今はまだ、と考えるしかない。
いずれ妥当な回答を得られるだろう。それが、喜ぶべきものか否かは別として。
とにかく今は、目の前にいる少女にどう応じるかという問題の方が先決だ。自分から申し出ておいて、今さら、友という言葉を拒否はできない。
それなら、少女の世界をこの塔の外へ拡大するしかない。より多くの人とふれあわせ、会話させ、選択肢を増やしてやるのがよい。
結局、そこなのだ。
ルシルの生真面目な顔を見返して、ヤエトはゆっくりと告げた。

「死にたくない、生きたいと思うことは、恥ではない――と、我があるじが申しました」
「うん」
「生きたいと、思ってくださいますか。塔を出て、生きてくださいますか？」
ルシルはうなずいて、それから小首を傾げた。
「空腹。さっきの、もっと？」

4

アルサールの機嫌は悪かった。
途中でへたばりそうになりながら塔を降りて来たヤエトを出迎えたときも、安堵の表情を見せたあとは、変な顔をしていた。おそらく自分の不機嫌を持て余し、どうしてよいかわからないのだろう。ヤエトの腕か袖をひったくって、鳥の背に押し上げたいくらいの心境で待っていただろうと思うが、つづいて出てきた少女の存在が彼を混乱させたらしい。
口を開け、閉じ、もう一回開け、閉じ、ようやくこれだけつぶやいた。
「ご無事で……」
「携行食の予備はあるか？」
「はい」
手渡された包み焼きを、ヤエトはそのままルシルに差し出した。抵抗していた割に、少女はなんの感慨も見せずに塔を出、相変わらず無頓着な動作で距離を詰めると、包み焼きを受け取った。
「礼をいわないと」
「ありがとう？」
「そうです」
「ありがとう」
「お役に立てて幸いです」
かぶりつく前に、ルシルはアルサールの方を見て尋ねた。
「あれにも？」
「あれではなく、彼です」

「彼にも。ありがとう」
アルサールは困ったような顔をしてヤエトを見、現実的なことをいった。
「あまり数はありません」
「わかっている。誰か来たか？」
「いえ」
外は明るかった。塔の中でどれだけ時間が経過したのか、ヤエトにはよくわからない。日はまだあまり高くないから、朝のうちなのだろうが、あれが東でなく西の空なら、午後も遅いということになる。
まあ朝だと思っておこう、とヤエトは結論づけた。その方が、気が楽だ。
「誰かあなたを保護してくれそうな人はいますか、ルシル？」
包み焼きを頬張ったまま、少女は首をかしげた。
訊くだけ無駄か、とヤエトは腕組みをした。
ライモンドに対抗する気概がある者を探すべきかと考えたが、すぐにその考えは捨てざるを得なかった。それでは、ルシルがライモンドに対する武器にされてしまいかねない。
もう答を諦めかけた頃、ようやくルシルが声を発した。
「保護、必要ない」
「そういうわけには参りません」
「ルシル、強い」
説明など後回しで、とりあえず自分が保護してしまえれば楽なのに、と。どうしても思ってしまう。
ヤエトはため息をついた。
こうやって、目先の楽さに流されるから、隠居できないのだ。今回は妥協しないし、できない。
「……塔を出てくださったのを、わたしは嬉しく思います。わかりますか」
「うん？」
「生きると決めた、という意味だからです。生きていくからには、あなたは人としての生きかたを学ばねばなりません」

ルシルの口が微妙に歪んだ。それから、開いた。
「人として？」
「そうです。ルス公の呪いなど、うち払っておしまいなさい。ひとりで生きる必要はない。むしろ、そうしてはいけない。あなたはまだ子どもなのです。どんな力があろうとも、人の暮らしの中では、まだ護られるべき存在であることを、わたしは知ってもらいたい。感じてもらいたいのです」
母の呪縛を破り、塔を出たのは大きな一歩だが、一歩に過ぎない。一歩進んだだけで立ち止まるわけにはいかないのだ。
「強くても、護られる？」
「はい。わたしが家族に、諭されたように。見守り、忠告してくれる大人が必要です。誰か、お心当たりはありませんか」
「いない」
だろうと思ったよ、とは口にできない。
不意に、アルサールが声を発した。
「鎖を壊したのは、それですか」
なんの話かわからず眼をしばたたいたヤエトに向かって、アルサールはさらに問いをかさねた。
「公を攫ったのも？」
どうやら『それ』というのは、ルシルのことのようだ。ヤエトは大きく息を吐いた。
「わたしは攫われてなどいない。自分でア＝ヴルスのもとへ赴いただけだ。だいたい人をさすのに『それ』はない。言葉のつかいかたが、おかしい」
「でも、追えませんでした。扉が閉じて、開かなくなってしまった。そいつのしわざですか？　そこにいるそれが、北の魔女ですか」
よせばいいのに、ルシルが会話に参加した。
「お前には用はない」
「ぼくには、公をお護りする任務がある」
「この土地で、わたしより強い者、いない。わたしといれば、誰といるより安全」
なんでここで言葉がすらすら出てくるのか、とヤ

エトは頭を抱えたくなった。ルシルには、アルサールを馬鹿にする意図はないだろう。淡々と、事実を指摘しただけだ。

それが逆に、少年の心を逆撫でしたようだ。アルサールは無言だったし、表情が変わったわけでもないのに、不機嫌なのがわかる。

ヤエトにはわかるが、ルシルにはわからない。平気で、追い討ちをかけた。

「ここにいるあいだ、ヤエトは、わたしが護る」

「北の魔女を信用する者は、北領にはいない」

アルサールの声は、厳冬期の風より冷たい。つまり、耳が凍えそうに痛い。

さすがに、ルシルの表情が動いた。

「黙れ」

自分の声もそれくらい冷たく響けばよいのだが、と思いながらヤエトは少年を見下ろし、声に力を入れたせいで襲ってきた目眩に耐えた。これは不意打ち過ぎる。

興奮しているせいか、アルサールはヤエトが揺れているのに気づいていないようだ。いや、揺れているということ自体が勘違いなのだろう。そうであってほしい。

黙れという命令を、アルサールは無視した。

「北の魔女は――」

ヤエトは容赦なく遮った。

「北嶺には興味深い物語が伝わっているのかもしれないが、ここにいるのは昔話の魔女ではない。ルシルという女の子だ。おまえはルシルのなにを知っている？　決めつけで、わかった気になって、批判するというのか。そこまで愚かなのか？」

アルサールは口をつぐんだ。納得したという顔ではない。

――先祖代々、争って来た間柄ではなぁ。

悪感情があっても無理はなかろう。そうは思うが、ここで揉められるのも困るのだ。正直、それどころではないのだから。

「北の魔女、四代前」
ルシルがヤエトの袖を引いた。あまり強く引かれると倒れるぞと思いながら、彼はふり向いた。
「なんです？」
「四代前のア＝ヴルス。とても昔。力、あまりなかった。風たち、いっている。名前だけのア＝ヴルス。力がある、ふり？　それだけで勝った。頭がよい。悪い頭。わかる？」
「……悪巧みをするのがうまかった、と」
「悪巧み？　鳥の糞どもを誘い込んで、皆、殺した。鳥は捕えて使おうとしたけど、皆、死んだ」
ヤエトは頭を抱えたくなった。アルサールがすごい顔をしている。口を開いたり手を出したりしないのは、頑張っていると認めてやるべきだろう。
「ルシル、でも、あなたはそんなことはしない。なぜなら――」
少し躊躇して、しかしヤエトは最後まで言葉をつづけた。
「――わたしたちは、友だから」
「ヤエトは友」
「そうです。国事にたずさわる者としての友情ではないと、そういう話はしましたが、北嶺の国相としてではなく、わたしはただ鳥が好きだし、北嶺の民とも親しんでいます」
「だから？」
「わたしの大事なものを、理由もなく害したりは、なさらない。そうですね？」
「大事」
ルシルはうなずいた。ヤエトの袖をはなすと、例によって無造作に、アルサールに近づいた。硬直している少年の手をとり、彼の顔を見上げて告げた。
「おまえのことも、ヤエトは大事？」
「え……」
「大事な部下で、友人です」
急いで口を挟んだヤエトの方を見もせず、ルシルはさらにアルサールとの距離を詰め、頭を垂れた。

少年の胸に、金茶色の頭頂がふれんばかりである。
「ヤエトの大事なもの、わたしが護る」
アルサールの青い眼がまんまるになり、弱りきった視線がヤエトに向けられた。いったいなにをしたんですか、という顔だ。
なにもしていない、と主張したい。ここまで無条件にすべてを受け入れられると、逆に困る。今すぐこの場から逃げ出して、すべてなかったことにできればと思うが、それも無理だろう。
ルシルが顔を上げた。
「兵士が来る。おまえたち、逃げる？」
はじめはアルサールに、次いでヤエトの方に向き直って尋ねた。
「誰の兵です」
「摂政。逃げる？　わたし、時間を稼げる」
逃げるべきが誰なのか、微妙なところだ、とヤエトは思った。それから気になって尋ねた。
「あなたを狙っているのではない？」
「摂政の兵、わたしを知っている。ア＝ヴルスに剣を向ける、ない」
ライモンドが命じても無理だろうか、とヤエトは考えた。ア＝ヴルスは、神なき土地の絶対者だ。畏怖が、人の揮う刃からルシルを護るに足るものなのか、他所者のヤエトには判断ができない。
アルサールが口を開いた。
「摂政の兵は誰を追っているのです」
少女は少し考えるようにした。風霊の報告を聞いているのか、あるいは直接に情報を得るすべがあるのか。
なんにせよ、ルシルは確信をもって告げた。
「南方人と、わたしの養父」
――ナグウィンだ。
ヤエトとアルサールは顔を見合わせた。
安堵するにはまだ早いのだが、それでも、自分の中で緊張が弛んだのを感じた。
――無事だったのだ。

膝の力が抜けかけたヤエトを、アルサールがさっと近寄って支えた。身体が揺れているのは、とうに見破られていたらしい。

そのまま、低い声で問われた。

「逃げますか」

「いや……なぜ？」

「商人の身柄や北方との交渉については、ほかの者にまかせる、と仰せでした。公が内密に戻られたのは、その――そこにいる、その者と交渉するためと伺っております。それはもう、果たされた。公は北嶺にお戻りになるべきです。第一、ここにおいでになることを知られるのは、まずいのでは？」

ヤエトは答に窮した。

「ナグウィンを、殺させるわけにはいかない」

「それは、公のお仕事ではありません」

「わたしの仕事は、わたしが決める」

アルサールはさらになにか口にしかけていたが、それが言葉になる前に、ルシルが呼んだ。

「ヤエト」

身体中を、なにかが駆け巡った。なにが、かはわからない。力というのがもっとも近そうな気はするが、正確なところを表現しようとすれば、摑みどころのないなにか、としかいえない。

ルシルの声は魔法だ、と思う。

少女が誰かの名を呼ぶとき、それは魔法なのだ。すでに。

「ヤエトがここにいるのは、わたしが呼んだから」

「……そうですね」

「わたしのせいだと、いえばいい。皆、納得する」

そうなのだろう、とヤエトは思った。

ア＝ヴルスという呼び名にまつわる昔話が、そこにこめられた畏れと恐怖、崇拝と忌避が、少女の言動のすべてを保証してしまう。

――そうなのだろう。

それで済むのに、どうして苦い気分になるのか。

「ですが、わたしは……みずから来たのです」

「うん？」
「我があるじを説得し、鳥に乗って。あなたに呼ばれたからですが、同時にわたしが来たいと思ったからこそ、こうして来たのです。わかりますか」
ルシルが黙っていると、思いがけず、アルサールが声を発した。
「おまえに呼ばれていない者も、ここにいる」
「……うん、呼んでいない」
「そういうことだ」
どういうことなのかさっぱりだが、ルシルはその言葉になにか感じるところがあったらしい。難しい顔で、黙ってしまった。
アルサールはまたヤエトの方に向き直った。
「公、どうかこのまま、北嶺にお戻りを」
「しかし――」
すぐそこに、ナグウィンがいるのに。ここで見捨てられるはずがない。このままルシルに会わせれば、皇帝の目論見通りになりかねない。
「薬の効力が、じきに切れます」
「……わかっているが」
「この場で倒れて、それでなんのおはたらきが、おできになると？」
アルサールは容赦がない。同年輩のタルキンには、もう少しこう、付け入る隙があるのだが……アルサールには、それがない。
少しでも気を抜くと、守勢にまわらされてしまう。今がそうだ。
「だが……なんとしても、ナグウィンを保護しなければ」
「わかった」
ヤエトはぎょっとした。ルシルだ。
「いや、待ってください」
「わたしが助ける。ヤエトの大事なもの、護る」
ルシルに会うことで、ナグウィンの命があやうくなるという筋書きなのだが、それをうまく説明できるかどうか。

だがヤエトの苦悩を他所に、少女は晴れやかな笑みを浮かべて告げた。
「わたしに名を尋ねた。わたし、答えた」
「どういうことです」
「ヤエトといた人、尋ねた。なんて名前？　わたし答えた。ルシル。答えるが正しい、思ったから。やっぱり正しかった。名前で、繋がっている」
――名告った側が支配されるのが、名前の魔法の大原則なら、ルシルはナグウィンに……？
まさかそんな、とヤエトは思った。そこまで極端なことにはならないだろう。ただ、繋がりが生じているというだけのことだ。
そうであってほしい。でなければ――。
――皇帝が、ア＝ヴルスを押さえたも同然だ。
「繋がっていると、なにができるのです？」
「護れる」
ルシルの答は単純だ。なにをもって、護ると表現しているのだろう。
そもそも、この少女自身に庇護者が必要なのだ。塔を出て、人のあいだで暮らすために。野心を抱かず、脅迫に屈せず、まっすぐに人としての道を信じて生きることを教えられるような――。
「あ」
「なに？」
ヤエトは少し考えた。アルサールに指摘されるまでもなく、体力は限界を超えている。
彼がそれなりに活動できているのは、かつてナオが処方した薬のおかげなのだ。一時的にしゃんとする効果があるから、どうしても必要なときに使えという代物で、第二皇子のところで悶着に巻き込まれたとき、服用すべきか迷った例のあれだ。
今回も皇女は反対したが、ヤエトは押し切った。
ナオは、薬の処方に手を抜いたことはない。彼女の力や知識の源泉がなんであろうと、その治療術は信じる、という態度を見せたい。
帰るまでに、治療の準備をお願いしますと、ヤエ

トは皇女に告げてある。どうせ北嶺に戻ったらすぐ倒れるに決まっているからだ。
それをきっかけに、ナオが出て来てくれればいい。自主的に閉じこもって、声をかけてもどうにもならないというが、人の命を救うことを天職と心得ているなら、きっと出て来て技術を尽くすはずだ。
ナオのためにも、それを許してくれた皇女のためにも。ヤエトは北嶺に戻らねばならない。
それだけは、変更がきかない。
「もう、湖の向こう岸に着く。商人」
迷っている時間はないようだ。
「わかりました。では、こうしましょう……ナグウィンと、ご養父のおふたりの前に、姿をおあらわしになるといい。追って来た兵士たちにも、はっきりと見せておやりなさい」
「うん」
ルシルは楽しそうだ。
こうなることを、知っていたのかもしれない。だが、いくら知っていても、それが現実になるのとは、だいぶ違うはずだ。塔の中ですべてを知ったつもりになるのと、外へ出てみずから体験するのとでは。
「そして、できればナグウィンを移動させてほしいのです。わたしたちのところへ。……できますか」
「できる。風霊に乗せる」
「風霊……」
「案内に出した、あれ」
「ああ、あの……狼ですか」
あやうく犬と口走るところだった。
「そう。あれは人を乗せる。大丈夫」
いろいろ疑問は尽きないが、余分な質問をしている余裕はない。それはそれでいいことにした。
「あなたは、ご養父と一緒に、ルス公の館へ行かれるといい。できますか」
「できる」
なんでもないことのように、ルシルはうなずいた。
あの母親と対峙せねばならないのが、気にならない

のだろうか。
「そこに、セルクという者がおります。北嶺の民で、人質として当地にご厄介になっております」
「セルク？」
「その者に、わたしから託されたと……これを見れば、わかるでしょう」
ヤエトは腰からシロバの羽を結んだお守りをはずした。皇女から貰ったものだが、シロバの羽は色が特徴的だし、彫り物もセルクなら見覚えているはずだ。
「これを渡す？」
「いいえ、これはあなたに。わたしがあるじより賜った、大事なものです。友情の証に、お預けします。ですから、これはセルクにだけ見せて、伝えてください。あなたはわたしの友人で、よろしくたのむと、ヤエトが申していたと」
「うん」
「いろいろと、案じることは多いのですが——」
セルクは善人だが大馬鹿だとか、ナグウィンがさぞ仰天するだろうとか、塔から出て来た娘をルス公がどう扱うかさっぱりわからないとか、摂政閣下の出方も見えないとか、こんな少女を放り出して北嶺に戻るわけにいくかとか、山ほどだ。
だが、セルクは大馬鹿でも善人であることは保証できるし、ナグウィンはこの土地から引き剝がしたいし、ルス公は……あんな不毛な想念をあらためるべきだし、デュラルクは馬鹿じゃないから損得を見極めるだろうし、ルシルを北方から連れ出すわけにはいかない。
そして、ヤエトは北嶺に戻らねばならないのだ。
「お願いばかり多く、申しわけない」
ヤエトはルシルの腰帯に、お守りを結びつけた。地味な服に、地味な帯だ。ざらつく手触りに、眉をひそめたくなった。
「お願いされる、嬉しい」
身を屈めたその耳もとで告げられて、胸が痛んだ。

いよいよ具合が悪いのか、それとも心が痛いだけなのか、よくわからない。
　立ち上がると、もう口にすべき言葉も見当たらなかった。
「万事うまくいきますよう。幸運のあらんことを、お祈り申し上げます」
「大丈夫、うまくいく」
　ルシルは確信を持ってうなずいた。
「はい」
「また……来てくれる？」
「事情が許しますれば、またお会いしましょう」
「一緒に戦うから、たぶん」
「え？」
「風たち、いってる。魔王の軍、また来る。わたしたち、戦う。きっといつか」
　決然と告げる少女は、その戦いの行く末を、どこまで知っているのだろう。
「商人来る。案内人も来る。わたしは行く」
「案内人？」
「人。またね、ヤエト」
　ルシルがするどい声を発すると、少女の身体は宙に浮かんだ。そしてそのまま、彼の返事を待たずに飛び去ってしまった。
　呆気にとれられて見送る暇もなく、今度は銀色の光がさっと上空を過ったと思うや、顔面蒼白の商人を乗せた狼が桟橋に着地し、だらりと赤い舌を垂らして告げた。
「連レテ来タ」
　ひとことで用件を済ませると、狼は小さなつむじ風を巻き起こして姿を消した。そのつむじ風は湖面を切り裂くように波立たせつつ、凄まじい勢いで湖を渡って行った。
　商人は、ぺたんとその場に腰を落とした。
「……なんなんですか」
　今は、皇帝の気配はない。忙しくすることに成功しているのかどうか。

ヤエトは商人に近寄り、声をかけた。
「あなたを助けてくれたんですよ」
「それより、なんで公がここに？」
「たまには助ける側にまわろうと思いましてね。あなたを、わたしが」
「助ける？」
皇帝からと告げてしまえば、時を超えた伝言を受け取ったとみずから明かすようなものだ。
「あなたが兵士に追われていると、ア＝ヴルスが教えてくれたので。助け出してわたしに預けてくださいとお願いしたところ、あの……狼を遣わしてくださったのです」
「ア＝ヴルスがここに？」
「もういません」
商人は頭を左右にふった。自分が置かれている状況が、うまく摑めないらしい。
皇帝にあやつられる時間が長かったのかもしれない。詳しいところは教えられないままであるという可能性も、かなり高い。
ヤエトは尋ねた。
「それより、あなたはなぜ、逃げ出したりしたのですか。おかげで大変でしたよ、摂政閣下にいろいろ疑われたり、監禁されそうになったりしました」
正直な答がほしいというより、ヤエトは皇帝の思惑など知らないと思わせるための工作だ。
ナグウィンを見殺しにできないのと同じくらい、うかうかと皇帝の罠にはまる気もない。
「なぜって……いや、質問したのはわたしが先ですよ。なぜここに？」
「ア＝ヴルスと是非にもお話ししたいことがあったので、お訪ねしたのです」
「そのア＝ヴルスは、どこへ行ったんです」
「生まれに行ったんですよ。人の世に」
「は？」
――うまく、できるだろうか。
ルシルに与えられた力は、あまりに強い。それを

担って、人として生きるのは困難だ。
手助けできればよいのだがと、もう何回考えたかわからないあたりを自分の思考が彷徨っているのに気づき、ヤエトは苦笑せざるを得なかった。
どうしようもない。
扉を叩き、錠を開けさせ、外に踏み出させた。その先は本人まかせだ。ひどい話だと自分でも思うが、ほかにどうすればよかったのか。あのまま塔の中で死ねというよりは、ずいぶんましなことをしたと思うしかない。
目の前で、なんだかわけがわからないという顔をしている商人もそうだ。見殺しにはできないが、最後まで面倒を見ることもできない。
「とにかく、北嶺にお連れしましょう。摂政閣下には、あなたを捕えても命はとらぬようにとお願いはしましたが、聞き入れられたという確証がない。留まれば命があやういでしょう」
商人は眼をしばたたいた。
「まだ、なにがなんだか」
「説明は、後刻。今はこの場を離れましょう」
「鳥に乗って大丈夫ですか？　お顔の色が、真っ青ですよ」
「自分で立っているより、シロバの背に乗せてもらっている方が、安全かつ安心でしょうね。アルサール、戻るぞ」
「はい」
「ナグウィン殿、あちらの鳥に同乗してください」
ヤエトは既に姿勢を低くしたシロバのもとに向かい、たのむぞ、と声をかけた。
とにかく帰らねばならないのだ。皇女のもとへ。

第



章

1

ヤエトはぼんやりと布団の上の羽毛のかたまりを撫でていた。

案の定、北嶺に帰るなり倒れてしまったが、それも悪くはない、と体調が上向いた今は思える。倒れてさえいれば、いかなる問題にも悩まされることはない。関知しようがないのだから。

いわば、知るかボケ、を体現している状態だ。

だからといって、また倒れたいとも思えないが。

――あれは、辛過ぎる。

痛いし苦しいし気もち悪いし、思いだすだけで泣けそうだ。もう二度と嫌だというのが本音だが、生き延びてしまう限り、二度どころかいくらでもくり返すことになるのは必定である。せめて明るい面でもみつけないと、やりきれないではないか。

「……また入り込んで」

ナオがシッと声をあげると、雛は翼を打ち付けて騒ぎ、しかし逆らいきれずに窓から出て行った。

そして、残ったヤエトがなぜか睨まれることになる。なにもしていないのに。

「ここが気に入っているらしくて」

どうして、いいわけをせねばならないのか。わからないが、そうなってしまう。

ナオは眉根を寄せた。

「不衛生です」

「しかし、勝手に出入りするものはしかたがない」

「勝手に？」

「窓から入って来るんですよ」

「わたしは窓を閉めて出ましたよ」

茶器を卓に置くと、ナオは窓に歩み寄り、外を眺めた。そして、窓の下に向かって、またシッと声をかけた。どうやら雛が、懲りずに再突入の機会を窺っていたらしい。

ここで、誰が開けたのかとか、なぜ開けたのかと

か、尋ねてくれればよいのに、と思う。
ナオは尋ねない。無言で窓を閉め、灯火の燃料がたりているかをさりげなく確認してから、茶器を並べる作業に戻った。
「北方から、騎士が戻って参りました」
「騎士が？」
「ここの人たちなら、鳥が、というのでしょうね」
それで合点がいった。あとから交渉して送り込んだ鳥たちが、戻って来たということだ。
それは商人の捜索が打ち切られたことを示唆している。そのための派遣だったのだから。
――あの男はどうなったのかな。
商人の身柄はヤエトが確保し、無事、北嶺に連れ戻すことができたが、同行していたラズラフとは顔もあわせていない。また、皇女の騎士が一名、姿を消しているが、その後、どうなったのか。
ア＝ヴルスであるルシルが塔を出、養父となっているラズラフと合流したことを、ライモンドはどう受け止めただろう。
「公にご報告がおありなら書面でと申し上げてあります。簡潔に、公のお身体に障らない長さにおさめてくださらなければお渡しできませんとも、申し上げてあります」
ヤエトは苦笑した。ナオはジェイサルドほどの迫力も、皇女ほどの権力も持ち合わせてはいない。だが、病人の体調管理に関しては、確信を持ってものをいう。だから、逆らえる者はほとんどいない。
おかげで、ひっきりなしに助言を求める者が訪れるという悪夢からは解放されたが、情報が入らないことで、もどかしさを感じてしまう。
贅沢なものだ。まったく。
「行き届いたことです」
「公の御身になにかあれば、姫様がお嘆きになりますから。姫様がお戻りになるまでに、ご本復いただくのがつとめと心得ております」
身を起こしたヤエトの手に碗を渡し、小皿を差し

出した。その上には、黒っぽい丸薬が並んでいる。
ヤエトはその丸薬を口に入れると、できるだけ素早く茶で流し込んだ。舌に残ると、凄まじい苦味にのたうつ羽目になるのだ。それは覚えた。
「姫様からのご連絡は？」
ナオは小皿を置き、碗に茶を注ぎ足した。
「とくには。定時には、伝達官殿をお通しします」
ヤエトがなんとか意識をたもって北嶺に戻ったというのに、皇女は不在だった。
第四皇子が処刑されるのを止めに行った、という話だけ聞いて、なんだそれはと思ったのを最後に気を失った。
未だに、詳しい事情はよくわからない。
留守を護るイスヤームにさえ、皇家内の騒動だからと、皇女は説明もせずに発ったのだという。自分が行けばなんとかなるかも、と口走っていたらしいが、それはどうだろうとヤエトは思う。
皇帝はたしかに皇女には甘いが、ひとたび決めたことをひるがえすまでは、しないだろう。
まだ事態は流動的といえる段階らしいが、どうやら、兵馬を集めていると第二皇子を責めたのがきっかけで、第四皇子の方が足場を崩されたらしい。第二皇子の足を露骨に引っ張ったのだ、《銀鷲公》あたりが周到にことを仕組んでもおかしくはない。
――なにかあるとすれば、第五皇子からかと思っていたが……。
対面したときに覚えた不快感が、予測の精度に影響してしまったのだろうか。あり得る話だ。
「ジェイサルドからは？」
ナオは空になった碗を見て、尋ねた。
「まだお飲みになりますか？」
「いや、いい」
「どなたからも、とくにご連絡はありません」
「ルーギンからも？」
「どなたからも」
不在だったのは皇女だけではない。ジェイサルド

も、ルーギンもいない。
ジェイサルドは例の隠し鉱床へ、ルーギンは皇女とともに当初は都へ向かったそうだが、今は博沙国にいるらしい。どちらも未だに戻って来ないし、とりたてて連絡があるわけでもない。
ヤエトが戻ったことは、伝達官を通じて皇女は知っているが、ジェイサルドとルーギンには伝わっていないのだろう。公的には、ヤエトはずっと北嶺で寝ていたことになっているので、大っぴらに帰りましたとは報告できず、とくに伝令を立ててもいないから、無理もないのだが。
なにがどうなっているかを把握できないと、こんなに落ち着かないものだとは思わなかった。
ここまでとあらば、しかたがない。北嶺相本復の報せを交替の騎士に託し、面倒くさい報告書が届いたり、判断を仰がれたりするのを我慢……するしかないのかもしれない。
だが、それでいいのか。
――どうなんだ？
のんびり寝ていられる機会など、滅多にないのだ。今のこの状況を、満喫すべきではないのか。
自分自身を持て余しているヤエトに、ナオは淡々と告げた。
「先にも申しましたが、必要なことがあれば書面で、公の御身をそこねる危険をおかしても即座にお伝えせねばならないような緊急の用件でしたら対面で、と皆様にお願いしてあります」
「……すみません」
ナオは眉を上げた。
「なにがです」
「わたしは少し、焦っているようです」
ヤエトの告白に、ナオは表情も変えずに答えた。
「焦られても、なにもよいことはございません」
「ナオ殿は、忍耐強くていらっしゃる。わたしのような偏屈な病人の相手も、お上手だ」
「これが、わたしの仕事ですから」

——やっぱり偏屈なのか。
口では偏屈といいながら、かなり従順な病人としてふるまっているつもりだったから、ナオが否定しないのには、少々がっかりした。
——いや、そうじゃないだろう。
がっかりするのは間違いだ。
むしろ、認められたことを歓迎すべきではないか。偏屈でなにが悪い？　知るかボケ、の心意気を忘れてはならない。……残念ながら、ナオにその台詞を叩き付ける勇気はない。どう応じるかには、少し興味があるのだが。
ナオの反応は概して冷淡である。
ヤエトが北嶺に戻ったときもそうだ。
人目を避けて厩舎に入った時点で、たまたま居合わせたタルキンに、ひどく心配されたのは覚えている。厩舎長も、彼なりに案じてくれた。その後、厩舎長とアルサールと、おそらくナグウィンの助けも借りて、屋根伝いにこっそり自室に戻ったのだが、そこでヤエトを出迎えたナオは、冷たかった。籠っていた部屋から出て来てくれたことに対して感謝の言葉を述べようとしたとたん、それを寝台へ、といわれた。
怒っている、と全員が察した。
そもそも、ナオはヤエトにあまり好意を抱いていない。ヤエトの無謀な行動の、健康面での尻拭いをさせられるのは彼女なのだ。歓迎しろという方が無理である。
ヤエトを運んで来た男どもは、命じられた仕事を可及的すみやかに果たすと、挨拶もなしに窓から出て行った。逃亡したのである。
置き去りにされたヤエトは、じきに気を失ったからよかったようなものの、そうでなければ沈黙・凝視・投薬という三重の拷問を受ける羽目になっていたに違いなかった。
意識が戻り、人間らしい思考や会話がなんとかできる程度に復調してから状況確認をしたところ、ジ

エイサルドが鉱床へ行ってからは、ヤエトが部屋にいて療養中であるかのように擬態することまで、ナオがやっていた、といわれた。

ありがとうといったところ、いいえ、と短く答えられた。思いきり拒否された気分だ。

拒否されたという印象に間違いはないだろうが、そうですかわかりました、とおとなしくしているわけにもいかなかった。

起き上がるとだるいとはいえ、熱も下がり、順調に回復しているところだ。このままなら二日か三日もすれば仕事に戻れてしまう。そうなったら、ナオとゆっくり話す暇などつくれない。

「少し話し相手をつとめてもらえますか」

「それは、わたしの仕事ではございません」

「でもあなたは、鳥を追い出してしまわれた」

「不衛生ですので」

「病を得ると、気が弱るのでしょうね……生き物がそばにいることが、とても心強い。ひとりで過ごす時間が、ひどく不毛で恐ろしいものに感じられる」

ナオが答えるまでに、少し、間があった。奇跡的に同情でもひけたのかと思ったら、そうでもなかったようだ。淡々と、こう指摘された。

「鳥ではお話し相手にはなりませんでしょう」

「ええ。わたしは鳥たちの心が読めませんからね。でも、鳥なら一緒にいるだけで気が楽になる。人であれば、やはり話をしたくなる」

「左様でございますか」

ナオの答はそれだけだ。

ヤエトは碗を置き、寝台に横になった。

「今の薬で、どうせ眠くなるでしょう。それまでのあいだですから、諦めてつきあってください」

「……公は、お命じになればよいのです」

「できませんよ。ナオ殿は、わたしの配下ではない。皇女殿下の薬師で、治療者だ」

ため息をつくように、ナオは言葉を吐き出した。

「あなたは貴族のなんたるかを、少しもわかってお

いでない」
「わかりたいとも思いませんのでね」
「それでも、心得ておかれるべきです」
ヤエトは微笑した。
「姫様の御ために？」
「そうです」
「なにもかも、姫様のため」
「公は」
「はい？」
少しためらってから、ナオは告げた。
「同じでいらっしゃるでしょう。その点は、公も」
「なにもかも、ではないと思いますが」
「では、わたしもそうです。なにもかもではございません」
「頑固ですね、ナオ殿は」
ナオは否定も肯定もしなかった。ただ黙って立っているだけだ。彼女にとってヤエトは、気安い口をたたける相手ではない、ということだろう。
まあそうなのだが、今はもう少しだけ距離を詰めたいところだ。
「座って」
これは命じた内に入るのだろうか。
ともあれナオは椅子に腰を下ろした。これで少しは足留めできた。
「それでは、同じということにしておきましょうか。ナオ殿も、わたしも、その点では同じということで、手を打ちましょう」
今さらなにをと思っているのだろうが、ナオは無言だ。
ヤエトは言葉をつづけた。
「その上で、聞いておきたいことがあります」
まだ、無言。
窓の外で、羽撃きの音がする。鳥が、入れてほしいといっているのだろう。ナオにも聞こえているはずだが、表情は変わらない。
「あなたは、シーハの恩寵の力を得ておられるので

すか？」

おそらくもう、ヤエトがなにを話そうとしているのか予測していたのだろう。ナオは静かに、ほとんど抑制していることすら窺わせない口調で答えた。

「わかりません」

「……わからない？」

「わたしはシーハの民です。医師神、治癒神、生命をつかさどる者、救い手――さまざまな呼びかたがありますが、とにかく、わたしはシーハを信奉する一族に生まれ、知識を授かり、訓練を受けました。シーハの民であることは、保証できます。それがわたしの生まれと育ちですから」

ナオの声は沙漠に吹く乾いた風を思わせた。黄色い砂に煙る景色、茫漠と広がる不毛の大地と空、永遠にも感じられた、あの沙漠越えの道程を。

生死の境が近接した、あやうい世界。

「あなたは、わたしを何度も死の淵から呼び戻している」

「それが、つとめですから」

「姫様の御ため？」

「そうです」

一歩、踏み込んでみた。

「つとめであっても、力がなければできないことだとは、思いませんか？」

シーハの恩寵――あるいは、悪神の力が。

ナオは黙っている。

「ふつうの薬師に、あなたと同じ芸当ができるでしょうか？」

「薬師の力量によるでしょう」

「訊きかたが悪かったですね。やり直しましょうか。人ならざるものの力を借りずとも、あなたと同じことはできますか？」

「わかりません」

「……そうですか」

「あまり難しい話をなさると、お身体に障ります」

「難しい話が好きなのです」

ナオはまた、ため息をついた。
「わからないものを尋ねられても、お答えできません。わたしの力がシーハの恩寵なのか、悪神の誘惑なのかは、ただ、わからないとしか。姫様にも、このことは申し上げてあります」
「なるほど」
「シーハの恩寵であってほしいと思いますが、たぶん違うでしょう」
あまりに何気ない口調でいわれたので、聞き流すところだった。
「なぜ、そう思うのです」
「わからないからです」
ナオの答は明快だった。そういえば、彼女は語尾を濁すことが少ない。わりと遠慮のないことをいうか、黙っているかのどちらかだ。
そのあたりは、皇女と似ている。もっとも、皇女はなんでもかんでも断言しまくるばかりで、黙っていることは滅多にないが。
「恩寵の力であれば、はっきりわかるはずと？」
「それもありますし……シーハは、別名を傷ついた癒し手とも申します。ご存じかどうか、恩寵を賜るための修行には、みずから危険な疫病に身を差し出す段階も含まれています」
「噂には、聞いたことがあります」
ジェイサルドが教えてくれた。シーハの民は、死病からの生還をもなし遂げる、それくらいの修行をしているのだと。
「わたしは罹患しませんでした」
ナオの声に、感情の色はなかった。
病気にかからなかったといえば、ふつうは喜ぶべきところだが、かかるのも修行の内なら、それは歓迎されざる事態だったに違いない。特別に選ばれた治癒者になる資格を得るためにはまず、病を得ねばならないようだから。
ナオは静かに視線を上げた。それまで眼を伏せていたのだと、そこでようやく気づいた。

彼女はヤエトの眼をまっすぐにみつめて告げた。
「わたしは病を得なかった」
「それは――」
「体力が落ちているときに感じる手足の重さも、高熱を発しているときの辛さも、すべてが治療者には必要な経験なのに。同調できるからこそ、癒し得る。それがシーハのわざなのです。それなのに、わたしは健康そのものでした。わたしは病者の辛さをわからないまま、癒し手になってしまったのです」
「それは必要なことなのですか。その、痛みがわかるということは？」
「ええ」
「自分が病気になってまで？」
「あなたはよくご存じでしょう。わたしはあなたに冷たい。それは、あなたの痛みも、辛さも、わからないからです。わたしは本物の癒し手を知っています。違いますよ、全然。かれらにとって、治癒のわざは共感からはじまるものなのです」
「そういえば、残念ながら生き延びたとか……いわれたことが、ありましたね」
「申しました」
ヤエトと瀕死の苦しみをわかちあっていれば、あの台詞はないだろう。いや、何度もこんなに苦しくて気の毒に、という同情から出ているなら、それもあるかもしれないが、ナオの発言にそういう含みはなかった。
あのときヤエトは、きっぱり突き放されたと感じたものだ。死にたがりが身体を大事にせず、しかしまた生き延びた、なんとみっともない、くらいの雰囲気だった。断言できる。
たしかに、治療者があまりに思い遣りに欠けるのは、患者にとって歓迎できないことだが、それでも治療してもらえるなら、ありがたい。痛みや辛さを知らないことが、そう大きな問題とも思えない。
正直なところを、ヤエトは告げた。
「でも、それだけのことで、恩寵の力かどうかを判

断できるものですか」
「はじめに、申し上げました。判断はつかないというのが、正確なところです。ですが、それだけのこと、というような話ではありませんよ、公。それがすべてなのですから、ターンのわざは」
「すべて、ですか」
「ええ」
「薬や治療術の知識は関係ないと？」
「それは基礎の技術です。先ほど仰せになった、特別な力とは関係のない部分です」
——手強い。
ナオがこんなに理屈っぽいとは思わなかった。論戦の相手としては、かなりの難敵だ。
「その特別な力が発現した時期は、はっきりわかっているのですか」
「ええ。修行中でした。悪疫におかされた巡礼を、看病していて。そのときも、わたしより修行の浅い者が先に倒れて、わたしだけはなんともないままでした。どうして発病しないのかと自分を呪っているときに、聞こえたのです、声が」
ナオの声が、わずかにふるえた。
一旦、言葉を切り、少し間を置いてから彼女はつづけた。
「その声を、わたしは信じたのです」
「声は、なんと？」
「それが、はっきりとは覚えていないのです。言葉ではなかったような……ただ、感じただけと申せばよいのでしょうか」
「なにを感じたのです」
ナオは息を吐き、ふたたび眼を伏せた。
「人を癒す力を欲するか、と」
なんと答えたかなど、想像するまでもなかった。
「肯定しましたか」
「即座に答えました。欲しい、と。その声の気配に、光を見ました。今さらなにをいっても詮無いことですが、そのときわたしは、それが神だと思った。タ



ーンの神が、努力を認めてくださったのだと。それで、……飛びついてしまったのです」

ナオの声は沈んでいた。落ち着いてはいたが、そこに明るさはない。

それはそうだろう。

ひとりで部屋に籠っていたあいだ、ずっと考えていたのだろうか。かつて、自分に与えられた試練と誘惑を、どうしてうまく乗り越えられなかったのだろう、と。

「恥ずべきことではないと思います」

え、とナオが小さく声をあげた。同時に顔も上げ、眼があった。

ヤエトはくり返した。

「恥じることはない。あなたは人を癒したいと希っただけだ。それはあなたの真心です」

「……姫様と、同じことを仰る」

えっ、とおどろきの声を漏らすのは、今度はヤエトの番だった。ナオは微笑んだ。久しぶりに見る笑顔だ。そもそも、彼女は滅多に笑わない。

今もまた笑みはすぐに消え、生真面目な表情でナオは告げた。

「そんな美しいものでも、立派なものでもないことは、自分がいちばんわかっています。それでも、姫様のお役に立つなら、わたしは死ぬまでこの力を使うでしょう」

「肚を据えましたか？」

ヤエトの問いに、ナオはうなずいた。

「泣いてたのまれたのでは、逆らえません」

「姫様に？」

「わたしが必要だと、手を握ってくださいました。どうしても力を使いたくなければ、それでもよいから、とも」

そこまでいって、ナオは立ち上がった。茶器を盆に並べ直すナオの所作は、落ち着き払ったものだった。彼女の懊悩（おうのう）に終わりはないだろうが、少なくとも今は安定しているといえるだろう。

前のように、とり乱したりはしないはずだ。
「もう終わりですか」
「この先は、姫様とわたしだけの秘密ですから」
「秘密？」
「秘密ならいくらでも持って結構と、仰ったそうですわね」
「はい？」
「姫様に、そう仰せになったそうですね」
ヤエトは眼をしばたたいた。目蓋が少し重い。薬がきいてきたのだろう。
「そんなことを、申しましたかね」
「何度も申し上げておりますが、公は少しも姫様のことをおわかりでない」
「やんごとないかたのお心の内をはかろうなど、わたしのような下賤の者には難しいことです」
ナオは手を止め、ヤエトを見下ろした。
「あまり馬鹿なことを仰いませんように」
「馬鹿なこと、ですか」
「姫様が、生まれや育ちなどを気にかけるかただと、本気でお思いですか？」
ナオの声が冷たい。かなり怒っているようだ。
機嫌をとらねば、と反射的にヤエトはうなずいた。
「そうですね、はい、つまり……いや、それはその通りですが、そうはいっても、やはり」
「どうにもならない格差はあるでしょう。だからこそ、姫様はそこをお気になさっておいでです」
「ああ……ええっと？」
ナオはため息をついた。
「お休みになってください。今のようなご返答、けっして姫様にはなさいませんように」
「はぁ」
「それと、これだけはお教えしておきますけれど、公がおわかりにならないのは、やんごとないかたのことではありません。女心というものです」
「あ、それはわかりません」
即答したヤエトに、ナオもまたあっさり答えた。

「わかるようになられると、よろしいですね」
「……努力します」
「努力だけではたりないことが、世の中にはございます。結果を出さねばね。それくらい、ご存じでしょうけれど。では、失礼します。定時に、伝達官殿をお通ししますので、それまでお休みになってください」
北嶺最強は実はナオ殿だという説はないか？　と思ったのを最後に、ヤエトの意識は眠りの底へと沈んでいった。

2

どうも、おかしい。
皇女からの定時連絡は、一方的に伝言を聞かされるだけの状況がつづいていた。こうなってはじめて、皇女は臨での会話を好む傾向があったのだな、とヤエトは気がついた。
だから、おかしな感じがする。
直接お話しをと申し入れてもみたが、お忙しいので、と伝達官に断られた。その場で皇女の意向を確認する様子さえ、見せない。事前に申し渡されているのだろうと見当がつく――ヤエトになんといわれても取り次ぐな、と。
手回しのよいことだ、と思う。よほど、探られては痛い腹があるのだろう。
ヤエトは北嶺から動くな、というのが第一の命令であった。
王も将軍も不在とあれば、相をつとめるヤエトが国に残るのは当然だが、その当然があまり当然でないのが今まではよくあることだったので、不当に押し込められているような心地がした。
七日の日限があるから鳥は交替で戻ってくる。皇女自身も長期間は北嶺をはなれられないのではないか、という疑いはもう晴れていたが、クラルだけ帰らせるとは意外だった。

それほど、都に長居をすることになろうとは。
情報をもたらしてくれたのは、ナグウィンだった。
「四の君のお部屋に立てこもっておられるそうで」
「……王が？」
「正確には、扉を護っておいでだそうで。ご自分がいなくなったらすぐに陛下がその……ねぇ？　そうはさせじと、張り番をしてらっしゃるとか」
戻れないはずだ。
「それで、どう思われます」
ヤエトの問いに、商人は首をかしげた。
「どう、とは？」
「王が北嶺にお戻りになったら、四の君のお命はないものと思われますか」
「竜種のことを、そのように仰られるのは……」
ヤエトが踏野太守の親族に食ってかかったように、不祥を言葉にするなというのだろう。だが、ここは曖昧にはできない部分だ。
「礼を失してしまいました。以後、気をつけます」
要は、質問の勘所が伝わればよいのだ。命にかかわっているかどうか次第で、皇女に意見を求められたときの対応も変わってくる。
正直いって、第四皇子の生死など、ヤエトにはあまり興味がないことだ。知らない人物だし、これから知り合うつもりもない。ただ、玉座を巡っての争いがあり、皇女の兄でもあることを考えれば、無視はできない。それだけのことだが、そこが重要だったりするから困る。
「わかりませんな。陛下のお考えになることは、わたしなどには、とてもとても」
「そうですか？」
「そうですよ！　さっぱりわかりません。ご参考までに、公のお考えになることもです。見当もつきませんね」
「そうですか？」
ふたたびヤエトが疑義を呈すると、商人は大袈裟に肩をすくめ、大きな眼をくるりと回して見せた。

「わかるわけないでしょう。あなたほど、わけのわからないお人も、滅多にいない」
「そんなことはないと思いますが」
「なにをなさりたいか、摑めないんですよ」
ああ、とヤエトはうなずいた。
「それは、自分でもわかっていませんから」
「え。ご自分のなさりたいことが、ですか？」
「隠居したいという野望くらいですからね、わたしの中で揺るぎないものといえば」
「ふつう、それを野望とは呼びませんがね……」
「そのようですね。それより、答らしい答をいただけていないのですが、どうなんです。陛下のご勘気は、どれほど強いのです」
ナグウィンは、ううんと唸って、ちらりと視線を部屋の隅にやった。
そこには、ファルバーンが座っていた。
北方での商人の捜索が打ち切られ、鳥が帰されたときに、一緒に戻って来たのだという。
《黒狼公》の安否が気になって、夜も眠れない、是非とも自分が看病しなければ……と、泣き暮らして見せたところ、うまくいきました、というのがファルバーンの報告だった。
いったいどんな噂になるか、考えたくない。
なんでも、ルシルの侍女をつとめないかとセルクに持ちかけられたそうで、さすがにそれはまずいと逃げ出してきたという。
つまり、ルシルは無事にセルクと出会え、彼の庇護下にあるらしい。……自分で指示したことなのに、ちっとも安心できないのが不思議だ。
――むしろ、セルクがルシルの庇護下に入ったと考えればどうだろう。
そういう面もあるのは事実だ。が、だから安心できたかというと、そこはさっぱりである。
ともあれ、沙漠から来た未亡人を装うのにも限界が来ていたため、人の出入りが激しいのを幸い、なんやかやとごまかして未亡人の存在を消し、ファル

バーンはファルバーンとしてここにいるそうだ。《黒狼公》領で雇われた、ヤエトの護衛という触れ込みらしい。

そもそも、逆賊と決めつけられかねない亡国の王子が北嶺にいること自体、ヤエトとしては避けたい事態だったのだが、彼が論理的な思考をできるまでに回復したときには、ファルバーンはもう当然という顔をして彼の護衛におさまってしまっていた。無駄に騒いで送り返せば、いらぬ注意を惹くことになるだろう。

――しかし、摑めないといえばファルバーンの方が摑めないと思うがな。

ジェイサルドもいないし、アルサールには厨房での仕事があるので、ファルバーンが護衛をつとめてくれるのは好都合なのだが、相変わらず、ヤエトは彼のことが理解できない。

なんのために、ヤエトに仕えているのか。

預言者の言葉があるからか、あるいはほんとうに沙漠の民を受け入れたことに恩義を感じているだけなのか――ほかに、なにかあるのか。

まったくわからないな、と思いながらヤエトもファルバーンを見、そして命じた。

「はずしてくれ」

無言で一礼して、ファルバーンは扉の外に出た。見送った顔をヤエトの方に戻して、商人はささやいた。

「あれ、まずいでしょう」

「なんのことです」

「あの眼ですよ、眼」

そういえば、眼の色は少し珍しいという話だった。ならば今の発言は、商人がファルバーンの出自に気づいた、という意味だろう。

「惚れましたか」

「……さらっとなにいっちゃってるんですか、もう、違うに決まってるでしょう」

「あれで女装も似合いますよ」

「そりゃ知ってますがね」
なるほど、未亡人の正体も発覚済み、ということだ。次に気になるのは、皇帝に報告済みであるかどうか、という点だ。
「彼は《黒狼公》の庇護下にあります。滅多なことはしないし、させません」
ヤエトは眼を上げ、商人に視線を返した。そして、微妙としかいえない表情をしている彼に、尋ねた。
「なにか、問題でも？」
「わたしは、訊かれたら返事をしなきゃなりませんよ。嘘はつけない。わかってますか」
「訊かれなければ教えないということですね。感謝します」
「暢気なんだからこの人はもう！」
商人は頭をかきむしろうとでもするかのように両手を上げ、途中でやめた。ふと、この男が自分のように、呪うべき人物一覧表を作っているとしたら、ヤエトの名は上位に位置しているのかもしれないなぁ、と考えた。
気の毒ではあるが、では言動をあらためよう、とも思わないから、下位への転落は望めそうもない。
「それで、陛下のご勘気のほどは？　大雑把なところすら知りませんのでね。王が、あまり詳しく教えてくださらないのです」
「……それはご心配でしょう」
少し考えてから、ヤエトは答えた。
「ええ」
皇女が直接の連絡を避けているのは、ヤエトに知られては都合の悪いことがあるからではないか。
伝達官は、ヤエトに伝えている以上のことはなにも知らないという。騎士に文を託して《黒狼公》領にも連絡してみたが、代官もさしたる情報は手に入れていないようだった。
文といえば、宮廷の動静を伝えるミアーシャからの文も期待できない。届いたとしても、エイギル宛のものをヤエトが勝手に読むわけにはいかないのだ

が、そもそもエイギルは博沙国へ向かったルーギンに代わり、皇女の護衛をつとめるべく、今は都にいるのだ。夫が都にいるのに北嶺に文を送る妻はいない――ミアーシャからの文が途切れてしまったのは、そういう事情だ。

地獄耳のジェイサルドは鉱床での戦闘を率いるべく出陣して戻って来ないし、その戦の趨勢も、報告で聞く限りではあまり芳しくない。帝国の正規軍の一部として戦っているのだが、率いているのが第五皇子で、どうやら踏野太守と秘密裏に交渉しているようなのだという。

詳細はしるされていなかったが、おおむね、太守が隠し財産をいくらか差し出すことで、隠れ場所と身の安全の確保をはかってでもいるのだろう。あるいは、鉱床の管理はすべて御用商人の独断でやったこととして、太守から責任を切り離し、現在の領地と地位の維持を狙っている可能性もある。

ふつうにやれば、後者は無理だ。皇帝にうまく話して調停へという流れをつくれる可能性は、低い。第五皇子にその才覚があるとは、ヤエトには思えなかった。

だが、たとえ低くとも可能性は皆無ではない。望ましからぬ隣人である踏野太守を潰す機会は、徹底的に利用すべきだ。もっといえば、第五皇子の弱点も、握れるなら握っておきたいところだ。

確たる証拠を摑むため、暫し時間を……という文を託された騎士が来て、そうせよと応じてしまえば、ヤエトにはもうできることはない。そうこうする内に、皇帝直属の騎士団が派遣されて来て、第五皇子から指揮権を奪ったという知らせが届いた。たかが鉱床ひとつ、制圧にもたついていては、皇帝が業を煮やしても無理はない。

これで踏野太守は終わったな、とヤエトは確信した。交替要員として現地へ向かう騎士に、巻き込まれないようにとだけ念押しをした。ジェイサルドのことだから、ヤエトが直接采配するよりもよほど安

心だが、……そうせずにはおれなかったのだ。
とてつもなく暇で、気が急いて、不安だった。
認めたくないが、彼は情報に飢えていた。
そこへ、おいしい餌をたっぷり持ったナグウィンがあらわれたのだ。なにかの罠ではないかと疑いたくなる反面、罠でもなんでもいいから教えろ、と襟元を摑んで揺さぶりたい衝動にも襲われる。
ヤエトの表情からなにか不穏なものを読み取ったのか、商人は早口に告げた。
「きっかけは、馬なのです」
「馬ですか」
北嶺人の鳥馬鹿には及ばないものの、帝国人も馬がかかわると少しおかしくなる。騎士にとっては、戦場で生命を預けるものだからと考えれば、重要視するのは無理もない。だが、それにしてもどうなのか、という程度のおかしさである。
つまり、異民族のヤエトから見れば、かなりおかしい。商人の眼にも、おそらく奇態なことと映るであろう。
「《灰熊公》が、沙漠越えに名馬を率いておられたのは、ご存じかと思いますが。だから今も、名伯楽として名を馳せておいでになるわけですがね」
「そうですね。それは知っています」
即席貴族の基礎知識としてルーギンに叩き込まれた限りでは、《灰熊公》は馬こそ我が魂という人物である。西の旧帝国で、さる一族の粛正にともなって、馬までもが惨殺されたという事件があった。《灰熊公》は、それが皇帝本人の命によるものだと確認して、憤激した。皇弟に、蜂起するなら自分が味方だと断言したらしい。それも宮廷で、衆人環視の場で、というから馬鹿丸出し。いっそ天晴れというところだ。
皇弟は、このままでは《灰熊公》も自分も粛正の対象になると考え、それで沙漠越えに《灰熊公》も誘ったのだというが、首尾よく沙漠を渡り切った暁には、馬の飼育にもっとも適した土地を《灰熊公》

に与え、良馬の血統を護り育てて行くことをこそ彼の職務とせよ、と説いたとか説かなかったとか――そんな話を教わりながら、説いたのか説かなかったのかどっちなんだと確認したところ、どちらにせよ現状はそうなってますね、と躱されてしまった。

つまり、《灰熊公》は沙漠の西から連れて来た名馬の子孫を増やすのが仕事らしい。馬の名前はもちろん、誰が父親だ母親だという血統図を暗記している人種だろう。

ヤエトにはよくわからない世界だが、北嶺人の鳥に対する反応を見れば、類推できる。誰の子どもがどうしたこうしたと、親戚の子を語るように、いやもっと熱を入れて語れるに違いない。

商人は、声をひそめてつづけた。

「盗まれたんだそうで」

「《灰熊公》の馬が、ですか？」

「正確なところを申しますと、《灰熊公》から《金獅子公》が買い付けた馬を、四の君が後から奪い取ったとか。牧場の官吏が逆らえないのをよいことに、生まれる前から《金獅子公》に引き渡す約束になっていた子馬を含む五十頭を、無理矢理ご自分のものになさったそうです。代金と称するものは、置いて行ったんだそうですが」

「……たりない？」

「いや、《灰熊公》が、こんなもの受け取れるか、と送り返したそうですがね……その使者がまた、斬られてしまったんで」

なるほど、とうなずいてから、ヤエトは尋ねた。

「その情報は、どこから？」

「やんごとなき筋ですが、公がお考えになるのとは違います」

「違う？」

現状、商人には情報源がない。少なくとも表向きは、城の使用人や、顔見知りの北嶺人らとの雑談の範囲でしか、彼は外界の噂を仕入れるすべがない。

だが、伝達官としての能力を使えば別だ。

その場合、商人に伝える情報は皇帝が完全に制御し得る。すでにナグウィンが北嶺にいることは承知しているだろうし、ならば、なにをどれだけヤエトに伝えるかも、皇帝が決定できるだろう。

だが、商人はそれを否定した。

ならば、誰が、誰のためにもたらした情報なのか。

さっと思い浮かんだのは皇女だが、それは可能性が低過ぎた。皇女はヤエトに連絡したくないのだ。直接的な連絡は見張られているからと、迂遠な方法で情報を与える可能性は、なくもない……が、きわめて低い。

第一、ナグウィンは皇女の伝達官ではない。皇女の恩寵の力は、自分の伝達官以外に言葉を伝え得るほどは、強くないはずだ。

次に思い浮かんだのは、あまり連想したくない相手だった。

「まさかとは思いますが……皇妹殿下？」

「わたしはなにも申せませんよ？　ですが、そんな芸当のできるかたは、皇妹殿下以外にはいらっしゃいませんからね」

竜種と伝達官の固有の絆を結び変えたり、割って入ったり。皇妹ラキニーには可能だそうだから、あり得るとは思うが、やはり考えたくない。あまり、という表現では手ぬるい。全然とか絶対にとか、ものすごく想定したくない相手である。

が、現実とはつねに、彼の考えたくない方へ方へと向かっているものらしい。

「恩寵の力で？」

念のために尋ねてみると、商人はうなずいた。これで否定のしようがなくなった。

恩寵の力で伝えられた情報であるなら、多少の詐術が紛れ込む隙こそあれ、その根幹は真実であるとしか考えられない。

確実なのは、《灰熊公》の馬を第四皇子が奪った、それも《金獅子公》が予約していた馬を——と、いうことだ。どちらも四大公家に数えられる大貴族で

ある。それを一気に敵に回したわけだ。

――二の君と揉めたのは関係ないのか。

むしろ、揉めた相手が二の君であればよかったのかもしれない、と思う。あの皇子なら、その場をおさめることを重視し、荒立てずに話をおさめた可能性は高い。

だが、相手は《金獅子公》だ。いや、《金獅子公》だけならまだいい。彼は計算高く、実利を重んじる人物だ。必要なら譲って見せるだろう。もちろん、第四皇子の評価を地の底まで落としながら、ではあるだろうが。

問題は、《灰熊公》だ。

帝国貴族の価値観では、馬は特別な存在だ。中でも《灰熊公》の馬といえば、別格なのだ。

一般に、貴族の役職として評価が高いのは、軍における地位である。だが、《灰熊公》自身は単なる大貴族というだけで、なんたら将軍だの司令だの参謀だのという役職には就いていない。彼はただ、天領の馬場の監察官であるだけだ。

その天領が《灰熊公》の領地と隣接しているわけで、実質、税のかからない放牧地を皇帝が貸しているようなものだ。

だから、《灰熊公》は資産家である。馬が財産だし、その馬で儲けた金もある。かつて、一介の尚書官として収税にかかわったことがあるので、ヤエトは《灰熊公》の監察官としての表向きの収入を知っており、これでは貴族らしい派手な暮らしはできないだろう、自領からのあがりで食えということかと帝国の悠気に呆れていたのだが、実情を知るようになった今では、むしろ《灰熊公》に俸祿を支払うなどとんでもない、と思っている。天領の貸借料を請求して、帝国の収入に計上すべきだ。

《灰熊公》はまた、権力者でもある。

おまえに馬は売らないと《灰熊公》にいわれたら、貴族としては終わりですよ、とルーギンからは教わっている。ヤエトはまだ売るとも売らないともいわ

れていないが、それは彼が馬に乗らないから、異人種だから、尚書卿と呼ばれる変人だから済んでいるだけだ。れっきとした帝国貴族であれば、《灰熊公》の馬に乗るべきだそうだ。

第四皇子は貴族ではなく、竜種である。だが、だから《灰熊公》の馬に乗れなくても平気である……とは、ならないだろう。本人は貴族など見下していたに違いないが、世の中の価値判断基準は、彼と同じではない。

そして、《灰熊公》は、西の狂った皇帝にさえ公然と叛旗をひるがえしそうになった人物だ。直情径行型だろうし、損得勘定で取り引きなど持ちかければ、さらに怒らせるだけだろう。彼を動かすのは、馬への理解と愛情に違いない。

皇帝がどちらを支持するかといえば、《灰熊公》で間違いない。もしも、自分の子だからと第四皇子を庇うなら、それは偽者である。これほどの状況判断の間違いを、皇帝が許すはずがないのだ。

――皇妹がこれを報せて来た意図は、なんだ。

なにを考えているかわからない人物の一覧表をつくったとしたら、第一位には皇妹が居座るはずだ。彼女の考えることがわからないのは、ヤエトが女心の機微に疎いせいではなかろう。もっと徹底的に、理解不能だ。

「わたしに教えよと？」

「どうでしょうね。ですが、陛下にってことはないでしょうし、わたしが公と親しくさせていただいているのは、まぁ……ご存じですしね」

「なにかあると、たよってしまいますからね」

「だからそれをやめてくださいと」

ヤエトは笑った。なんとなく、久々にちゃんと笑えたような気がした。

「暫しは自重するとしましょう。あなたもいろいろ大変だったでしょうしね」

「いろいろねぇ……」

「いろいろですね」

商人は、ため息をつき、ヤエトもそれに倣った。
するとなぜか、嫌そうな顔で見られた。
「なんで公がそんな、はぁぁ、って」
「ため息多めの人生ですが、知りませんでしたか」
「存じませんよ。あれほどの立身出世譚の主人公でいらっしゃりながら、はぁぁ、ってあなた」
「芝居の見過ぎですよ」
即座に応じると、商人は、うっ、と詰まったような声をだした。なるほど、彼もあの唾棄すべき演芸を鑑賞しているらしい。
「いやぁ、でもあれは、よくできてますよ」
「現実を見るべきですね。わたしは剣をふり回すどころか、剣にふり回されてころんで怪我をしてそのまま寝込みかねない軟弱な男ですし、なにもしなくてもこうやって寝込んでいるわけですし、だいたい、したくもない出世をして喜ぶはずがないでしょう。わたしがしたいのは、出世じゃない。隠居なんです。世間の動静など知らぬ存ぜぬで、のんびり、だらけた暮らしがしたい。なのに、それができないんですよ。落ち着いて隠棲するためには、今の地位も役職も捨て去らねば無理ですが、それが許されると思いますか？　ため息が尽きなくても無理はないんです、当然なんです」
「……雄弁でいらっしゃる」
「隠居がからむと、いくらでも喋れます」
ヤエトの答に、商人は肩をすくめた。
「わたしまで隠居がしたくなってきましたよ」
「いいですよ、隠居。是非するべきです。残念ながら、わたしは未体験ですがね」
「すごい詐欺にあってる気分です」
「皇妹殿下は、都においでなのですか？」
「は……」
い、と答えきる前に、我に返ったらしい。ナグウィンの眉が、困ったときの形になった。かまわず、ヤエトは話をつづけた。
「わたしがお邪魔すると、お伝えすることは可能で

しょうか」
「お……ええ？　もう大丈夫なんですか」
「なにがです」
「いや、だから、ご健康とかですね」
「健康ですか。それには自信がありませんので、なんとも申せませんね。できれば、陛下と皇妹殿下のおふたりに、内密にお会いしたいのです。面倒な手続きは抜きにして」
　いかに皇帝じきじきに友よと呼びかけられ、直言を許されたといっても、気安く会うことはできない。ヤエトが面談を申し込んだという情報自体が皇帝のもとに届かないまま、延々と待たされかねないのだ。そういう地味な嫌がらせは、すでに何度か体験している。
「いや、ちょっと待ってください、そんなこと」
「いっそ、阿呆馬鹿間抜けの揃い踏みにしてしまった方がいいような気がするんですよね」
　商人は、まるで空気がないとでもいうように口をぱくぱくさせていたが、やがて肩を落としてつぶやいた。
「おかしいでしょう。ついさっき、あまり困らせないようにするとかなんとか、そういう意味のことを仰せになったばかりではないですか」
「おや、これでもかなり自重していることを、おわかりでない？」
　商人の顔には、どのへんが自重？　と書いてあった。顔芸だけでは飽き足らなかったのか、本心がぽろりと言葉になってこぼれ出る。
「……わかりませんて」
「これ以上ごねるようなら、もっと面倒くさいことをお願いしますよ。それも断れないように。今すぐ引き受ければ、連絡をつけるだけで済みます」
「どんな」
「説明してもかまわないのですか？　そんな手間を割くことになれば、当然、面倒くさくて断れない方を引き受けてもらうことになりますが」

ナグウィンはまた、大きなため息をついた。
「公は……」
「はい？」
「わからないかたですよね」
「そうですね。自重しても伝わらない程度には、わかりづらいようです」
「いったい、なにをなさりたいのです」
「さっきも話したではないですか。わたしにはとくに望みはありません。強いて挙げるなら――」
ヤエトは言葉を切り、少しだけ考えた。
自分がしたいことなど、とくにない。それは、嘘ではなかった。
「お仕えしている北嶺王の、お望みになることを」
「姫様の、お望みになることですか」
「ええ」
「それなら、公が元気で長生きなされば」
商人の返答を、ヤエトは鼻で笑いとばした。
「それは、わたしがどうにかできる範囲を超えています」
「いや～、そうでしょうか。もう少しご無理なさらないように、せめて危険な場所に突っ込んでいかないようになさるとか……」
「陛下や皇妹殿下にお目通りを願うなど、もってのほか、ということですか？」
商人は眼をしばたたいた。
「いやいやいや、そうじゃなくてですね」
「で、どうします。説明しますか。説明を聞いて、面倒くさくて断れない方を引き受けますか」
「いや結構です。慎んで、簡単な方を引き受けさせていただきますよ。でもこれ、断れないというのは同じですよね」
どっちみちそうなんだ、とぶつぶつ唱えている商人に、ヤエトはうなずいた。
「そのようですね。では、よろしくお願いします。明後日の夕刻に伺います、と」
「えっ。しかし、先方のご都合が――」

「調整してください」
　ナグウィンの返事は、悲鳴のようだった。
「わたしがですか！」
「ほかに誰が？　たよりにしてます、よろしくお願いします」
「……たよらないでくださいよ、ほんとうに」
「気もちはわかりますよ。わたしもよく思います」
　我ながら実感のこもった台詞だと思う。たよられるのは大変だし、とても疲れる。
「わかるんなら手心をくわえていただけませんか」
「ですから、これでも自重してますよ」
　今度は、商人はただがっくりと肩を落としただけだった。諦めの境地に達したらしい。ひときわ大きなため息をついて立ち上がると、これ以上なにか用事を押しつけられるのを恐れてか、挨拶もそこそこに退室してしまった。
　入れ替わりに戻って来たファルバーンに、ヤエトは声をかけた。
「厨房に行って、携行食の準備を」
「量はいかほど？」
「騎手二名。二日分を。出立は日没前。それから、ナオ殿にも連絡を。出先で服用しやすいような薬がほしいと伝えてください」
「わたしは？」
「留まってもらいます。ここに、仕事があります」
　ファルバーンには、ナオを見ていてもらわねばならない。悪神とは水と油のように相容れない力を持つファルバーンなら、ナオが悪神に魅入られそうになれば、すぐに察することができるだろう。それがわかっていれば、ナオ自身も安心できるはずだ。不愉快でもあろうが。
「ですが」
「わかっているのですか。ここに来るだけでも危険なのです。都へ行けば、なおさらです」
「危険など――」
　ファルバーンがなにか愚かなことをいいかけたの

を、ヤエトは遮った。
「自分のことしか考えないようでは、とても連れては行けませんね」
効果は覿面だった。
むっつりと黙ってしまった青年に、ヤエトはさらに畳み掛けた。
「《黒狼公》領に査察が入れば、せっかく生き延びた沙漠の民の運命はどうなります。わたしだけならよし、王の身にまで責めが及んでしまえば、誰もあなたがたを庇護できない。そこまで考えましたか」
碧緑の眸は災いのもとだと、ナグウィンがせっかく示唆してくれたのだ。その情報を無視するわけにはいかない。
それでもファルバーンは、抵抗をこころみた。
「わたしは公をお護りすべきなのです」
「預言者にいわれたから?」
ぐっ、と口を引き結んで、ファルバーンは視線を落とした。その通りなのだろうが、それを認めればヤエトの反感を買うだけなのも、わかっているのだ。
――結局、預言か。
ターンの神の気配は、ここにはない。あのとき、あれほどはっきりと存在した神が、今では不確かな幻のようにしか思えない。
この身に神を宿したヤエトでさえ信じきれないものを、どうして人は信じるのだろう。失われていく一瞬一瞬を惜しみながら、既知の未来を語り、今に干渉しようとする神を、彼は今でも好きではない。
いや、好きではないなどという表現は、あたらないだろう。なにか憐憫めいたものは感じるが、はっきりと、嫌いである。
預言が人の心に及ぼす影響を知っていながら、その力を揮うことに躊躇しない、その傲慢が嫌いだ。
そして、いかに神の力が絶大であろうとも、預言を根拠に行動の正統性を訴えるなどという考えも、正直いって大嫌いだ。
好悪の感情はひとまず措いておくとしても、漠然

とした預言だけでは、ファルバーンの同行を許すわけにはいかない。
「都へ行って、おまえの出自が発覚すれば、わたしは破滅です。護られるどころではない」
「しかし、ご一緒することで危険があるなら、預言者が教えてくれているはずです」
「この先起きる災難のすべてを、ひとつずつ、つぶさに説明してくれているはずだとでも？　預言者はそれほど暇ではないでしょうし、神もそこまではなさらない。なさるはずがない」
「ですが――」
「ターンの神は口出しが多過ぎるとわたしは思っていますし、黙ってやがれというのが正直な気もちです。ですが、神もすべてを語られるわけではない。ここぞという場面でのみ、正しい選択をうながすため、心に勇気を与えるためにお言葉をくだされるのです。人の智慧で考え、判断し、行動することまで、神は否定なさっているわけではない。それを、わかっていますか。ただ同行したい、危険を顧みずに都へ行きたいというのは、どうでしょうね。自分がやりたいことを考えなしに主張して、その責任を預言に押しつけているだけのように、わたしには思えます。愚劣で、卑怯だ。見苦しいふるまいです」
　厳しい言葉を投げつけると、ファルバーンの顔色が変わった。
　ヤエトは少し、声の調子を落とした。
「考えなさい。考える自由を捨ててはいけない。ここは自分で考えるところです。わたしは留まれと命じ、ここに仕事があると告げた。それに逆らっても同行すべきと信じる理由が、なにかありますか。わたしを、説得できますか？」
「……いいえ」
　ようやく負けを認めたファルバーンに、ヤエトは手をふった。
「わかったら、行きなさい。大丈夫、護衛はちゃんと都合をつけます。凄腕のをね」

3

ぼんやりと、ヤエトは露台に面して置かれた長椅子に座っていた。いや、座っていると主張するにはずいぶん上体が斜めになっていて、横たわっているというには起きている、それくらいの中途半端な恰好だ。

このまま寝てしまうと首やら腰やら背中やらが痛くなるだろうなぁ、と見当はつくが、心地よい夕風に吹かれて空を眺めていると、眠りこけてしまいたいという強烈な誘惑にかられるのも事実であった。

脇に置かれた小卓には、香りのよい茶が湯気をたて、焼き菓子が盛られた皿もある。至急決済の書類を持って来た代官を追い払い、誰も通すなと厳命してしまえば、それなりの時間は確保できる。

つねに見張られているわけでもなく、窓や扉を閉められてしまうわけでもなく、風が吹き過ぎるのを感じるままに時間を過ごすなど、北嶺では許されなかったことだ――もちろん、北嶺の風はここは段違いに冷たいから、同じようにしたらすぐに体調を崩してしまうのはわかりきっていたが。

この自由な時間がすぐに終わってしまうのもまた、自明のことだった。

「旦那様」

控えめな声に、ヤエトは頭を背もたれから上げ、扉の方を向いて尋ねた。

「なんだ？」

「お夕食を、お持ちしました」

「ずいぶん早いな」

「少量ずつ、時間をかけて、たくさん召し上がっていただこうと……厨房の皆が申すので」

「なるほど」

まず羹（あつもの）を、とスーリヤは蓋をした陶壺を卓に置き、ヤエトに手を貸して起き上がらせた。それから、少し眉根を寄せた。

「どうした？」
「また、お痩せになったのではないかと」
「そうでもないと思うが」
「でも、お手が……骨の形が前よりも、はっきりと浮いているような」
「自分のと比べているのではないか？　女の手と並べれば、骨っぽくて当たり前だろう」
　ヤエトの手を自分の手に乗せて眺めていたスーリヤは、不意に自分が無礼をはたらいていると気づいたらしく、赤面して手をはなし、腰をかがめた。
「失礼を申しました」
「いや、ずいぶんと気苦労をかけているようだ」
　そんな、と口の中でつぶやいて、それからスーリヤは焼き菓子の皿をとりあげた。
「こんな風に、申し上げるつもりでは、なかったんです」
「うん？」
　羹の蓋をとって器を覗き込んでいたヤエトは、顔を上げ、スーリヤを見た。これを去年は少年と思い込んでいた自分の不明に、今さらながらびっくりだ。どこからどう見ても女である。
「久しぶりにお戻りになられたというのに、こんなことを申し上げるつもりではありませんでした。考えておりましたのに、ずっと……」
「ずっと？」
　ヤエトの不在中、彼が戻ったらどういう言葉で出迎えようか、考えていたということか。
　こくりとうなずいたスーリヤを見て、微苦笑を隠せなかった。ずいぶん大人びたと思ったが、中身はまるで子どもではないか。
「そうか。留守中、なにか不自由はなかったか？」
「なにも」
　なりゆきとはいえ、ヤエトはスーリヤの保護者のようなものになってしまった。彼がいるからスーリヤはここに来たというのに、その彼が不在がちでは、不安も多いだろう。

この公邸には先代から仕えている者も多いし、なにより土地柄が違う。他所から来た、新しい主人に贔屓されているように見える新入りには、辛くあたる者もいるのではないか。

だが、尋ねてもスーリヤは不平を口にしたりはしないだろう。そういうところは自分で呑み込んでしまうような性格に違いない。それはなんとなく、わかってしまう。

「あの……」

ヤエトが目顔で先をうながすと、スーリヤは少し口籠ってから、言葉を絞り出した。

「ご無事のお戻り、嬉しゅうございます。……皆も喜んでおります」

これが、ずっと考えていたという出迎えの言葉なのだろう。なんということはない歓迎の挨拶なのに、妙に意識してしまい、返す言葉に迷った。

「厄介な病人がいないと、手が空いて暇だろう」

結局、そんな風に混ぜ返すと、スーリヤは視線を落として、はい、と答えた。

「旦那様がいらっしゃらないと、いろいろ、困ります。手も空きますし、なんだか……ぼんやりしてしまいます」

「勤勉なのだな。わたしなら、仕事がなければ、いくらでもだらだら過ごせる自信がある」

「そうでしょうか」

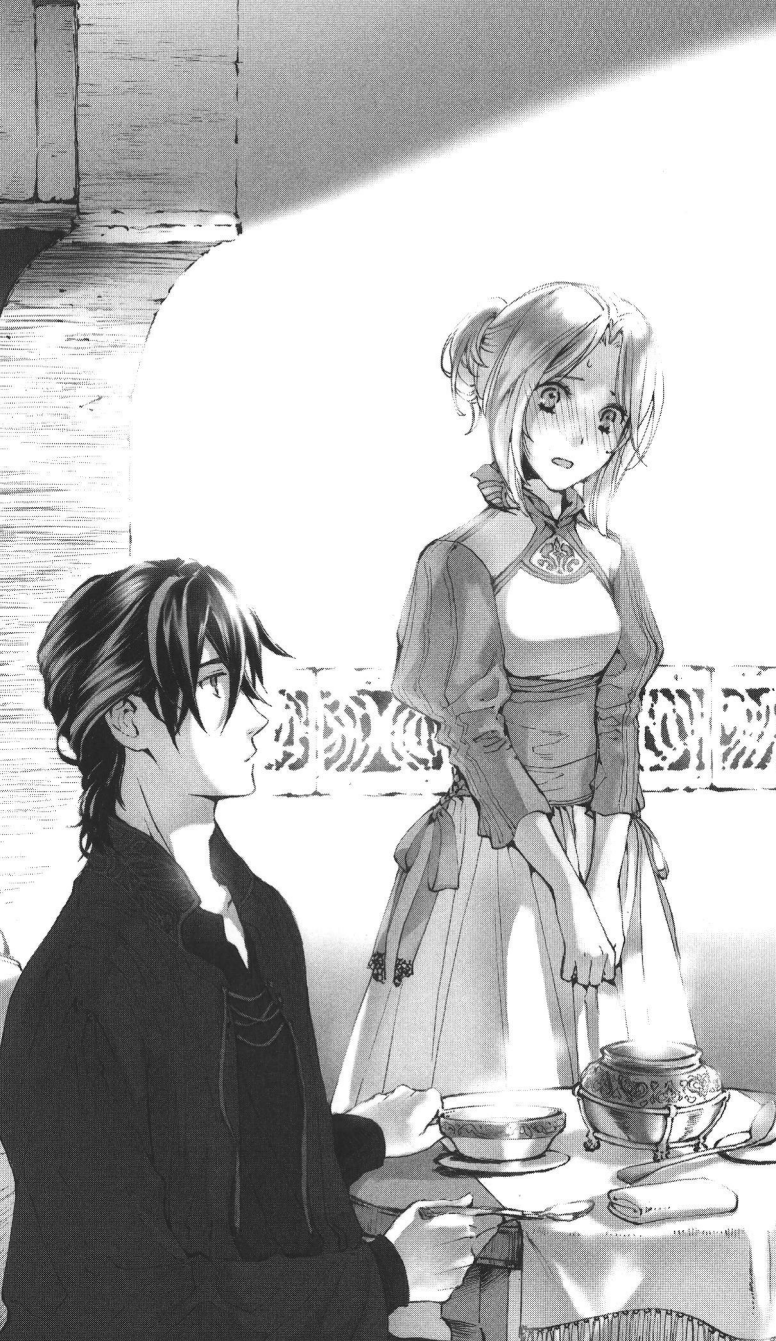
「そうだとも」

「でしたら、だらだらなさればよいのです。北嶺で呼ばれたとか、今度は都だとか、気忙しく飛び回られずとも、ここでのんびりなされば。そうしたら、わたしも……皆も、安心いたします」

「ここにいても、いろいろ仕事はあるがね」

「そんなもの、お命じくだされば、すべて門前払いにしてしまいます。旦那様が、お休みになりたいとお考えでしたら、誰も逆らう者はおりません。むしろ、皆が喜びます。代官様にだって、嫌とはいわせません。先ほどのように書類を積んでいらしたら、

わたしが追い払ってさしあげます。ずっと、扉の前で番をいたしますから」
力説された。
苦笑して、ヤエトは答えた。
「そうか。留守にしているあいだは、どこか目の届かないところで倒れているのではないかと、さぞ案じられているのだろうな」
「もちろんです」
即応してから、いささか喋り過ぎたとでも思ったのだろう、スーリヤはまた困ったような顔になり、それから今度は厳しい表情でヤエトを見下ろした。
なんだろうと思っていると、さあ、と器をさして命令された。
「お食べになってください。全部お食べになるまで見張っておけと、皆にいわれて参りました」
「周到なことだが、それより、もうひと皿、用意してもらえないか。夕食をひとりで食べるのは、いささか味気ないのでね」
「え？」
遠くの空に浮かんだ黒い点が、みるみる大きくなってくる。
「空から来客があるのだ。扉の前で頑張ってくれても、追い払うのは無理だろうな」
スーリヤは顔をしかめて窓の外を見ていたが、自分の様子をヤエトが窺っているのに気づき、さっと面を伏せた。頬が真っ赤になっている。
「申しわけありません」
「なんで謝るんだ。あれはわたしが呼んだのだから、追い払われては困る客だし、……いいから厨房にたのんで来てくれ、我儘な主人に仕える身の不幸でも、ともに嘆くとよかろう」
一礼して踵を返しかけ、スーリヤは動きを止めた。
「いつも誰か、なにか、ほかのことばかりで、ご自分のことは後回しになさるようなかた、誰も我儘だなどとは申しません。旦那様は、もっと我儘になってください」



なにを思い詰めたような顔でいうかと思えば、そんなことか。
「それは思い違いだろう。わたしは自分のやりたいことしかやっていない」
「そんな」
「納得しないことは、やっていない。本当だよ」
反駁しそうなそぶりを見せたものの、スーリヤは無言で退室した。
露台からの客は、それから暫しの後に訪れた。
「沙漠の上は、埃っぽくて嫌になる」
脱いだ上着を少し払ってから衝立の端に引っ掛けると、鳥の世話をするための用具を勝手に取って、また露台へと戻って行った。おそらく、卓上にならんだ膳を見て、即座に出発の必要はないと踏んだのだろう。鞍などの装具は外してやらねばならない。人よりも鳥の都合を重視して作ったとはいえ、所詮、根本は人のための道具だ。乗らないとなれば即座に外すのが鳥への礼儀である、と厩舎長にはいわれている。
礼儀という言葉が出てくるあたりが北嶺だ。
ひと通りの作業を終えたのだろう、室内に戻るとルーギンは椅子を動かし、ヤエトの向いに置いた。
「口を漱がなくても？　水ならそこにあります」
いつ鳥が来るかわからないので、この部屋の露台には水瓶が用意されている。この水瓶の中身を交換するのも、スーリヤの仕事らしい。ヤエトが不在でも、暇ということはなさそうだ。
さすがに乗り手のための水は用意されていないはずだが、ルーギンは肩をすくめて答えた。
「なんだかすごい敵意を感じたってハーマンがいうんだけど、誰です？」
――敵意？
ハーマンというのはルーギンがいつも乗っている鳥の名だ。鳥は人の心を読むとはいえ、距離があっても届く相手となると、限られてくる。
思い当たるまでに少し時間がかかったあいだに、

ルーギンはヤエトが酒を隠している場所から、勝手に瓶と杯を持って戻って来た。あまりにも当たり前のような顔でやってのけるから、止めようもない。

「追い払ってもらうべきだったかもしれないな。それ、いくらしたと思ってるんです」

「仕入れの経路によるけど、金貨が飛んでいくくらいが相場かな。追い払うって、わたしを？」

「使用人が、わたしの休息を邪魔する者は追い払うと力説しているところに、あなたが到着したのでね。追い払えるものなら追い払いたそうでしたよ。……敵意というのは、それでしょう」

ルーギンは高い酒を無造作に注ぎ、一杯ひっかけてから、ああ、と声を漏らした。

「生き返るなぁ。なるほど、それは例の、あの娘ですか。伝達官の素質があるとかいう。それなら鳥がびっくりするほどでも、おかしくないな」

「貴族の血が入っていますからね、おそらく」

「……それもそうだけどね」

ルーギンは苦笑して、うんうんとうなずいた。

「なんです？」

「いや、ちょっとハーマンと話してただけです。それで、本人は知ってるんですか？」

占いによれば、スーリヤは《銀鷲公》の血筋らしいという話は、エイギルの妻からの情報である。伝達官としての素質があることを考慮すれば、誰にせよ、貴族の血を引いているのは確実だ。

「父親は帝国人らしいとは、察しているでしょうが……それ以上の話はしたことがありません」

うーん、とルーギンは二杯目を注ぎながら眉根を寄せた。それから扉の方にちらとだけ視線を遣り、また酒に注意を戻した。

「それでいいんだろうな、たぶん」

ルーギンのつぶやきが消えるか消えないかのところで、扉が開いた。

女性には愛想のいいルーギンだが、使用人は、基本的には視界の外だ。大貴族の若様らしく、存在自

体を無視するのに慣れているということだろう。
だが、完全に意識の埒外に置いているわけではなく、今のようにさりげなく注意を向けることもあるから、おもしろいなと思う。
「まだ食べていらっしゃらない……」
スーリヤがつぶやいたので、ヤエトはあわてて匙を持った。もうひと皿をルーギンの前に置くと、スーリヤは一礼して退室した。
匙を握ったままのヤエトを見て、ルーギンは、にやりとした。
「先生は、変な風に人気がありますよね」
「……なんですか、それ」
「体調管理に夢中になる下僕続出、とでも？」
ヤエトはなんともいえない気分になった。
「ジェイサルドとか？」
「そう、あの爺さんが筆頭です。いや、姫様も筆頭を争う勢いかな。今の娘もそうだし、ほんと、枚挙に暇がないとはこのことですよね」
「……健康にならなくては」
「いい決意です。頑張ってください」
ルーギンは笑って、自分の前の皿を、たった三口で空にした。酒杯の方もすぐ空になったようで、容赦なく注ぎ足しながら、それで、と尋ねる。
「都へは、今夜中に？」
「いえ、今夜は休んでもらいます。そちらはよくても、わたしの方の体力に疑問があるのでね。北嶺からここに着いて、すぐまた都へ移動では、まともに動ける自信がありません」
杯を持ち上げて、ルーギンはまた笑顔を見せた。
「ああ、それは好判断かな」
「たっぷり呑めるし、ですか？」
「よくわかりましたね。さすが先生だ。……詳しい説明もしてもらえそうですしね。博沙まで飛んで来た騎士の説明では、よくわからなくて。都への同道を願う、としか。北嶺でおとなしく療養しているはずの先生が、なぜ都へ？」

「こちらも伺いたいところです。王に同行したはずのあなたが、なぜ、博沙国に？」

北嶺に戻って以降、交替の騎士を通じてルーギンの様子は聞いていたが、ただ皇女の命令で博沙国に行った、としか教えられていない。第二皇子のところで戦闘が起きたという話も聞いていないし、睨みをきかせるための派遣とも思えない。ルーギンが強いということは知れ渡っていても、第二皇子を直接攻めるところまで思いつめた相手に、挙兵を諦めさせるほどの抑止力はないはずだ。

だが、ルーギンは肩をすくめて答えた。

「食事がまずくなるような話は後回し。北方での首尾はどうだったんです？」

――どんな話なんだ。

食後に回すのもどうかとは思ったが、北方での一連のできごとについても、ルーギンには詳しく話しておくべきだと思ったので、まずヤエトの方から説明をすることにした。使節として正式に北方に滞在していたあいだのことは、ぶっ倒れて運ばれたときに皇女に話したから、おおまかな流れは耳に入っているだろうが、どうせ時間があるのだから、直接話しておいた方がよいだろう。

給仕は、はじめに宣言された通り、少しずつたくさん食べさせるという戦術に沿っておこなわれているようで、ヤエトの長い話にちょうどよいくらい、時間のかかる夕食になった。

食後のお茶を運んで来たスーリヤに、あとはもう誰も通さないようにと命じたところ、顔をしかめられた。娘が部屋を出て行ってから、ルーギンが笑いながら指摘した。

「夜を徹して語り合うとでも思われたのでしょう。案じられてますよね、先生」

「……徹夜はしません」

「追いかけて、教えてやればどうです。徹夜はしないから安心しろ、と。泣いて喜びそうだ」

「酔いましたね？」

たいがいにしろと窘めたつもりだったが、騎士はまったく頓着しなかった。まさか、と小さく笑っただけだ。

「一途なのは、ちょっと、重たいな。一方的な好意は、人をそこなうこともある。あの娘はまだ、それを知らない」

「そういうものですか」

「そういうものです。人が人に向ける感情なんて、絶対に見返りを求めずにはおられない。そうできてるんだ。無償の愛は、胡散臭い。そんなもの唱える輩に出会ったら、まず信じないかな」

「なるほど」

「情は、やりとりです。通じあうものがなければ、意味がない。さしだした好意は、剣と同じだ。柄を相手に、切っ先を自分に向けた剣ですよ。突き返せば相手を傷つけるとわかっていれば、優しい人ほど躊躇する。応える気もちがないのに、無理をする。敵意は悪い、好意ならかまわない、そんな単純なものじゃないんだ。相手を大事に思うなら、好意を見せないことを選ぶべきときもある」

そこまで語って、ルーギンはふと自分が喋り過ぎたと感じたらしい。微笑を浮かべて、酒杯に視線を落とした。

まるで酒に語りかけるように、彼は話を結んだ。

「自分の愛情に縋りつくのは、結局、いちばん好きなのは自分自身だとでもいっているようなものだ。それでも愛を知っているだけ、ましなのかな。どうなんだろう」

同じような言葉を、ヤエトは聞いたことがある。

――おまえは自分自身をすら愛していない。だから、愛を理解できない。

あまり深入りしたくない相手だが、含蓄のある台詞だとは思う。彼女は愛を知っているのだろうか、とも。

「どうでしょうね。よくわかりませんが、愛を知らない華の騎士など、想像できそうもありません」

「そうかな。たまに、自分が愛についてなにを知っているのかが、よくわからなくなります」
「わたしよりはずっと、ご存じだと思いますが」
ルーギンは鼻先で笑いとばした。
「先生を基準値にするのは、どうかと」
「そうですか」
「もっとも、家族の愛情なら、先生の方がずっとお詳しいでしょうね。さっきの話を聞いても、思いました。大人がもっと子どもを支えてやれとか、家庭でちゃんと育てろとか、そういう発想がすんなりできるのは、先生が家族の愛を知っていて、信じているからじゃないかな」
どう応じるべきか、ヤエトは少し迷ったが、結局、はじめに思い浮かんだ言葉を告げた。
「あなたも、ご存じでしょう」
ほかに思いつかなかったのだ。
ルーギンは眉を上げ、意外なことを聞いたという表情だ。だから、言葉をつづける羽目になった。
「お父上に憧れておいでだったから、騎士としての道を迷わず歩まれたのでしょうし、お母上やご兄弟への哀惜の念が強く忘れがたいのも、家族への愛情があるからではないですか」
「失われた愛です」
「でも、知らないわけではない」
「……そうですね。裏切られたわけですが」
淡々とした口調だが、その裏に激情が隠されていることくらい、ヤエトも知っている。
それでも、敢えて反論したい気分になった。おそらく、ルシルのことを話したせいだろう。人間らしくないと兄にいわれた少女は、たしかに常識に欠けて、奇矯な言動も見せた。だが、その原因はなにかといえば、家庭に恵まれなかったせいではないか。
「お父上のことは許せなくても、今の奥方や、義理の弟君、妹君には、応えてさしあげればどうです。わたしが口出しをすることではないでしょうから、一回しか申しませんが――子どもには、罪はないの

ですよ。あなただって、あの子たちのことが嫌いではないでしょう」
暫く、ルーギンは無言だった。
怒らせてしまったかと思ったが、彼は意外にやわらかい表情で告げた。
「姫様が、仰せでしたよ」
「は？」
「先生は正し過ぎて、腹が立つって」
これはやっぱり怒ってるなぁ、と思った。が、どうしようもない。
しかたなく、正直な感想を述べてみた。
「正しいことが、つねに正しいとも限らないです」
「どういう意味です？」
「正しさを犠牲にすべきだったのかも、と後悔することも多いですよ、わたしは」
ルーギンは鼻先で笑った。
「正しくない先生なんて、そんなの偽物でしょう」
「人を追いつめたり、腹立たしくさせたりするような正しさに、なんの有用性があるのかと」
「いいんですよ、先生は先生らしくしていてくれれば、それで皆が安心するんだから。たまに腹立たしいことは、もちろん、あるけど」
「今とか？」
ヤエトの問いに、今度はいかにも楽しそうな笑顔でルーギンは答えた。
「ええ、今とか」
「いわずもがなのことを申しました」
「そうですね。でも、わかっていても、人にいわれないとどうにもならないことって、あるかな。だからやっぱり、いいんですよ、先生は、それで」
「ではもうひとつ、正しそうなことを申し上げてもよろしいでしょうか？」
「なんです」
「酒はここで終了で」
「……しかたないなぁ」
嘆息して、ルーギンは座り直した。危ない。次の

瓶を取りに行こうとしていたようだ。
「わたしを破産させるより、食後にまわした話をしてもらいましょうか」
「単純な話です。追い払われました」
ヤエトが黙っていると、ルーギンはまた、大きく息を吐いた。
「先生はよくおわかりでないようだけど、陛下に意見をするというのは、死ぬってことですよ」
「……わかっていますよ」
「いや、それはない。自分が生き延びてしまったから、全然だ。今、姫様がどんなに危ないかも含めて、わかっていないね」
ヤエトは眉根を寄せた。皇女が第四皇子の命を守るために都に留まっているというのは把握しているが、それは皇帝に対し、真っ向勝負に出ているというほどの状況なのか。
「陛下はすでに、四の君の処刑をお決めになっているのですか？」
「あのね、先生。決まってしまったことに異をとなえれば、叛逆です。それくらい、先生のお好きな歴史にも出て来るでしょう」
そうとは限らない。異をとなえただけで即叛逆となるのは、よほど強大な権力を持つ、絶対的な君主のもとでという限られた状況であるが、今はそれを語るべきときではなさそうだ。
「では、まだ決まってはいないのですね」
うんざりしたという表情でルーギンは酒杯を手にし、空のそれを独楽のように卓上で回しながら、言葉をつづけた。
「決めないのは、姫様を叛逆者にしないためです」
それだけですよ、と彼は念を押した。
「それだけ、ですか」
「それだけです。公的に宣言していないというだけで、陛下のお考えは明白です。姫様がお止めしなければ、四の君の首と胴はとっくに泣き別れてます。表立った後援者もいませんし、母君の生家も口出し

はできないでしょう」
「母后は？」
「陛下に逆らえるようなご気性ではありません。ただ、宮廷を去られたそうで、それがせめてもの抗議なのかな。末の、七の君のところに行かれたと聞きました」
――なぜ、第七皇子？
皇女とさして年齢も変わらず、帝位からはもっとも遠いと思われている第七皇子よりも、せめて、第五皇子のところへ赴けば、なにかやりようがあるのではないか。そう考えてから、第五皇子は取り込み中だったと思いだす。
帝国に隠れて私腹を肥やす商人を懲らしめるため、鉱床に出兵中なのだ。表向きはそうでも、第五皇子はその黒幕である踏野太守と繋がっており、へたをすれば自身が討伐されかねない状況であることまで、母后は承知しているのだろうか？
それもこれも自分が采配した展開だと気づいて、ヤエトは少し気分が悪くなった。ほかに、なんとかしようがなかったのか。ほんとうに、これが唯一の方法だったのか？
皇女の行動を見れば、誰も死なせたくない、兄弟で相争わせたくないと念じているのは明白なのに。それを無視し、しかたのないことと切り捨てた。
挙げ句、どうなった。
皇女自身が身を挺し、兄を庇う羽目に陥っているではないか。
――なんだそれは。
呆然としているヤエトに、ルーギンが尋ねた。
「四の君の一件、先生はどこまでご存じなんです」
ナグウィンに聞いた範囲でしか知らないので、それを説明すると、騎士は顔をしかめた。
「重要な点が、抜けていますね」
「なんです」
「《灰熊公》の対応です。四の君を突き出せ、馬盗人として処刑してやる、というのですよ」

「まさか」
「やりかねない人なんです」
「ですが、仮にも皇子殿下ですよ？　いかに《灰熊公》であっても、それは」
「不穏当に過ぎます。だから、陛下が処刑をお命じになるしかない」
ああ、とヤエトは声を漏らした。ほかに言葉があたらなかった。すべてわかったという気もしたし、そんなもんわかるか、とも思った。
そんな面子（メンツ）のぶつかりあいのために、皇女の立場はおろか、命まであやういだなど、絶対に、承服できない。
「どこまで陛下の我慢がつづくかなんて、誰も賭けたくないですよ」
ルーギンはそう評したが、ほんとうのところ、皇帝はなにを我慢していると見るべきなのか。《灰熊公》の呆れた直情径行っぷりか、それとも立場をわきまえぬ第四皇子の馬鹿さ加減か。あるいは、皇女の情け深さだろうか。
おそらく、こんな馬鹿な問題で愛娘の命が危険にさらされること自体を、誰よりも疎ましく思っているのは、ほかならぬ真上皇帝なのではないか。
「それで……おとなしく追い払われてしまったんですか。賭けたくないから？」
「追い払われたというのは、わたしのこと？　なら、そうですよ。逆らいもしませんでしたね。姫様のご命令だったんです、『二の兄君のところへ参れ！』とね」
「王をお止めすることはできなかったのですか」
「そうできればよかったとは、思います。実のところ、なにも知らないあいだに追い払われたんですよ。不覚をとりました」
「なにも、ですか？」
「ええ。ただ二の君のところへ急いで行け、別命あるまで戻るなといわれて……もともと、なにかあったら二の君のところへという話でしたからね。変事

が起きたのかと勘違いして、都を飛び出してしまいました。着いたら、なにも起きていないし……二の君は二の君で、こうですよ。『そなたのことは絶対に都へ戻らせるなと妹にたのまれた、ちょうどよい、再建中の砦について意見がほしい』ってね、いいようにに連れ回された。それからようやく、なにが起きているかを教えてくださいましたが、『都へは戻らせない約束だ』で、懇願しても脅しても、例の塞の兵士が入れ替わっていたのを看破してやったのが誰だったかを思いださせてさしあげても、まったくびくとも動かない。ちょっと強硬に出たら、『そなたほどの腕であれば、まばたきひとつのあいだにわたしの命をとることもできようが、そうなれば、わたしの配下がそなたを生かしてはおかぬであろう。結局、都に辿り着けぬのだから、意味のない行為ではないか。暫しは我慢せよ』……ってもう、ほんとうに殺してやろうかと思ったな、あのときは」

やや性急な語り口が第二皇子そっくりだったので、ヤエトは少し笑ってしまった。ただし、若干、ひきつった笑いだったかもしれない。

「強硬にって……なにをやったんです」

「ご心配なさるようなことはなにも。剣の柄に手をかけてすらいませんよ」

「まぁ、とにかく、よく抜け出せましたね」

「《黒狼公》からお呼びがかかったので、そちらへ参りますといったら、そうか、と送り出してくださいました。……なにを考えておいでなんだか、よくわかりません」

「妹君のことを、案じてくださったのでしょう」

「都へは駄目でも《黒狼公》領へは行かせるなんて、屁理屈もいいところだ」

よほど苛立たせられたのだろう、まだぶつぶついっているルーギンを、ヤエトは諭した。

「《天地輪》がありますからね。姫様に、華の騎士はどうしているとでも訊かれたら、都へは行かせていませんと、答える必要があるでしょう」

「ああ、なるほどね……。さすが、屁理屈をこねさせたら天下一だ」

どさくさに紛れて妙な称号を授与されたが、それを無視して、ヤエトは話を次に進めた。

「姫様は、覚悟なさっているのですか。陛下に逆らえばお命はないかもしれぬと」

騎士は表情をあらためて答えた。

「ご覚悟は、おありだと思います」

「では、そこまで四の君をお救いしたいと？」

「そこが、わからないんですよね。四の君をなぜ、庇わねばならないのかが。先生ならご存じかと思っていたのにな。……やはり、ご存じない？」

「存じませんね」

ヤエトは酒を呑みたい気分になった。呑んだら倒れるとわかっていても、たまに呑みたいことがあるのだ。酒杯から手をはなさないところを見ると、ルーギンも似たような気分なのだろう。

沈黙を破ったのは、ルーギンだった。

「姫様にわたしを追い払わせたのは、《金獅子公》です。面談に来てましたからね。彼は彼で、渦中の人だから。万が一を考えたのだろうな。嫡子をとりあえず逃れさせておいて、家名の存続をはかろうと。あの家だって、危ないんだ。どう展開するかによってはね」

他人事のようにルーギンはつぶやいて、顔を上げた。

父親のことを語るとき、彼は冷たい炎のようだと思う。冷徹でありながら激情を秘めている、いつ爆発するとも知れぬ危険な炎だ。

「王に、四の君が処刑されかねないという情報を流したのが誰かは、わかっているのですか」

ヤエトの問いに、ルーギンはかぶりをふった。

「はっきりとは。《金獅子公》かもと思うけど、わたしの意見だから割り引いてもらわないとな。……彼だとしたら、ずいぶんな不手際をやったものです。姫様を災禍に近づけるなんてね」

「不手際、ですか？」
「ええ。相変わらず、わたしの嫁候補にと考えているようだし。彼の思惑通りになるのが嫌で、ずっと距離をとっていたんだけどな。北嶺に行くまでは、剣を捧げたといっても名目上の関係くらいしかなかったというのは、前にも話したことがあるけど、とにかく、必要以上に親しくならないように、気をつけていたんです。万が一にも、姫様から陛下におねだりされたら困るでしょう。わたしが気に入ったから結婚したいとか……避けねばならない展開でしたからね。今はもう、それは心配するのをやめたんだ。わたしは姫様の剣であり、姫様はわたしの王だ。それだけの、そういう関係になれたと、わかったから……先生はお察しでしょうけど」
　お察しもなにも、いわれてみればそうかも、そうだったのか、なるほど、という三段階の理解が今まさに訪れている最中なのだが、ヤエトにその件に関する理解を深めさせる暇を与えず、ルーギンは言葉をつづけた。
「姫様が一件を知って、四の君を救おうとお考えになったことを、彼はわたしより先に気がついたわけだから……彼の情報網のどこかにひっかかる誰かが、姫様にお知らせしたんでしょうね。意図は不明だな。姫様を破滅させようとしてのことか、単に四の君をお救いしようとしてか、それともほかになにか……とにかく、わからない」
　――《金獅子公》が読み違えたのかもしれない。
　妙な事態になりそうだから距離をとれと助言に訪れたら、皇女はむしろ積極的に首を突っ込みそうなことをいったので、とにかく嫡子だけでも引き剝がしておいた……という可能性も、ありそうだ。
　しかし、気づいていないのならルーギンには教えない方がよいだろう。これは憶測に過ぎない。
　ヤエトは別の可能性を示唆しておくことにした。
「ひょっとすると《天地輪》かもしれませんね」
「ああ……そんなものもありましたね。そうか。あ

りそうだな。誰が持ち出してもおかしくない。真実しか語れない場だから、信憑性も高いし、姫様が行動に出たのが早かったのも、それで説明がつく。一緒にいたわたしを通り抜けて、姫様だけに情報が伝わっていたことも、か」

やれやれ、とルーギンは肩をすくめて、いかにも気楽な調子で尋ねた。

「で、どうします？」

情報は増えたが、計画に変更が必要な内容ではなかった。ヤエトは即答した。

「都へ行きます。王をお救いせねばなりません」

「ふたりで雁首そろえて姫様のところに行っても、追い払われるだけじゃないかな」

「行くのは王のところではありません。陛下と、皇妹殿下にお話を」

ルーギンは杯をいじる手を止めた。

「勇敢だな」

「無駄に、ですか？」

「無駄なら止めますよ。なにを申し上げるおつもりか、教えておいてもらえますか」

「単純なことです。陛下は四の君を始末なさりたい。おそらく、それは揺らがないでしょう。三の君がなさったように、裏でこそこそ動いてろくに証拠も残さなかったなら、かばいようもありますが、四の君は派手にやり過ぎた。もし、四の君を生かすおつもりであれば、貴族たちを処分する方向に動かれるはずです」

「無理だな。かかわっているのが、四大公家の内の二公家ともなれば、一気には潰せない」

「そういうことです。ですから、やはり始末するのは四の君ということになる。それを邪魔しているのは、皇女殿下だ。なにがなんでも動かないと心に決めておいでの皇女殿下を、どうすれば動かせると思いますか」

ルーギンは眼をしばたたいた。

「説得なさるのですか」

「そうできればよいですが、そんな時間をかけていたら、陛下の我慢が切れるでしょう。騙してでも、連れ出します」
「……ますます勇敢だな」
「そのための許可を、陛下にいただきに参ります。お許しがあれば、王にお会いするのが容易になりますから。それと、世界の破滅の預言についても、どこかからお耳に入っているかもしれませんが、一回はお話ししておくべきでしょう」
「なるほどね……それで陛下が納得してくださるものか、わたしにはわからないな」
「都までの護衛さえつとめてくだされば――」
「無理。わかりますか、む、り、です」
「無理ですか？」
「尚武官の勇気が尚書官に劣るわけにはいかないでしょう。それとも、それは命令なのかな？」
「我々は同格なので、命令はできません」
「それなら、同行しますよ。追い払われるのには飽きました。砂っぽい土地にもね」
北嶺将軍と北嶺相では、どちらが上とか下とかにはならない。自分たちが皇女の両翼なのだな、と不意に実感した。
皇女には翼が必要だ。だが、逆も真なのだ――翼にも、皇女が必要なのだ。
「ルーギン殿」
「なんです」
「ひとつ、約束してほしいのです」
「……怖いなぁ。どんな約束です？」
「我々が共倒れになったら、王は両翼を失ってしまわれる。せめて貴殿は、生き延びることを第一に立ち回ってください」
暫しの沈黙の後、騎士は大きく息を吐いた。
「違うでしょう。ふたりとも生き延びないと」
「わたしも死ぬ気はありませんが、万が一ということがありますし」
「片翼では鳥は飛べない」

ぴしゃりといっておいて、ルーギンは不意に表情をやわらげた。

そして、告げた。

「わたしのつとめは、先生を死なせないことと心得ました」

「なんでそうなるんですか」

「悪くないでしょう。人を殺すことを考えるより、生かすことを考える方が幸せです。騎士が剣を手にするのは、守るためであると、思いだしました」

騎士が守るべきものは、家名や面子ばかりと思っていた、と皮肉をいいたくなった。今、皇女が戦っているのは、そうした概念とだからだ。

だが、それをルーギンにいうのもお門違いだし、彼が守ろうとしているのは虚名ではない。

命だ。

それが、いつ死ぬかわからない、むしろ医師の見立て通りなら数年前に寿命が尽きているはずの男のものであっても、命は命だ。殺すより生かす方がよいという考えには、反対できない。

ヤエトにできるのは、せいぜい条件を出すことくらいだ。

「ご自分の命と引き換えにというのでなければ」

「もちろん。片翼では飛べないといったのは、わたしだ」

「……では明朝、払暁を待って出立しましょう。明るい方が、鳥も飛びやすいでしょうし。急げば夕刻前に着けるかな」

「ハーマンなら楽々ですよ。日限もまだ残ってますしね。一回、北嶺に戻しておいてよかった。まぁ、速度はシロバにあわせますよ」

ヤエトは苦笑した。そんなことを伝えたら、シロバは死にものぐるいで飛びかねない。

4

都で、巨鳥が飛来してもあやしまれない場所とい

えば、《黒狼公》邸しかない。頻繁に騎士を送り込んできたのは、鳥の出入りが日常の景色となるように考えてのことだが、経費と手間暇に見合うだけの効果があがっているかといえば、微妙なところだ。

ともあれ、ふたりを乗せた鳥は、無事《黒狼公》邸に着いた。案の定、シロバは年甲斐もなくハーマンと張り合おうとしたらしく、余裕で日を残したうちに到着してしまった。

予定よりずいぶん早いと思ったが、邸には既に伝達官が待っていた。

「畏れ多くも真上皇帝陛下のお召しである。舟でご案内するように、仰せつかった」

ひと休みといきたいところだったが、それを許さない雰囲気があった。

相手は紫の肩衣をつけているわけではない。いわゆる下位伝達官というやつだ。心を繋げて竜種の声を聞きとるような特殊な能力はない、いうなれば皇族直属の使い走りに過ぎないが、それでも公的な役目に就いている人物を堂々と派遣して来たということは、皇帝はこの会談を完全に内密のものにする気はない、ということだろう。

――主導権も、握っておくというところか。

ヤエトからの申し出に応えたという実情はともかく、これで表向きは、皇帝からの召喚になる。

伝達官は、早くせんか、という顔つきだ。黄金竜の縫い取りが目立つ青い制服の腹が、はじけとびそうに充実している。いささか後退した生え際に、なんとなく見覚えがあった。

ひょっとすると、去年、第三皇子の邸からヤエトを連れ出す役割を果たした、あの伝達官と、同一人物かもしれない。

――待てよ。

あのときも騙りではないかと疑ったが、実のところ、どうなのか。

もし騙りでないなら、去年の一件も、裏で皇帝が協力していたということになる。

ルーギンがヤエトに視線を向け、眉をひそめた。
「どうかしましたか、公」
「いや……」
それはない、という感が強い。では、皇帝の下位伝達官だという身分はほんもので、あのときは、皇妹の指示で行動していたのだとしたら？
……だとしたら、今はどうなのだ？
「少々、立ちくらみがしまして。陛下にはわたしから申し開きをいたしますので、暫し休ませていただけますか」
「左様か。致しかたない。待たせていただこう」
「大丈夫ですか」
尊大な態度を崩さない伝達官とは違い、ルーギンは大げさなくらい心配した。邸の使用人を呼び、ヤエトを別室へとみずから指図をはじめたほどだ。
「肩をお貸ししましょう。失礼」
伝達官に一礼して、ルーギンはヤエトを支えながら外に出た。扉が閉まる音を聞いてから、ヤエトは小声で告げた。
「彼には、去年も会っている気がします」
「なにか問題が？」
「二の君の邸から連れ出しに来たのが、彼だったのです。そのときも、陛下の伝達官というふれこみでしたが、実際どうなのか……」
ルーギンは眉を上げた。
「なるほど。では、皇妹殿下の思し召しで動いているのかもしれないな」
「陛下の伝達官が？」
「皇妹殿下は、直属の下位伝達官をお持ちではないでしょうからね」
ヤエトは少しおどろいた。
「そうなのですか？」
「そりゃあ……皇妹殿下は皇家のかたですが、公的な立場には就いておられませんからね。下位伝達官を融通してもらうなら、兄君であらせられる真上陛下から、だ。そのへんはもう、慣例として認められ

ている範囲かな」

なるほど、と答えるべきところなのかもしれないが、なんだかなぁ、というのが正直な感想だった。

あれほどの異能の持ち主であり、申し分のない血筋に生まれたというのに、なにかといえば、公的な立場にはない、役職がない、と来る。

ただ女性であるというだけで。

だからなのか、と思う。だから彼女は、自分が女性であることを最大限に生かそうとするのか。社会が彼女をどう規定してしまうかを、逆手にとる。立場がないからこそ自由に動ける面もあると、皇妹は知っている。不自由さの向こう側にある自由を、彼女はつねに選び、我がものとしている。

それでもなお、不満は残るのではないか……。

——皇女も、同じ道を辿ることになるのか。

皇女は北嶺太守の地位を獲得し、今や北嶺国の王となった。そこが、皇妹とは決定的に違う。

皇女が立ち向かう次の試練は、結婚ということになるだろう。縁組みの相手を、皇帝はどう考えているのか。王としての皇女を認め、補佐役に徹する男を選ぶか。あるいは、女性には従来通りの役割しか求めない男をあてがい、主権を譲らせるのか。

そういえば、皇妹は皇女に具体的な助言をしていたはずだ。皇女の切り札は結婚だ、と。

——いつでも結婚してやろうという雰囲気で、釣り上げるだけ男を釣り上げる以外、北嶺王としてこの先を生き抜く手段はない、と。

ずいぶん前に聞いた台詞が、今頃になって、腹に響いてきた。気もちが悪くなりそうだ。結婚したら最後だという皇妹の予測は、当たってしまうのだろうか。

どうして自分のあるじは女性なのか。男子であれば、こんなことでは悩まずに済んだものを。

これについては誰を呪うべきか考えていると、ルーギンに確認された。

「ところで、どれくらいの割合なのかな、仮病の方

は？」

「少し、休んだ方がよさそうなのは事実ですね」

「香茶を持たせましょう。おい」

ルーギンが少し声を高めると、近くに控えていた家宰が一礼した。

「すぐにお持ちします。それまで、こちらでお休みください」

ヤエトの私室は少し遠いと判断したのだろう、家宰は近くにある小部屋にかれらを案内した。

この若者はジェイサルドが探して来たのだが、ヤエトとは逆に、老けて見えるのが悩みらしい。まだ三十歳になっていないそうだが、白髪が多いせいで四十近くに見える。もっとも、家宰などというものは年齢がいっている方がそれらしく見えるものだから、彼のその外貌も込みでジェイサルドは選んだのだろう、とヤエトは考えている。

小部屋からは中庭が見え、ここを見下ろしてミアーシャと語りあった日のことを、ヤエトはぼんやりと思いだした。たしか息子が剣をふり回すのを見ながら、娘も兄弟のまねをして、剣の稽古ばかりしていると、こぼしていたはずだ。

そして彼は答えた、皇女殿下のようですね、と。

「王は……」

「はい？」

思わずこぼれ出た言葉に、ヤエトは自分でもどうつづけるつもりだったかわからず、いえ、と頭をふった。

それしかない、などという狭い未来を、ヤエトは皇女に提示したくはなかった。もっと広い、選択肢がいくつもあって、そこから皇女が選びとれるような――そんな展望を、示してやりたかった。

「どうしたんです、先生」

「ただ、お元気なのであろうかと」

「姫様は、体力がおありですからね。気力も。大丈夫です」

「わたしよりずっと、みたいに話がつづきそうだ」

ルーギンは鼻先で笑っただけで、それについては否定も肯定もしなかった。

「万が一お元気でなかったとしても、先生がお顔をお見せになれば、すぐに元通りじゃないかな。無事を案じるというなら、姫様の方がずっと案じておいでしょうからね。それより、わたしの方は二の君が屁理屈でごまかしてくださるとして、そちらはどうなのです。昨日の定時連絡で、北嶺にいないことがばれてしまったのでは？」

「最近は、一方的に王からの伝言を賜るだけでしたから、問題ないでしょう。伝達官殿には、所領に行って来るとは伝えてあります。そう長くは留守にしない、王から急を要する連絡があれば、騎士に伝言をたのんでください、とくになければ戻ったときにまとめて伺います、と。……それをそのまま王にお伝えしていれば別ですが、問われもせずにご自分から話すようには、あまり思われませんしね」

「ああ、あの人はそんな感じだな」

「そんな感じです」

皇女がヤエトにつけた伝達官は、出会ったときから一貫して、命じられたことしかしない人物だ。これくらい割り切れれば、とヤエトは少し羨ましく思うこともある。

ヤエトは香茶を啜った。ひとくちに香茶といっても種類は豊富で、これは爽快感のある配合らしい。胸から喉にかけてなんとなく滞留していた不快感が、すうっと抜けていくように感じた。

「うまい茶だ」

「ありがとう存じます。殿が香茶をお好みと聞き及びましたので、厨房の者が研究をかさねました」

どこの厨房でも、ヤエト籠絡の作戦が練られているらしい。ルーギンが笑っているだろうなと思って横目で様子を窺うと、案の定、おかしそうに家宰を眺めていた。

薬効しか考えない上に味音痴としか思えないジェイサルドの薬膳に比べたら、なんだって百倍は美味

なのだから、そんなに頑張る必要はないのだが。
「そうか。戻ったら、また飲ませてもらおう」
「かしこまりました」
「もう行けますか？」
ルーギンの問いに、ヤエトはうなずいた。
「大丈夫です。たぶん」
「心強いお言葉だ！　伝達官殿に、じき出立すると申し上げて来るように」
家宰は一礼して部屋を出た。
ルーギンはヤエトを見下ろして、それで、と尋ねた。
「ほかに、今のうちにいっておくことは？」
「いっておくというか……訊いておくというか」
「なんです」
「訊いてよいのか、わからないのですが」
「よくなかったら答えませんから、どうぞ」
少し、勇気がいる質問だ。ヤエトは大きく息を吐き、心を落ち着けてから口を開いた。
「皇妹殿下と、ご結婚なさりたいというお気もちは、……ありますか？」
「できませんよ」
即答された。予測通りではあるが、少し回答が質問の意図とずれている。
「できるかできないかではなく、したいかどうかなのですが」
ルーギンは眉根を寄せた。
「それ、重要なことですか？」
「……やはり訊かなかったことにします」
「いや、好きか嫌いかなら容易に答えられるんですよ。わたしはあのかたに惚れていたし、今でも思い切れてはいない。それは、確実だ。でも、それと結婚したいかどうかは別だし、その可能性については、もう何年も考えもしなかったから。急に訊かれても、えっ、としか思えないな」
「えっ、ですか」
「ですね。えっ、って感じだ。もっとも、いきなり

復縁を迫られたあなたのおどろきに比べたら、大したことでもないだろうけどね」

——やはり知られていたか。

誰が喋ったのだろう、と思う。皇女だろうか。いや、それよりも、皇妹自身が楽しそうに教えたというのが、いかにもありそうな話だ。

「おどろいたというより、……いや、まぁ、おどろきました」

ほかに答えようがない。ルーギンは腕を組み、心得顔でうなずいた。

「だろうなぁ」

「そんなことより、えっ、以外になにかないのですか。まさか、それだけということはないでしょう?」

うーん、とルーギンはまた眉根を寄せた。

「えっ、の次は、無理だろう? だしな」

「その次は?」

「……わたしではなく、あのかたの望み次第じゃないかな」

なんとなく、納得がいってしまった。

「愛ですね」

「華の騎士は愛を知る人物であるらしいですからね、先生のご評価によれば」

「わたしは間違っていなかったわけですね」

「そう、たぶんね」

「心強いお言葉です」

ルーギンは屈託ない笑顔を見せた。

「それはよかった。お互いを心強く思えたところで、では、参りましょうか」

5

皇宮にあがるのは、ずいぶん久しぶりのように感じた。頻繁に通っていた時期があったせいだろう、とヤエトは考えていた。渡り廊下に花吹雪が舞うのを眺めながら、春先にもこんな光景を見たな、と思い返す。

今は花の種類も違うのだろうが、ヤエトにはあまり見分けがつかない。

花の名など、文献で知っていれば十分というのが彼が生きてきた世界だ。ある花の名が出れば、季節や地域、時代や文化の特定に役立つだろう、という方向にしか知識を伸ばしていないのだから、いかんともしがたい。

伝達官の先導があるせいか、それなりに人がいる場所を通り抜けることもあるのに、かれらに声をかける者はいなかった。

見慣れた皇宮が、いつもとは違う場所のようだ。なにか魔法じみた静謐さを感じてしまうほど。

そしてまた、見慣れているという前提に自分でおどろき、不思議さを感じた。

——皇宮などとは縁がなかった時間の方が、ずっと長いのに。

久しぶりかどうか、見慣れているかどうかの判断をくだすのは自分だし、その基準は主観的なものにならざるを得ない。だから、今の自分の基準を少し疑いたくなった。

皇帝の嫌がらせで《黒狼公》に叙爵されてから、自分はまだわずかの時しか過ごしていない。なのにもう、それに慣れきっている。

人は慣れる生き物だ、とつくづく思った。

それでも、とヤエトは考えた。

——それでも、どこか非現実的な感じは残る。

自分が貴族であること。北嶺国の相であること。これから、真上皇帝に面会すること。当然のような顔で、皇宮を歩いていること。

それらのすべてが夢だったと、今すぐ彼の現実から失われるといわれれば、そうですかと答えて、ヤエトは元の生活に戻れるだろう。

まだ根が生えていないのだ。そんなもの、生えることなどなく生涯を終えることになってもおかしくない。

貴族という地位に限らず、尚書官としての暮らし

でさえ、どこか夢のように感じていた。
いつ、この世は夢になったのか。
三十歳まで生きられるかあやうい、といわれたときからか。あるいは、自分に恩寵の力があると知ったときだろうか。この世は儚いものと考えることで、運命の転変をやり過ごして来たのか。
「こちらでお待ちである」
伝達官は扉の前で一礼し、中にいる皇帝に敬意を表した。そして、ひと息もつかずに扉を開いた。
案内されたのは皇宮の奥の方、つまり、皇帝の私的な場所と看做される区画だ。私的とはいっても、公務ではないというだけの話で、その身は大勢の伝達官にとり巻かれているのが常であったが、今日は違った。
おどろいたことに、そこで待っていたのは皇帝と皇妹、ただふたりであった。
思わず、ルーギンの様子を窺いかけたが、かろうじて首を動かす前に思いとどまった。そんな無様な真似をすれば、会談の内容に響きそうな気がしたからだ。
さして広い部屋ではない。中庭に面した開口部が大きくとられた、風通しのよい部屋だ。乾燥した土地から急に大河のほとりに移動したせいもあるのだろうが、今日はずいぶん蒸し暑く感じる。中庭に繁茂する植物のおかげか、室内の空気は少しひやりとして感じられた。
ヤエトとルーギンが並んで室内に入ると、背後で扉が閉じた。
「用件があると聞いた」
挨拶もなく、皇帝は単刀直入だった。ルーギンに目線を向け、かるく顎を引く。
「そなたにも直言を許す」
帯剣もだ、とヤエトは今になって気がついた。本来ならば、ここに来るまでに武器は預かられているはずなのだ。
ヤエト自身は、皇帝じきじきに、今後は直言と帯

剣を許すといわれているが、身に寸鉄も帯びていない。武器など、重くて疲れるだけだからだ。当初、皇女は不安がったが、ルーギンが、敵に武器をとられて却って危険になるだけですと説得したら、あっさり引き下がっていた。

そんなことを思いだしつつ、ヤエトは一礼した。

「お時間を割いてくださったことに感謝します。わたしがお仕えする北嶺王の処遇について、かつまた、世界の破滅の預言についてお話ししたく、参上つかまつりました」

顔を上げると、皇帝と視線があった。

皇帝がいる場所は一段高くなっている。やわらかそうな寝椅子に、皇帝は姿勢よく座っていた。

その足下には、皇妹が寄りかかっている。ちょうど段差のところに座っている形であろう。敷物をかさねた上に腰を下ろし、半身を皇帝が座る長椅子に預けている。すらりとした脚は揃え、いやわずかにずらして斜めにしている。沓は履いておらず、裾から覗く一方の足首には、清流のようにきらめく銀鎖を巻いていた。

久しぶりに対面すると、ああ、この女性はここまで美しかったか、と感じ入る。

「わたしのことも、考えてくださったのかしら」

考えたくないときも思いだしてはうんざりしていました、と答えたいところだ。より簡潔には、知るかボケの使いどころのような気もしたが、諦めた。

無駄死にはしない約束である。

「それに関しましては、陛下へのお話が終わり次第ということで、お願いいたします」

皇妹が首をかしげると、水晶の装身具が揺れ、中庭から差し込む午後の光を反射して、こまかな光の粒を室内に撒いた。白い胸許にも、輝点がいくつも散っている。

「話すがよい」

皇帝が命じ、ヤエトはふたたび頭を下げた。

突然、皇帝がなぜ皇宮にしては小さなこの部屋を

謁見の場に選んだのか、わかった気がした。
おそらく、こういう用途には使われない部屋なのだ。知られては困るような密談をおこなった場所に、ヤエトを入れるわけにはいかない——過去視の恩寵があれば、どんな秘密も暴き放題かもしれないのだ。
ヤエトはなにも認めてはいないが、皇帝はすでにほぼ確信しているはずだ。彼に、過去視の力があるということを。
その恩寵の力がどの程度の精度ではたらくのかまでは、皇帝もまだ知るまい。気軽に過去を眺められるのか、鮮明に見聞きできるのか。仔細がわからない状態では、適切な対策も難しいだろう。危険性が低く、確実性が高く。そして、容易な方策として考えだされたのが、場所の選択なのだ。
おそらくこの部屋で、皇帝が言葉を発したことなどないのだろう。今日このときまでは。
知られていると思うことに、ヤエトはまだ慣れなかった。北方で皇帝の幻に時を超えて呼びかけられた、あのときの衝撃は忘れられそうもない。
覚悟は決めてきたはずだ。
——どうなろうと、自分で選んだ結果だ。
おそれながらと前置きをして、ヤエトはひと息に告げた。
「北嶺王が、陛下のご勘気にふれかねぬ、思慮に欠けたおこないをなさっておいでと聞き及びまして、遅ればせながら参上いたしました。主君の落ち度は臣下の落ち度。主君が道を踏みあやまらんとしているときは、諫止したてまつるのが仕える者のつとめと心得ます。我らを王のもとへお遣わしください。きっと王のお心を変えてご覧に入れます」
勝手に行けと応じてくれれば楽なのだが、そうはならないだろうと踏んでいた。ではどうなるかが読めないのが、真上皇帝だ。
案の定、ヤエトの想像の埒外にある回答が飛んで来た。
「父であり皇帝であるわたしにできぬ説得を、そな

たならできると申すか」

――どう答えても墓穴を掘りそうだ。

むしろ、それを狙っている返しではないのか？

顔がひきつりそうになったのを堪えていると、ルーギンが加勢に出た。

「陛下に申し上げます。皇女殿下くらいのお年頃であれば、親の言葉には逆らいたくなるのが世の常というものでございましょう。不肖の臣にも身に覚えのあることですゆえ、皇女殿下のお気もちはよくわかります」

「ああ、そなたは父と不仲であったな」

さらっとした返しからすれば、皇帝はルーギンの援護など気にもとめていないのだろう。だが、ルーギンはいつものように胡散臭い笑顔で答えた。

「御意に存じます。若かりし日、父はわたしへの対処をあやまりました。おかげで不仲は今に至るまでつづいております。おそらく、死ぬまで父と和解することはないでしょう」

噛んで含めるようにルーギンが告げるのを聞き、皇帝はわずかに顔をしかめた。

なんということだ、とヤエトは思った。

皇帝は、皇女に嫌われたくないのだ。

この人物に、そんな泣き所があるとは……いや、末娘には甘いといわれているのは知っていたが、大したことはないだろうと高をくくっていた。

どうやら、それは間違っていたらしい。

逆に、そこを正確に読んでいたルーギンは、さっさと話を終着点に運ぶつもりらしかった。笑顔を消して、こう言葉をつづけたのだ。

「なんといっても、皇女殿下は年頃の乙女でいらっしゃる。わたしなどより、繊細なお心を持ち合わせておいでと存じます。わたしですら、一生残る傷となってしまった諍いの原因を、恥を忍んで申し上げれば、家族の命と家名とを、父が天秤にかけたことがきっかけでした」

ルーギンは皇帝に対し、自分の過去は今の状況と

酷似していますよ、と示唆してのけた。皇帝は、皇家を守り帝国の秩序を示すため、皇子を処分すると心に決めているのだから。

憂い顔で、彼は言葉をつづけた。

「二度と和解することのない父を持つというのは、せつないものです、陛下。皇女殿下には、そうなってほしくありません」

暫しの沈黙の後、皇帝の下問があった。

「そなたは、どちらをとったのか？」

「選択権はございませんでした、陛下。気づいたときには、ことは終わっていました」

「そうか」

皇帝はなにか考えている風だったが、やがてヤエトを見て告げた。

「娘は手強いぞ」

「わたしに、王に諫言できる力をくださったのは、陛下でいらっしゃいます」

「なに？」

「皇女殿下の副官としてわたしを任命なさったのは、陛下でいらっしゃいます。それゆえ、わたしの任免をお決めになれるのも、陛下おひとり。王の勘気を被りましても、副官を辞めさせられることはありません。王よりいただいた北嶺相の地位は失うかもしれませんが、それは覚悟の上です。……臣下の置き換えはいくらでもできますが、親子はそれができません」

ルーギンに倣ってつけたした、見え見えの言葉に効果があったのかどうか。皇帝はわずかに口を引き結び、それからうなずいた。

「よかろう。伝達官に案内させる。そなたらの行く手を阻む者のなきよう、はからおう」

「かたじけのう存じます」

思いのほか順調に話が進んだ、と気を抜きかけたとき、皇妹が声をあげた。

「あの子は、間違っているのかしら？」

今日の彼女は、竜気を強くは帯びていない。竜種

としての力の強さに比例するといわれる眸の紫は、しかし、いつにも増して濃く、あざやかであるように見えた。

長い睫毛の下から、皇妹はヤエトを見、問うた。

「兄を助けたいと希うことは、間違いかしら？」

「皇子殿下も、皇女殿下も、ともに竜種にあらせられます」

答えたのは、ルーギンだった。皇妹は眉を上げ、そちらに視線を向けた。

「だから？」

「わたしが尚武官として、騎士として、帝国のためにはたらかねばならぬように、竜種のかたがたにも果たすべき義務というものがおありと存じます。畏れながら――肉親の情にさからうことであろうとも、おろそかになさるわけには参りますまい」

皇妹は顔をそむけた。話は終わり、という所作だろう。

「いまひとつ、話があるそうだが」

皇帝が声をあげ、ヤエトは気もちを引き締め直した。ここからが、難所なのだ。皇帝がどう出るか、まったくわからない。

「陛下はもちろん、皇妹殿下もご存じでいらっしゃるかと存じます。昨今、恩寵の力と呼ばれるものが、日増しに強まっている、ということを。ですが、その力の源泉をも、ご存じでしょうか？」

「知らんな」

あっさりと、皇帝は答えた。

少し気を抜いたのか、上体を寝椅子の背もたれに預けている。皇帝にとっては、皇女の問題の方が本題だったのだろう。

「すべての恩寵の力は、今より何百年もの昔に世界から切り離され、封じられた魔界を、その源泉としているのです」

皇帝は表情を変えなかった。姿勢も、なにもだ。

つづけろということだと判断して、ヤエトは言葉を継いだ。

「恩寵の力が強まっているのは、魔界の蓋が開きかけている証拠。封印が、弱まっているのです。放置すれば、魔界から魔物があふれ出し、この世は破壊されてしまいかねません。そのときが迫っているのではないかと、危惧しております」

「荒唐無稽な話だな」

——一刀両断か。

そういえば、ルーギンもこれに近い反応だったと思いだし、ヤエトは腹に力を入れ直した。これしきで、めげていてはいけない。

「にわかには信じがたいと、わたしも思いました。ですが、調べれば調べるほど、信憑性が増すばかりなのです」

「まあ、よい。それで、そなたはどうしたいのだ。あるいは、わたしにどうせよと申すのか」

信じてないな、とヤエトは思った。いや、信じるかどうかなど、皇帝にとっては些細なことに違いない。どう対処するかの方が重要なのだ。

極端な話、皇帝はヤエトの説明など微塵も信じる必要はない。そうしたいと思えば兵を出し、あるいは尚書局を挙げて神話や伝説のたぐいを調べ、でなければヤエトを吊るして終わりにする。

その程度の注意しか、彼はこの話題に興味を抱いていない、という意味でもある。今の返しは、そういうことだ。

「選任の官をもうけ、その者にでき得る限りの権限を与え、一件の調査にあたらせてくださいますよう、お願い申し上げます」

下げた頭の上から、意外な言葉が降って来た。

「その官に、そなたがなりたいと」

「いえ、そのようなことは、まったく」

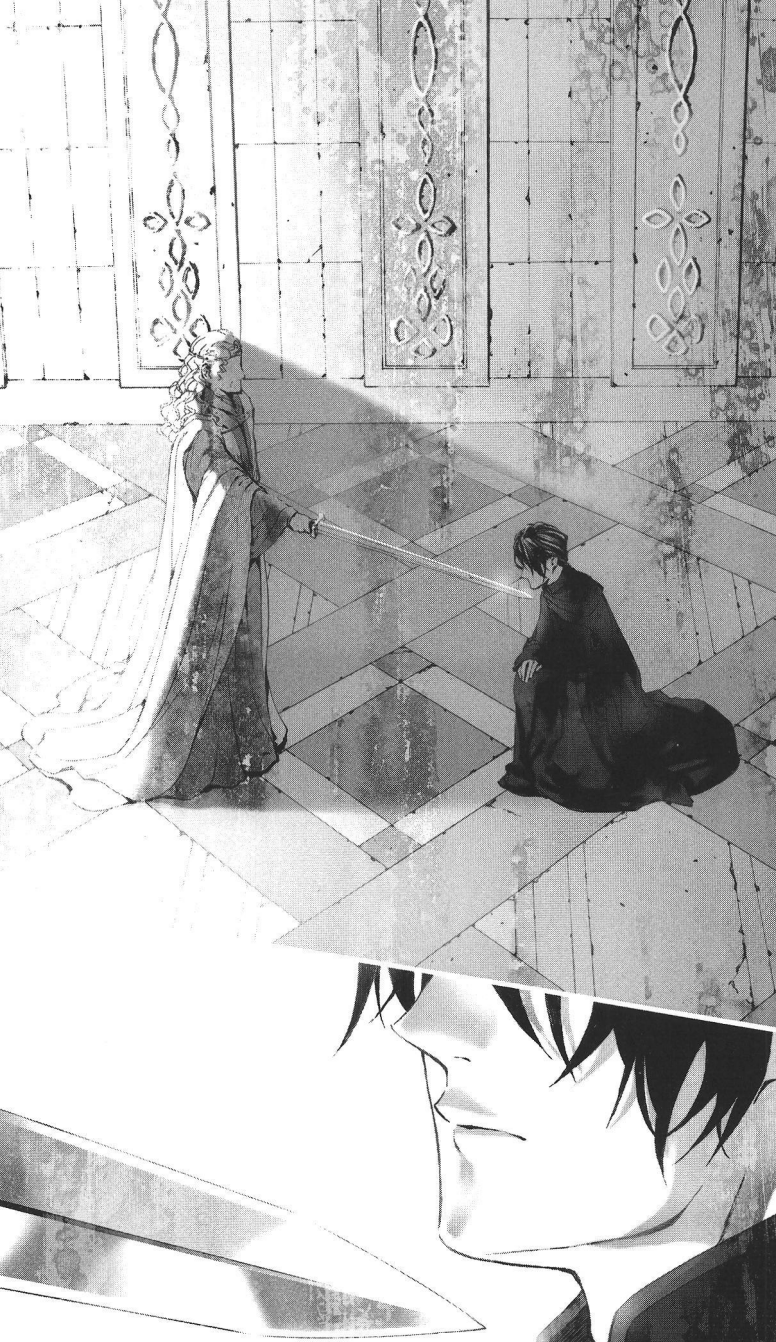
自分の仕事を、これ以上増やす気はない。もし任官されたら、ほかの仕事を辞める必要がある。

——そうさせたいのか？

皇女から切り離すつもりなのだろうか、と少し疑っているところへ、思いがけず前向きな言葉が投げ

かけられた。
「恩寵の力については、わたしも興味がないではない。わかるな、ヤエト」
「御意に存じます」
「力が強まるのであれば、よいではないか。そなたも、そうは思わぬか」
「魔界の蓋が開くのと引き換えでは、割にはあいませぬ」
「魔界だの魔物だのと申すが、それを実際に見た者はおるのか。そなたは見たのか？　そなたに与えられた、恩寵の力で？」
——来た。
覚悟はしていただろう、と自分に尋ねた。そうだな、と答えるしかない。
下げた頭を、上げるべきか否か、決心がつかない。いっそ平伏すべきかとも思ったが、それも違う気がした。
所詮、促成の貴族である。正しい礼儀作法などわかるはずもない。生まれながらの貴族であっても、恩寵持ちであろうと糾弾されている最中に、どうふるまうのが正しいかなど、わからないだろう。
つまり、どうでもよいのだと開き直ることにして、ヤエトは頭を下げたまま答えた。
「わたしは、見てはおりません」
「なぜか。恩寵の力が強まっているというのが真実ならば、そなたの力もであろうに。見たと申せば、信憑性も高まろう。嘘はつけぬ」
「陛下に嘘を申し上げるなど、考えたこともございません」
皇帝は笑った。声もなく、ただ笑いの気配だけが届いた。
「ルーギン」
「はっ」
「そなたの剣を貸せ」
断れる相手ではないだろう。騎士が前に進み出るのが、視界の隅にちらりと見えた。

さらに、皇帝の声が聞こえた。
「面倒だ、抜き身で寄越せ」
「……御意に存じます」
鞘鳴りの音がした。ヤエトが顔を上げると、騎士は床と水平に捧げ持った剣を皇帝の前に差し出しているところだった。
皇妹は騎士を凝視していた。その美貌に、感情の色はない。ただ、さっきまではおとなしかった竜気が、一気にほとばしり出るのを感じた。黄金の光が皇妹を包み、膨れあがる。
皇帝が剣の柄を握り、同時に立ち上がった。
跪いた騎士は、垂れた頭を上げることもしない。できないのだ、とヤエトは思った。
皇妹が、彼を抑えている。とんでもない竜気だ。
「妄言虚言で世を騒がそうというのか？」
「左様な意図はございません。申し上げたことは、すべて調査の結果を勘案した妥当な推測です」
「恩寵の力は一切関係ないと申すか」
皇帝は、ゆっくりと歩を進めた。なんだか経験があるぞこれは、と思った。斬られるんじゃないだろうか？
それも覚悟の上だろう、とヤエトは確認した。これにもまた、そうだよなぁと答えるしかない。
「関係があるとは、すでに申し上げました」
屁理屈を捻らせれば天下一というルーギンの評価が適正であったかどうか、今が証明のしどころなのだろうか。そんなことができるのだろうか？
皇帝は剣をヤエトの喉元に突きつけた。
「そなたの力で、この剣から逃れ得るかどうか、試してみるか」
「わたしは武器の扱いも知らず、戦いの訓練も受けておらぬ、非力な尚書官に過ぎません」
「だが、恩寵の力には恵まれた。そうだな？」
否と答えれば嘘になる。恩寵の力について、嘘はつけない。
「……呪いです」



「呪い？」
記憶の彼方で、母が叫ぶのが聞こえた。
――特別な力は、呪いと同じよ！
まさにそうだ、と今は思う。
「呪いです。人生を縛り、不自由にする。恩寵などと、ありがたがるようなものではありません」
「くだらん。力は力だ。いかに使うかが問題なだけで、それ自体は呪いでも祝福でもない。恩寵などというのは、呼びかたの問題に過ぎぬ」
「なにをどうあらわすかは、言葉の力です。言葉は心に通じるもの。言葉によって、ものごとが心に映る姿も変わります」
「……そなたは力に怯えておるのか」
――そうだとも。
力があるから、面倒なことになる。
皇帝は眼をほそめた。声に出さずとも、ヤエトの内心は読めたらしい。
「迷うことはない。ただ従えばよい。そなたの力を十全に使ってやろう」
「わたしが主君と仰ぐのは、北嶺王おひとりでいらっしゃいます」
――わたしはそなたを裏切らぬ。
皇女の覚悟をヤエトは知っている。ならば、彼もそれに応えるしかないではないか。
――絶対に。
「では、そなたの王のために、わたしに仕えよ。王とて、皇帝の配下に過ぎぬ。そうだな……北嶺の領地を拡張してもよい。踏野の隠し鉱床から、《青鉄》の原料になる鉱石が出たのは知っているか？　北嶺に編入してもかまわぬぞ？　制圧はもう終わった。太守は逃げたようだが、追わせている。長くは逃げられぬであろう。天領にするつもりであったゆえ、厄介ごとはすべて片付ける算段がついている」
一瞬、心が揺れた。
たしかに、北嶺の税収は乏しい。もともと、旨味のない土地だったからこその、放置区だ。そこへ皇

女と皇女の騎士団が押し掛けた上、国として会計を独立させられてしまったのだ。騎士団を養うだけでも、かなり厳しい。

税収はそのまま国の力、君主である皇女の支えとなる。取引として、悪くないのではないか？

——いや、それも一時の安心に過ぎない。

女性であるという不利を抱えている皇女にとって、皇帝が保証する領土の価値は、長くて次代の皇帝が即位するまで、短ければ結婚相手を押し付けられるまでに過ぎない。なまじ貴重な鉱石を産する鉱床など手にしていれば、熾烈な政争に巻き込まれることだろう。

断ってしまえ、と思う。

なのに、それが声にならない。

北嶺の財政が厳しいことを、ヤエトは誰よりもよく知っている。鉱床から得られる利権があれば、できなかったことが、できるようになるのだ。

昨冬の襲撃で損壊した建物を補修するための資材の購入も容易になる。北方との防衛線に、砦を新設してもいい。主要な集落に診療所を建設し、常駐する医師を雇い入れることもできる。

やりたいことなら、いくらでもあった。金がないばかりに諦めた案件なら、それこそ山のように。

迷っていると、ふと、スーリヤの顔が浮かんだ。

——思い上がっておりました。

あの娘が、第二皇子の使節に口説かれていたことを思いだしたのだ。ヤエトに便宜をはかるといわれて身を委ねようとしたのだと知ったとき、どれだけ自分がうんざりし、空恐ろしさを感じたかを、まざまざと思いだした。

想像するまでもない。

ヤエトの犠牲で得た富を、皇女は喜ばないだろう。我が身ひとつで皇女の未来を買えると考えるなど、それこそ思い上がりだ。

「何度でも、申し上げます。わたしがお仕えするのは、北嶺王おひとりです」

「口答えは不要だ。臣下は従順であればよい」
「そうでしょうか」
反射的に答えたまさにその瞬間、皇帝の手がわずかに動いた。このまま喉を突かれる、と思ったが、切っ先が少しふれただけで、それ以上の事態にはならなかった。
唸るように、皇帝は告げた。
「手足が思うように動かなければ、不便なだけだ」
「世界を見る眼、考える頭、感じる心――どれも欠くべからざるものではありませんか。手足に限れば、臣下のはたらきもそこに留まってしまいます」
皇帝は無言だった。
剣尖は微塵も動かない。大したものだ、とヤエトは感心せざるを得なかった。自分だったら、とっくに腕が疲れて剣がふるえ、狙いがさだまらなくなっているだろう。
さすがでいらっしゃいます、と褒め讃えるところでもなかろうが、膂力（りょりょく）の強さと狙いの確かさが賞賛に値するのは確実として、皇帝らしからぬ決断の遅さについては、どう評すべきだろうか。
狙われたままでいるのも、疲れるのだ。できれば、さっさと終わりにしてもらえないだろうか？　斬るにせよ、斬らないにせよ。
結局、皇帝は剣を引いた。
ずいぶん長く感じたが、ほんとうのところは、どれくらいの時間が経過したのだろうか。
「手足に徹することのできぬ臣は、いらぬ」
ヤエトがなんとも応じられずにいるあいだに、皇帝はルーギンに剣を返し、いかにも気が進まないという口調で告げた。
「踏野の鉱床の件、そなたが気づいたそうだな。後日、褒美をとらせよう」
顔を上げ、必要ないと答えようとした瞬間に、ルーギンと視線があった。
怖いくらい、睨まれている。
つまり、……黙っていろということだろうと判断

し、ヤエトは上げた頭をふたたび下げ、ありがたき幸せに存じますと口の中でつぶやいた。

ようやく頭を戻したときには、皇帝の姿はすでになかった。ルーギンがほっとしたように肩の力を抜くのが見え、ちょうど今、出て行ったのだとわかる。

皇妹が立ち上がった。

「三度あることは、偶然とはいえないわね。どんな力に守られているのかしら？」

「……は？」

装身具を鳴らして、皇妹はヤエトに歩み寄った。皇帝とどちらが怖いか、いい勝負だ。

「わからないなら、いいわ。わたしには関係のないことだから。それよりあなた、さっきの話。ほんとうに、それでいいの？」

「それで、とは」

「あの子に、兄を見殺しにしてしまったと思わせても、かまわないの？」

返す言葉に詰まった。

ヤエトの迷いを読み取ったように、皇妹はわずかに翳りを帯びた笑みを見せた。

「わたしでさえ、あなたなら別の結末を教えてくれるのではないかと期待するのよ。あの子はどうかしら？　心の底から、あなたを信じているでしょう。その期待を、裏切れるの？」

ヤエトははっとした。

――まさか。

皇妹がナグウィンを通じて情報を流したのは、それが理由なのか？

そうだとしても、どうにもならない。

「……たとえ、お応えしたいと思ったとしても。過分なご期待であれば、わたしにはどうしようもありません」

そう、と皇妹は囁いた。

「残念ね。……それに、復縁の話の方も、きっと残念な返事なのではないかしら」

「それは、なにを、どう、残念にお感じになるか次

第です。姫は、ご結婚なさりたいですか？」
　皇妹は、眼をしばたたいた。夕焼けが消えかけている、あの時分の空と同じ色の眼だ。昼でもなく、夜でもなく。明るく、そして暗い。
「今さらなにをいうのかしら。こちらから申し入れた復縁よ……内緒だけれど」
「相手をわたしに限らず、お尋ねしているのです」
「おかしなことをいうのね。あなた以外の誰と、わたしが結婚できるというの？」
「北嶺は、昔から女性であっても再婚が可能とされて来た土地です。それを正式に北嶺国の法として制定しようと、考えております。ですから、北嶺国においでくだされば、北嶺王の権限で――」
「待って」
　大きな声ではなかったが、調子はするどい。遮られて口をつぐんだヤエトの顔に、皇妹が顔を寄せてきた。ぎょっとするほどの近さだ。
「……あなた、これからあの子に罷免されるかもしれないと、自分でいっていたでしょう。なのに、国政に口を出せるの？」
　礼儀として、硬直するのはどうかと思うが、しかしだったらどうすべきなのか。
　ルーギンに助けを求める視線を送ったが、騎士は慎み深く壁の方を向いており、役に立たない。
――ええい。
　礼儀など知るか、という気分になったヤエトは、半歩下がった。皇妹はわずかに眉を上げ、それから微笑を浮かべた。
「あら、おどろかせてしまったかしら」
――どう答えろと！
　わけのわからない問いの方は無視することに決めると、ヤエトは咳払いをして口を開いた。
「先ほども申しましたが、わたしは陛下に任命された、皇女殿下の副官です。しかもそのとき、陛下は皇女殿下にこのように仰せになりました――副官のいうことをよく聞き、意見を容れるようにと。です

ので、わたしの献言は、皇女殿下にとっては無視すべからざるものなのです」

あらかじめ考えていた内容だ。すらすらと出てくるし、喋っているあいだに冷静になれた。

皇妹にとっては、あまりおもしろくない回答だったらしい。

「……嫌な男ね」

「よくいわれます。斯様な男とは、復縁などなさらぬ方がよいでしょう」

「きっとそうね。でも、北嶺で結婚もしないわ。わたしの遊び場はね、あんな狭い場所では収まらないの。わかるかしら？」

彼女にとって、人生は遊びなのだろう。遊戯盤の上に駒を並べて骰をふり、札をめくるようなものなのだ。彼女は、なにもかもを、一段上から見下ろしている。そして、支配しようとする。その場を、駒を、現実に生きている人々を。

「……ひとつ、伺っても？」

「なにかしら」

「復縁は、陛下のお考えですか？」

「いいえ。わたしのよ」

《黒狼公》の妻という地位も、公的にさほど重要なものとは看做されないだろう。《黒狼公》が真正の成り上がり者では、なおさらだ。

皇妹がそんなものを欲しがる理由がわからない。

ヤエトの悩みが読めたのか、皇妹は小さくため息をついてつぶやいた。

「わたしね、白ばかり着ているのに飽きたの」

彼女は胸許に手を添えた。水晶の指輪が虹の光輝をはなち、白い肌に色を落とした。

本気なのか、それとも冗談なのか。どう応じるべきか判断がつかないまま、ヤエトは答えた。

「喪の色を着続けねばならないという規則も、ないのですよ。再婚を禁じる法も、ない」

「正論ね」

「わたしはいつも正しくて、腹が立つそうです」

皇妹は眼をみはり、そして笑った。
「たしかにそうね。あなたにもわかっているだろうけれど、正しいばかりが世の中ではないわ。法で裁かれなくとも噂で裁かれてしまうし、わたしはその方が嫌。……だから、もういいわ。どうせ一色しか着られないなら、白は悪い色じゃないもの。わたしに似合うでしょう？」
最後の問いかけは、ルーギンに向けたものだった。
騎士は一礼して答えた。
「姫ならば、どんな色でもお似合いでしょう」
「白がとくに似合うといって」
「白もまた」
騎士は皇妹の前に跪き、その袖の端を手にとると、そっとくちづけた。
そして、彼女を見上げて告げた。
「よく、お似合いです」
「そう？　嬉しいわ」
微笑んで、皇妹はふたたびヤエトを見た。
「四の君はもう死体になっているわよ。不明を恥じて自決したと、後日、公知されるでしょう」
ルーギンは立ち上がり、皇妹の手をとった。
「姫、それはまことですか」
「あなたがたが来る前に、手配は終わっていたの」
「では、王は――」
皇妹は呆れたように手をふった。
「陛下があの子に配慮しないはずがないでしょう。安心なさい、無事よ。皇宮内に保護されているわ」
「……時間の無駄でしたか」
ヤエトがつぶやくと、皇妹はかぶりをふった。
「馬鹿なひとね。無駄とわかっていることに、陛下が時間を割くはずがないでしょう。あなたがどんな人物か、あらためて判断なさったのよ。それと、三回目をお試しになりたかったのね」
「三回目、とは？」
ルーギンが尋ねると、皇妹はちらりと彼を見た。
それから、ヤエトに視線を戻す。

ゆっくりと、彼女は告げた。
「殺せるかどうかよ」
「は……？」
「これ以上のことは、口にできないわ」
「姫」
ルーギンの手から自分の手を引き抜くと、皇妹は淡雪のような裳裾をひらりとひるがえし、後ずさった。女性にしては長身だから、その気になれば、一歩が大きい。
「駄目よ。……そうね、《黒狼公》が夫であれば、話したでしょうけど。断られてしまったもの、わたしのもっとも身近な親族は、やはりお兄様ということになるわ。だから、駄目よ」
「恩寵の力の源泉の話に――ご興味は？」
ヤエトが声をかけると、皇妹の動きが止まった。黄金の竜気が、その身を覆うのがわかり、彼は前に出しかけた足を止めた。
皇妹は不思議なものを見るような表情になった。
「やはり、わかるのね。調べさせたけれど、古王国の恩寵にそんな力はないそうよ。知っていて？」
ヤエトは皇妹を見返した。これは、自分の一族にだけ伝わる別種の契約なのだろうと思っていたが、あらためて他者から指摘されるのは、妙な気分だ。
漠然とした不安を感じる。
――こうやって、少しずつ明かされてしまうのだろうか。
恩寵の力について、ヤエトが心得ていることなど、ほんのわずかでしかない。いずれ、皇帝や皇妹の方が詳しくなってしまうのではないか？
皇妹は微笑み、ひとりごとのようにつぶやいた。
「その話は、また今度ということにしましょう。せっかく陛下が約束してくださったのだから、お気が変わらない内にお行きなさい。あなたがたの、姫のもとへ。伝達官の先導で、遮る者なく」

6

皇女は怒っていた。
「そなたら」
地の底から響くような声に、ヤエトは足を止めた。ルーギンもだ。
伝達官は、部屋まで案内したとたん、逃げ出してしまった。室内に控えていた数名の女官たちも、皇女がひとこと、去ね、と命じるが早いか、飛び出して行ってしまった。
背を向けていた皇女が、くるりと向きを変えた。
「どの面下げて参った」
気落ちしているのではないかと案じていたヤエトは、いきなり面罵されたことに少しおどろき、同時に安堵した。
それから、これは安心してはいけないのではないか、と思った。
――今にも倒れそうだ。
隈が浮いている。頬も少し、削げているようだ。
早く寝かさねばと思ったのは、ルーギンも同じだったらしい。先んじて跪き、頭を垂れた。
「ご命令に逆らった責めは、いくらでも。ですが今はまず、お休みください」
なるほどと思い、ヤエトもそれに倣う。
「将軍の仰る通りです」
「なにがだ、たわけ！　そなたらは！　わたしが、わざわざ遠ざけたのに、なぜふたりとも、ここにおる！　都に来るばかりでは飽き足らず、皇宮にまで来おったか」
「姫がこちらにおいでだからです」
「来るなと命じたはずだ」
「左様なご命令は、伺っておりません」
珍しく、ルーギンが語気を荒げた。失礼、と低く告げるなり立ち上がると、皇女の腰を掬い上げ、荷物を運ぶように横抱きにした。
「な……」
ルーギンはヤエトを見て、鬱陶しげに荷物を揺す

った。揺すられた皇女の顔は、まったく見えない。髪がかぶさってしまっているからだ。

「これ、さっさと北嶺に持って帰りましょう」

「はい？　え、いや、それは」

「鳥たちをここに呼びましょうか。いや、それはまずいな……やはり、公の邸宅へ戻りましょう。姫、このまま運ばれたいですか。それともご自分の足でお歩きになりますか」

「勝手に決めるな！」

ようやく我に返ったらしく、皇女が手足をふり回しはじめた。ルーギンは冷静に答えた。

「姫のご命令に従っていたら、手遅れになりそうですからね。こんな場所にいらっしゃるべきではありません、もう遅過ぎるくらいだ」

「こんな、だと――」

「四の君は亡くなられたのです」

冷静だったが、叩き付けるような語調だった。

皇女の動きが止まった。

「姫がここにいらっしゃる理由は、もう、ありません。むしろ、早くこの場を離れた方がよい。庇っておられたのであれば、なにごとかに巻き込まれるやもしれぬのです。ご自覚を」

ふたたび、皇女は暴れだした。

「下ろせ！」

だが、ルーギンはびくともしない。

「おとなしく待っていてくださると、お約束をいただければ。馬が早いのだが、顔が見えない方がいいな。馬車……いや、舟がいい。姫、水路の通行権はお持ちですか」

「ある。だが、なんにせよ暫しは動けぬ。もうじき《天地輪》だ……それより、下ろせ！」

「お約束くださいますか」

「脅迫された約束になど、誰が応じるか！」

ルーギンは大仰にため息をつくと、皇女を下ろした。……正確には、床に転がした。

皇女は悪態をつきながら乱れた髪を顔からかき上

げ、素早く立ち上がった。
「兄上を庇っていた件なら、陛下が……」
皇女の声は小さくなり、途切れた。ルーギンは容赦しない。
「陛下がどうなさいました」
「もう、罰はくだされた。御意を受け、兄上に毒を運んだのはわたしだ。それで、もう……」
「甘い」
するどく断じると、ルーギンはヤエトの視線をとらえて告げた。
「やはり、急いだ方がいい。四の君の縁故の者に恨まれる危険性があります」
今の告白におどろく暇もない。
――そこまでやらせたのか。
力ずくで排除されたものかと思っていが、実情はずいぶん違うらしい。それなら、皇女が叛逆者として告発されることはないだろう。《灰熊公》や《金獅子公》からも、文句は出るまい。
悪くない対応だ――皇女の心境さえ、無視するならば。だが、それで危険がすべて消えたというわけでもない。
「四の君の母后は、七の君のところへ行かれたそうですが」
センヴェーラ妃は、第四、第五の双子と、末息子の第七、この三人を生んでいる。彼女の実家である《白羊公》家は、十二大公家のひとつだ。三人もの皇子を生んだ妃の実家とあって、馬鹿にならない権勢がある。
「これ以上、立場が悪くなるのを避けるための配慮でしょう。ただ、本家の思惑などとは関係なく、頭の悪い輩が報復をたくらみかねません。わたしが戻るまで、姫をお願いします。姫、騎士団の人員はどこに？　詰め所ですか」
「皆、陛下のご命令で捕えられた」
「では、釈放のお願いを」
「さっきからやっておる！　伝達官を通じて、陛下

に……でも、陛下がなにもお返事をくださらぬ」

うわずった声に、自分でおどろいたのだろう。後半は、逆に押し殺したような喋りかたになり、聞き取りづらくなった。

「今はお忙しくていらっしゃるのでしょう。たしかに釈放がとりおこなわれるよう、後刻あらためてお願い申し上げるよう、伝達官に念押しを。では、手配をして参ります。失礼」

一礼して退出するルーギンの背を見送って、彼を連れて来てよかったとつくづく思った。ヤエトひとりでは、舟を使うなど思いもよらなかっただろう。

――さて。

もつれた髪もそのままに、態度を決めかねて立ち尽くしている皇女の相手をせねばならない。姫をお願いしますというのは、そういう意味だ――たとえば、武装した兵士でも送り込まれたら、ヤエトでは相手にならないわけだし。

とりあえず、なんと声をかけるべきか。よい考えも浮かばないので、ふつうに挨拶することにした。

「お久しゅうございます」

「……今頃なんだ」

「先ほどは、ご挨拶を申し上げる隙もございませんでしたので」

皇女は無言でヤエトを見ている。

そこは、先刻までいた部屋とさして変わらない広さだったが、開放感がまったく違った。四方は壁に囲まれ、窓がひとつ、扉がふたつ。その窓もあまり大きくはなく、室内は薄暗い。大きめの長椅子が二脚、鍵型に置かれている。

「申し上げにくいのですが」

「なんだ」

「陛下への拝謁がかないまして……それでかなり消耗しましたので、その、座りたいのですが」

「勝手にせよ」

「王が立っておいでなのに、わたしだけ腰を下ろすわけには参りません」

皇女はわずかに顔をしかめたが、とくに反抗することもなく腰掛けた。
「ありがとうございます」
礼をいって、もうひとつの長椅子に座ったヤエトに、皇女はするどく問いかけた。
「なぜ、ここにおる。なぜ、陛下にお会いした」
「ご許可をいただこうと思ったのです」
「なんの」
「王にお会いするために」
「わたしは――わたしは、そなたが、陛下にお会いせぬように」
「わかっております。陛下がわたしの恩寵の力にお気づきになっている節がおありでしたから、案じてくださったのですね」
「わかっているなら、なぜ！」
皇女の叫びに、どう答えるべきだろう。
わかっていたし、ありがたいとも思った。皇帝がヤエトに恩寵の力があると確信すれば、便利な道具として接収されてしまいかねない。その危険性を考えて、皇女はヤエトを巻き込むまいとしたのだ。
ルーギンを遠ざけた理由もまた、あの騎士のためを思えばこそだろう。彼が父を憎悪していることを、皇女は知っている。これ以上、《金獅子公》とのあいだに軋轢を生ませまいとの配慮だ。
「我らに負担をかけまいと、いろいろとお考えくださっていること、存じております。ですが、それはお心得違いです」
「心得など知るか！　そんなもの、鳥も食わぬ」
苦笑が浮かぶのを、止められなかった。このままでは、皇女の方が先に、知るかボケと叫びそうだ。
「腹をこわしそうですね」
「なんの話だ」
「ですから、鳥が食べたら」
「……どうでもよい！」
凄まじい剣幕で怒鳴られた。たじろぎそうになったが、なんとか堪える。

「《天地輪》まで、あまり時もありません。少しでも、お休みになってください」
「休めるわけがなかろう！」
そうだろうなぁ、と思ったが、ここで無為に同意するわけにもいかない。
「では少し、どうでもよくない話でもいたしましょうか」
皇女は口を引き結んだ。
否といわれないのだから、話してもよかろう。拒否されたところで、ほかにできることもない。結局、口先だけの男なのだ、自分は。
「お聞かせ願えますか。なぜ、四の君を庇われたのか……わたしが聞き知った範囲では、王が口出しをなさるような問題ではないように存じますが」
ぐぃ、と皇女は顔を上げた。喧嘩でもはじめそうな勢いだ。
「口出しをして、なにが悪い」
「良い悪いの話ではありません。なぜだったのか、理由を伺っております」
「理由がいるのか！」
「理由が必要である理由を、ご説明申し上げねばなりませんか？」
皇女は顔を歪めた。
「……兄を庇うのに、理由がいるのか」
もちろん、それは必要だった。
庇った皇女も、庇われた皇子も、それぞれに領地がある王なのだ。そしてなにより、真上皇帝の娘であり、息子である。国のために、なにをなすべきかを考えないわけにはいかない。
だが、ヤエトが指摘するより早く、皇女は頭を垂れた。
「わかっている」
それならなぜ、と問うまでもないだろう。黙って待っていると、皇女は自分から語りはじめた。
「四の兄を、わたしは好きではなかった。でも、好きでないなら死んでもよいか？ 味方と思っていた

者たちに去られ、……あんなに威張るのが好きだった四の兄上が、偉ぶる相手も失って、追いつめられていくのは、たまらなかった」

「それで、ご自分がお味方なさろうと？」

皇女は頭を左右にふった。

「そこまでの、強い気もちではなかった。覚悟もなく、巻き込まれた。わたしは……わたしは、真剣に兄上を救おうと思っていたわけではなかったのだ。わたしは、愚かだった。たぶん、……自分は悪くない、できることはやった、兄上の死に責任はないと思いたくて、それで――」

声が途切れた。まずい、とヤエトは思った。

――放っておくと、泣かれる。

「わかりました」

「……わかった？」

「はい」

「なにがわかったというのだ」

「四の君のこと、王にはなんの責もありません。誰が見ても、あきらかです。なるほど、兄君のお命をお救いすることこそ、かないませんでした。ですが、王は兄君をお見捨てにならなかった。……それで、十分ではありませんか」

「なにが十分だ。兄上は命を落とされたのだぞ」

「王は、ご自分におできになることを、十分になさいました。そういう意味での、十分です。それ以上をお望みになることをこそ、危惧なさるべきです。手が届くより少し先を望まれる、それ自体は悪いことではありません。ですが、よくお考えを――この場合、四の君のお命をお救いするために、なにが必要だったかを」

皇女は眼をしばたたいた。

「なにが必要……」

なんにでも、すぐ興味を抱いてくれるのは、ありがたい。泣かれずに済みそうだ。

「おわかりになりますか？」

「わからぬ。なんだ」

「陛下を上回る権力です」
驟雨の気配は、完全に消えた。
どう反応すべきか決めかねたらしく、皇女の返答には少し時間がかかった。
「そなたにはときどき、おどろかされるな」
「ときどきであれば興趣もあって、よろしゅうございましょう」
「わたしは、左様なものは欲しておらぬ」
「それは失礼を」
「いや、興趣の話ではない。だから……大それたことは考えておらぬ。そなたも知っておろうに」
「すでになさった以上のことを、おできになるとするならば、必要なのはただひとつ。たった今、申し上げたものだけです。それさえあれば、四の君のお命をお救いするなど雑作もないこと。ですから、お望みになるのであれば――」
「欲さぬと申したであろう」
遮られたのを無視して、ヤエトはつづけた。
「――お望みならば、よくよくお考えください。それが、どういう意味をもつことか」
皇女は黙ってしまった。
やはり痩せたな、と感じた。全体に、ひとまわり縮んだように感じる。
――励まさねば、ならないのに。
諫めるところからはじめてしまうのは、いかにも自分らしい、と思った。それが彼の欠点で、限界なのだ。
なかばは自分に聞かせるつもりで、つぶやく。
「限界を認めるのは、大事なことです」
「そうだな」
「ですが、そこで立ち止まるのが、真に正しいことかどうかも、よくお考えにならねばなりません」
「謀反でもそそのかす気か」
「物騒なことをせずとも、望みをかなえる方法は探せます。それもまた、王に心得ていただかねばならないことの、ひとつです」

皇女の口の端が、少し上がった。
「ねばならないことが、また増えた」
「御意」
「生きるのは、つらいな」
そんなことを口走る年代ではないだろう。
やはり、来るのが遅過ぎた。こんなに待たずに、もっと早く合流すべきだったのだ。
「申しわけありません。そのようなこと、王に仰らせてはいけませんでした」
「たわけ。少しは黙っておれ」
「ですが――」
「そなたはわたしより二十以上も年嵩だと、いつも威張っておるではないか」
「二十二です」
「大人ぶりたいなら、黙ってわたしの頭でも撫でておけばよかろう。それで十分だ」
皇女の頭を撫でる自分を想像し、それはちょっと、とヤエトは思った。誰が見ても不自然ではないのかもしれないが、違うだろうという気がする。理屈ではなく、なにか許せない。
ヤエトが黙っていると、皇女は口をとがらせた。
「どうなのだ」
「どう、とは？」
「そなたはそれで満足か。よしよしと、いなしておけば」
黙っていろといったくせに、返答を待っていたらしい。難しい、と思いながらヤエトは答えた。
「いいえ」
「では、わたしを馬鹿にするのはやめろ」
「馬鹿になど」
「わたしの気もちは、わたしのものだ。口にしてはならぬ言葉を口走ったなら、それはわたしの責任であって、そなたが責めを負うものではない。わかるか、ヤエト」
「……失礼を、つかまつりました」
「わかればよい」

大きく息を吐いて、皇女は天井を見上げた。両手を座面につき、背をそらす。

そして、つぶやいた。

「わたしは、しくじった。どこまでやり通すべきか心も決まらぬままに手を出し、出した手を引くべきか、引かざるべきかすら、判断をしかねた。だから、陛下に課されたお役目に、異論はない。わたしのために、引き際を決めてくださったのだ。感謝せねばならぬほどだ。……そうして……兄上は命を落とされたというのに、わたし自身は、どこかで安堵しているのだ。陛下のご意思に逆らってもまだ、自分が生きていることに」

皇女の声は、ふるえてはいなかった。

泣かせてやればよかった、とヤエトは少し後悔した。その方がきっと、すっきりできただろうに。

「当然です」

「そうか」

納得したという声ではなかった。諦めた、という声だった。

「ご自分で仰せになったことを、お忘れですか」

皇女はヤエトの方に顔を向けた。なんのことだ、という表情をしている。

なぜか、苛立ちを感じた。

「死にたくない、生きたいと思うのは当然のことだと、仰せになったではないですか」

まだ思いだせないらしい。当然のこと過ぎて、忘れてしまったのだろう。

苛立ちを口調に滲ませないように注意しながら、ヤエトは言葉をつづけた。

「死にたくないと思うことは恥ではないと、……お叱りを受けました」

「そうだったか」

「お忘れなのであれば、そのお言葉を今、わたしからお返ししましょう。生き延びて安堵なさるのは、当然のことです。恥じることなどありません。堂々としておいでになればよろしいのです。少なくとも、

ほかの誰もやらなかったことを、王は、なさったのですから」
「それは、わたしが陛下に甘えているからだ」
「甘えられるお立場なのですから、それも結構」
「でも、兄上は」
「四の君は四の君、あなた様はあなた様です」
「それは、そうだが」
「四の君が危難に陥ったとき、人は背き、逃げ去った。ならば、四の君はそれまでのおかたでいらしたのです。ですが、あなた様はそうではない。逆に、ご自分のなさることに巻き込まぬようにと気遣って、臣下を遠ざけられたほどではありませんか」
「そんな立派なものではない。ただ、そなたらに知られたら、止められると思ったから……」
それも事実ではあろうが、一部に過ぎない。自覚がないのか、と思う。
「たしかに、お止めしたでしょう。それが、我らのつとめですから。次は、止めさせてくださいますか」
「……」
「次はお止めします。なにがあろうと」
兄を死なせたくないと願った妹に、自決のための毒薬を運ばせるような結末は、避けられたはずだ。
——絶対に。
二度と、こんな失態はおかさない。
ヤエトは椅子から腰を滑らせると、皇女の足もとに跪いた。そして、あるじを見上げた。
まだいくぶんか乱れたままの髪が、窓から入る日差しを受けて、かがやいている。少しやつれているせいか、皇女はずいぶんおとなびて見えた——と同時に、途方に暮れた子どものようでもあった。
矛盾している、とヤエトは思った。
皇女は三十過ぎのヤエトとは違うのだ。外貌も、その心のありようも、目覚ましく成長する時期だ。いつまでも子ども扱いはできないが、だからといって、完全に大人として扱うわけにもいかない。
「ミムウェ様」

強い声で名を呼ぶと、皇女はうなずいた。
「……うん」
「あなた様だからこそ、わたしはお仕えしているのです。わたしに生きよとお命じになるならば、あなた様もまず、生きることをお選びください。死にたくないと思うのが恥ではないと説かれるなら、それをご自身でお示しくださらねば、困ります」
束の間、皇女は眼をみはった。おどろきが苦笑に変わるまで、さほど時間はかからなかった。
「そなたを困らせるのも、楽しいやもしれぬな」
「でしたら今、大変に困っておりますことを、お知らせいたします」
「全然、なんにも、困っているように見えぬぞ」
「それは残念です」
「残念なのか」
「お楽しみいただく機会を、失いました」
「大丈夫だ、そなたを困らせる準備なら、いくらでもある。次を期待するとしよう」
「心得ましてございます」
ため息をついて、皇女はヤエトを見た。
「なんだ、困らせるぞと宣言しても、困らぬのか」
「困っておりますよ」
「見えぬ」
「実に残念です」
「残念そうにも見えぬ」
「遺憾に存じます」
「そなたは口先ばかりだ」
「ですが、お約束は果たしました」
「なんの約束だ？」
「無事に帰るようにとの、ご命令でした」
皇女は微笑んだ。その笑顔が歪み、いきなり目尻から涙があふれ、頬をころがり落ちた。
「よく、帰った」
――なんでここで泣く!?
ヤエトは動転した。ついさっき、泣かせてやればよかったと思ったことなど、もう意識にない。

皇女は手の甲で涙を拭い、許せ、とつぶやいた。なんとも答えがたい。というより、いたたまれない。どこか逃げ場がほしい。

もちろん、そんなものはどこにもない。

しかも皇女はまだ泣きそうだ。

「そなたが帰るのは、どこぞの場所ではない、わたしのところだ、と……自分でいうたのにな」

声が、ふるえている。

これ以上泣かれないためには、どう答えるのが最良か。ヤエトは真剣に考え——そして、馬鹿らしくなって尋ねた。

「なぜ、我慢をなさるのです？」

「……なぜ？」

泣きたいなら、泣けばよいのだ。竜種とて、人には違いないのだから。

「今は、我慢をせずともよいところでしょう。生きていることを喜ぶのと同様、失った命を嘆くのもまた、ふつうのことではありませんか」

「ふつうのこと、なのか」

「はい」

「女子どもだから、ではないのか」

不意に、皇女がどういう環境で育ってきたかを思い、ヤエトは腹立たしくなった。皇帝の末娘として生まれたせいで、周囲からどんな偏見を押し付けられて来たのか。

すべて、やり直させてやりたい。もしかすると、持って生まれた美質をそこなってまで、枠にはめられていたかもしれないのだ。

それを拒否し、精一杯に反抗して、ようやく北嶺を得て——兄たちと並び立つために、皇女がどれほど努力しているかを考えると、腹立たしいではすまない。

「左様な言葉は、お忘れください」

「でもな、ヤエト。わたしは女だし、まだ子どもだ。それは、どうしようもない」

「ミムウェ様は、ミムウェ様です。ほかの誰でもあ

りません。女とか子どもとかいうくくりで語る前に、左様なことを申す者は、あなた様ご自身をきちんと見、判断すべきです」

皇女は口を引き結んだ。

長いあいだ、皇女は無言だった。涙はそれ以上こぼれることもなく、嗚咽が漏れることもなかった。結局、彼女は自身を律しきってしまった。

「……でも、もう涙が出そうもない。泣いている暇も、なさそうだしな」

日の傾き具合を見れば、《天地輪》の時刻は近いと知れた。ヤエトは立ち上がり、一礼した。

「では、涙が出そうになりましたら、いつなりとお呼びください」

「なぜ？」

「おひとりで泣かれるのは、困ります」

答えながら、まったくどうかしている、と思った。ひとりで泣いてくれるなら、勝手に泣いてもらえばよいのだ。

だが、ヤエトに前言撤回する暇も与えず、皇女はうなずいた。

「わかった。約束だな」

それで少しは気が楽になるなら、まぁいいか、とヤエトは思った。

相変わらず問題は山積して、なにひとつ解決などしていない。《天地輪》が終わったら、報告しなければならないことも、たくさんある。

それでも、目に見える範囲に皇女の姿がある、ただそれだけで安心できた。それがあたりまえで、日常の光景なのだと感じられたからだ。

不意に、ヤエトは胸を摑まれるような苦しさを覚えた。

皇女がそこにいれば、安堵はできる。だが、それだけでは満足しないのが、人という生き物の常ではないか。

――俺は、なにを望んでいる？

皇女の幸せか。それとも自分のか。

この少女に、なにをさせたいというのか。皇帝を上回る権力を――この若いあるじに摑ませたいと、少しも思っていないといえるのか。

少しは、とヤエトは認めた。少しは思う。だが、それは手段のひとつに過ぎない。

目指すところがそれ、というわけではない。

女だから、年少だからという不利を覆してやりたい――それがどうやら、ヤエトが皇女に感じているものらしかった。そんなことで判断されてたまるか、と思う。批判も、愚弄も、すべて撥ね除けてやる。もしも皇女が望むなら、帝位だって手に入れてやる。それくらいの覚悟は決めた。たった今。

誰に告げることもなく、悟られることもなく終わるかもしれない。だがその決意は自分自身との約束であり、誓いのようなものだった。

「王」

「なんだ？」

「ご無事で、なによりです」

もっと早く口にするべきだった言葉に、皇女は呆れるでもなく、笑顔で応えた。

「そなたもな」

（了）

あとがき

少々、いやかなり、お待たせし過ぎてしまいました。申し開きのしようもありません。皇帝陛下の無茶振りでどうなるの、というところで上巻が終わった状態で、下巻の刊行までに一年以上の空白とは。プロ失格。

断筆宣言して隠居すべき。隠居して、ヤエトに羨ましがられるべきです。

しかし、シリーズ未完で隠居というのも同様に、あるまじき所行と申せましょう。

作家でいることが間違いなのに、作家を辞めるのも間違いとは。最初から作家になるべきではなかった、というところまで巻き戻せば解決するのでしょうが、そんなことはもちろん、不可能です。つまり、このまま頑張るしかないようです。

とはいえ急に筆が速くなるはずもなく。今回のような不始末の再発を防ぐため、今後は下巻の刊行目処がたってから上巻を出しましょう、ということになりました。

必然として、次の四巻が出るまでの期間は長くなると予測できます。

毎回、次は遠い、次は遅いと書いておりますが……嘘はついていないとは申せ、誇るわけにもいかず。それが嘘になるといいなぁ、という願望はあるのですけどね。

いつ原稿があがるかわからない曖昧なスケジュールの中、美しいイラストを描いてくださったことときさん、ありがとうございます。カバーの金髪一味も素敵ですが、口絵のファルバーンが最高過ぎます。なんでこいつが主人公じゃないんだろう。

粘り強く原稿を待ってくださった内田さんにも、さぞご心労をおかけしたことと存じます。やっと本になって、お互いほっとしたわけですが、……これが最後ではないですし。

次もまた、よろしくお願いいたします。

この本が、読者の皆様のご期待を裏切りませんように。

読まれてはじめて、物語は動きはじめるもの。文字の羅列が想像力の加護を得、ひとつの世界として立ち上がり、息づいて動きだす——元のテキストは同じでも、読み手の皆様それぞれの心の中には、唯一無二の世界が生まれるはず。世界生成の魔法の使い手は、作者ではない。読者である皆さんなのだと、わたしは思っています。

どうか読んでください。この本に命を吹き込んでやってください。

そして、楽しんでいただければ幸いです。

二〇一一年八月　妹尾ゆふ子

幻狼ファンタジアノベルス

Information

この本を読んでのご意見・ご感想を
下記の住所までお寄せ下さい。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
株式会社 幻冬舎コミックス
幻狼ファンタジアノベルス編集部

幻GENROU狼
FANTASIA
NOVELS

Colophon

翼の帰る処【ところ】3——歌われぬ約束——下

THE HOME OF THE WINGS——Volume three——Lower volume

二〇一一年八月三十日——第一刷発行

著者——妹尾ゆふ子 せのおゆふこ

発行人——伊藤嘉彦

発行元——株式会社 幻冬舎コミックス
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六四三四(編集)

発売元——株式会社 幻冬舎
〒一五一-〇〇五一
東京都渋谷区千駄ヶ谷 四-九-七
電話 〇三-五四一一-六二二二(営業)
振替 〇〇一二〇-八-七六七六四三

コンセプトデザイン——コードデザインスタジオ

印刷・製本所——共同印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(デジタルデータ化も含みます)、放送、データ配信等をすることは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SENOWO YUFUKO, GENTOSHA COMICS 2011
ISBN978-4-344-82076-0 C0293
Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

幻冬舎コミックスホームページ——http://www.gentosha-comics.net

9784344820760

1920293009001

ISBN978-4-344-82076-0
C0293 ¥900E

Published by
GENTOSHA COMICS

定価—本体900円+税
発行—幻冬舎コミックス
発売—幻冬舎



翼の帰る処 3 下
——歌われぬ約束——

THE HOME OF THE WINGS——Volume three——Lower volume

皇帝の策略によって罠に陥ったヤエトは、ルス公当主ライモンドと対面し、逃亡した商人を引き渡すよう要請する。要求は受け入れられたものの、無理がたたって倒れてしまうヤエト。からくも北嶺に戻るが、皇帝の策略を阻止するため、ヤエトは無理を押して再び北方へ向かうことを決意する。それを決断させた裏には、〈過去視〉の力で出会った謎の少女・ルシルの願いを聞き入れたいという思いがあり——。